

Sapphos of the Eighteenth Century

サッポータちの 十八世紀

近代イギリスにおける女性・ジェンダー・セクシュアリティ

Women, Gender and Sexuality in Modern Britain



川津 雅江 著

音羽書房鶴見書店

サッカーたちの十八世紀

近代イギリスにおける女性・ジェンダー・セクシュアリティ

◆ 目次 ◆

はじめに……………1

第一部 サッポアの歴史ヒストリー／物語

第一章 レスビアン誕生秘話……………11

レスボス島民はレスビアン 11／「第十番目のミューズ」が愛した男性たち 12／オウイデイウスのサッポア 14／男性のように女性を愛する 17／二人のサッポア 18／ルネサンス時代のサッポア 19／オウイデイウスの影響 22／両性具有の身体 25／淫らなサッポア 28／女性同性愛の伝統 33

第二章 「第十番目のミューズ」の系譜……………41

サッポアの断篇詩 41／「断篇1」の誤訳 43／「断篇31」の異性愛的読みの操作 50／同性愛詩人の異性愛者化 56

第二部 十八世紀のジェンダーとセクシユアリティの表象

第三章 「女性兵士」の異性装とジェンダーの境界……………61

ジェンダーの衣 61／ハンナ・スネル 64／男装の理由 68／戦う女 70／男装と演技 71／女性の美徳 73／曖昧な結び 74

第四章

「女性の夫」のジェンダー偽装とセクシュアリティ……………76
女性と結婚した女性の話 76／メアリ・ハミルトン 80／曖昧なセクシュアリティ 87

第五章

「スランゴスレンの貴婦人たち」
——ロマンティックな友愛とサフィズム……………88
スランゴスレンの貴婦人たち 88／ロマンティックな友愛 89／もう一つのエデンの園 95／女性同士の異常な愛情 102／サフィスト 105／プラトニックでない愛 107／新しいジェンダー観と女性同性愛 109／奇妙な外観 111

第三部 イギリスのサッポーたち

第六章

十八世紀のサッポーたち
——ペンと縫い針の文芸的公共圏……………117

大いなる文化的現象 117／ジェンダーの分離領域 120／イギリスの「サッポー」 124／女性の弁解 131／ペンと縫い針の文芸的公共圏 135／貞淑なサッポーの伝統 143／料理本作家のサッポー 154

第七章

アンナ・シーワードとサッポーの伝統……………160
ブリテンのサッポー 160／喪失した愛の詩 166／私の愛の幻影 173

第八章

二人の女性と一人の男性の楽園
——アンナ・シーワードの『ルイーザ』……………177
異性愛的読みの傾向 177／絶望的な愛の体験 178／恋愛書簡詩の伝統の転覆 179／ロマンティックな友人 182／女性のセクシュアリティの罰 189／二人の女性と一人の男性の楽園 195

第九章

甦った女性詩人

——メアリ・ロビンソンの『サッポーとパオーン』……………199

イングランドのサッポー 199 / イギリスの文学的セクシズム 201 / 「パーティー」 204 / サッポーの名誉回復 208 / ロビンソンの真正なソネット 210 / ロビンソンのサッポー 211 / もう一人のサッポー 224 / サッポーの蘇生 226

第十章

ウルストンクラフトとサッポーと女性のセクシユアリティ……………231

『女性の権利の擁護』のサッポー 231 / サッポーに関する知識 232 / 放蕩なセクシユアリティ批判 234 / 『メアリ』 239 / ウルストンクラフトの異性愛者化 241 / 「女らしさを失った女」のセクシユアリティ 244

第十一章

舞台の上の異性装とジェンダー

——マライア・エッジワースの『ベリンダ』……………247

『ベリンダ』の真のヒロイン 247 / フリーク夫人のフリーク 250 / 舞台の上のジェンダー・トラブル 253 / 性転換の脅威 261 / 舞台の上の女性の幸せ 264

注……………269

あとがき……………283

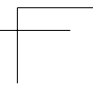
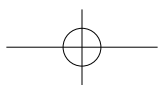
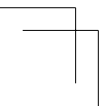
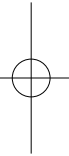
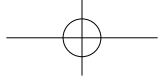
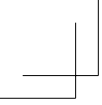
初出一覧……………285

参考文献……………306

索引……………322

凡例

- 一 原書を邦訳して引用する場合、原文中のイタリック体で示された強調部分は傍点をつけて示し、全部大文字の語は太字で示した。
- 一 原書における二重引用語句のシングルクォーツ部分がキーターム的に使われている場合、へんがで表した。



西洋最初の女性詩人にして西洋最初の女性同性愛者。紀元前七世紀頃ギリシャのレスボス島に生まれた sappho は、女性に対する愛や嫉妬を一人称でうたった詩とそのセクシュアリティで有名な女性である。だが、実のところ sappho について現在知られていることは、彼女の時代よりはるか後世の情報による。sappho の詩は、紀元前三世紀にアレクサンドリアの学者によって編纂されたときには全九巻に五百編以上もあったらしいが (Barnstone 274)、現存しているのはわずか一九二の断篇のみである。¹ しかも、それらは、紀元前四世紀から紀元後三世紀頃の修辭学者や韻律学者や文獻家たちなどが引用したことで伝えられてきた比較的長い二編の詩といくつかのかなり短い断篇を除いてすべて、十九世紀末にエジプト中部のオクシリュンコスで発見された二〜三世紀のパピルスに書写されていたものだ。

sappho の生涯についてはもつと不確かで、彼女の死から数世紀も経た歴史家や哲学者や注釈者たちなどによるさまざまな証言が今日まで伝わっているにすぎない。生まれた場所はレスボスのエレスス市という説が現在有力だが、それは十世紀のビザンティウムの百科事典『スーダ』に依拠する。しかし、『スーダ』には sappho の項が二つある。エレスス市生まれの sappho は、第四二オリンピア紀 (紀元前六二五—二〇頃) に活躍し、全九巻の詩集を書いた抒情詩人である。彼女の父親の諸説ある名前、母親と三人の兄弟と夫と娘の名前、そして三人の女友達や三人の女弟子の名前なども明記されている (West 2)。もう一人の sappho は、ミティリニ生まれのリラ奏者で、パオンへの愛のためにレフカスの岩上から海へと身投げして亡くなった。この sappho も抒情詩を書いたと言われているという (West 3)。sappho の最古の伝記としては、二世紀末か三世紀初期のパピルスに記されたものが伝わっている。それによると、sappho はミティリニ市生まれである。両親と三人の兄弟と娘の名前、同性愛で非難されたこと、醜くて色黒で背が

低い容貌なども記されるが、いつ、どこで、どのように亡くなったのかについては全く触れられていない (East, 1)。このように、あまりにも情報が欠如し、謎に満ちているからであろうか。西洋の伝統において、サッポアの人生ほど人々の想像力をかきたてて、夥しい数のフィクションを生み出させた詩人はいないし、彼女の詩ほど後世の詩人たちによって翻訳され、翻案され、模倣され続けた詩はない。サッポアの受容の歴史はサッポアの多くの物語の堆積であるとするらえる。

英米でサッポアの詩や彼女の伝説がどのように受け継がれてきたかを探る研究が始まったのは、十九世紀末に大量のサッポアの断篇が発掘されたあとしばらくしてからである。メアリ・ミルズ・パトリックは『サッポアとレスボス島』(一九二二)の第七章「文学の中のサッポア」において、古代、十七世紀フランス、十九世紀初期のドイツ、そして十九世紀後半のイギリスのサッポアの受容を、デイビット・M・ロビンソンは『サッポアと彼女の影響』(一九二四)において、古代ギリシャ、中世、そしてルネサンス期から二〇世紀初期までのフランス、イギリス、アメリカの文学に与えた影響の跡を概略的に辿った。また、エドウィン・マリオン・コックスは『歴史的批評的注、翻訳、および伝記付きサッポア詩集』(一九二四)中の第二章「英文学におけるサッポアの著作」で、十六世紀のサッポア詩体(五脚の四行詩)の模倣例から十七世紀以降のサッポアの詩の英訳や詩集の出版、十九世紀末から二〇世紀初期までのサッポア研究を紹介した。

最近では、古典学以外の分野の学者たちもサッポアに高い関心を寄せ、その受容の歴史をさまざまな物語として学際的に探る傾向がある。先鞭をつけたのは、ジョアン・デジャンの『サッポアのフィクション——一五四六—一九三七』(一九八九)だった。デジャンはフランスにおけるサッポアのフィクション形成の歴史を詳細に考察し、サッポアのフィクション形成に関してフランスが十六世紀から一九四〇年代まで一貫して支配的役割を果たしたことを強調する一方、ドイツは十九世紀から二〇世紀初期、イギリスは十八世紀初期と一九二〇年以降優位を占めたにすぎないと論じた (DeJean 5)。イギリスにおけるサッポアの受容に関してデジャンの見方が誤りであることは、すでに二〇世紀

初期のバトリックやコックスの研究で明らかだが、一九九〇年代に入ると、デジャン説に論駁を加える研究書や論文が続々と発表されるようになった。たとえば、アンジェラ・レイトンの『ヴィクトリア朝女性詩人たち——心に逆らって書く』（一九九二）やマーガレット・レノルズの『私は芸術のために生きた、私は愛のために生きた』——女性詩人はサッポアの最期の歌をうたう（一九九六）は、ヴィクトリア朝時代における「サッポアの最期の歌」を書く女性詩人の伝統を指摘し（Leighton, *Writing Against 36*; Reynolds, “I live for art”）、リンダ・H・ピーターソンの「サッポアとテニソンの抒情詩の形成」（一九九四）は、アルフレッド・テニソン（一八〇九—一九二二）の棄てられた女性についての詩にサッポアの影響の跡を認めた。ジャーメイン・グリアは『だらしがない巫女』（一九九五）の第四章「サッポアの謎」において、古代、イタリア、フランスの他に、イギリスの十六世紀から十八世紀初期までと十九世紀のサッポアの詩の翻訳や伝説の表象も扱った。エレン・グリーン編集による『サッポア再読——受容と伝播』（一九九六）には、ドイツの十九世紀やイギリスの二〇世紀だけではなく、イギリスの十六世紀から十七世紀までの受容やヴィクトリア朝の受容を論じた論文（Andreadis, “Sappho”; Harvey; Parker）も含まれている。また、ヨーピー・プリンズの『ヴィクトリアン・サッポア』（一九九九）は、ヴィクトリア朝時代、ハリエット・アンドレアデイスの『近代初期イングラッドにおけるサッポア』——女性同性愛の文学的エロティックス、一五五〇—一七二四（二〇〇二）はイギリスの十六世紀から十八世紀はじめまで、マーガレット・レノルズの『サッポアの歴史』（二〇〇三）はイギリスのロマン主義時代から二〇世紀はじめまでを中心に考察している。その他、女性同性愛史の観点からは、エマ・ドノヒューが『女性間の情念——イギリス女性同性愛文化、一六八八—一八〇二』（一九九三）の第七章において、イギリスの十七世紀から十八世紀のサッポアの受容と、女性同性愛の伝統の形成を概略的に論じている。

本書『サッポアたちの十八世紀——近代イギリスにおける女性・ジェンダー・セクシュアリティ』は、このような最近の研究動向に沿いつつ、従来のサッポア関連のほとんどの研究では看過されてきた十八世紀を中心に、古代ギリシャの詩人サッポアに関する言説の受容、女性同性愛の言説の形成、「サッポア」と呼ばれたイギリス女性詩人の詩

的言説やサッポーを最初の知的な女性として称えるイギリス女性作家たちのフェミニズム的言説などを詳しく検証している。近代イギリスにおいてジェンダーの構築がどのようなセクシュアリティ観や女性同性愛に対する見方のもとでおこなわれたか、そしてそれが異性装の習慣、女性の社会的地位、女性の創造的能力の評価などどのような関係にあったかを明らかにすることが、本書の目的である。

本書の構成は三部に分かれる。第一部は、古代から十八世紀イギリスに至るまでのサッポーのセクシュアリティと詩の受容の歴史^{ヒストリ}／物語^{ナラティブ}を辿る。これは特に第三部において論を展開する際の基盤的論拠となるものである。第一章では、古代ローマ詩人オウィデイウスの第十五番目の書簡「パオンに宛てたサッポーの手紙」の流布によって、同性愛者としてのサッポーが確立した過程を通観する。イギリスは西洋諸国のうち唯一女性同性愛に対する法的罰則規定のなかった国であるが、レスボスのサッポーがレスビアン^{レズビアン}のサッポーになる過程で、十八世紀イギリスにおける知的な女性批判、女性同性愛に対する偏見・嫌悪・抑圧、女性同性愛者の両性具有的身体および「男性」のジェンダー、サッポーやサッポーの出身地に関係した固有名詞の普通名詞化などが明らかにされる。第二章では、十八世紀イギリスにおける詩人サッポーの再評価と、それに付随するサッポーの異性愛者化の動きを辿る。十八世紀のサッポーの詩の英訳者たちは、プラトンによって「第十番目のミュージズ」と賞賛されたほど優れた詩的能力の持ち主であったサッポーを同性愛者もしくは両性愛者としての汚名から救い出すために、彼女の詩中の女性への愛の表現を男性への愛と意図的に誤訳した。このようなサッポーのセクシュアリティの異性愛化は、イギリスにおける女性同性愛の抑圧の一端であると考えられる。

第二部は、イギリスの十八世紀に実在した異性装の女性たちや親密な関係にある女性たちに関するジェンダーや女性のセクシュアリティについてのさまざまな言説を取り上げる。第三章では、十八世紀に流行した「女性兵士」の話のうちハンナ・スネルの伝記に焦点を当て、男装のスネルにおけるジェンダーの攪乱とセクシュアリティの表象を読み解く。サッポーのような知的な女性たちや女性同性愛者が「男性的」として批判された時代に、スネルのような女

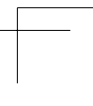
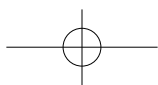
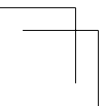
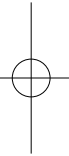
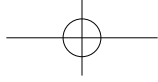
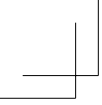
性兵士は「男性」を装うことを許され、その男性的な英雄行為で褒賞を受けた。それは、彼女が異性愛的枠組みの中で女性としての美德を守ることができたからに他ならない。第四章では、いわゆる「女性の夫」と呼ばれる女性、すなわち男装し、夫として別の女性と結婚し、一緒に暮らした女性のセクシユアリティの表象を分析する。ヘンリー・フィールディングによって書かれた最も有名な伝記『女性の夫』によれば、メアリ・ハミルトンはスネルの場合と同じく男性の衣装で性を偽装することに成功するが、スネルと違って、そのセクシユアリティは曖昧である。裁判沙汰になった最後の妻との関係だけは彼女の同性愛志向を仄めかす。しかし、最終的にハミルトンの罪はセクシユアリティの逸脱ではなく、ジェンダーの逸脱にすり替えられた。『女性の夫』においては、セクシユアリティの問題はジェンダーの問題であったと言える。第五章では、「女性の夫」の場合のように異性間結婚の偽装ではなく、二人とも女性であることを隠さずに一七八〇年から半世紀以上も長きにわたり一緒に暮らした、いわゆる「スランゴスレンの貴婦人たち」に関する言説を取り上げる。多くの同時代人はこの二人の独身女性の過度に親密な関係を当時流行していた「ロマンティックな友愛」の理想として絶賛したが、その一方で、異常な「サフィズム」ではないかとひそかに怪しむ者もいた。「スランゴスレンの貴婦人たち」に関する相反する言説は、「ロマンティックな友愛」が「サフィズム」の表の顔であった可能性を暗示している。

第三部は、西洋最初の知的な女性サッポアのイギリスにおける最初の娘たちと言うべき、十八世紀の女性詩人や作家たちの言説にさまざまな角度から光を当てる。第六章では、十七世紀後期のキャサリン・フィリップス以来、女性詩人たちが賞賛されるときも攻撃されるときも「サッポア」と呼ばれた現象を取り上げる。古代のサッポアはイギリスのサッポアたちの業績を評価する際の一つの重要な指標であると同時に、彼女たちにとっても、文芸的公共圏に自分たちの場を確保するための基準であった。それ故、多くの女性詩人たちは、男性の公的領域を侵犯しているという批判を免れるために、同時代に伝わっていたサッポアの汚名に満ちたセクシユアリティとは一線を画そうと努めたのである。第七章では、死後「プリテンのサッポア」と呼ばれた十八世紀末の女性詩人アンナ・シーワードの自伝的な

詩を詳細に分析する。従来の文学批評家たちは異性愛中心主義の立場から、女性詩人の恋愛詩を異性間の愛を前提として読む傾向があったため、養妹のホノーラに対するシーワードの熱烈な愛の詩を誤読し、単なる友情の詩として解釈してきた。しかし、シーワードの詩は、不在の愛する女性、失われた時間、失われた喜びへの熱烈な切望や思慕をうたっている点で、サッポアの同性愛詩の伝統を継承している。第八章では、シーワードが物語詩『ルイーザ』(二七八四)において、オウイデイウス以来の伝統的な異性間恋愛書簡文学の枠組みをとりながら、ヒロインのルイーザとその婚約者の男性ユージーニオとの恋愛や結婚よりも、ヒロインとその女友達エマとのロマンティックな友愛を重要視していることを明らかにする。詩の最後では、ヒロインがロマンティックな友人の女性と恋人の男性の三人で牧歌的な楽園で暮らす未来が示される。シーワードはこのように十八世紀後期の異性愛社会と共存する女性同性愛のかたちを提示した。第九章では、「イングランドのサッポア」と呼ばれたメアリ・ロビンソンがその呼称に潜む文学的性差別に対抗し、古代ギリシャの詩人サッポアの名誉と自分自身を含む同時代のイギリス女性詩人たちの正当な評価を求めるために、ソネット連歌集『サッポアとパオン』(二七九六)において、いかにオウイデイウスおよびアレグザンダー・ポープの伝統的なサッポア像を書き直したかを考察する。パオンに恋に落ちたロビンソンの語り手「私」は何度も詩人「サッポア」の死を嘆いている。ロビンソンにとって重要なのは、「私」が「サッポア」と統合し、偉大な詩人として復活することであった。第十章では、『女性の権利の擁護』(二七九二)においてサッポアを理想的な男性的女性の一人として賞賛したメアリ・ウルストンクラフトのセクシュアリティに関する言説とフェミニズム思想の関係論を論じる。ウルストンクラフトのフェミニズムは、従来指摘されていたように女性のセクシュアリティを否定する女嫌いではなく、むしろ男性のセクシュアリティを拒絶する男嫌いを示している。この男嫌いは伝統的なサッポア像を修正し、その同性に対する愛を脱性化することを含意する。最後の第十一章では、マライア・エッジワースの小説『ペリンダ』(二八〇二)における男装の女性登場人物、ハリエット・フリーク夫人に焦点を当てる。当時の女性兵士のように銃を撃ち、ウルストンクラフトのように「女性の権利」論を唱え、サフィストのように「奇妙な」雰囲気

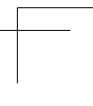
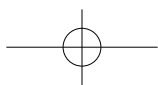
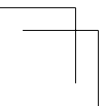
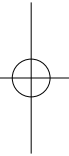
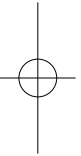
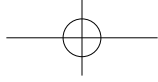
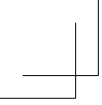
を漂わせて女性に言い寄り、シユヴァリエ・デオンのように密偵活動に勤しむフリーク夫人は、あたかも舞台の上のズボン役の女優のように、「男性」を上手に面白おかしく演じる。だが、ズボン役の女優なら舞台から降りれば女性に戻るが、フリーク夫人の場合、二度ともとの性に戻れないという恐れが常につきまとう。しかし、風俗喜劇の閉幕のようなこの小説の終わり方は、そのようなジェンダーの逸脱に対する性転換の恐怖や脅威を無効にしている。『ペリンダ』における男装の女性の滑稽化とフィクション化は、十八世紀的な両性具有的身体や曖昧なジェンダー・セクシユアリティの終焉を暗示するであろう。その意味で、このテキストほど本書を閉めるにふさわしいものはない。

本文に入る前に、本書で用いているいくつかの用語について説明を補足しておきたい。本書でいう「イギリス」とは、その語の起源である England ではなく、Britain あるいは United Kingdom のことであるが、現在の連合王国だけではなく、十八世紀における国名を指すときにも慣用的に用いる。ただし、同国の連合の歴史的变化を反映させるために、十八世紀の文献に登場する England や Great Britain などの名称はそのまま忠実にカタカナ表記する。また、現代英語では、女性同士の愛や親密関係を表す語として、lesbian, lesbianism, sapphism, female homosexual, female same-sex love などさまざまな語があるが、本書では、「女性同性愛」の語を、女性同士のホモセクシユアルな関係からホモソーシヤルな関係までをカバーする総称として用いる。どのような関係がセクシヤルであると言えるのか否かは、時代や文化のセクシユアリティ観によって異なる上、第五章で触れるエードリアン・リッチの論文でも明確な定義がされていない微妙な問題であるが、本書では、一九八〇〜九〇年代の女性同性愛史家たちに倣って、「レスビアニ」、「サフィズム」、「ホモセクシヤル」の語はセクシユアルな関係、「ロマンティックな友愛」は無垢な関係を指すものとして対比的に使っている。これらの語はすべて「女性同性愛」の範疇である。



第一部

サツポ^ヒの歴史^ス／物語^ト



◆◆◆第一章◆◆◆

レスビアン誕生秘話

レスボス島民はレスビアン

ギリシャのレスボス島（現在ではミティリニ島と呼ぶ方が多い）はエーゲ海で三番目に大きい島である。トルコの沿岸から四・五キロ沖に位置し、アテネから飛行機にのってわずか三〇分で行くことができる。オリブの木と葡萄畑に恵まれた美しい島だ。紀元前七世紀頃はどうかだったのだろうか。その頃、この島にはサッポーという名の西洋最初の女性詩人が住んでいた。彼女は正真正銘の“Lesbian”だった。と同時に、彼女は西洋最初の“lesbian”としても有名だ。

大文字で始まる“Lesbian”は形容詞で「レスボス島の」、名詞で「レスボス島民」を意味するが、“lesbian”は形容詞で「女性同性愛の」、名詞で「同性愛の女性」を意味する。日本語で「レスビアン」とよく言うのは、もちろん後者の英語を指す。だが、“lesbian”の由来が“Lesbian”だと知らずに、その言葉を使っているのではないだろうか。

“Lesbian”から“lesbian”が派生したのは、レスボス島が生み出した最も有名な女性詩人であるサッポーが同性愛者であったという伝説がまことしやかに伝わっていたからだ。しかし、この偉大な詩人が果たして本当に同性愛者であったかどうかは、実のところ誰にもわからないだろう。確かに、現在まで唯一完全な女性たちで伝わっている「断篇1」とほぼ完全な女性たちで伝わっている「断篇31」は二編とも女性への愛をうたっているし、他にも同性愛を仄めかす断篇も残っている。だが、男女間の愛や子どもへの愛をテーマにした断篇もある。「愛の詩人」¹であったことは確

かのようなが、同性愛の詩人と断定するにはあまりにも証拠が限定的であると言わざるを得ない。そして彼女の生涯についてはもっと不確かで、彼女よりはるか後世に記された証言や伝記によるさまざま、時に矛盾する内容が伝わっているにすぎない。

しかし、十八世紀末頃までに、「Lesbian」の語が「レスボス島民」ではなく「レスビアン」の意味で使われたり、 sappho の名前から派生した“Sapphist”や“Sapphian”がそれぞれ現在と同じように「女性同性愛者」や「女性同性愛」の意味で使われるようになった。Sappho とくれば女性同性愛を連想し、女性同性愛とくれば sappho を連想する。この連想ゲームは sappho とその生地レスボスの固有名詞の普通名詞化によって一応の終わりを迎え、現在に至っている。第一章では、その連想ゲームの推進力になった伝説上の sappho の歴史／物語を通観する。

「第十番目のミューズ」が愛した男性たち

レスボスの sappho の歴史／物語は、彼女の死後数世紀を経て始まる。ギリシャの哲学者プラトン（紀元前四二七頃―三三八）は sappho を「第十番目のミューズ」(Tenth Muse) と呼び、生身の女性でありながら女神として崇めた。彼女の名前はアレクサンドロス大王の征服によってギリシャ世界が一つの帝国になり、ギリシャ文化が新しい段階に入ってから轟いていた。紀元前最後の二世紀、アテナイはもはや文化の中心ではなく、代わりに他の諸都市が重要になったが、その一つがアレクサンドロス大王によって北エジプトに設立されたアレクサンドリアである。アレクサンドリアは書き言葉に重きを置く文学文化の発祥地で、学者たちによって sappho を含む過去の詩人たちの作品が編集・出版された。Sappho は規範的な抒情詩人の一人として見なされていたので、彼女の詩集は全九巻におよび、その第一巻には一三二〇行の詩行（三三〇スタンザで六〇〜七〇の詩）があったらしい。全部で五百編あったとも推定されている (Barnstone 274; Campbell, introduction xiii)。そしてローマ時代に入ってから彼女の名声は続き、ホラ



図版1
「サッポーとアルカイオス」、紀元前5世紀前半頃の
アテナイのワイン・クーラー。マーガレット・ウィリア
ムソン『サッポーの不滅の娘たち』(1995)挿絵2。

ティウス(紀元前六五―八)から「男性的なサッポー」(Vest. 34)という賛辞を呈された。

それでは、いつ頃から、このように古代において名を馳せていた偉大な詩人が同性愛者であるという話が起ったのだろうか。現存する古代証言を見てみる限りでは、西暦が始まってまもなくのようだ。それより前には、と言っても紀元前四世紀から三世紀頃だが、彼女の恋愛の相手として挙げられた名前はすべて男性で、女性はい人もいなかった。たとえば、紀元前四世紀頃アテナイの少なくとも六つの喜劇がサッポーの下ネタ話をテーマにし、大盛況だったらしいが、そのうちのひとつでは、彼女はイオニアの詩人アルキロコスとヒッポナクスという二人の男性と同時に恋愛関係にあった(Vest. 8)。また、ギリシャの学者アテナイオスによれば、紀元前三世紀頃のヘルメシアナクスは抒情詩人のアルカイオスとアナクレオンがサッポーをめぐる恋の鞘当てをしたと伝えている(Vest. 8)。しかし、これらの恋愛

話でもっともらしいのは、サッポーと同時代で同郷のアルカイオスだけだ。アナクレオンはサッポーより一世紀あとに活躍した詩人だし、アルキロコスとヒッポナクスはそれぞれ彼女より何十年も前かあとの時代の人物であり、その上、この三人ともレスボス島出身者ではない。してみると、アルカイオスが彼女の恋人だったという話も眉唾物ではないか。サッポーにはもう一人男性の恋人がいた。パオンという名前の若くてハンサムな渡し守である。この話も紀元前四世紀頃のアテナイの喜劇で始まったが、パオンは上記の詩

人たちと違って、実在の人物というよりむしろ神話的人物である。ある神話によれば、パオーンはレスボス島の年老いた渡し守だったが、老女に扮した愛と美の女神アフロディテをただで川向こうに渡したお返しに、アフロディテによって、レスボスのすべての女たちが恋に落ちるような美青年へと変えられたという。また別の神話に、アフロディテ自身が彼を愛したというものもある。これは、アフロディテに愛されたアドニス、曙の女神エオスに愛されたテイトノス、月の女神セレネに愛されたエンデュミオンなど、女神が年下の美青年に恋する神話のパターンを踏襲したものだ。紀元前四世紀にはこれらの美青年を題材にした喜劇がかなりあった。現在、少なくとも一つの『エンデュミオン』、二つの『アドニス』、一つの『パオーン』の話があったことが知られている。そして、ある時点で、サッポーはパオーンに恋した女たちの一人とされ、レフカスの岩上から海へと飛び降りれば失恋の痛手が癒されるというもう一つの神話と融合して、彼女が彼に失恋したあとレフカスの岩上から身を投げ、亡くなったという話がつくられたようだ。喜劇作家メナンドロス（紀元前三四二頃―二九三頃）による『レフカスの女』の断篇以外ほとんど残存していないが、三つの喜劇がこのエピソードを扱っていたらしい。

このように複数の男性たちとの恋愛話が起ったのは、名前が売れば売れるほど払わねばならない有名税のようなものだったかもしれない。それはやがてサッポーの名声を決定的に貶めるような悪評判をもたらすことになった。

オウイディウスのサッポー

古代ローマの詩人オウイディウス（紀元前四三―後一七）がサッポーの偽手紙を書いたとき、後世にまで彼女の悪名を広げるほどの影響力があると思っただろうか。現在『女主人公たち』の第十五番目に収められている「パオーンに宛てたサッポーの手紙」は、サッポーがパオーンに失恋してレフカスの岩上から海へ飛び降りて亡くなる直前に彼に宛てて書いた手紙という体裁をとった詩で、この写本が十五世紀はじめに発見されたとき、サッポーの本物の手

紙をオウイディウスがラテン語に翻訳したものと勘違いされたという (Most 17)。

しかし、オウイディウスは詩の冒頭からおふざけ調子だ。サッポーはパオンに、あなたは私の筆跡が誰のかおわかりにならないでしょうと言う。もちろん、わかるはずがない。オウイディウスの筆跡なのだから。だが、彼のサッポーはかまわず続けて、叙情詩で名高い私がどうしてその形式ではなくて、このエレジー形式の手紙を書いているのかとおたずね

になるでしょう、それはエレジーの方が私の悲しみを伝えるのに最適だったからよ、としらじらしい。オウイディウスのサッポーはこのようにもはや抒情詩人でなく、年甲斐もなく若いパオンに熱をあげ、彼に棄てられてもなおかつ未練があり、ついには絶望のあまり投身自殺してしまう単なる女性である。だが、それだけではない。さらに衝撃的なことに、オウイディウスのサッポーはカミングアウトした女性である。彼女の告白によれば、彼女はパオンという若い男性への愛に身を焦がすようになる前は、アナクトリエ、キュドロ、アッティスという三人の女性をはじめとする百人以上のレスボスの女性たちと同性愛関係にあった。だが、パオンに恋に落ちて今となつては、以前のように彼女たちに心を奪われなと言う。いや、女性たちとの恋は次のように「とがむべきもの」(crime)であったと後悔する。のちに言及する英訳詩との比較のために、ローブ古典文庫のグラント・シャワーマンの英訳を併記する。

non oculis grata est Athhis, ut ante, meis,

atque aliae centum, quas hic sine crimine amavi. . . . (Ovid, Epistle XV: "Sappho Paoni," lines 18-19)²⁸



図版 2
1799年版の『スペクテーター』第3巻
210頁(第223号)に面した挿絵。

my eyes joys in Atis as once they did, nor
in the hundred other maids I loved here to my reproach....

そしてのちには女性への愛が自分の「名誉を棄損に」(infamem) (“Sappho Paoni,” line 201) したのだとも述べている。女性同士の愛はとがむべきで不名誉なものだが、もうそれは過去に終わった話で、現在は男性を愛している——オウィディウスのこのような sappho の描き方は、女性同性愛をギリシャの現象と見なすことによって、それと距離を置こうとするローマ人の一般的な態度を端的に反映しているだろう。オウィディウス以後、sappho の同性愛への言及が目立つようになるが、それらはしばしば非難の声を伴っていた。たとえば、現存する一番古いギリシャ語の sappho の伝記(二世紀終わりか三世紀はじめ)は、「彼女のことを淫らで、女を愛する女(“a woman-lover”)として非難する者もいた」(test. 1)と伝えている。また、アッシリア出身のシリア人のキリスト教護教家タティアアノスは一八〇年頃 sappho を「淫らな恋の病にかかった女で、自分自身の好色をうたう」(Tatian ch. 33)として攻撃し、彼女の詩の評判を落とした。二世紀のギリシャの修辭学者・哲学者テュロスのマクシモスは sappho と女性たちとの関係をソクラテスの愛にたとえたが (test. 20)、四世紀のギリシャの修辭学者・哲学者テミステイオスは、「われわれは sappho とアナクレオンに彼らの最愛の人「少女・少年」を節制なく、手放して褒めたたえ放しにしている」(test. 52)と評した。さらに、三世紀初期のローマのホラティウス注釈者ポルピュリオンは、ホラティウスの「男性的な sappho」という表現をめぐって、sappho が「男性的」なのは男性の方が優れている詩の分野で彼女が有名だからか、それとも「トリバド」(女性同性愛者) (“a tribad”) だったとして中傷されているからか、一体どちらのせいなのかと頭を悩ませた (test. 17)。なぜなら、古代においては「男性的」という言葉は知的な文脈だけではなく、同性愛の女性を指すのにも使われたからである。

男性のように女性を愛する

女性同性愛者が「男性的」と見なされていたことについては少々説明が必要であろう。古代の性のしきたりによれば、性的関係における二人の役割はかなりはっきり識別されていた。つまり「男性」は愛する側で、積極的に恋人を求め、⁴「女性」は愛される側で、欲望の対象だった。従って、二人とも男性の場合、一般に年齢も地位も違っていて、年上で上の階級の者が能動的に愛する方で、男と見なすには若すぎる少年が愛される方なので、さほど問題ではない。だが、女性同士だと、どちらか片方が「男性」の役割を担っていると憶測するより他にないのである。

オウィディウスの『変身物語』中の「イピスとイアンテの話」では、女性が女性と交わるために片方が本当の男性に変身する。イピスの母親トレトゥーサは生まれた子が女なら育てるのはやめようと言っていた夫に真実をうち明けることができず、娘を男の子だとうそをつき、そのように育ててきた。イピスが十三歳になったとき、「彼」の父親は「彼」を美しい乙女イアンテと婚約させた。イピスとイアンテはすぐさま相思相愛になったが、イアンテが婚礼の日を待ち望んでいるに対し、イピスは女が女を愛すなんて、雄牛と交わったパシパエ（太陽神の娘）よりも異常だわと思悩む。パシパエの恋の相手は「まがりなりにも男だった」から。トレトゥーサも心配して、なんとか婚姻の日どりを延ばしてきたが、とうとう嘘の種も尽きてしまったので、イシス女神に助けを求めた。イシス女神は願いを聞き入れ、イピスを男に変えたので、イピスはめでたくイアンテと結婚できたのである。

二世紀のギリシャの諷刺作家ルキアノスの『遊女の対話』の第五話「レイイナとクローナリオン」では、男に変身しないけれども「男のように」女を愛するレスボス出身の女が出てくる。遊女のクローナリオンは「お金持ちのレスボス女のメギラ」と同様しているレイイナに、一緒の時に何をされるのよ、としつこく訊ねる。何しろ、「レスボスじゃ女の人は男みたいで、男に例のことをされるのを嫌って、自分の方から女の人にまるで男みたいに近づくといい噂があるから、興味津々なのだ。そこで、レイイナはしぶしぶ、次のように告白する。彼女は、宴席のあとでメギ

ラともう一人の女デーモーナツサがいるベッドへと誘われたのだ。メギラはまるで「男の人」みたいにレイアイナにデーイプ・キスをし、燃え上がってくるといきなり髪を脱ぎ捨て、丸坊主の頭を見せた。そして、自分はメギロスという男で、ずっと前からここにいるデーモーナツサと結婚しているのだと言う。驚いたレイアイナが「それじゃ、メギロスさん、あなたは、アキレウスが紫の衣を着ている乙女たちの間にかくれていたと言われるように、男なのに私たちにはわからずにいたってわけね。あなたは男の例のものを持っていて、男と同じようにデーモーナツサにするのね」と聞くが、メギラは「例のもの」は持っていないと答える。また、「両方の性器を持つヘルマプロディートスでもなければ、テーバイの予言者テイレイシアースのように女から男になったのでもない、生まれつき女だけでも「考え方や望み、その他の点ですっかり男なんだ」と言う。そして、「私には男のものの代わりがあるのさ、さあ、やらせてご覧」とレイアイナに迫り、ことをおこない、満足したのである。

レスボスの男のような同性愛女性の話はサツポーを想起させるに十分だろう。このテキストはレスボスと女性同性愛を決定的に結びつけた現存する最古のものとして重要であるが、それに加えて、女性がどのように女性を愛するのかという疑問に一つのヒントを与えている点でも重要だ。つまり、メギラは肉体的には女性だが、「男のものの代わり」を持っていて、それを使って女性を悦ばせることができた。「男のものの代わり」とは何か。これについては舞台がイギリスの十八世紀に移ってから詳述したい。

二人のサツポー

サツポーの話に戻れば、三世紀頃までには、彼女の評判は完全に地に落ちてしまったと言ってよい。しかし、サツポーの名誉を回復しようと頭をひねった学者もいた。三世紀のローマの修辭学者アイリアノスは、『ギリシャ奇談集』の中で、「レスボスにはもう一人サツポーという名の女がいて、これは詩人ではなくて遊女であったことを筆者は知っ

ていね」(test: 4)と書いているが、その情報の拠り所は紀元前三世紀頃のシチリアのシユラクサイ出身のギリシャ人著述家ニユンポドロスだった。ニユンポドロスは詩人のサッポーの他に売春婦のサッポーがいて、後者の女がパオーンという若者に恋に落ちたのだと主張した⁵。これはアテナイの喜劇で描かれた好色なサッポーに対する反動だったと考えられている。二人のサッポー説を唱えることによって、偉大な詩人サッポーを不名誉から救い出そうとしたのである。

こうした解決法は十世紀の百科事典『スーダ』にも引き継がれている。レスボス島出身のサッポーの項が二つあるのである。一人は、エレスス市出身の抒情詩人、「大金持ちと結婚し、(中略)クレイスという名の娘をもうけた。彼女にはアッティス、テレスイッパ、メガラという三人の仲間と友人たちがいて、彼女らとの不純な交友で悪名高かった。(中略)彼女は九巻の叙情詩を書き、ピック「弦楽器演奏用のつめ」を発明した。彼女はまた警句、挽歌、短調格の諷刺詩、独唱歌も書いた」(test: 2)。もう一人のサッポーはミティリニ市出身のリラ奏者で、「ミティリニ人のパオーンへの愛のためにレフカスの岩上から飛び降りて、溺死した。彼女も叙情詩を書いたという者もいる」(test: 3)。しかし、たとえば、一番目のサッポーの結婚相手がアンドロス島(Andros)出身のケルキュラス(Kerkiras)という名前だと記されるが、ギリシャ語でAndrosは「男性の」、Kerkosは「陰莖」を意味する⁶ (Lardinois 22)、男島出身の陰莖氏というのも同然のふざけた名前である。『スーダ』がどれほどまじめにサッポーの「伝記的事実」を記そうと、ばかばかしさがただよっている。

ルネサンス時代のサッポー

『スーダ』以降中世後半の間はサッポーについての言及は何もないが、ルネサンス時代に彼女は戻ってきた。オウィディウスの『女主人公たち』が続々と出版され、その中の「パオーンに宛てたサッポーの手紙」がサッポーの伝

記の主たる源泉になる。オウイディウスの注釈者たちにとって、 sappho の同性愛は事実だった。たとえば、一四八二年、一四九二年、一四九五年、一四九九年に出版された一連のベネツイア版や十六世紀のいくつかの大陸版にはドミテイウス・カルデリヌス（一四四七―七八）のラテン語の注釈が繰り返し収録されたが、そこには次のような記述があった。

彼女「 sappho 」は彼女たちを男がやるように愛したが、他の女性たちとはトリバド (tribade) だった。つまり、ユウエナリスやマルティアリスによれば、「ギリシャ語の」 *tribas* とはこすることだから、こすることによって女性たちが陵辱したのだ。それで、彼女はホラテイウスによって男性的な sappho と呼ばれたのである。

(Quid. in Andreadis, *Sappho* 29-30)

ドミテイウスは「男がやるように」愛する行為（挿入）と「こする」行為を区別しているが、両方とも女性同性愛行為として見なしている。また、ここでは、「男性的な sappho」というホラテイウスの有名な言葉が、 sappho の詩的な能力ではなく彼女の同性愛と結びつけられていることにも注目したい。古代のポルピュリオンにとってどちらを指すのか不明だったけれども、ルネサンス時代のオウイディウスの注釈者にとって sappho が男性並の詩的能力を持つていることなぞ思いもよらなかつたのだ。

sappho の詩はアレクサンドリアの学者たちによってまとめられたときには全九巻あったのに、暗黒時代が始まる直前の九世紀頃までには、ほとんどが消えてしまった。十六世紀には、この突然の消失を巡って、もう一つの歴史^{ヒスト}物語^リが書き留められた。すなわち、異教の詩人で同性愛者の sappho の作品は初期キリスト教徒たちによって道徳的放縦の極致との烙印をおされ、焚書の対象になったと。たとえば、コンスタンティノープルの主教ナジアンゾスのグレゴリオスが三八〇年に sappho の作品を燃やせと命令したとか、あるいは、イタリア生まれのフランスの古典学者ヨセフ・スカリゲル（一五四〇―一六〇九）が、一〇七三年にローマ教皇グレゴリウス七世の命によって、 sappho や

その他の抒情詩人の作品がローマとコンスタンティノープルで焼き捨てられたという話を伝えている。⁶

その一方で、詩人としてのサッポーを全面的に崇める者たちもいた。たとえば、十五世紀はじめのフランスでは、女性作家クリステイヌ・ド・ピザン（一三六三頃—一四三二）がサッポーの詩的な名声を傷つけるような愛人とか同性愛などについては一切触れずに、知的な女性としてのサッポーを称えた。そして、サッポーやその他の十七人の知的な女性たち——歴史上の人物だけでなく、ローマ神話の知恵と武勇の女神ミネルヴァ、ギリシャ神話のキルケー（ホメロスの『オデュッセイア』に出る、魔術で男を豚に変えたという魔女）、メーデイア（イアーソーンの金の羊毛獲得を助けた魔女）など神話的人物も含む——こそが、女性に男性と同じ知性があることを示す証拠であると主張した。十六世紀に入ると、イタリアの画家ラファエロ（一四八三—一五二〇）が「バルナツソス」の絵の中で九人の女神たちの中に混じる唯一の人間としてサッポーを描き、イギリスでも、古典学者トマス・モア（一四七八—一五三五）がプラトンによつてサッポーが「第十番目のミューズ」と呼ばれたことをラテン語とギリシャ語で引用した。さらに、十六世紀終わりには、劇作家ジョン・リリー（一五五四頃—一六〇六）がエリザベス一世の面前で上演した喜劇『サッポーとパオ』（二五八四）において、サッポーをエリザベス女王のように王家の生まれで、学識があり、かつまたパオ（エリザベス一世に求愛していたアランソン公爵を暗示）へのエロティックな情熱に打ち勝ち、処女を守った貞淑な女性として描いていた。⁷

十六世紀には、サッポー自身の詩も現れている。イタリアでは、一五〇八年にサッポーの「断篇1」を引用したハリカルナツソスのディオニュシオスの『文章構成法』が、一五五四年に「断篇31」を引用したロンギノスの『崇高論』が出版された。フランスでは、一五四六年にギリシャ語版の『文章構成法』が出版されたあと、一五五四年にサッポーの「断篇1」を収めたアナクレオンのギリシャ語版の詩集、一五五六年にはその第二版で「断篇31」も収めたものの出版、そして一五六六年には、「断篇1」と「断篇31」の他に四〇ほどのサッポーの断篇も所収したギリシャ抒情詩人詩集（ほとんどの詩にラテン語訳がつく）が出版された。フランスではその後一六六〇年にアナクレオンと

サッポアのギリシヤ・ラテン語版の詩集、一六七四年には、ボワロによる有名なフランス語訳『崇高論』、一六八一年にはアンヌ・ルフェーヴル・ダシエによるフランス語訳『アナクレオンとサッポアの詩集』などが続々と出版されることになる。

これに対し、イギリスではジョン・ホール（一六二七—一七〇六）による最初の英訳『崇高論』の出版が一六五二年、サッポアの詩を収めたギリシヤ語とラテン語訳版の『アナクレオンのオード』出版はもっと遅く一六九五年である。しかし、それより以前でも古典語を解する知識階級の間でサッポアの詩はよく知れ渡っていたようだ。たとえば、十七世紀はじめの形而上派詩人ジョン・ダン（一五七二—一六三三）は、サッポオが女性のピラエニス（この名前は古代ローマの詩人マルティアリスが描いた両性愛者として有名な女性から採られたと推定されている）に宛てたという設定の詩「ピラエニスに宛てたサッポオの手紙」を書いたが、その十六行目「私はあなたを神々にたとえる」（“when gods to thee I do compare”）は明らかに「断篇31」の一行目の影響を受けている。ちなみに、ダンのサッポオは、オウイデイウスの淫らなだけのサッポオと違って、詩の言葉がどこから生じるのかを真剣に探る詩人である。

オウイデイウスの影響

しかしながら、イギリスでは、十六世紀中頃から『女主人公たち』の英訳版が続々と出版されて、オウイデイウスのサッポオ像が広く世間に行き渡るにつれ、詩人サッポオの名誉にかげりが出てきた。つまり、両性愛者サッポオとしてのイメージの方がクロースアップされたのである。オウイデイウスの英訳版の推移を見ると、いかにサッポオの同性愛がキリスト教の罪として抑圧され、語るのものはばかれるものになっていったかがわかる。たとえば、前に引用したオウイデイウスのラテン語の詩で“crime”として言及されている箇所が、一五六七年のジョージ・ターバヴィル（一五四〇頃—一七七頃）の英訳では“shame”（恥辱）とされた。

Nor Athis, as she did of yore,
allures these eyes of mine.
Ne yet a hundreth mo
whom (shame ylayd aside)
I fancide erste....⁹

一六三九年のジョン・シャバーン（十七世紀中葉活躍）の英訳では、その箇所は「私の罪」である。

Vile *Athis*, once most gratefull in my sight,
And hundreds more with whom my sins are knowne.¹⁰

そして最も有名な一七〇七年のアレクザンダー・ポープの英訳では、サッポアの同性愛の相手の数や具体的な名前すら消され、ただ単に「私の罪深い愛の対象」と一言で済ませている。

No more the Lesbian dames my passion move,
Once the dear objects of my guilty love: (lines 17-18)¹¹

オウイデイウスの影響力はさらに旅行記にまで及んだ。たとえば、フランス人ニコラス・ド・ニコレイ（一五一七―一八三三）の『トルコ航海記』の一五八五年の英訳では、トルコの女性たちが公衆浴場に一緒に入る風習について次のように描写された。

彼女たちには十人か十二人で、時にはもつと大勢、ギリシャ人もトルコ人も一緒に行き、お互いの体を親しく洗

い合う。そうすると、頻繁に浴場に行くうちに、レヴァント「東部地中海およびその沿岸諸国」の女たちの間は非常に親密になる。それのみならず、時には、まるで男性とのように、強烈に愛するようになる。ある乙女や絶世の美女を見初めたら、彼女たちと一緒に入浴し、随意にどこでも彼女らに触れ、体をまさぐる手段を見いだすまでやめないほどに。この女性たちはそれほど享樂的で同性に淫らである。遠い過去にもトリバド「女性同性愛者」たちはいた。そのトップがレスボス島のサッポーで、百人の大人の女性や少女たちを愛していたのだが、たった一人の男友達パオンに気を移してしまった。(Nicolaïy 60)

ここでは、トルコの女性たちがお互いに体を洗い合うことによって、「まるで男性とのように」同性と愛し合うようになること、そして、そのような女性たちを意味する「トリバド」のイコンの存在として、サッポーの名前が挙げられている。このサッポーは、彼女の同性愛の相手として「百人」という数が示されているように、明らかにオウイデウスが描いたサッポーである。

近代初期の旅行記には、このように女性同性愛を東方のトルコの女性たちの奇妙な習慣として紹介するものがあった。一六八四年に英訳されたフランスの男爵J・B・タヴァニエ（一六〇五―八九）の『トルコ・ペルシャ・東インド諸国旅行記全集』中の「大君主の宮殿内奥の新しい関係」では、トルコ宮殿内のハーレムやコンスタンティノープルの女性たちが男性同士の「いまましい愛」(Tavernier 2: 86)をまねた女性同士の性愛について伝えている。サッポーの生地とされるレスボス島はトルコ沿岸沖にあるので、トルコの習慣はもともらしい話である。しかし、当時の旅行記が常に真実を記しているとは限らなかつた。キャサリン・パークが「性的異常を別の種族や大陸の女性たちのエキゾチックな肉体に投影することは、近代初期ヨーロッパ地誌文学によく見られる文彩だった」(Park 17273)と述べているように、旅行記は女性同性愛の存在を遠い東方のトルコに追いやることによって、西洋社会からその存在を排除するのに一役買っていたのである。これは古代ローマ人が女性同性愛をギリシャの現象として見なしたのと似ている。

当時の旅行記にはまた、女性同性愛者を東洋化する傾向に加えて、差別的な階級意識も見られた。たとえば、アウグエリウス・ギスレニウス・ブスケイウス（一五二二—九二）のラテン語の『トルコへの使節に関するA・G・ブスケイウスの四通の書簡』（二五八九）は各国語で再版を重ね、英訳版は一六九四年になってはじめて出た本だが、この中には、トルコの公衆浴場で同性愛にふける女性は「庶民」であり、「家に風呂がある」（Busbecq 182）貴族階級の女性ではないと記されている。十七世紀のイギリスの読者層はほとんどが貴族だったので、遠い異国の、しかも庶民階級の女性の同性愛の話を自分たちとは関係のない話として楽しんだことは想像に難くない。

イギリスでは、サッポーのような女性同性愛者は古代や遠い異国にはいたかもしれないが、国内にはどこを探してもいないと信じられていた。それはイギリスが西洋諸国の中で女性同性愛を一度も法的に処罰しなかった唯一の国であることと無縁ではない。中世以来近代に至るまで、大陸の女性同性愛者たちは法的迫害を受け続け、少なくとも一人のドイツの女性同性愛者が一七二一年に処刑されたことが知られている（Dekker and de Pol 76-80; Hitchcock 77）。一方、一五三三年のイギリス法では、男性同士や男女間のソドミーだけが死罪にされた。女性同士の愛はどうして法的に罰せられなかったのだろうか。ある女性同性愛史家によれば、それは決して女性同性愛の存在が許されていたからではなく、むしろ社会的に抹消され、無視されていたからだという（Donoghue, *Passions* 18）。イギリスでは、それほど女性同性愛に対する抑圧が強力だったと言える。

両性具有の身体

さて、古代のルキアノスのレスボス女メギラは自分が身体的に女性であるけれども、「男のものの代わり」を持っていて、それを使って女を悦ばせることができるとはっきり主張した。「男のものの代わり」とは何なのか。この疑問に、いまだ二世紀ギリシャのガレノス説から脱却していなかった近代初期の医学書や解剖学書は、男性性器並に大

きなクリトリリスのことであると断定した。そして、十七世紀の旅行書と同じように、サッポーを祖とする女性同性愛者の異国説を唱えた。

たとえば、三〇年の産婆のキャリアを持つジェーン・シャープは『産婆術書』（二六七二）の中で、他の人たちよりも大きくて、垂れ下がっているクリトリリスを持つ女性を両性具有者であるとし、次に肉体的な異常がいかに性的な異常を導くかを説明した。普通のクリトリリスはほんの小さな芽だが、時々陰茎のように大きくて長いものがある。それは刺激されると膨れて固くなるので、「淫らな女たち」はそれを「男が彼女らにしてくれるように」使うのだ。シャープは最後に、そのような異常な性器を持つ女性はいンド諸国やエジプトでは珍しくないけれども、イギリスには一人としていないと述べている(Sharp 44-45)。女性同性愛の場所としてトルコの代わりにインド諸国やエジプトの地名が挙げられているが、いずれにせよイギリスから遠い異国であるので、読者は一安心したに違いない。

シャープの『産婆術書』は一七二五年までに四版を重ねたほど俗受けしたが、フランスの外科医ニコラス・ヴェネット（二六三三―一九八）が一六九六年に書いた本の英訳版『夫婦間の営みの奥義の開示』（一七〇七）も人気があった本である。これは主にいかにしたら子どもをつくれるかを記した性の手引き書であるが、本の終わりの方で五種の両性具有者についての説明がある。最初の三人は「本物の男性」、五番目のは「完全な両性具有」で両方の性器を持つ。そして四番目のがクリトリリスの大きい女性で、ギリシヤ人たちが「トリバド」と呼んでいたものだという(Venette 453-67)。ヴェネットはまたクリトリリスの説明のとき「この部分を好色な女性たちはしばしばいじる」と述べ、そのすぐあとで、「レスポスのサッポーは彼女のこの部分がもっと小さかったら、あんなひどい評判がたたなかったであろう」(Venette 15)と言っている。サッポーが同性愛なのは彼女の性器の奇形のせいという説である。

一七〇八年出版の『オナニア』は一七五九年までに十九版までいった自慰の禁止を唱えた本である。一七二五年頃出版された『オナニア補遺』は、自慰をするとクリトリリスが大きくなるからという理由で、禁止を唱えた。そして、クリトリリスが大きい女性の「ことば」Fricatrices, Tribades, Subgatrices, Hermaphroditess[ic]（はじめの三つが女性同

性愛者を指し、最後が両性具有者のこと」と呼び、そういう女性はトルコ、リスボン、アラビア、フランス、北アメリカ、スコットランドにいると明記した (Supplement to the *Onania* 154-66)。

ジェイコブ・ジャイル (一六八六—一七四四) の作とされる『両性具有者論』(一七一八)¹² は、ヴェネツトの五種の両性具有者を紹介し、検証したあと、主に女性の両性具有者について言及している。それは大きなクリトリスの持ち主で、「たくましく、好色」で、他の女性とお互いに楽しみ合う女性である。「両性具有者たちと男性的な女性たちの情事」のセクシオンはそういう女性たちの具体的な話を描く。最初の話は「気候が暖かくなるにつれて、肉欲への耽溺が強くなる」という記述から始まり、イタリアとフランスの二人の男っぽい女性同士が男女の役割を変えつつ楽しむ秘め事について、二番目の話はそれぞれ男性に失恋した二人のイタリア女性が一緒に住み、互いに愛し合ったが、二人とも最後には男性と結婚したことについて、三番目の話は二人の有名な両性具有者についてである。この種の女性たちは (イギリスのように) 涼しい国々よりも暖かい「トルコや他の東洋諸国」に多いとされた (Jacob 17, 19-55, 60)。

ジェームズ・パーソンズ (一七〇五—一七七〇) の『両性具有者の性質に関する機械論的批評的研究』(一七四二) では、真正の両性具有者はいないとされる。いるのは身体的に欠陥のある女性、すなわち「大きなクリトリスを持っている女性」(Macrochlorideate) だけで、そういう女性は「女性同性愛者」(Confratrices) であり、アフリカや東洋で見られるところ (Parsons 63, 21, 10-11)。

ジョージ・アルノー (一六九八—一七七四) の『両性具有者論』(一七五〇) は、完全な両性具有者と不完全な両性具有者 (男性か女性のどちらかが支配的) がいると考える。女性の両性具有者 (female hermaphrodite) は大きなクリトリスを持っている女性である。そういう女性はヨーロッパではまれだが、エジプトではありふれており、また、「性的快楽の達成なく性交を楽しむ宦官」に似ているとされ、「その種の」女性の代表としてレスボスのサッポーの名前を挙げてくる (Arnaud 16-19)。

さらに、スイス人のサミュエル・テイソ (一七二八—一七九七) の自慰に反対を唱えた論文の英訳『自慰』(一七六六) は

一七八一年までに五版も出版された本だが、ここではクリトリスを使う自慰はレスボスのサッポーから始まったとき、オウイディウスの詩からサッポーの女性たちの描写がラテン語で引用されている (Tissot 45-46)。

このように、女性同性愛者は女性両性具有者と同一視され、異常なセクシュアリティと異常な身体の異国説が繰り返し唱えられた。他の女性に対し「男性」の役割を果たす両性具有の身体という考えは、当時生物学的・解剖学的性 (sex) が現在と違って男性、女性、そして両性具有者の三種類あり、社会的・文化的性 (gender) が現在と同じく二種類だったことを反映している。¹³ 女性同性愛行為は両性具有という身体によって可能だったが、そうした身体を持ち主はジェンダー的に男性として見なされたのである。「男性的なサッポー」という古来の呼称がここでも反響している。

淫らなサッポー

それでは、異性愛者としてのサッポーの方の評判はどうであったろうか。女性の同性愛がアブノーマルなら、異性愛はノーマルのはずだ。ところが、十七世紀に戻ってみると、パオーンに対する愛を赤裸々に訴えるサッポーも淫らな女性として批判の対象だった。能動的な男性に対し受動的な女性という愛の場面における二分法は古代から現代まで根強く生きているが、特にキリスト教下では、慎みのある女性は決して自分から愛を訴えたりはしない、淫らな売春婦だけが積極的になるのだと考えられていた。それ故、ウィリアム・ボズワース (一六〇七―一五〇頃) の死後出版の詩『貞淑な恋人たちと墮落した恋人たち』(二六五二) 中の「パオーンとサッポーの物語」は、オウイディウスの詩と違って、レスボスのまだうら若き詩人サッポーが異国の騎士パオーンに熱烈なモーションをかける様を描いたとき、パオーンにこう批判させたのである。

Immodest Girl he said, why art so rude

To woo? when vertuous women should be woo'd,

And scarce obtain'd by wooing... (Bosworth 67)

下品な小娘よ、と彼は言った。どうしてそんなに淫らに／言い寄るのか？ 貞淑な女性たちが男どもに／言い寄られ
ても、めったになびかないときに。

アレグザンダー・ラドクリフ（一六六九—九六活躍）の『オウイデイウスもどきの詩』（二六八二）中の「パオーンに宛てたサッポーの手紙」では、サッポーは非常に有名なバラッド歌手であり、パオーンは彼女のコーラス仲間であると同時に恋人である。しかし売春宿のマッサージ師に心を移したパオーンは、サッポーの指輪とペティコートを盗んで彼女のもとを逃げ出した。そこで、盗んだものを返してくれなければ四階の屋根裏部屋から飛び降りて死んでやる、とパオーンを脅す手紙の中で、ラドクリフのサッポーはオウイデイウスのサッポー以上に淫らかな言葉を連ねている。

I can remember, 'fore my Voice was broke,

.....

You kiss'd me hard, and call' d me Charming Witch,

I can't do't now, if you wou'd kiss my Breach.

Then you not only lik'd my airy Voice,

But in my Fleshly Part you did rejoice;

And when you clasp'd me in your brawny Clutches,

You swore I mov'd my Body like a Dutchess;

You clapp'd my Buttocks, o'er and o'er again;

I can't believe that I was crooked then. (Raddiffe 3-4)

忘れることはできないわ、私の声がだめになる前、／（中略）／あなたは私に激しいキスをして、私のことを魅惑的な魔女と呼んでくれた。／今ではうたうことができないの、あなたが私の割れ目にキスしようとしたって。／あのとき、あなたは私の軽やかな声が好きだっただけじゃなくて／私の肉体も楽しんだ。／そして筋肉隆々の腕でぎゅつと私を抱きしめたとき、／私が公爵夫人のように体を動かすって言い張った。／何度も何度も私の尻をピシヤピシヤたたいた。／私がああとき騙されていたなんて信じられないわ。

看過できないのは、このように女性に対しては無論のこと、男性に対しても淫らであるという汚名にまみれたサッポーが、十七世紀終わりになると、女性の知性を攻撃するコンテクストにおいても批判されるようになったことである。ウィリアム・ウォルシュ（一六六三—一七〇八）の『女性たちに関する対話』（二六九二）は、「女性の擁護」という副題がついているが、内容はそれとは全く正反対だ。「知性ある女性たち」についての話題を取り上げたとき、「女嫌い」(Misogyny)という名前の登場人物は、一体そんな女がどこにいるだろうか、三千年の間にたった三人の知性ある女性がいたというだけで、女に知性があると言えるか、いや、女が知性的だという結果になるか、と論を進める。そして、三人の女性のうちの一人サッポーを「情欲の仕事」においては、どの男性よりも「才気縦横」であると、次のように批判する。

サッポーは世界が生んだ最も賢明な女性たちの一人なので、論理的にこう考えた。あらゆる女性がこれまでうまくやってきた学問に自分が何か付け加えるべきであると期待されていると。それで、どうしたのだろうか。男性には満足できなくて、同性と情事をはじめ、われらに新しい種類の罪を教えているのだ。それはルキアノスの時代に引き継がれていただけではなく、今日のトルコでも頻繁に実践されている。(Walsh 34-35)

「女嫌い」の主張は、サッポーは知性の点において女性としては例外的な、いわば「男性的」な女性だから、性的

にも「男性的」であると言っているに等しい。これは、まさしく男性の領域で名を挙げた女性に対するセクシャル・ハラズメントであろう。ホラティウスの「男性的なサッポー」には、男性に匹敵する詩的能力の持ち主か同性を愛する女性のどちらを意味するのか曖昧であったが、「女嫌い」は、知性において「男性的なサッポー」をこき下ろすために、彼女の性癖を取り上げたのである。

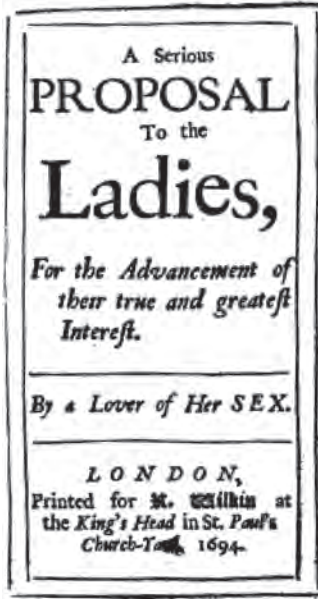
ここで描かれるサッポーは極めて性的に放縦な女性である。オウイデイウスのサッポーと反対に、性欲の対象を異性から同性に変えているが、それは「男性には満足できない」いからだ。さらに上記の引用で看過できないのは、サッポーは「われらに新しい種類の罪を教えている」と、現在形で書かれていることだ。これは二世紀のルキアノスの『遊女の対話』のような遠い過去の時代でもなく、同時代の旅行記で書かれたトルコのように遠方の国でもなく、まさしく現在のイギリスにおいて、サッポーのように知的な女性が他の女性たちに「新しい種類の罪」を教え込むことに対する恐れを暗示していよう。「新しい種類の罪」とは何も女性の同性愛だけを指すのではない。いや、むしろ、「女嫌い」が警戒したのは、知性という「新しい種類の罪」がイギリスの女性たちの間に広がることであつたかもしれない。女性が知性の分野に進出するということは、男女間の上下の社会的秩序を攪乱することを意味するのだから。実際、「女嫌い」の警戒もしくは恐れは現実のものだった。イギリスの女性たちはそれまで長い間一部の貴族階級出身者を除き、ものを書くという知的生産をしなかったし、また、知的生産には不適であると見なされていた。しかし、十七世紀中頃から女性たちは詩や劇やロマンスを出版し始めたのである。これまで知的活動を一手に引き受けてきた男性たちにとって、女性作家の登場は自分たちの特権的な地位を脅かすものとして映ったに違いない。十八世紀初期の女性詩人アン・フィンチ・ウインチルシー伯爵夫人（一六六一―一七二〇）が次のように述べているように。

Alas! a woman that attempts the pen,
Such an intruder on the rights of men,

Such a presumptuous creature is esteemed,
The fault can by no virtue be redeemed. (Finch, "The Introduction," lines 9-12)¹⁴

ああ！書くことを試みる女性は／男性の権利の侵入者、／生意気なやつと思われるので、／その罪が贖われることは絶対ないのだ。

さらに、サッポーが愛の詩、それも女性に対する愛の詩を書いたならば、イギリスの初期女性作家たちも女性間の愛をテーマにすることがよくあった。その多くはエロティックでない女性の友情を扱っていたが、中にはアフラ・ベイン（一六四〇―八九）の「美しきクラリンダへ——私を愛した、女性以上の存在と想像される人」（二六八八）のように、女性との性愛をうたう詩もあった。ベインはその他にも多くのエロティックな詩や劇などを精力的に出版したプロの作家であり、かつまた両性愛者ジョン・ホイルの愛人としての私生活もよく知られていた。その不道徳性が危険視されたが、他の女性作家の作品にも別の意味で（男性側にとつて）危険なものが潜んでいた。たとえば、マーガレット・キャヴェンディッシュ・ニューカーズル侯爵夫人（一六二四頃―七四）は『快楽の修道院』（二六六八）にお



図版3
メアリ・アステル『女性たちへの大事な提言』（1694）題扉。

いて、世間から隔離された女性だけのユートピアを描いたが、そこに集う女性たちはみな、「女性を自分たちの奴隷にする」(Cavendish) 男性中心の社会に対して反乱を起こした者たちであった。また、メアリ・アステル（一六六六―一七三二）は『女性たちへの大事な提言』（二六九四）を「同性を愛する女性」(“a Lover of Her SEX”)とこう匿名で出版し、未婚の女性たちに対して財政的な支援をする女性共同体を

確立すべきだと訴えた。このように、キャヴェンディッシュやアステルの描く女性間の愛はフェミニズムの萌芽を宿していたのである。

女性同性愛の伝統

サッポーの名前が女性詩人や作家の別名として頻繁に使われるようになったのはこの頃からである。たとえば、キャサリン・フィリップス（二六三―二六四）は十七世紀後期から十八世紀中期まで「イングランドのサッポー」として名を轟かせていた詩人であった。彼女には、「ロザニア」とか「ルーカシャ」のように女性の友人たちとの友情をうたった詩があるので、最初の詩人たるサッポーを連想させたのも無理はない。しかし、フィリップスの賞賛者たちは、「イングランドのサッポー」の美徳や貞淑さを強調することによって、悪名高い古代のサッポーとの間に一線を引いたのである。¹⁵

その一方で、サッポーの名前は同時代の女性を貶め、批判するにも用いられた。オウイデイウスの「パオーンに宛てたサッポーの手紙」を英訳したポープはまた、サッポーの詩的名声を貶めると同時に同時代の女性作家たちをこき下ろすための詩を書いている。彼が特に目のかたきにしたのは、メアリ・ウオートリ・モンタギュー夫人（二六八―一七六二）であった。彼女が一七一六年から一八八年に外交官の夫とトルコに旅行したとき書いた書簡形式の旅行記は、手書き原稿のまま回し読みされ、大評判になった。ポープもそれを読んで絶賛した。しかし、二人の仲が政治的な立場の相違などによって断絶すると、ポープは自分の詩の中で彼女を「サッポー」として何度も登場させながら、彼女を汚くて、乱交にふけていて、梅毒にかかり、うぬぼれが強い女として猛烈に攻撃し始めたのである。¹⁶

ウイリアム・キング（二六八―一七六三）がラテン語の詩の英訳という体裁で匿名出版した『祝杯』（二七三）という嘲笑詩では、批判の対象はフランセス・ブリューデネル・ニューバラ公爵夫人である。キングはアイルランドに

滞在中、彼女に貸した多額の金をめぐる裁判で負けたので、復讐するために、その嘲笑詩の中で彼女を両性具有者のミラとして登場させた¹⁷。そして、ミラとその醜い愛人のアリ（ニューバラ公爵夫人の友人アレン夫人）の関係のことを、前付けの著者への手紙や後付けの「ミラへのオード」の中で、「Lesbian Loves」として言及し（King, [1732] 16, 85）、さらに同詩の一七三六年版の第二編の脚注では、アリに「トリバドすなわちレスビアンたちのボスというタイトル」〔“the Title of Chief of the Tribades or Lesbians”〕（King, [1736] 53）を授けた。「トリバド」は十六世紀以来同性愛にふける女性を指すのに使われてきたギリシャ語源の語であるが、それと同じ意味で「レスビアン」が使われているのである。キングはもちろんサッポーについてよく知っていた。第三編の脚注の中では、次のように記される。

サッポーは有名なトリバドだった。それは古代の全詩人の証言にあらわれているが、とりわけロンギノスによって保存され、あらゆる批評家たちに高く評価されてきた、あの美しいオード（彼女が愛した女性たちの一人に宛てた詩）から明らかである。しかし、彼女は第十番目のミューズの称号を授かるほど、その詩で非常に大きな榮譽を手に入れたが、それでもレスボスの女性たちへの愛が自分の名声を台無しにしまったのだと認めている。

（King, [1736] 110）

そして、オウイデイウスの「パオオンに宛てたサッポーの手紙」の第二〇一行目のラテン語「*Lesbides inflamem quae me fecistis amatae*」（「私の名譽を棄損したことに、私が愛したレスボスの女性たち」）を引用したあと、「ギリシヤ人は好色で不道徳であるけれども、それでもこれを非常に破廉恥な熱情と見なした。そしてサッポーの懲罰には正義の特別な法があったようで、彼女は最後に一人の男への愛のために自殺した」と、サッポーの投身自殺を同性愛にふけた罰だったと見なした。

一七四九年に出版され、大評判になった作者名不明の『サタンの収穫祭——売春、姦通、私通、売春婦斡旋、ボン引き、ソドミー、女性同性愛の現況（真正の娯楽物語による例証）』及びプロテスタントのわが王国にて日々増殖す

るサタン『の書物』では、女性同性愛行為を表す言葉として「フラッツ」(“Flats”)もしくは「フラッツのゲーム」(“the Game of Flats”; “the Game at Flats”)とこう語が用いられている(Satan’s Harvest Home 18, 60)。これは、おそらく女性の「平たい」(Flat) 性器の接触と「まぬけ」(Flat) な女が何か性的なゲームでだまし合うことを指しているのだろうと解釈されている(Donoghue, *Passions* 261)。そしてさらに興味深いことは、同書の匿名作家が、前に引用したウォルシュの『女性たちに関する対話』における「女嫌い」の言葉を一字一句忠実に再録し、最後の部分だけを次のように変えていることである。

男性には満足できなくて、同性と情事をはじめ、女性界にフラッツと呼ばれる新しい種類の罪を教えるのだ。それはルキアノスの時代に引き継がれていただけではなく、今日では、トルコやトウイッケナムでも頻繁におこなわれている。
(Satan’s Harvest Home 18)¹⁸

当時の人々がトルコとトウイッケナムの地名で思い起こすのは、おそらくオウイディウスの「パオーンに宛てたサッポーの手紙」を英訳したポーブによって何度も「サッポー」として中傷されたメアリ・ウオートリ・モンタギュー夫人であろう。彼女はトルコ旅行記を書いたし、一七一九年にポーブに続いてトウイッケナムに転居し、オックスフォード夫人のような貴族階級の女性たちや『女性たちへの大事な提言』を著したメアリ・アステルと親しくつきあっていた(Grundy 185-89, 354)。実際に同性愛者であったかどうかは別にして、『サタンの収穫祭』の著者にとつて、モンタギュー夫人やその女友達たちの存在はウォルシュが警戒していた「新しい種類の罪」がまさにイギリス国内にまで蔓延していることの証左であったのである。

とはいえ、ソドミーの刑罰しかなかったイギリスでは、女性同性愛は宗教上・道徳上の罪(罪)であって、法律上の罪(crime)ではなかった。上記の匿名作家も別の箇所では、「二人のレディが淫らなやり方で互いにキスしたり、ピチャピチャしたり、頻繁にそれを繰り返したりするのを見ると、私はとてもショックを受ける」けれども、二人の

男性同士が「会うたびごとにべたべたしたり、互いの手をぎゅっと握ったり、その他猥褻な徴候を示すのを見ると」に比べると、さほどではないと言っている (Satan's Harvest Home 51-52)。

しかし、十八世紀後期になると、トウィッケナムにあるホーラス・ウォルポール (一七二七—一七九七) のストロベリー・ヒル屋敷を相続した彫刻家アン・コンウェイ・ダマー夫人 (一七四八—一八二八) の同性愛関係をめぐるゴシップが実際に起こった。彼女は一七六七年に結婚したあとまもなく別居し、一七七六年の夫の自殺のあと再婚しなかった。この大金持ちの未亡人の相手として噂が立ったのは、女優のエリザベス・ファレン (一七五九頃—一八二九) や作家のメアリ・ベリー (一七六三—一八五二) である。作者名不明の『ジャック・キャヴェンディッシュから尊敬すべき、とても美しいダ***夫人に宛てたサッポー風の書簡』(一七七八「?」) は、明らかにダマー夫人に宛てたものだ。詩の第一行目 ("Was there a Maid of Lesbos Isle") の「レスボス」につけた脚注では、サッポーから女性同性愛の伝統が生じたことが示されている。同じくは女性同性愛者は「トミー」 ("Tommy")¹⁹ と呼ばれる。

エーゲ海の一つの島レスボスはサッポー嬢の生誕地として有名である。彼女は自分と同じ性の者に愛情を捧げた最初の古典時代のうら若き女性だった。彼女はモンタギュー夫人、グレヴィル夫人、カーター嬢、エイキン嬢の誰よりも上手に詩を書いたが、冷酷なパオーンに求愛するようになったとき、詩を書くことができなくなってしまった。それで、オールドミスになって、男の愛に不向きになったとき、ミティリニの若い娘たちを追いかけて、たくさんの娘を誘惑したのである。彼女は記録に残る世界で最初のトミーだった。だが、彼女のことを公平に評すれば、彼女のあと多くのトミーが出てきたけれども、サッポーは一人だけだった。

レスボスの女性たちはもう二度と私の熱情をかきたてることはない
かつて私の罪深い愛の対象であった者たちは。

ポープ氏とピュブリーウス・ナソ・オウイディウス氏、前者は気難しいイングランドの詩人、後者はアウグストゥス帝の治世で最も学識のあるローマの紳士だが、二人はサッポールのこの異常な熱情を示す証拠を提示してきた。

(*Sapphick Epistle 5n*)

「ジャック・キャヴェンディッシュ」氏は、十八世紀後半に活躍した女性詩人たち——エリザベス・モンタギュー（二七二―八〇〇）、フランシス・グレヴィル（二七二―八〇九）、エリザベス・カーター（二七二―八〇六）、アンナ・レティシア・エイキン（のちバーボウルド）（二七四―八二五）——よりもサッポールが優れた詩人であったことを認めている。「サッポールは一人だけだった」とは、彼女ほど偉大な詩人はいなかったということだろう。しかし、「男の愛に不向きになった」サッポールの女狂いから綿々と伝えられる女性同性愛の伝統に比べれば、このような褒め言葉はいかにもとってつけたようだ。「キャヴェンディッシュ」氏がサッポールの同性愛の証拠として引用しているのは、ポープの「パオンに宛てたサッポールの手紙」からの二行である。

サッポールが「最初のトミー」であるなら、ダマー夫人はその後継者の一人である。詩の中では、ストロベリー・ヒルは「サッポール風の愛」(*Sapphic love*)の場所であり、男性との結婚を嫌う女性たちは「サッポール信徒たち」(*Sapphick Saints*)と明記される (*Sapphick Epistle 369, 372*)。ちなみにサッポールの名前の同種の使い方はこの頃までにはすでに他にもあった。フロイア・シドナムによる一七六一年のプラトンの『饗宴』の英訳では、二人の女性のことを「サッポール風の恋人たち」(*Sapphic Lovers*)と言及していた (Plato 93)。また、一七七三年六月のロンドンの雑誌『コヴェントガーデン・マガジン』には、女性間の関係の話の索引として「サッポール風の熱情」(*Sapphic passion*)という表現が使われていた (*qtd. in Donoghue, Passions 4*)。

ヘスター・リンチ・スレール、のちのピオッツィ夫人（二七四―一八二二）も、私的な日記の中で何度もダマー夫人のことを書いている。だが、その前にまず見ておかねばならないのは、ピオッツィが一七八九年四月一日の日記

で、フランス王妃マリー・アントワネット（一七五五—九三）について次のように記していたことだ。ここでは、女性同性愛者を示す言葉として、サッポーの名前から派生した「サフィスト」(“Sapphist”)が使われている。

自然は奇妙にも流行遅れになっている。今噂になっていることは、ペトロニウスやユウエナリスのペンが記録し、諷刺するにふさわしいものだ。すなわち、フランス王妃は、お互いサ、フ、イ、スト、と呼びあっている怪物仲間のかしらだという。彼女たちは王妃の例に倣うのを自慢していて、同じようにお互い足繁く通い合う男の悪魔たちと一緒に、ウエスウィウス山に放り投げられる罰に値する。

その悪徳は時間毎に広がりを増している——予期された親殺しがもはや私たちを脅かさないので。

(Piozzi, *Thraliana* 2: 740)²⁰

マリー・アントワネットの同性愛の噂は少なくとも一七七〇年代頃から宮廷内であったが、フランス革命の数年前からは、反王権主義の宣伝者たちがその噂を取り上げ、猥褻な小冊子や新聞を使って広めることに成功していた。²¹上記のピオッツイの日記は、その噂がイギリスにも届いていたことを示すものである。

ピオッツイはやがて「悪徳」がイギリス国内の都市バースとロンドンにまで広がっていることを記録し始めた。一七九〇年六月十七日の日記では、件のダマー夫人についてこう書いている。

今やイングランドには、これら言語に絶する罪^{スイン}への奇妙な性癖がある。ダマー夫人は犯罪的なやり方で自分と同じ性の者を好むのではないかとよく怪しまれているご婦人で、昨年はずたび美しい喜劇女優のファレン嬢をそばに置いていた。だから、シドンス夫人の夫君は彼女たちについて次の詩をつくったのだ。

彼女の私的な名声の小さな蓄えは

公のやかましい声に大破してしまうだろう、

もし、ファレンがあの人と同盟を結んだら。その名前は
忌々しい「ダマー」に近い——そう、とっても近い。(Thraliana 2: 770)²²

一七九四年一月二五日の日記では、トレフェューシス嬢やウエストン嬢たちが住んでいたラスボン嬢の家が「罪深い
独身主義で暮らしている不潔な鳥たちのかごだったと思われている」(Thraliana 2: 868)と記される。ピオッツイが女
性の独身主義を同性愛志向と結びつけていることに注目したい。ウエストン嬢とは、詩人のアンナ・シーワード(一
七四二—一八〇九)と親密な関係にあった女性たちのうちの一人、ペネロッペ・ウエストンのことである。ピオッツイ
は同日の日記の脚注の中で、「なぜウエストン嬢がどんな結婚に対してもあんなにも嫌ったのか、私は不思議に思っ
ている。(中略)そして、なぜウエストン嬢は小さなサリー・シドنز「悲劇女優のシドنز夫人の娘」の機知と美と才
能についてあんなに大騒ぎしたのだろうか? あの子は他のどの女の子とも違わない——だけどウエストン嬢はどの女
の子もそのように好きになるのが常だった」(Thraliana 2: 868n3)と書いている。

さらに、一七九五年十二月九日の日記には、「二人のご婦人たちがあまり長く一緒に暮らしているときにはいつで
も」の箇所²³に次の脚注をつけた。

あなた方ローマの女性があの恐ろしい悪徳をギリシャから借用しなかったのは奇妙なことである——それは現在ギリ
シャ語の名前を持ち、サフィズムと呼ばれている。しかし、私はイタリアでそれを聞いたことがなかった。そのご
婦人方は今日まさにユウエナリスが彼の時代のご婦人たちを描写したものであるのに。シドنز夫人は、彼女の妹が
かつてこの種の女友達から個人的な危険にさらされたと話してくれたことがある。私にはその言葉を信じない理由は
何もない。バースは私が知っているこれらの不潔な鳥たちのかごで、ロンドン²⁴はあらゆる罪の巢窟である。

(Thraliana 2: 949n3)

以上のように、十八世紀末頃までには、イギリス国内における女性同性愛者の存在がひそかに囁かれるようになってきたが、またその頃までに、サッポーやその生地のスレスロスから派生した言葉が現在のように女性同性愛（者）を意味するように使われるようになっていたことは、特質すべき現象であると言わざるを得ない。なぜなら、オックスフォード英語辞典によれば、「lesbian」が現在の意味のように使われ始めたのは、形容詞としては一八九〇年、名詞としては一九二五年、「lesbianism」（女性同性愛）はそれらより少し早い一八七〇年、また「lesbianism」と同じ意味の「Sapphism」の初登場も「lesbian」と同じ一八九〇年、「Sapphist」は一九〇二年だからだ。ちなみに、「homosexual」（同性愛者）の初出は一八九七年、「heterosexual」（異性愛者）は一九〇九年である。オックスフォード英語辞典における女性同性愛（者）の初出年を見ると、ミシェル・フーコーやジェフリー・ウィークスなどの歴史家に倣って、イギリスにおいて同性愛にふける女性を他の女性と区別するようになったのは、十九世紀末頃からであると言いたくなるかもしれない。²³ ジュディス・C・ブラウンのような女性同性愛研究者はその立場をとり、「十九世紀以前には、他の女性と性的関係にある女性たちは自分たちのことを明確な性的・社会的グループとして見なすことができなかったし、他人からもそのように見られることはなかった」（Brown 173）と述べている。しかしながら、言葉の上からだけ見ると、イギリスにおけるレスビアンの誕生は、権威ある辞典が示すよりもさらに一世紀以上も遡っていたのである。

◆第二章◆

「第十番目のミューズ」の系譜

サッポーの断篇詩

現在ローブ古典文庫には一九二編のサッポーの断篇詩が収められているが、そのほとんどは、十九世紀末にエジプトのナイル川の三角州で発見された二～三世紀のパピルス文書に由来している。それよりも前に知られていたのは、紀元前一世紀のギリシャの歴史家・修辭学者ハリカルナッソスのディオニュシオスが『文章構成法』の中で引用したこと、唯一完全な形で伝わっている「断篇1」と、紀元後一世紀のギリシャの修辭学者ロンギノスが『崇高論』において崇高の一例として挙げていたこと、ほぼ完全な形で伝わっている「断篇31」、そして、韻律学者や分典家たちが引いてきたことで伝えられてきた若干のかなり短い断篇詩だけであった。

「断篇1」は、十八世紀のイギリスでは、「ヴィーナスへの讃歌」もしくは「第一のオード」と呼ばれていた。ローブ古典文庫のデイヴィッド・A・キャンベルのギリシャ語の原文に忠実な英訳によれば、自分のもとから去った女性への愛に苦しむ詩人サッポーの「私」が、彼女の愛を取り戻してくれるよう愛と美の女神アフロディテ（＝ヴィーナス）に懇願する詩である。アフロディテは次のようにサッポーに答えて、サッポーの望みをかなえることを約束する。

Whom am I to persuade this time to lead you back to her love? Who wrongs you, Sappho? If she runs away, soon she shall pursue; if she does not accept gifts, why, she shall give them instead; and if she does not love, soon she shall love even against her will. (fr. 1)

今度は誰を説得してあなたを彼女の愛のもとに戻しましょうか。サッポーよ、誰があなたに不当なことをしているのですか。もし彼女が「あなたから」逃げ出しているのなら、すぐに彼女は「あなたを」追いかけることになるでしょう。もし彼女が「あなたからの」贈り物を受け取らないなら、彼女が代わりに贈り物を「あなたに」贈ることになるでしょう。そしてもし彼女が「あなたを」愛していないなら、すぐに彼女はその意志に反しても「あなたを」愛するようになるでしょう。

他方、十八世紀には「第二のオード」として知られていた「断篇31」は、女性二人と男性一人の三角関係を描く。キャンベル訳の全文を引用する。

He seems as fortunate as the gods to me, the man who sits opposite you and listens nearby to your sweet voice and lovely laughter. Truly that sets my heart trembling in my breast. For when I look at you for a moment, then it is no longer possible for me to speak; my tongue has snapped, at once a subtle fire has stolen beneath my flesh. I see nothing with my eyes, my ears hum, sweat pours from me, a trembling seizes me all over. I am greener than grass, and it seems to me that I am little short of dying. But all can be endured, since . . . even a poor man . . . (fr. 31)

私には彼は神々のように幸運のように思える、あなたの向かい側に座り、あなたの甘い声と愛らしい声を近くで聞いているあの男の方は。本当にそれは私の胸の中の心を震わせる。というのは、私はあなたをちらりと見ると、もはや話すことができなからだ。私の舌はブツンと切れてしまった。同時に、繊細な炎が私の肉体の下に忍び込み、目は何も見えず、耳はぶーんと鳴り、汗が流れ、震えが体中を襲い、私は草よりも緑色である「嫉妬深い」、そしてほとんど死にそうな気がする。しかし、すべて我慢できる……ので……かわいそうな男の人さえ……

「断篇1」と「断篇31」が二編とも女性への愛をうたっていることは明らかである。サッポーの詩と言えば主にこ



図版4
サッポアの最も初期の肖像画、紀元前6世紀後期のアテナイの水甕。マーガレット・ウィリアムソン『サッポアの不滅の娘たち』(1995)挿絵1。

の二編しかなかった十八世紀のイギリスでは、これらはサッポアの同性愛を裏づける十分な証拠だったかもしれない。しかし、事実は異なっていた。その世紀の間、一方では、オウイデウスのサッポオ像がさまざまなフィクションを再生産し続け、同性愛者もしくは両性愛者サッポオの悪名を轟かせていたけれども、他方では、「第十番目のミューズ」と絶賛されたほど詩才にあふれたサッポオをセクシユアリティにまつわる不名誉な評判から守り、再評価しようという動きも出てきた。その動きの最たるものが、サッポオの詩の翻訳者たちによる、おそらく意図的な誤訳である。この章では、十八世紀におけるサッポオの詩の英訳の変遷を通して、彼女の名誉回復の過程を見てみる。

「断篇1」の誤訳

まず、一六九七年にフランスで出版され、一七一〇年に最初の英訳が出て以来何度も版を重ねたピエール・ベール(二六四七—一七〇六)の『歴史批評事典』における「サッポオ」の項から話を始めよう。ベールの事典は知の宝庫で、古代から当時までのサッポオに関するほとんどの言説を網羅し、出典を明示している。ここで特に注目したいのは、サッポオの「断篇1」と「断篇31」について、十七世紀末期のフランスの学者アンヌ・ルフェーヴル・ダシエ夫人の説を退けたことである。ダシエ夫人によれば、サッポオの「断篇31」は女友達への詩だった。また、「断篇1」はパオンの愛を取り戻すための詩であり、彼を追いかけてシチリアに行ったときに創作したものだった²。これに対し、

ベールは「サッポー」の項の脚注(D)で、「断篇31」に関するダシエ夫人の説を退け、「友情」ではなく「愛」の詩であると断定し、脚注(F)では、「断篇1」に関するダシエ夫人説を紹介するだけにとどめた。そして本文では、サッポーの二編の詩とも女性への愛の歌であると明記した直後に、「というのは、諸君は次のことを知らねばならない。彼女の多情なパッションは彼女自身の性の者たちに対しても及んだのだ。そしてそのために彼女はひどくけなされたのである」(Bayle, [1710] 4: 2671-72)と追加した。上記で引用したベールの事典は一七二〇年版からであるが、一八二六年版でも同様の記述がなされてくる(Bayle, [1826] 3: 175-76)。

ベールの事典はジョゼフ・アデイソン(一六七二—一七一九)が『スペクテーター』誌においてサッポー関連の記事を書く際に参照した文献だったと言われている(Bond 2: 365n3)。しかしながら、アデイソンは、一七二一年十一月十五日付けの『スペクテーター』誌第二二三号においてサッポーを紹介したとき、ダシエ夫人の説に従い、「断篇1」はパオンを追いかけたサッポーがシチリアで作ったと推定されていると記した(Joseph Addison 2: 369)。彼のサッポーの記事はイギリスにおいてははじめて詩人サッポーを再評価したと言われているが(Lipking 80)、そこには明らかに偏向と意図的な操作があったのである。

そのやり方は実に巧妙だった。次に引用するのは、「第十番目のミューズ」たるサッポーに対し、惜しみない称賛の言葉を贈っている箇所である。

古代の多くの詩人たちのうち、サッポーほど美しい断篇を残している者はない。サッポーの断篇は彼女の書き方の趣きを伝えてくれる。それは、彼女の著作が全部そろっていたときにそれらに精通していた偉大な批評家たちの評言の中に見られるような、あの非凡な人物像に完全に相応している。残存する作品を見れば、彼女は、多くの現代の叙情詩人たちがあれほど悲惨なほどかぶれているあの些細な点、凝った隠喩や機知の言い回しを用いることなく、あらゆる思考において自然に従っていたことがわかる。彼女の魂は愛と詩でできていたようである。彼女は熱烈な限りの情念を感じ、あらゆる兆候の情念を描いた。彼女は古代作家たちによって第十番目のミューズと呼ばれ、ブルタルコ

スによって、バルカンの息子で、炎以外の何も口から吐き出さないカークスにたとえられている。彼女の著作に關して伝わる特徴を見ると、それらが失われたことは人類の利益のためではないかどうか、私にはわからない。それらは非常に魅惑的な愛情と恍惚で満ちていたので、読むには危険だったかもしれない。(Joseph Addison 2: 365-66)

読者はここまで読むと、「読むには危険」なほどの「情念」とはどのようなものであるのか興味がわくだろう。オウイディウスの話やギリシャ語のサッポールの詩に精通している者やベールの事典を読んだ者なら、女性への愛のことだとすぐに思い当たるに違いない。しかし、アディソンは、すぐ次のパラグラフで、パオンへの絶望的な愛の話と「断篇1」の創作エピソードへと話を進めることによって、前のパラグラフの内容を異性愛化してしまうのである。

パオンと呼ばれる不実な愛人がこの女性詩人に大きな災難をもたらした。彼女は彼に絶望的な恋に落ち、彼を追いかけてシチリアへ旅立った。彼は彼女を避けるためにそこへ引きこもっていたのだ。このときその島で彼女がヴァーナスへの讃歌を創作したと推定されている。私は読者諸君にその翻訳を披露しよう。(Joseph Addison 2: 366)

そこでアディソンが掲載した英訳は、アンブローズ・フィリップス(一六七四—一七四九)による「ヴァーナスへの讃歌」(「断篇1」)である。フィリップスもダシエ夫人の説に倣って、詩人の愛する相手を男性として訳した。原文に忠実な英訳とフィリップスの訳の違いは、ヴァーナス(「アフロディテ」)の言葉をみれば明白だ。フィリップス訳の第五スタンザの三行目から第六スタンザがヴァーナスの言葉で、前に引用したキャンベル訳に相当する箇所である。

V.

.....
 What gentle Youth I would allure,
 Whom in my artful Toiles secure?

Who does thy tender Heart subdue,
Tell me, my *Sappho*, tell me Who?

VI.

Tho' now be Shuns thy longing Arms,
He soon shall court thy slighted Charms;
Tho' now thy Offings he despise,
He soon to Thee shall Sacrifice;
Tho' now he freeze, he soon shall burn,
And be thy Victim in his turn. (Joseph Addison 2: 368)

どんな優しい若者を誘惑して、／私の巧みな骨折りでつかまえますようか。／誰があなたの繊細な心を支配しているのですか。／私に教えてください、私のサッポーよ。私に教えてください、誰なのですか。／今彼はあなたの思い焦がれる腕を避けているけれども、／すぐにあなたの魅力に言い寄るでしょう。／今彼はあなたの贈り物を侮辱しているけれども、／すぐにあなたに捧げものを差し上げるでしょう。／今彼は冷たいけれども、すぐに熱くなって、／今度は彼があなたのとりこになるでしょう。

フィリップス以来、「断篇1」の詩人の愛する相手の性を「男性」として誤訳する伝統は、十九世紀後期になるまで根強く続くことになる。この伝統に終止符を打ったのは、ジョン・アディントン・シモンズ（一八四〇―九三）が一八八三年作の英訳詩において、詩人の愛する相手を「彼女」として訳したときである。シモンズの英訳詩は、一八八五年出版のヘンリー・ソーントン・ウォートン（一八四六―九五）によるサッポーについての本格的な学術書『サッポー——伝記、テキスト、精選訳と逐語訳』に収められた(Wharton 57-58)。

十八世紀に出版されたサッポーの詩に付記された彼女の伝記においては、それ以後もかならずパオーンに失恋した

ことが「断篇Ⅰ」の創作のきっかけだったという説明がされた。それどころか、一七二三年出版の『ペトロニウス著作集……およびピンダロス、アナクレオン、サッポールのギリシャ語からの翻訳』に収められた「ハーバート氏」という人物によって英訳された「愛の女神に寄せて」（「断篇Ⅰ」）では、サッポールの愛する相手はただ単に「彼」として示されるだけでなく、最終行で「*パオ、ン*」の名前すらも明示してあった。ヴィーナス（＝アフロディテ）の言葉から最後の行まで引用する。最終スタンザはサッポールの返事である。

Alas, poor *Sappho!* who is this Ingrate

Provokes thee so, for Love returning Hate?

Does he now fly thee? he shall soon return;

Pursue thee, and with equal Ardour burn.

Wou'd he no presents at thy Hands receive?

He will repent it, and more largely give;

The force of Love no longer can withstand,

He must be fond, wholly at thy command.

When wilt thou work this change? now, *Venus*, free,

Now ease my Mind of so much misery:

In this Amour my powerful Aider be,

Make *Phaon* Love, but let him Love, like me. (Mr. Herbert 325-26)

ああ、かわいそうなサッポよ、この恩知らずは誰ですか。／愛に憎悪を返して、あなたをそんなにもじらす人は。／

彼は今あなたから逃げているのですか。すぐに彼は戻り／あなたを追いかけ、そして同じ熱情で燃えることになるでしょう。／彼はあなたの手の中の贈り物を受け取るうとしないのですか。／彼はそれを後悔して、気前よく「あなたに」もつと「贈り物」あげるでしょう。／愛の力はもはや逆らうことができません。／彼は完全にあなたの掌中で、愛に溺れるに違いありません。／いつこの変化を起こしてくれるのですか。ヴィーナスよ、今お救いください、／今、私の心からこんなにもひどい苦悩を除いてください。／この愛において私の強力な助っ人になってください。／パオーンが「私を」愛するようにしてください。だけど、私が「彼を愛」しているように、彼が「私を」愛するようにしてください。

これはオウィディウスによる伝説上のサッポーと歴史上のサッポーの区別が曖昧になった最初の例である。その後、一七六〇年に出版された『アナクレオン、サッポー……著作集』所収のフランシス・フォークスによる英訳「第一のオード——ヴィーナスへの讃歌」においても、サッポーが思いを寄せる相手は「若きパオーン」として明記された。以下の引用も、ヴィーナスの言葉から最終行までである。

V.

What healing Medicine shall I find
 'To cure thy love-distemper'd Mind?
 Say, shall I lend thee all my Charms,
 'To win young *Phaon* to thy Arms?
 'Or does some other Swain subdue
 'Thy Heart? my *Sappho*, tell me Who?

VI.

'Though now, averse, thy Charms he slight,
 'He soon shall view thee with Delight;

'Though now he scorns thy Gifts to take,
He soon to thee shall Offerings make;
'Though now thy Beauties fail to move,
'He soon shall melt with equal Love.'

VII.

Once more, O *Venus*, hear my Prayer,
And ease my Mind of anxious Care;
Again vouchsafe to be my Guest,
And calm this Tempest in my Breast!
To thee, bright Queen, my Vows aspire;
O grant me all my Heart's Desire! (Fawkes 183-84)

「どんな癒しの薬を見つけましょうか、／あなたの愛に病んだ心を癒す薬を。／さあ、あなたに私の魅力のすべてを貸しましょうか、／若いバ、オーン、をあなたの腕へと口説くために。／それとも、誰か他の若者があなたの心を征服するでしょうか。私のサッポーよ、誰なのか教えてください。／今、彼は嫌って、あなたの魅力に冷淡だけれども、／すぐに歓喜してあなたを見ることになるでしょう。／今、彼はあなたの贈り物を受け取ることを拒んでいるけれども、／すぐにあなたに贈り物を捧げることになるでしょう。／今、あなたの美しさは「彼を」動かすことができなけれども、／すぐに彼は「あなたに」匹敵する愛で和らぐでしょう。／もう一度、おおヴィーナスよ、私の祈りをお聞きください。／そして私の心から心配事を除いてください。／再び私の賓客になって、私の胸の中のこの嵐を鎮めてくださいませ！／輝かしい女王よ、私の願いはあなたのところにまで上がります。／おお、私の心の欲望をかなえてくださいませ！

「断篇31」の異性愛的読みの操作

「断篇1」が異性愛の詩として誤訳される一方で、「断篇31」は十八世紀においても多くの場合、同性愛の詩として忠実に英訳されていた。次に引用するフィリップスの英訳は、アディソンによって『スペクテーター』誌二二九号（二七一年十一月二二日）において、古代ローマの抒情詩人カトゥルスによるラテン語の翻案詩と十七世紀フランスのボワロによる仏訳とともに、掲載されたものである。アディソンはこれら三種類の「断篇31」のうちで、フィリップスの英訳が最も原文に近く、「サッポ、ポ」の精神そのもので書かれている」（Joseph Addison 2: 392）と絶賛した。しかし、厳密に言えば、フィリップスの英訳は原文通りではない。原文ではすべて現在形で書かれているに対し、フィリップスの訳では第二連以降が過去形になっているのである。

I.

Blest as th'Immortal Gods is he,
The Youth who fondly sits by thee,
And hears and sees thee all the while
Softly speak and sweetly smile.

II.

'Twas this depriv'd my Soul of Rest,
And rais'd such Tumults in my Breast;
For while I gaz'd, in Transport tost,
My Breath was gone, my Voice was lost:

III.

My Bosom glow'd; the subtle Flame
Ran quick thro' all my vital Frame;
O'er my dim Eyes a Darkness hung;
My Ears with hollow Murmurs rung;

IV.

In dewy Damps my Limbs were chill'd;
My Blood with gentle Horrors thrill'd;
My feeble Pulse forgot to play;
I fainted, sunk, and dy'd away. (Joseph Addison 2: 392)

彼は不滅の神々のように神聖だ。／あの若者はあなたのそばに親しげに座り、／あなたが優しく話し、愛らしく微笑むのを／ずっと聞き、見ている。／これこそ、私の魂から休息を奪い、／私の胸の中でこのような心の乱れをかきたてたものだった。／というのは、私が「あなたを」見つけていると、恍惚になって／私の息づかいはなくなり、私の声は消えたのだ。／私の胸は熱くなった。繊細な炎が／私の生きている体中を駆け巡った。／暗闇が私のかすんだ目の上を覆っていた。／私の耳はうつろなざざめきで響いた。／私の手足は露のようにじっとり湿って震えた。／私の血液は優しい恐怖でぞくぞくした。／私の弱々しい脈拍は動くことを忘れた。／私は気が遠くなり、沈み込み、そして死にそうになった。

語り手の「私」の女性に対する激しい愛は過去形で示されることによって、原文の生々しさが和らげられ、現実味が薄れている。フィリップスの英訳には、オウイデイウスのサッポーがレスボスの女性たちに対する愛を後悔すべき過去の出来事として片づけたのと同じような、女性同性愛に対する抑圧が見られるのである。

その上、それを『スペクテーター』誌ではじめて紹介したアディソンは、次のようにコメントした。

Whatever might have been the Occasion of this Ode, the English Reader will enter into the Beauties of it, if he supposes it to have been written in the Person of a Lover sitting by his Mistress. (Joseph Addison 2: 390)

このオードの出来事がいかなるものであろうとも、イングリッドの読者はその美しさの中に入るだろう。もし彼の愛する女性のそばにその恋人が座っていると描かれた詩だと想定するならば。

「イングリッドの読者」を「彼」で受けていることから明らかのように、アディソンは男性の読者に向かって、男性が女性詩人の立場になって考えれば、この詩に表現された女性への愛がよくわかるであろうと言っている。つまり、アディソンはここで読み手の側の読みを操作して、サッポアの詩の中の二人の女性と一人の男性の三角関係を一人の女性と二人の男性の三角関係に変えて、同性への愛の表現を異性への愛の表現として読むようにと示唆しているのである。

アディソンはさらに、この詩がロンギノスを通して伝わってきた間、誰一人としてプルタルコスやデメトリオス伝内にあるアンテオコス王子の話を持ち出さなかったことを指摘する (Joseph Addison 2: 393)⁴。アンテオコスは義母のストラトニスに恋に落ち、自分の熱情を隠そうとして病気のふりをしてベッドに寝ており、義母がそれにつきそっていた。その様子を見た医者のエラシストラトスはアンテオコスの病がサッポアの詩に描かれた「愛の症候」に似ていることを発見したという。アディソンにとって、この話は「断篇31」を異性愛の詩として読めることを裏づけるものだった。

アディソンはこのようにサッポアの同性愛に直接言及しないような抑制した書き方をしているが、サッポアの詩の英訳者たちは、訳詩に付記したサッポアの伝記の中で、彼女の同性愛や両性愛について隠すようなことはしていない



図版5
「サッポー」、ジョン・アディソン訳
『アナクレオンとサッポー著作集』(1735)
245頁の挿絵。

Philips 65) を紹介している。しかしながら、「サッポーのオード」欄では、「第二のオード」(断篇31) に序文としてアディソンの上記の異性愛的読みのアドバイスに加えられ(A. Philips 74)、さらに、同書の巻末に置かれた目次では、その詩は「恋人から彼の愛しい女性へ」(傍点引用者)のタイトルで示された。

一七三五年出版の『アナクレオンとサッポー著作集』に収められたジョン・アディソンによる英訳「オード」(断篇31)は、その副題として、「彼女が愛した若い娘に」をつけているように、同性愛の詩であることを隠していない。しかしながら、彼の訳もフィリップスの訳と同じ箇所から過去形になり、脚注ではジョゼフ・アディソンの記事中のアンテイオコスの話がそのまま引用されている(John Addison 263-65)。

一方、「サッポーの伝記」では、若くして寡婦になったサッポーが再婚しなかったのは、その情欲を「一人の人」に限ることに耐えることができなかつたからであり、また、「古代の人々が伝えるように、あまりに激しすぎて、一つの性にすら限定することができなかつた」(John Addison 251)からだとして記した。しかし、サッポーの女性の恋人たち——アッティスやアンドロメダなど七名——の名前を挙げたあとすぐに、「美しいパオト、ほど彼女の賞賛の対象になった者はいなかつたようだ」(John Addison 252)と、オウィディウスの詩に倣って、彼女の人生が最後には異性

い。たとえば、一七一三年に出版された『アナクレオンとサッポー著作集』中には、フィリップスによる「サッポーのオード」二編が再録されていたが、そこに付記された「サッポーの伝記」欄では、「彼女の多情な気質は男性の求愛では満足できなくて、色男たちに加えて女の愛人たちを持つのに乗り気であつたという変わらぬ言い伝え」(A.

愛で終わったことを強調する。最終的に異性愛に転向したのだから、彼女の同性愛は許される類のものであったと灰めかしたのである。そして最後には、「確かに、彼女の魂は愛と詩でできていたようである。彼女は熱烈な限りの情念を感じ、あらゆる兆候の情念を描いた」と、『スペクテーター』誌第二二三号のジョゼフ・アディソンの言葉を出典を明示することなくそのまま繰り返したあとで、ホラティウスの「男性的なサッポー」という表現について、ポルピュリオンによる解釈として「彼女の詩のエネルギー」を指すと紹介した (John Addison 255)。第一章で述べたように、ポルピュリオンはもう一つの解釈としてサッポーの同性愛を示唆していたが、ジョン・アディソンはあえてそれを無視し、サッポーの詩的能力だけについて言及したのである。

十八世紀中期を過ぎると、「断篇31」におけるサッポーですら異性愛者化する英訳が出現した。E・B・グリーン(二七四〇頃―八八)の二七六八年の英訳「第二のオード」では、女性を見たときのもだえ苦しむような愛が単なる嫉妬に変えられ、さらに、詩人が嫉妬の炎を燃やすのは、原文のように女性の心をつかんでいる男性に対してではなく、男性の心をつかんでいる女性に対してである。

Happy the youth, who free from care
Is seated by the lovely Pair!
Not Gods his ecstasy can reach,
Who hears the music of thy speech;
Who views entranc'd the dimpled grace,
The smiling sweetness of thy face.

Thy smiles, thy voice with subtil art
Have rais'd the fever of my heart.

I saw Thee, and unknown to rest,
At once my senses were oppress'd,
I saw Thee, and with envy toss'd,
My voice, my very breath, was lost.

My veins a throbbing ardor prove
The transport of a jealous Love;
E' n in the day's meridian light
A sickly languor clouds my sight,
A hollow murmur wounds my ear,
I nothing but confusion hear.

With current cold the vital streams
Trill, slowly trill along my limbs;
Pale as the flow' ret's faded grace
An icy chillness spreads my face;
In life's last agony I lie,
—Doom'd, in a moment doom'd to die. (Greene 144-46)

何の心配もなく、かわいらしい美女のそばに／座っているあの若者は幸いなるかな！／神々も彼の歓喜に及ばない。／彼はあなたの話の美しい調べを聞き、／優雅なえくぼをうっとり眺めている、／あなたの美しい顔を。／あなたの笑みは、あなたの声は、深遠な技で／私の心の熱を上げてしまった。／私はあなたを見ると、平静でいることができず、／私の五感が同時に圧迫された。／私はあなたを見ると、妬みでかき乱され、／声を失い、息もできなかつ

た。／私の血管ははっきり示している、ドキドキする熱情を、／嫉妬深い愛の恍惚を。／日中の盛りの光の中でさえ／青ざめた物憂さが私の眼を曇らす。／うつろなざわめきが私の耳を傷つけ、／私は混乱しか聞こえない。／寒流とともに命の小川は／私の手足を少しづつ流れていく、ゆっくりと少しづつ流れていく。／小花のしおれた恵みのように青白く、／氷の冷たさが私の顔に広がる。／生命の最後の苦悶の中に私はいる——死ぬと運命づけられた瞬間に。

グリーンは脚注で、「私はこの詩は、サッポーが恋敵の美女が自分よりもっと好かれているのを見て、嫉妬したことから生まれたと理解したい」(Greene 145n)と述べている。サッポーの詩が異性愛の詩であることを主張するために、彼はあえて誤訳したのだ。

彼は「サッポーの伝記と著作に関する所見」においても、サッポーの同性愛に関して全く触れていない。ホラテイウスの「男性的なサッポー」という表現についての解釈を紹介するときも、ダシエ夫人による解釈(サッポーが雄々しくもレフカスから飛び降りたこと)、および三世紀初期の注釈者ボルピュリオンによる二つの解釈のうちのひとつ(彼女の詩が男性の詩に匹敵するように優れていること)を紹介するにとどまる(Greene 156n)。グリーンは意図的に、サッポーから同性愛を匂わせるものをすべて消去することによって、彼女の名誉を回復しようとしたのである。

同性愛詩人の異性愛者化

イギリス人だけがサッポーの同性愛を抑圧したのではなかった。イタリアの作家アレックスサンドロ・ヴェリ(一七八一―一八一六)の小説『ミテリニの女性詩人サッポーの冒険』は一七八二年にイタリアで出版され、一七八八年に伊英対訳版が出版された。ヴェリのサッポーには忠実な女召使いがいるが、女の恋人は一人もいない。彼女の冒険の最後はパオーンとの絶望的な恋愛だ。そしてこの小説の中で、「断篇31」は「パオーンへのオード」(Verri 2: 213)と

呼ばれ、サッポーがパオーンのために書いた詩として登場する。それは、アンブロース・フィリップスの英訳であり、彼の名前も記されているが、面白いことに、冒頭の二行だけが次のように変えてある。

Bless'd as the immortal Gods is she,
the maid who fondly sits by thee, (Verril 2: 211)

彼女は不滅の神々のように神聖だ、／あなたのそばに優しく座っているあの乙女は。

ヴェリは本文中の脱線として、この詩はパオーンの隣に座っている少女にサッポーが嫉妬している詩であると断言し、サッポーが同性愛者だという古来の話は単なる流言であり、「おしゃべりな詩人たちのいまいまいましい悪意」(Verril 2: 213)によって広げられた嘘にすぎないと明言した。そして、その証拠にレスボス島にはエレススのサッポーとミティリニのサッポーがいて、二人とも詩人だったが、同性愛にふけたのはわれわれが知っているミティリニの天才の方ではなくて劣った方だ、と古くからなじみの戦略を使ったのである (Verril 2: 215)。

フランスの聖職者ジャン・ジャック・バルテルミ(一七二六―一七九五)の『小アナカルシスのギリシャ旅行記』は、一七八八年に出版されて以来版を重ね、一七九一年に英訳された。バルテルミにとっても、サッポーの同性愛は認めがたかった。彼は次のように述べている。

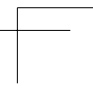
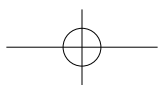
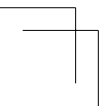
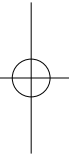
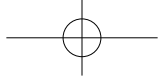
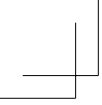
夫の死後、彼女は暇な時を学問に捧げ、レスボスの女性たちに文学の趣味を吹き込む仕事にとりかかった。彼女らの多くは彼女から教えを受け、外国の女性たちも大勢彼女の弟子になった。彼女は彼女らを愛しすぎるほど愛した。別なふうにあつて愛するなんてできなかったからだ。そして、あらん限りの激しい情念で自分の愛を表現した。あなた方がギリシヤ人の極端な感受性のことをよくご存じで、彼らの間では最も無垢な関係がしばしば情熱的な愛の言葉を借用

していることがわかりになったら、そんな表現に驚かないでしょう。(Barthelmy 2: 63)

sappho と女性たちとの関係を文学教師と弟子の関係であるとするバルテルミの説は、十八世紀末に「イングラ
ドの sappho」と賞賛された流行作家メアリ・ロビンソン（一七五八―一八〇〇）にとつて歓迎すべきものであった。
彼女はソネット連歌集『 sappho とパオーン』（一七九六）の序の中で、詩人としての sappho の名誉を回復するため
にバルテルミの上記の説を引いている。また、オウイデイウスとポープの「パオーンに宛てた sappho の手紙」は
「ギリシヤの女性詩人に光彩を添えるというよりもむしろ、その価値を下げる傾向にある」(Robinson, *Sappho* 18)と
して痛烈に批判し、彼らの sappho 像（叙情詩人ではなく淫らな女性）をソネット連歌で大胆に書き換えた。 sapp
po の同性愛を仄めかす記述は何もないどころか、 sappho の異性愛すらも抑圧したのである。

第二部

十八世紀のジェンダーと
セクシュアリティの表象



◆◆◆ 第三章 ◆◆◆

「女性兵士」の異性装とジェンダーの境界

ジェンダーの衣

エリザベス朝時代から四世紀に渡って生き続けて、一九二八年に三六歳になる美しい貴族の詩人オーランドーは、十七世紀末あたりで男性から女性へ変身した。七日間の昏睡のあと、素っ裸で起きてみれば、女の体になっていた。このまか不思議な「性転換」について、ヴァージニア・ウルフ（二八八二―一九四二）はどのような手順でおこなわれたかを明記していない。「ここでは簡単明瞭な事実だけ記せば十分。すなわちオーランドーは三〇歳まで男だった、三〇歳で女になり、以来ずっと女だ」（Wolf 134）と書いているだけである。オーランドーは肉体的に女性になったが、「他のあらゆる点で全く以前のままであった」（Wolf 133）ので、はじめのうちは自分が男だか女だか混乱している。しかし、そのうちに女であることに慣れてくる。他の者たちもオーランドーを女として扱うようになる。どうしてだろうか。

ウルフが提示する一つの理由は、オーランドーが女の服装をしているからというものである。「衣服はわれわれの世界観を変え、われらに向ける世間の目を変える。たとえば、バートラス船長は、オーランドーのスカートを見たからこそ、ただちに水夫に日除けを拡げさせ、お肉をもうひと切れどうぞ、とすすめ、長艇で上陸のお供を、と申し出たのだ。長くてふわふわのスカートでなくて、足にぴったりのスポンをはいていたとしたら、このような敬意などはらわれっこなしであったろう。（中略）という次第で、われわれは服を着るのでなく、服に着られているのだ。わ

れわれは腕や胸を型どって服を作るのだ、としても、心、頭脳、舌は衣服の意のままに型どられているのです。だから、スカートをはくようになってかなりになるので、オーランドーは目に見えて、顔つきまで変わってきた」(Woolf 179-80)という。やがて、オーランドーは「男の服女の服をとつかえひつかえして」、始終性を変えることを楽しむようになる。「ズボンをはいては単刀直入、それを魅惑のスカートに着がえては、両性の愛を等しく享受したのであった」(Woolf 211)。その時代は十八世紀だった。

ウルフの小説『オーランドー』(一九二八)において、このように衣装がジェンダーを決定する時代が十八世紀に設定されているのは決して偶然ではないだろう。現代では女性たちも伝統的に男性の服であったものを愛用し、ユニセックスの服も流行っているので、いくら遠目からでも人が着る衣装だけで男性か女性かを区別するのは極めて難しい。ところが、十八世紀のイギリスでは、男性と女性をはっきりと識別できる衣装を身につけていた。特に「ペティコート」(petticoat)と呼ばれる床までの長いスカートは女性の衣服の代名詞、「ブリッチズ」(Breeches)という膝下で閉めた半ズボンもしくは乗馬用のズボンは男性の衣服の代名詞であり、「ペティコート」をはく者は女性、「ブリッチズ」をはく者は男性としてジェンダーの区別がなされたのだ。オーランドーの話の中でも、「スカート」(skirt)と「ズボン」(breeches)を使い分けて、両方の性になることができたのである。

テリー・キャッスルの指摘によれば、十八世紀の衣装は言語のように「人の性、階級、年齢、職業」を刻む「記号の体系」であり、「象徴的なコミュニケーションの手段」であった。だから、「人はいつも惑わせる衣服を、戯れにせよ犯罪的にせよ不適切な衣服を自由に着ることができる。ちょうど嘘をつくかもしれないように、人は〈変装〉するかもしれない」(Castle, *Masquerade* 55-56)。つまり、男性が女性の服を着て「女性」を装い、女性が男性の服を着て「男性」を装うことが可能だったのである。

本章が注目するのは、このような性の仮装(とりわけ女性の男装)が十八世紀イギリスに顕著に見られる文化的現象であるということだ。キャッスルは十八世紀の仮面舞踏会における異性装とジェンダーの故意の混乱について分析

しつづるが (Castle, "Culture of Travesty" 163-64); Castle, *Masquerade*, esp. 46-47, 63-64)、異性装は仮面舞踏会に限ったものではない。クリステイナ・ストラウプによれば、劇の舞台では少年が女性の役を演じる伝統があったが、十七世紀末期に女優が登場すると、女性役は女性が演じるようになった。女優はまたいわゆる「ズボン役」(breeches part)と呼ばれる男役も演じるようになり、十八世紀を通して人気を博していた (Straub, "Guilty Pleasures" 142; Straub, *Sexual Suspects* 127)。仮面舞踏会や舞台では数時間の間だけの変装だったが、ある程度長い期間水夫や兵士として男装し、海洋や戦場で活躍した女性たちもいた。さらに、男装して別の女性と結婚し、一緒に暮らした女性たちもいた。四二歳の時出版した自伝で有名なシャーロット・チャーク (二七二一六〇) はかなり長期に渡り、舞台の上でも外でも男装していた。¹ これら実在の男装の女性たちの話は新聞、大衆小冊子、伝記や自伝などで書かれ、さまざまな階級の人々、特に労働階級の人々の間に広く知れ渡っていた。その一方で、虚構の女性の兵士などの異性装の話も劇や詩やバラッドによく登場したテーマだった。

十八世紀になぜ女性の異性装の話がこれほど流行したのか、その世紀はじめのメアリ・アステルの次の言葉を知っている者なら疑問に思うだろう。

男性たちは歴史家なので、めったに女性たちの卓越した見事な行動を記録にとどめてくたさらない。彼らが彼女らを取り上げるときは、これこれの女性らは彼女たちの性を超えて行動した、という賢明な評言をする。そういう言い方をすることによって、彼らは、卓越した行動をした者は女ではなくてペティコートをはいた男であると、読者に理解してもらいたいのだらうと思われる。(Mary Astell to Elizabeth Elstob in 1705, qtd. in Perry, *Celebrated* 25)

アステルが言及しているのは、男性の領域に踏み込んだ知的な女性に対する当時の男性側の見方である。男性優位社会においては、女性に対して「性を超えて行動した」という表現を使うことは、最大の褒め言葉のように思える。それは「男性と同等の」とか「男性のような」知性の持ち主であることを指しているからだ。しかし、アステルはそ

の褒め言葉が実は女性蔑視であることに気がついている。つまり、そういう知的な女性は「ペティコートをはいた男」であると見なされているだけなのだ。ペティコートを身につけ、外見は女らしい。けれども、中身（頭の中）は女性ではなく男性なのである。これは女性のアステルにとって決して嬉しい賛辞ではなかった。²⁾

女性が精神的に男性として振る舞うことに対し、このような見方がある時代に、どうして少くない女性たちが男性の衣服を着て、男性を装ったのだろうか。また、どうしてその種の女性たちの話が好んで読まれたのだろうか。本章では、いわゆる「女性兵士」のハンナ・スネル（一七三三―一九二二）に焦点を当て、十八世紀イギリスにおける異装の文化現象をジェンダーとセクシュアリティの観点から考察する。

ハンナ・スネル

十八世紀に実在したイギリスの女性兵士のうち有名な名前として、スネルの他にクリスチャン・デイヴィス（一六六七―一七三九）、マライア・ノールズ（生没年不明）、メアリ・アン・ツールボット（一七七八―一八〇八）を挙げることが出来る。彼女たちの生涯や冒険談はそれぞれ出版された伝記を通じて世に知れ渡っていた。³⁾ 十九世紀後期には、ジョン・アシュトン（一八三四―一九一一）が『十八世紀の放浪者たち』（一八八七）において、「十八世紀のアマゾンたち」の章でこの四人の女性兵士たちを紹介した（Ashton 177-202）。

これらの女性たちの伝記のうち二〇世紀に入って唯一リプリント版が出たのが、『女性兵士、すなわちハンナ・スネルの驚くべき人生と冒険』である。一七五〇年にロンドンの印刷業者ロバート・ウォーカーによって出版された作者名不明の『女性兵士』には二つの版がある。一つは全一八七頁でハンナ・スネルの肖像画などの挿画をいくつか含む。もう一つの版は全四六頁の挿画のない版で、これが一九八九年にリプリントされた。⁴⁾

十八世紀の書物においてよくあるように、『女性兵士』の扉頁には読者の興味を喚起するために粗筋が書いてある。



G. Scott, Sc.

HANNAH SNELL,
The Female Soldier &c

図版7
「ハンナ・スネル、女性兵士」、「女性兵士」
(1750) 題扉のあとに置かれた挿絵。



HANNAH SNELL,
(the Female Soldier);
Who went by the Name of James Gray.

図版6
「ハンナ・スネル、ジェイムズ・グレイの名
前で通った女性兵士」、「女性兵士」(1750)
口絵。



図版8
挿絵のない版の『女性兵士』(1750) 題扉。

挿画のない版の題扉（図版8）は、挿画つきの版と少し違った箇所があるが、以下のごとくである。

彼女はウスター市生まれで、ジェイムズ・グレイの名前を名乗った。そして夫に棄てられて、彼を探すために男の服をまといつてコヴェントリーまで旅をし、そこでギーズ大佐の歩兵連隊に入り、スコットランドの反乱時、その連隊と一緒にカーライルまで行進した。その街で彼女に起こったこと、およびその連隊を脱走した話。

また

その後、ポーツマスにいたフレーザーの海兵連隊に入隊した完全かつ真正な話。その連隊から選抜派遣されて、ボスコエン提督の小艦隊の一つ、つばめスループ型軍艦に乗船し、東インド諸島へ向かった。その航海の間、彼女は浮き沈みの多い運命に遭遇し、特にボンデイチエリの攻囲線では、十二の負傷を負った。その上、思いがけない偶然の出来事によって、探していた不実な夫の死の噂を聞いた。

さらに、

エルサム軍艦でイングランドへ帰る航海中に彼女の身に起きた話。いまだかつてなかったほど驚くべき出来事をすべて含む。男性の服を着て、五年近くの間、本当の性が見つかることなしになした冒険のすべてが明らかになる。

テキスト内部の情報で年代を補うとすれば、スネルは一七二三年四月生まれで、一七四〇年にロンドンに出て、一七四四年一月、二一歳でオランダ人の水夫と結婚した。早々に子どもを宿すも、夫は借金のせいで妊娠七ヶ月の彼女を棄てて出て行ってしまふ。早産した子どもを亡くしたあと、一七四五年十一月に義理の弟のジェイムズ・グレイの服を着て、彼の名を騙り、軍隊に入った。一七五〇年六月に給料をもらって除隊したあとで、女性であることを打ち明けた。それから終身年金を請願したところ、支給されることになった。

スネルのその後の人生について現在わかっているのはこうだ。⁵『女性兵士』が出版されるやすぐにスネルは一躍有名になり、『ジェントルマンズ・マガジン』第二〇号（一七五〇）や『スコッツ・マガジン』第十二号（一七五〇）に

『女性兵士』の縮約版が現れた。また、同年中にオランダ語にも翻訳されている。二四頁や十六頁の抄本版で安価なチャップブックもロンドンだけでなく、ヨークのような田舎や、アメリカのマサチューセッツ州ノーサンプトンのようなところでも続々と出た。ハンナ自身もロンドンのサドラーズ・ウエルズ劇場で軍服を着て女性の兵士を演じ、歌をうたつて、人気をさらった。彼女はその後ウォッピングに転居し、「女性戦士」^{ウオリアー}の看板をつけたパブを経営する。また、二度再婚し、二人の息子をもうけている。そして一七九一年に詳細不明の病気でベドラム精神病院に送られ、そこで一七九二年に六八歳で亡くなったという。

さて、『女性兵士』の後付けには、「ハンナ・スネル自身の口から」直接聞いた彼女の冒険話がすぐさま印刷所に回され、出版されたと明記されている。それは他でもない。女性が戦争で闘う話は、『女性兵士』が出版された一七五〇年頃には民間伝承としてすでに確立したテーマだった。一番初期のいわゆる女性戦士のバラッドは『勇敢な美しい娘メアリ・アンブリがゴントで闘った勇猛な行為』である。一六〇〇年頃普及し、十九世紀まで印刷され続けた。⁶その他多くのバラッドが女性戦士をテーマにしていた。⁷それ故、『女性兵士』の出版業者ロバート・ウォーカーは、虚構ではなく事実の話であるとわざわざ念を押したのである。しかも、民間に伝わっていたバラッドの読者層は主として下層階級の人々だったが、『女性兵士』の想定読者層は明らかにそれよりも上の階級だ。何しろチャップブックが普通一ペニーという安価だったに対し、『女性兵士』はその十二倍の一シリングもしている。また、のちに詳しく述べるように『女性兵士』には当時大流行したサミュエル・リチャードソン（二六八九―一七六二）の小説『パメラ』（二七四〇―四二）への言及があることからしても、同書が小説の読者層である中流階級以上の人々に向けて書かれたことは明らかである。

しかし、本物の女性兵士の話という能書きにもかかわらず、その描写の仕方はどちらかと言えば、女性戦士についてのバラッドでおなじみの伝統的なものである。そこで、次にバラッドとの共通の特徴に留意しながら、『女性兵士』を詳しく分析していこう。

男装の理由

ダイアン・デュゴーは、女性戦士のバラッドに共通する物語要素として、「愛と栄光の英雄的な結合、別離の危機を女性の変装によってひっくり返すこと、ヒロインの愛と兵役のさまざまな試練、あらゆる点で愛と戦場における彼女の成功の賞賛」(Dugaw, *Warrior* 48)を挙げている。つまり、バラッドの特徴の一つは、ヒロインが男装して戦場へ行くきっかけとなったのが、愛する男性のためという異性愛的動機であるということである。たとえば、『メアリ・アンブリ』では、ヒロインが男装し、兵士となって、勇敢に戦ったのは戦死した恋人のあだをとるためであった(Dugaw, *Warrior* 35)。『有名な女性鼓手』や『雄々しい女兵士』のようなバラッドでは、たくましいヒロインは男装して恋人の出兵についていく。『コンスタンスとアンソニー』では、ヒロインのコンスタンスは水夫に男装して恋人のアンソニーについていくが、船が難破したため別れ別れになる。しかしさまざまな苦難を経たあと、最後に恋人と結ばれる(Dugaw, *Warrior* 47-48)。

『女性兵士』のスネルが男装したのも、自分を棄てて逃げた夫を追いかけるためだった。最終的に夫と再会しハッピー・エンドになることはなかったけれども、スネルの男装もまた異性愛的動機として描かれている。こうした動機は注目に値する。なぜなら、当時のイギリスでは、男性の異性装の場合は明らかにソドミーと関わりがあったからだ。リン・フリードリによりれば、エドワード・ウォード(二六六七―七三二)の『ロンドン・クラブ史』(一七〇九)は女性みたいな男性を示す「モリー」(Molly)の語をソドマイト(男性同性愛者)の意味で用いた最初の文献である(Friedl 251n3)。厳密に言つと、その『第二部ロンドン・クラブ』[二七〇九?]⁹中の「ソドマイトたち、あるいはモリーたちのクラブ」の項で、ソドマイトたちは自分たちのことを「モリー」と称し、女性のつもりでいて、「慣習上女性に結びつくようなあらゆる流行の装飾品をまね、話したり、歩いたり、噂話をしたり、膝を曲げ体をかがめてお辞儀したり、泣いたり、小言を言ったり、あらゆる女々しいそぶりを模倣しようとする」、また「女性の寝巻、薄い

絹織物のフード、そして婦人用のナイトガウン」の姿に変装する者もいると記される (Ward, *Second Part* 56)。なおオックスフォード英語辞典では、ソドマイトたちが集う酒場・宿屋を意味する「モリー・ハウス」の初出は一八二八年であり、女みたいな男とソドマイトを結びつけた最初の使用例「ミス・モリー、女みたいな奴、ソドマイト」は一七八五年である。

一方、女性の異性装の場合は、同性愛との関連は明らかでない。研究者によっても見解が分かれる。たとえば、テリー・キャッスルは、同性愛に対する恐れが（男性だけでなく女性の）異性装の攻撃の根底にあったと主張し、一七二八年十二月十四日付けの『ユニヴァーサル・スペクテーター』誌における論評——「どの国においても、男女両性は衣服によって区別されるべきであるのが礼儀である。それは多くのふしだらな行為を予防するためであり、さもなければ、そんなことが頻繁に起こってしまうだろう」——を引いている (Castle, *Masquerade* 46)。また、エマ・ドノヒューも、一七一九年の『フリーシンカー』第一〇八号には、女性が男装して仮面舞踏会に行くことは「両性の区別」を曖昧にし、「伯爵夫人が女中の色恋の言葉に耳を傾けるとき」、偶然にせよ意図的にせよ、レスビアン的な誘惑をもたらしてしまうと警告されていたと断言する (Donoghue, *Passions* 90)。これに対し、ランドルフ・トランバックは、男性の女装は十八世紀初期からずっとソドミーと結びついていたが、女性の男装は十八世紀の終わりにサフェイス (女性同性愛者) たちが登場するまで女性同性愛と関連がなかったと指摘する (Trumbach, "London's Sapphists", 121-22)。十八世紀の「男性として通る女性たち」を研究したリン・フリードリも、男性の女装と違って、女性の男装がどの程度まで同性愛と関わっているのか不明であると述べている (Friedl 234)。

スネルの男装の動機は、トランバックやフリードリの見方を裏づけるものであろう。のちに詳述するように、『女性兵士』では、スネルやその他の女性の「美德」は常に異性愛の枠組の中で語られてもいる。

戦う女

バラッドの女性戦士はまた輝かしい武勲をたて、その「女らしくない」性質がいつも褒めたたえられたが、スネルも戦場において多くの傷を負うほど勇敢に戦ったことが絶賛される。

匿名作家は冒頭からスネルをべた褒めである。まず、労働階級出身のスネルが男性においても賞賛される「あらゆる戦争や征服の榮譽ある行動に匹敵する英雄的行為、胆力、そして精神力」を持った女性であると述べ、さらに、「アマゾン族の時代」以降の戦う女性たち——ローマの將軍アントニウスと戦ったクレオパトラ、アッシリアの女王セミーラミス、アルカディアの女羊飼いたち——の系図線上に置きながら、スネルの話はこれら過去のヒロインたちの話よりもはるかに「変化に富んだ驚嘆すべき出来事」と「汚れない真実性」(Female Soldier 2)に満ちていると推奨する。あとの頁でも、「どの時代、どの国も、このわれらがヒロインの冒険で出会う以上に卓越した美德と行動と不屈の例を生み出したことはかつてない。彼女の冒険は後世に伝えられる価値のあるものである」、「性格がきゃしゃで、繊細で、労苦に耐えることができなく、危険の名にひどく怖がる一人の女性が、自分の性を秘密にしておく決意を捨て去ることなく、これほど多くの場面を経験した」(Female Soldier 34-35)などと褒めたたえる。

スネルがこのように戦場という男性の領域の中でも最も厳しい場所に入り、男性に匹敵もしくは男性よりも優れた能力があることを示したことを見ると、彼女をフェミニストの先駆者として見なし、彼女の行動を支配的な性差の概念に意図的に挑戦する試みとして読み取りたくなるだろう。しかしながら、匿名作家の上述の賞賛の仕方では、確かに、スネルはあくまでも「例外的」な女性として提示されている。彼女は確かにジェンダーの境界を越えたけれども、それは個人的な行為であって、社会的な革命を意図したものではない。また、男性だけに与えられている社会的・経済的特権（ここでは兵役による給料や武功加俸）を声高に主張することなく容易に獲得するが、決して男性の特権を脅かすものとして恐れられることもないのである。

男装と演技

興味深いことに、スネルの話は、当時のジェンダーの概念がいかに外的な指標によって定義されるものであったかを示している。つまり、男性の衣服を着て、男性の行動をうまく模倣すれば、「男性」として見なされるのである。

バラッドの女性戦士と同じく、スネルが男装する過程の描写はきわめて簡潔である。「彼女は義理の兄ジェイムズ・グレイ氏の服を着て、彼の名前を騙り、一七四五年十一月二三日に出発した」(Female Soldier 7)。スネルは男性の衣服を着たとたん、女性から男性へとジェンダーを転換することができた。そして「旅の間、五年近くの間、多くの危険と栄枯盛衰があったにもかかわらず、一度も女性であると見つからなかった」(Female Soldier 30)。さらに帰国したあと給料をもらうまで、彼女は姉、義理の兄のグレイ氏、彼らの下宿人の若い女の三人以外の誰にも自分の本当の性をあかさなかつた。スネルはグレイ氏の家に住み、その若い女とベッドを共有していたが、近所の人々はスネルを男性であると思っていたので、二人が結婚したという噂が近隣中に広がった。

「自国と外国の両方で」スネルの本当の性がばれなかったのは、どうしてであろうか。この誰もが当然いさぐ疑問に対し、『女性兵士』の匿名作家は「容貌や身振りを判断する最も優秀な人でもごまかしを発見することができないほど巧妙に、彼女が男性をまねていた」(Female Soldier 33) からだと、指摘する。そして、それでもなお疑問に思う読者の好奇心を満たすために、逐一理由を示している。たとえば、兵士仲間が彼女にあごひげがないのを怪しむ者がいたが、彼女は「若すぎるから」(Female Soldier 19) と答えた。女役のスドマイトを指すように「モリー・グレイ嬢」(Female Soldier 19) と呼ばれたときは、無礼なお返しをしてやって、航海の間に誰よりも立派な男であることを証明すると宣言し、賭けもした。こうして、「彼女の機敏な性質」が秘密を暴こうとする人の「迷夢をさまさせた」(Female Soldier 30) のである。

また胸のふくらみも女性の証拠であるが、むち打ち刑のときでもそれは目立たなかった。カーライルの地で任務の

怠慢のため打ち打たれたときは、両腕を大きく広げられて市の門に固定されると、彼女の胸は「引っ張られて、その結果それほど大きく見えなかった。その上、彼女の胸は壁側だったので、戦友の誰にも見つからなかった。」船内で打ち打たれたときは、「彼女は直立し、胸を隠すために、いわば偶然に首に受けるかもしれないむちを防ぐように、首の回りにハンカチーフを巻いた。胸はその上にハンカチーフの両端が垂れ下がって隠された」(Female Soldier 34)。

さらに戦傷して治療を受けるときもなんとか切り抜ける。彼女が撃たれた十二箇所のうち、十一箇所は膝から下の足だったが、あとの一箇所はなんと「そけい部」(Female Soldier 15)だった。そこで、「外科医にいつもの手術をするのを許したら、必ずや起こるに違いないあの発見を妨げるために、彼女は自分の傷から弾丸を抜き取って、自ら医者であるとはっきり示した」(Female Soldier 31)。のちの頁でもう一度もつと詳しく治療の仕方が述べられる。彼女は戦傷を負って病院に運ばれたが、医者が把握していたのは足の傷だけだった。そけい部の傷が非常に痛むため、彼女は黒人女性に自分の性を知られることなく包帯と膏葉を持ってきてもらおう。そして、「指で傷をさぐって、弾丸があるところに行き、それから弾丸を感じるとすぐに、人差し指と親指で押して、外に出した」(Female Soldier 37)。そのあと軟膏を塗って治したのである。スネルは自分の本当の性を隠すためだったら、どんな危険なことでもしたのだ。

男装のスネルは、バラッドの女性戦士のように、他の女性に言い寄ることもあった。ジュリ・ホイールライトは『アマゾンと女軍人たち』(一九八九)において、女性戦士の話の中によくある同性間のロマンスのエピソードには、「男性の読者に性的な快感を与えるため」と、「模倣的な性質の兵士のアイデンティティを強調するため」の二つの目的があったと指摘している (White Wright 12, 60)。スネルの場合、まさにホイールライトの指摘の通り、同性への求愛は彼女がいかにうまく男性のふりをしていたかのもう一つの証左として描かれる。スネルはポーツマスで再会した若い女性と親密になり、船の仲間たちよりも彼女と一緒に酒を飲む方が多くなった。そして「この若い女が自分のことを嫌いでないことを知って、彼女は兵士を演じるほど上手に恋人を演じることができないかどうか試しにやってみた」(Female Soldier 28)。すると、「除隊と給料を得たらすぐに結婚するために、ロンドンから戻ってくる」という同

意を得た。若い女との結婚を取りつけるまでわずか二日間という早業であった。

女性との結婚の約束のエピソードはここで終わり、後日談はない。スネルは除隊後、前にも述べたように、結婚を約束した若い女性ではなく、義理の兄のところの下宿人である若い女性とベッドをとにした。前者の若い女性はスネルが男性であると信じていたに對し、後者の女性はスネルが女性であることを知った上での同衾である。前者との関係は明らかに異性愛関係の模倣だが、後者との同衾は同性愛関係を仄めかしているように見える。しかしながら、後者との関係についても、近所の人々が「彼女「スネル」が男性だと思って」若い女性が兵士と結婚した」(*Female Soldier* 32-33)と噂したように、異性愛関係の模倣として語られる。

女性の美德

見逃せないのは、『女性兵士』では、このように男性を完璧に装うことは女性の美德を守ることとコインの裏表の関係として提示されていることだ。スネルはその男性的な戦いぶりや男らしい行動と同じくらい、いやそれ以上にもっと、女性としての「美德」を保持したことが賞賛されている。たとえば、ポーツマスで陸に降りたとき、宿が込んでいたので、スネルは海兵仲間のジョン・ハッチンズの「Bedfellow」になるのを余儀なくされた。そして次の二晩、彼女の「Bedfellow」になったのは、のちにスネルに求婚することになる男で、イギリス行きのエルトム号の乗員仲間のジェイムズ・ムーディだった。「Bedfellow」という単語は普通妻や夫のような同衾者を指す。義理の兄の家の下宿人で、スネルの「妻と思われていた」若い女性もスネルの「Bedfellow」であった。しかし、若い女との同衾のように、スネルが違った二人の男性と三晩同衾してもセクシヤルなことは何も起こらなかった。なぜなら、男性たちは「彼女が女性であると全然わからなかった」(*Female Soldier* 29)からだ。別のところではこう記される。「もし彼女の性が見つかったら、彼女は多くの乗船仲間、特に彼女が直接関わった人々、すなわち、将校たちの節度のない、無秩序な、

非道の性欲の餌食になっていたに違いなし」(Female Soldier 31)。

従って、スネルは「本物のパメラ」(Female Soldier 40)として褒めたたえられる。いや、「冒険と美德」の点において、サミュエル・リチャードソンの小説のヒロインである「ロマンティックなパメラ」を凌駕しているともども絶賛される。リチャードソンの「まがいものの」のパメラがたった一人の男性だけを寄せつけなかったのに対し、「生身の人間」のパメラは、「何千もの軍人たち」や、「もしジェイムズ・グレイがハンナ・スネル夫人だと知ったら、すぐさま彼女の美德のとりでをたたきつぶしていたであろう屈強で大胆な水夫たち」の間で、「最も有徳な計略によって自分の貞節を守った」(Female Soldier 41)からだ。

曖昧な結び

以上のように、『女性兵士』は異性愛的枠組の中で、弱い性であるはずの女性がいかにも男性を装いつつ、女性の美德を保持したかを描いた。スネルは二〇代の若さで髭がないので「モリー・グレイ嬢」と呼ばれていたにもかかわらず、彼女の戦友や上官たちの中に、「モリー」(男性同性愛の女優)としての彼女を襲うソドマイト(男性同性愛者)は全くいなかったらしい。『女性兵士』に登場するすべての人物はあくまでも異性愛者である。いや、少なくともそのように見せかけていると言った方がいだろうか。

現代のわれわれからすれば、なぜ女性が五年近くの間男性として通ることができたのか、まことに不可解きわまらない。だが、スネルの例は当時の人々がどれほどジェンダーの差を外的な指標に基づいて認識していたかを示している。はじめに引用したアステルの「ペティコートをはいた男」という表現では、ジェンダーの差は明らかに内面的な能力の差を示した。ところが、スネルの話の場合、ジェンダーの差は能力の問題ではなく、男性の衣装を着て、どれほどうまく男性として装ったかという演技の問題である。

最後に、『女性兵士』は異性愛的な枠組をとっているとはいえ、ロマンティックな終わり方をしていないことを指摘しておきたい。多くのバラッドでは最終的に男性との愛が成就する。一方、スネルは公に女性であることを明かしたあと、戦友の一人から求婚されるが、断った。なぜなら、前の亭主があまりにもひどかったので「どんな男とも二度と婚約しない」(*Female Soldier* 39)と決心していたからだ。現在のわれわれはスネルがのちに二回再婚することになるのを知っているけれども、この時点では、彼女は明らかに男性に対して不信感、絶望感をいだいている。では、スネルとその「妻と思われるいた」若い女性の関係はその後どうなったのが気にかかるところだが、それについては全く書かれていない。もしかして、彼女はメアリ・ハミルトンのように「女性の夫」¹⁰になったのではあるまいか。また、スネルの伝記の最後には、彼女が帰国後も「連隊服を着続けている」(*Female Soldier* 42)と記されている。もはや自分の性を偽る必要がないのに、どうして男性の服を脱がないのであろうか。同書には何ら理由は記されていないだけに、それだけ一層意味深長である。

◆◆◆ 第四章 ◆◆◆

「女性の夫」のジェンダー偽装とセクシユアリティ

女性と結婚した女性の話

十九世紀末のイギリスの性科学者ハヴロック・エリスは、「性的に倒錯した女性」（女性同性愛者）が「ある程度の男らしさ」の特徴を持ち、男性の衣服を好んで着ることを指摘した。エリスのいう男装の女性同性愛者は、二〇世紀中頃から女性同性愛者のステレオタイプになった男役 (Dutch) と女役 (femme) のうち前者に相当する。では、男装する女性はみな同性愛者であるのかというと、エリスは必ずしもそうではないと述べている。その一つの例として彼が挙げるのが、十八世紀中期の有名な劇作家・俳優・桂冠詩人のコリー・シバー（二六七一―一七五七）の娘シャーロット・チャーク（一七三三―一七六〇）である。チャークは結婚後夫が失踪してから、一人娘を育てるためにズボン役の女優として舞台上上がったが、舞台の外でも男装し続けていた。そのため、彼女を男性だと思い込んだ他の女性たちからしばしば恋慕されたが、彼女自身は「一度も女性たちに惹きつけられたことがないようだった」（Ellis, *Sexual Inversion* 140）からだ。興味深いことに、彼女が四二歳のときに出版した自伝『シャーロット・チャーク夫人の生涯の物語』（一七五五）によれば、四万ポンドを相続した若い貴婦人に恋されて、結婚を望まれたときですら、チャークは自ら本當の性を明かし、「神は私を彼女が思い描いているような幸せな人物には定めていなかった」（Clarke 59）と断った。つまり、彼女は女性であるから他の女性の夫になれないと告げたのである。このエピソードは、リン・フリードリのよる最近の研究者によっても、チャークが「女性に対しエロティックな性向」（Friedli 242）を持っていない証拠として

挙げられている。それでは、本当に他の女性と結婚した女性のセクシュアリティはどうだったのだろうか。

男性に扮した女性が別の女性と結婚する。十八世紀のイギリスでは、このようないわゆる「女性の夫」(female husband)の実話がしばしば世を騒がした。最も有名な「女性の夫」は、治安判事であると同時に小説家であったヘンリー・フィールディング(二七〇七―五四)によって伝記が書かれたメアリ・ハミルトンである。ハミルトンは、一七四六年に、男性と偽って女性と結婚した罪で裁判にかけられ、四つの市場町において公衆の面前でむち打ち刑を受け、その後六ヶ月の禁固刑を受けた。公開刑の様子は、一八一三年出版の『女性の夫の驚くべき冒険!』の口絵(図版9)からうかがい知ることができる。画家はチャールズ・デイケンズ(一八二一―七〇)やウィリアム・サッカレー(一八二一―六三)などの小説の挿絵で知られているジョージ・クルークシャンク(一七九二―一八七八)である。

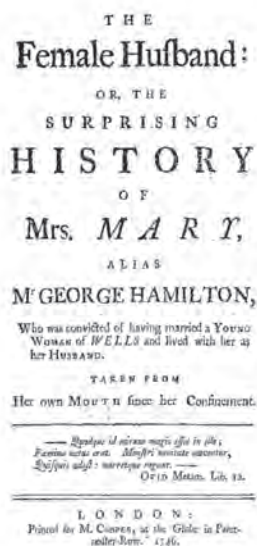
ハミルトンの事件以後、新聞・雑誌にはさまざまな「女性の夫」の記事が掲載されるようになった。たとえば、一七六〇年代の大衆紙『ロンドン・クロニクル』には、男装の女性兵士がひそかに女性と結婚していた話、ジョン・ブラウンことバーバラ・ヒルが結婚後志願兵になろうとしたとき本当の性がばれたけれども、その妻の愛を失わなかったという話、妻に養ってもらったために結婚したサミュエル・バンディことセアラ・ポールは妻に



図版9
ジョージ・クルークシャンク「メアリ・ハミルトン」、『女性の夫の驚くべき冒険!』(1813)口絵。

訴えられたが、妻が結局出廷しなかったため釈放された話、あるいは死亡記事欄において、故ジョン・チヴィが二〇年以上の結婚生活の間女性であると見破られなかった話などが取り上げられていた。²⁾ また、『ジェントルマンズ・マガジン』の一七六六年の七月、八月、十月号には、ロンドン東部のポプラーで二人の女性が三六年もの長きにわたり「夫と妻」として一緒に暮らし、一度も怪しまれることもなくパブを経営していたという記事（七月号では「ポプラーで最近起こった異常な事件の詳しい話」のタイトルで報じられた）が掲載された。「夫」はジェイムズ・ハウことメアリ・イーストであるが、他の「女性の夫」の話と違って、妻となる女性（名前は伏せられている）をだましたのではなく、それぞれ男性に失恋した十六才と十七歳の親友同士が二度と男性から求愛されることのないように、夫婦の服も二人の金を足した中から支払ったのだった。³⁾ そして一七七〇年代には、『ジェントルマンズ・マガジン』や『アニユアル・レジスター』において、若い男装の女性が金をだまし取るために金持ちの老女と結婚した話、アン・マロウという女性が男装と偽名を用いて三人の女性を欺き、それぞれと結婚して金を奪った罪で、さらし台にさらされたあと、六ヶ月間の禁固刑を受けた話などが掲載された。⁴⁾

これらの「女性の夫」の事例を見ると、妻の側も女性同士の結婚だとわかっていたメアリ・イーストのようなケースは非常にまれだったと言える。たいていの「女性の夫」は他の女性と結婚するために男性を装い、結婚後本当の性が露呈することになる。そして、そのまま構わず結婚生活を続けることができるか、あるいは詐欺として訴えられて罰を受けることになる。イギリスではソドミーは重罪だったのに対し、女性間の同性愛を違法とする法律はなかった。しかし、たとえばハミルトンの場合、一七一三年の「放浪罪」の第一条項の「詐欺罪」が適用された。ソドミーは無論のこと、スリや強姦のような犯罪が絞首刑の重罪だった時代に、公開鞭打ちやさらし台にさらされたあと六ヶ月の禁固刑という罰はいかにも軽いと言わざるを得ない。他の女性がまねをしないよう警告する程度の罰である。これに関して、現代ではさまざまに解釈されている。フリードリは、「男性として通る女性が詐欺罪で起訴されたこ



図版 10
『女性の夫』(1746) 題扉。

とは、主たる争点が性的逸脱というよりむしろ、詐欺とその結果生ずる権利と特権の侵害であったことを示唆している」(Friedli 237)と見なした。一方、エマ・ドノヒューは、イギリスにおいて女性同性愛を禁じる法がなかったのは、「法律家や判事たちが女性間のセックスを公にしたくなかった」からであると考え、それ故に「女性の夫」事件で用いられる「詐欺罪」という言葉は、「女性によつて権力が奪われることに対する男性の恐怖を暗示するかもしれないが、また同時に、女性同性愛の誘惑罪の婉曲語でもありうる」(Donoghue, *Passions 61*)と述べている。

それでは、チャークと違って、男性と偽って他の女性と結婚した「女性の夫」たちは、同性に対しエロティックな感情をいだいていたと言えるのだろうか。これは難しい問題である。当時のイギリスにおいて、法律のような公的領域でその存在が認められてもいなかっただけの私的感情を当の女性が果たして自覚していたのかどうかは、実際のところ不明であるというより他にない。そこで、本章では、事実がどうであったかを問うのではなく、当時の「女性の夫」の話において、男装によるジェンダーの偽装とセクシュアリティがどのように描かれているのかを見てみたい。取り上げるのは、フィールディングによる全三四頁の小冊子『女性の夫、すなわちメアリ・ハミルトン夫人、別名ジョー

ジ・ハミルトン氏の驚くべき物語』(一七四六)である。

初版の『女性の夫』の題扉(図版10)を見てわかるように、フィールディングは匿名で同書を出版した。題扉には、ハミルトンが「ウエルズの若い女と結婚し、彼女の夫として一緒に暮らした罪の判決を受けた」という概略と、この話が「彼女の抑留以来彼女自身の口から得た」ことが明記されている。しかし、実際にはフィールディングは彼女に直接面会したことはなく、『バース・ジャーナル』や『デイリー・アドヴァタイ

ザー』などに掲載された報告書を読んだだけだったらしい (Norton, introduction xviii)。ハミルトンの別名も実際には「ジョージ」ではなく「チャールズ」だったし、『女性の夫』で描かれる彼女の伝記的事項や裁判内容も事実とは違う部分が多い。文盲のはずの妻メアリ・プライスの手紙なども明らかにフィクションである。にもかかわらず、フィールドディングの『女性の夫』は、ハミルトンのジェンダー偽装のセクシュアリティの側面に焦点を当てている点で非常に興味深いテキストである。

メアリ・ハミルトン

『女性の夫』の冒頭で、フィールドディングはまず、「あらゆる時代、あらゆる国の不自然な肉欲のうち」(Fielding 2)、最も驚くべき例がハミルトンの物語の中で見つかるという。『女性の夫』を読み進むにつれ、「不自然な肉欲」とは、異性愛社会において女性がその性欲を同性に向ける「不自然さ」だけではなく、女性が女性としては並々ならぬ強さの性欲を持っている「不自然さ」、すなわち男性並みの性欲や性行動を持っている「不自然さ」を指すことがわかる。しかし、当時の医学書や性の手引書では女性同性愛者は両性具有の身体をもち、他の女性に対し性的に男性のようにふるまうと記されているが、ハミルトンの身体は、後述するように、普通の女性の身体である。

母親は最初の夫を亡くしたあと元近衛歩兵隊軍曹と再婚し、ハミルトンを宿したが、二度目の夫も亡くなったので、出産する二ヶ月前に三度目の夫を迎えたという女性である。一七二一年に生まれたハミルトンは、その母親から厳しく育てられ、「いつの日か最も忌まわしい、不自然な墮落で彼女の性を汚すことになるだろう」とはとても思えないような幼少期を送った。ところが、メソジスト教徒のアン・ジョンソンという近所の女性に「はじめて誘惑された」とき、ハミルトンの中で「異常な熱情」(Fielding 2) が生まれることになる。ここでは、宗教的転向とセクシュアリティの転向は密接な関連がある。次の引用中の「熱情／狂信」(“Enthusiasm”)と「初心者／修練女」(“novice”)

の二つの地口はそれをうまく表現している。

このアン・ジョンソンはある仕事でプリストルに行き、そこに半年近くいたのだが、メソジスト教徒と呼ばれる人々と何人か知り合いになり、その宗派に帰依しよう説得された。

彼女がマン島に戻ると、すぐにモリー、「メアリの愛称」ハミルトンをたやすく改宗させた。ハミルトンはその熱烈な気質のせいで、熱情／狂信に影響されやすく、メソジスト教徒の友人が彼女の心に刻もうとする、あのすべての感動を喜んで受け入れた。

(中略) しかしながら、ハミルトンは愛というかむしろ友情を示していて、ジョンソンに誘惑されてはじめて道はずれるまで、全く純潔だった。後者の方は、不純行為において初心者／修煉女でなかったようで、彼女の告白によれば、プリストルでそれをメソジスト派の修道女たちと一緒に学び、しばしば実践したことがあった。(Fielding 3)

こうして二人は「離れられない仲間」になり、やがて「同じベッドに寝る者」(“bedfellows”)になった。“bed-fellow”という言葉は“bed-mate”と違って必ずしも性的関係を伴う「同衾者」を意味せず、比喩的に「仲間」の意味もあるが、ここでは明らかにセクシャルな関係の意味合いが込められている。ハミルトンは「性癖が極端に好色だった」ので、その「性癖」がジョンソンに「とても激しく向かった。」そして、二人の会話はすぐに「犯罪的」になったが、二人の間のような「やりとり」があったかは「語るのに適していない」(Fielding 3)とされる。『女性の夫』では、女性間の同性愛行為に話が及ぶとき、こういう断り書きがされて具体的に何がおこったのか語られることがない。テリー・キャッスルは、このようなフィールディングの書き方は同書が二種類の違った読者層を想定しているからだと推定している。すなわち、ポルノのように性的な快感がほしい好色な男性読者と道德的教訓を求める有徳な女性読者である(Castle, “Matters” 613)。

しかし、次のエピソードは有徳な女性に対する警告というよりも、女性同士の「犯罪的」関係に入ってしまった女

性に対して、最も有効な脱出法を提示している。その脱出法とは男性と結婚することに他ならない。ジョンソンはロジャーズという名前の熱心なメソジスト教徒で、かつまた非常にハンサムな若者とひそかにつきあい、突然ハミルトンを棄てて彼と結婚する。そして、結婚式の翌日に書いたハミルトン宛ての手紙の中で、ハミルトンをかつて誘惑したことへの許しを請い、「そんな邪悪な方向」に進まずに自分のように結婚するようにとアドバイスするのである。いったん誤った道を進んでも、男性と結婚すれば、正しい道に戻ることができる。そうすれば、以前の過ちから救われるのだ。その上、男性との結婚は「神聖な状態」であり、女性間よりも男女間の方が「喜び」(Fielding 4)がまわっていると言う。

ハミルトンは残念ながらジョンソンのアドバイスに従わなかった。男性と結婚するという道よりもむしろ女性と結婚する道を選んだのである。いや、ジョンソンとの関係においても、ハミルトンは彼女の「夫」という男性的立場にいたと言えるかもしれない。ジョンソンに棄てられたことを知ったとき、ハミルトンは、「愛する妻の不貞を思いがけなくも発見してしまった最も優しい夫のように」(Fielding 4)、狂乱し、髪の毛をかきむしり、胸をたたき、怒り狂ったのだ。

ジョンソンとの関係が終了したあと、ハミルトンは外見的にも男性を装う。つまり、「男性の服」を着て、アイルランドのダブリンへ行く。「彼女は非常にかわいい女性だったので、今ではとても美しい若者に見えた」(Fielding 5)。旅の目的はメソジスト教の教えを広めるためであったが、前にも述べたように、宗教的目的と性的目的は相似関係にあったので、女性間の愛を広めるためと言ってもよい。こうしてハミルトンはまずダブリンの下宿先の同宿人である二人の夫を亡くした四〇歳近くの未亡人を誘惑する。そのとき、ハミルトンは女性か男性かわからない曖昧なジェンダーの持ち主として描かれる。少し長いが、原文を引用してみよう。

Here our adventurer took a lodging in a backstreet near *St. Stephen's Green*, at which place she intended to preach the

next day; but had got a cold in the voyage, which occasioned such a hoarseness that made it impossible to put that design in practice.

There lodged in the same house with her, a brisk widow of near 40 Years of age, who had buried two husbands, and seemed by her behaviour to be far from having determined against a third expedition to the land of matrimony.

To this widow our adventurer began presently to make addresses, and as he at present wanted tongue to express the ardency of his flame, he was obliged to make use of actions of endearment, such as squeezing, kissing, toying, &c.

These were received in such a manner by the fair widow, that her lover thought he had sufficient encouragement to proceed to a formal declaration of his passion. And this she chose to do by letter, as her voice still continued too hoarse for uttering the soft accents of love. (Fielding 7) (下線引用者)

上記引用の第一・第二パラグラフでは、「われらが冒険者」ことハミルトンは「彼女」として言及されている。だが、第三パラグラフで、いきなり「彼」「ハミルトン」は未亡人に「言い寄り始めた。(中略)彼は、きつく抱いたり、キスしたり、いちやつくなどのような愛情表現の行為をうまく利用せざるを得なかった」(傍点引用者)という表現になる。第四パラグラフでは、「彼」は「彼の熱情の正式な告白」に進むために、「彼女はそれを手紙ですることにした。というのは彼女の声は愛の甘い言葉をささやくにはまだあまりにもしゃがれ声だったからだ」と「he, his, she, her」の代名詞の使い方がかなり混線状態である。このようなジェンダーの曖昧さは、喜劇においてズボン役を演じる女優のように、滑稽味を帯びている。舞台の上の男役の女優の滑稽な仕草のように、女性のハミルトンが男性のふりをして他の女性に求愛している様はとても可笑しい。そしてもっと可笑しいのは、上記の未亡人がハミルトンを振ってからわずか数日後に、ジャック・ストロングという名前からして屈強な士官候補生と結婚したことだ。ハミルトンは一生懸命男性を装ったが、所詮女性だから随分弱々しく、頼りなく見えたようだと推察したくなるエピソードである。

ハミルトンが次に言い寄ったのは、前の未亡人よりもっと金持ちの六八歳の未亡人である。十八歳くらいの美しい若者だと思われていたハミルトンは、この未亡人の財産に目をつけて、「礼儀上、口に出すことが禁じられている手段を使って、その老女と結婚し、彼女を騙すこと」(Fielding 10)にする。「礼儀上、口に出すことが禁じられている手段」が一体何なのか気になるところであるが、ここでは具体的に何も書かれていない。しかし、極端な年の差結婚の式の様子は実に荒唐無稽だ。老けた花嫁は若い花婿に合わせて十八歳の乙女が着るようなドレスを身につけ、牧師に多産の祈りを省略しないように言い張った。また、花嫁の曾孫が言うように、花婿にひげがなく、花嫁にひげがあった。

結婚生活は最初の三日間はうまくいった。ある老夫人が花婿は「男というより女のように見えるわ」と話したとき、老花嫁は「あの人はアイルランドで一番いい男よ」(Fielding 11)と答えた。男性との経験が豊富な老花嫁がここまで若い花婿を褒めちぎるくらいだから、花婿は寝室でもよほどうまくふるまっていたのだろう。しかしながら、あるとき「必要なものを持っていなかった」(Fielding 11)ハミルトンは、経験豊かな妻の下で全く受け身のままであった。「必要なもの」とは張形であると推定される。ハミルトンが夫役を果たすためにそれが必要だったということは、彼女の身体が両性具有ではなく、女性の身体であったことを示している。次の夜、好奇心を抑えきれない花嫁の手がついにハミルトンの正体を暴く。「騙されたわ！ 男でない者と結婚しちゃった。私の夫？ 女、女、女よ」(Fielding 12)。ハミルトンはすぐさま金をつかんで逃げ出し、ダートマス行きグリリン・シックスの船に乗って追っ手をかわした。

ハミルトンはそれからトットネスでにせ医者になり、「うぶわずらい」に罹っていた若い女性患者の一人、アイヴィンソーン氏の娘と結婚する。二週間以上怪しまれることなく一緒に暮らしていたが、いつもより深酒をして寝込んでしまったとき、とうとう若い妻に「持っているはずのものを持っていない」(Fielding 14)ことがばれてしまう。それ故、再び逃げ出して、サマセットシャーのウエルズに身を落ち着ける。そしてその地で、メアリ・プライスという十八歳くらいの美しい女性を好きになり、結婚するのである。

三度目の結婚はこれまでの場合とかなり違う。まず、財産目当ての結婚でもなければ、滑稽なほど年が離れている結婚でもない。また、二度目のように年が近くとも、今回では、妻となる女性と出会ってすぐに、ハミルトンは「男性が女性と本当の大恋愛をすることがあるように」(Fielding 15)、恋に落ちている。そしてさらに、ハミルトンの本当の性を垣間見させるようなエピソードが続く。たとえば、ハミルトンはメアリ・プライスの心を掴むために、最初のダンスで、「彼「ハミルトン」の手と舌を使って愛情を示し、彼女「メアリ」の耳にたくさんの甘い言葉をささやき、彼女の手には何度もやわらかいものを押しつけた。」ここでの「やわらかいもの」が何であるのか曖昧である。次の行で「それらは、たくさんのキスなどとともに、この貧しい少女をとて喜ばせ、興奮させた」(Fielding 16)とあるから、唇ではないだろう。しかし、「やわらかいもの」が何であれ、男性的な堅いものと対局にある女性的なものを暗示していることは確かである。

メアリとの二度目のダンスのとき、ハミルトンの胸が衆目に晒されるといふきわどい事件も起こる。「ドクター」(ハミルトン)と別の男性の間でけんかがおこり、「ドクター」の上着が破られて胸があらわになったのである。それは「女性のものとしたら言いようもないほど美しかったけれども、男性の胸とは全く違うものだったので、そこにいた既婚女性たちはくすくす笑い始めた。そして、そのことでドクターの性が疑られることはなかったけれど、蔭でひそひそうわさされた」(Fielding 19)。

ハミルトンにとって幸いなことに、上の事件でメアリの気持ちが変わるといふこともなく、予定どおり結婚式が挙げられ、三ヶ月間何事もなく過ぎた。ところが、「ドクター」がグラストンベリーに往診に行っているとき、たまたまトットネス出身の人に目撃され、アイヴィソーン氏の娘との話を言いふらされる。その噂を伝え聞いたメアリの母親は娘に、事実を隠していたら「大罪」であり、男ではない夫と住んで「彼女の一族と彼女自身の性の名を汚すだろう」(Fielding 20)と言うが、メアリはその噂を信じようとしない。しかし、母親が治安判事に訴えたので、ハミルトンはとうとう逮捕される。そして厳密な調査の結果、ハミルトンが女性であることが判明し、その上、「ドクターの

トランク」からは、「非常に下品で、淫らで外聞の悪い類いのもの」(Fielding 21)、すなわち張形も見つかった。一方、メアリは、裁判において証人と呼ばれたとき、「ドクターの性」について何ら疑わしいことはなかったと証言した。「夫が妻におこなうようにドクターは彼女に振る舞ったか」の質問には、顔を赤らめながら「そうだと思う」(Fielding 22)とすら答えている。こうして、公にも私的にも男として装ったハミルトンは、「虚偽で詐欺の常習行為によって臣下の人々を騙した」(Fielding 21)罪に問われ、有罪判決が出たのである。

興味深いことに、『女性の夫』中の上記の記述は裁判記録と随分違っている。実際には、ハミルトンを通報したのは母親ではなく、メアリ・プライス自身であった。また、証言録取書にはこうある。「前記のように彼女と結婚した自称チャールズ・ハミルトンなる人物は、彼女の体の中に数回入ってきた。それ故、この証人は上述のハミルトンが本物の男性であると信じた。しかし、やがて上述のハミルトンが男性ではなく、女性であると判断する理由を持つに至った」⁸。メアリが夫の本当の性を知った「やがて」というのは、ハミルトンの以前の二人の妻たちのように結婚直後ではなく、二ヶ月という長い時を経てからのことである。

現代のわれわれがこの証言録取書を読むと、素朴な疑問をいだかざるを得ない。そんなにも長い間、メアリは本当に夫の性を疑うことはなかったのだろうか。もしかして、メアリは夫が女であると感づいていたのではないだろうか。この種の素朴な疑問は、「女性の夫」の妻となった女性のセクシュアリティは異性愛志向なのかそれとも同性愛志向なのかという問題と絡んでくる。しかしながら、『女性の夫』において、フィールディングは、巧みにその点を避けるような書き方に専念している。つまり、妻側の女性はすべて異性愛者として提示している。三番目の妻がそれほど長い間夫の本当の性がわからなかったのも、彼女が男性の裸の胸すら全く知らないような女性であったからである。フィールディングはこのように描くことによって妻の側には何ら問題はなかったことを示したと言える。

曖昧なセクシュアリティ

一方、ハミルトンのセクシュアリティの描き方は曖昧である。アン・ジョンソンとの関係において、彼女は明らかに女性として女性を愛していた。しかし、その後の三人の女性たちとの関係においては、妻となる女性を騙すために男性を装い、男性のセクシュアリティを模倣しているだけである。そして、最後のメアリ・プライスとの関係では、前のケースと同じく男性のセクシュアリティを模倣しようとしているけれども、それよりもむしろ好きになった女性と結婚したことが強調されている。しかし、ハミルトンの罪は女性でありながら、公にも私的にも男性として偽装し、他の女性を騙したことであつた。

看過できないことに、『女性の夫』の最後で、フィールディングは、ハミルトンの罪を、詐欺罪というよりも同性愛の罪であると暗示するかのように、「このような不潔で不自然な犯罪」と言い換えている。彼は、ハミルトンの公開鞭打ち刑がそのような犯罪から人を遠ざけるのに十分であると信じてやまない。ところが、彼は次のように言葉を続けていいる。「不自然な愛情は両方の性に等しく不道徳であり、等しく嫌悪すべきものである。いや、しとやかさが女性の特徴であるならば、それを卑しめ、品位を落とすことは女性にとつて最もショッキングで、唾棄すべきことだろう」(Fielding 23)。引用の前半では、セクシュアリティの問題を取り上げ、その不道徳性を指摘しているのに対し、後半では、ジェンダーの逸脱の問題にすり替えているのだ。いや、すり替えというよりも、「女性の夫」のセクシュアリティの問題はジェンダーの問題であつたと言う方が適切かもしれない。

◆◆◆第五章◆◆◆

「スランゴスレンの貴婦人たち」

——ロマンティックな友愛とサフィズム

スランゴスレンの貴婦人たち

アイルランドの貴族出身のエレナー・バトラー（一七三九—一八二九）とセアラ・ポンソンビイ（一七五五—一八三一）は、五〇年以上も一緒に暮らした土地の名前から「スランゴスレンの貴婦人たち」¹として知られている。二人がはじめて出会ったのは一七六八年、アイルランド南東部のキルケニーにおいてである。バトラーはキルケニー城の末娘であり、幼くして両親を亡くしたポンソンビイは同地の寄宿学校に入ったばかりであった。フランスの修道院で教育を受けたことがあるバトラーは、たちまち十六歳年下のポンソンビイの良き指導者であるとともに非常に親しい友人になった。一七七三年にポンソンビイが寄宿学校を出て、ウッドストックにある父方の従姉のレディ・ベティ・ファウンズの邸宅に身を寄せたあとは、二人はひそかに手紙を交わし続け、やがて一緒に住む決心をする。

最初の「駆け落ち」は一七七八年の三月の終わり、男性の衣に身をつつんでこっそりとそれぞれの家を抜け出したが、見つかって連れ戻された。だが、五月のはじめに二人は再び「駆け落ち」を決行し、北ウェールズのスランゴスレンに身を落ち着けることができた。バトラーが三九歳、ポンソンビイが二三歳の時である。そして、プラーズ・ネウイズ（ウェールズ語で「新しい場所」の意）と名づけた田舎家で、片方が亡くなるまで片時も離れることなく一緒に暮らした。

現代では、二人の女性がこのように出奔し、長い間同棲していたら、間違いなくレスビアン・カップルと呼ばれるに違いない。これに対し、約二百年前のスランゴスレンの貴婦人たちの非常に強い結びつきに対し現代的にレスビアンというレッテルを貼っていいかどうかに関しては、これまでかなり論争があった。なぜなら、彼女たちの時代、「サフィスト」(Sapphist)ではないかという疑惑がたまに表にできることがあったけれども、彼女たちの社会的な地位の高さや当代一流の著名人たちとの親交などによって、その疑惑は打ち消されていたからだ。いや、それどころか、二人の女性同士の関係はいわゆる「ロマンティックな友愛」(Romantic Friendship)の理想として見なされ、「清らかで不変の聖なる友情」とか「愛し合っている姉妹よ、その愛はこの地上にあつてなお／時の手の届かぬ高みに登ることを許された」などと詩にうたわれるほど絶賛されていたのである。これを鑑みれば、スランゴスレンの貴婦人たちは確かに現代のレスビアンとは違うと言わざるを得ない。一方、二人の関係に対しサフィストという疑惑が起こったことを重視すれば、彼女たちは現代のレスビアンの先祖といえることができる。いずれにせよ、そこには、女性同性愛についての捉え方、セクシュアリティについての認識、それと関わるジェンダー観などが複雑に関わっている。本章では、十八世紀末から十九世紀はじめのイギリスにおけるスランゴスレンの貴婦人たちに関する同時代のさまざまな言説を通して、女性同性愛をめぐる当時のセクシュアリティとジェンダーの複雑な関係を見てみたい。

ロマンティックな友愛

まず、スランゴスレンの貴婦人たちの関係が社会的規範に反しているとは見なされていなかった例から始めよう。二人の最初の駆け落ちが失敗し、ポンソンビーがレディ・ベティと一緒にウッドストックに馬車で帰るときのことである。友人のゴッダード夫人に宛てた手紙の中で、レディ・ベティは馬車の中でポンソンビーに「この突然の逃避行の原因」を尋ねたところ、次のことがわかったとしている。「彼女はそれは突然ではなかったと言いました。彼女た

ちの計画はイングランドに行つて、家を手に入れ、一緒に住むことでした。誰から聞いても、彼女たちのどちらにも男性は関係していませんでした」(Bell 30; Mavor, *Ladies* 27)。明らかに、レディ・ベティは二人の女性が一緒に住む望みをいだいていたことを何ら問題視していない。それどころか、彼女たちの逃亡に全く男性の関与がなかったことを知って安堵している。同様に、レディ・ベティの既婚の娘タイ夫人もゴッタード夫人宛ての手紙でこう書いた。ポンソビイの「行動は軽率に見えるけれども、深刻な間違いではないと私は確信しています。男の人は全く関係していませんでしたし、ロマンティックな友愛の企て以上のものではないようです」(Bell 27; Mavor, *Ladies* 27-28)。

レディ・ベティとタイ夫人の反応は、当時のセクシュアリティ観がいかに男性中心のものであったかを示している興味深い。ここでは、「間違い」は男女の間だけに起こるのであつて、女同士では何も起こらないと考えられている。男性が絡んでいないのだから、若いポンソビイの貞節はまだ汚されていない。ポンソビイの親族はそのことに一安心し、いらぬ噂が広がらないようにわざわざ友人に知らせたのである。これは、女性同士の親密な関係はどんなに度が過ぎたものであろうともセクシャルな関係であるとは見なされず、社会においてある程度許容されていたことを示しているだろう。

さらに上記の引用で看過できないのは、社会的に許容される女性同士の関係について、タイ夫人が「ロマンティックな友愛」と表現していることであろう。「ロマンティックな友愛」とは十八世紀に流行った用語で、エリザベス・メーヴァーは一九七一年に出版したスランゴスレンの貴婦人たちの伝記の中で、二人の強い結びつきを表すのに性的関係を匂わす「レスビアン」ではなく、この用語を用いた。それ以来、この十八世紀の用語は女性同性愛史家の間で、二〇世紀以前の女性同士のホモセクシュアルではなくホモソーシャルな関係で、かつまた異性愛社会の中で容認されていた関係を指し示すのに盛んに使われてきた。⁴

では、なぜ「ロマンティックな友愛」なのだろうか。一瞥すると、男女の恋愛に似た女性間の友情を意味するように思えるが、実のところ「(男女間の)熱烈な恋愛」を意味する“romantic love”や「(男女間の)恋愛関係・情事」の

意味の“romantic relationship”は今日的用法である。十八世紀中期のサミュエル・ジョンソン（一七〇九—一八四）の辞書では、形容詞の“Romantical”や“Romantick”はむしろ「放縦な、起こりそうもない、間違った、空想的な」を意味した（Samuel Johnson 623）。また、十八世紀末の女性小説家メアリ・ヘイズ（一七五九—一八四三）によれば、“Romantic”は「私たちが理解しないか、模倣したくないものすべてに適用される曖昧な言葉」（Hays, *Emma Courtney* 99）だった。従って、タイ夫人がバトラーとボンソソビの友情に「ロマンティックな」という形容をつけたのは、夫人にとって二人の関係は理解不能で常軌を逸していたからだと推定される。

また、スランゴスレンの貴婦人たちの時代は「ロマン主義運動」（Romantic Movement）や「ロマン主義詩人」（Romantic poets）の時代であるが、その意味で“Romantic”が一般的によく使われるようになったのは、レイモンド・ウィリアムズによれば、十九世紀末からである。だが、このロマン主義時代に、この形容詞はこれまでのどちらかというと侮蔑的な意味から徐々に賞賛的な意味合いを帯びるようになっていく。つまり、規則や因襲的なものからの解放という意味が、芸術や文学の分野のみならず、感情や品行においても発現し、それに呼応して強い感情や真正の感受性という意味もでてきた。だから、「ロマンティック・ヒーロー」は突飛な人物から理想的な人物へと変貌を遂げたのである（Williams 275）。

同様の変貌はスランゴスレンの貴婦人たちの「ロマンティックな友愛」においても見ることができる。二人がスランゴスレンに身を落ち着けて四年後、メアリ・ウオートリ・モンタギューの孫娘レディ・ルイーザ・スチュアートは、「彼女たちのことを最初に聞いたとき、私はすぐロマンティックなものに心を奪われた気になりました」（Mavor, *Ladies* 52）と書いた。この時の「ロマンティック」の使い方はタイ夫人の手紙の頃のようなどちらかというところ肯定的な響きはない。むしろ、一八〇六年に随筆家のジョン・フォスター（一七七〇—一八四三）がロマンティックな人を「人間の本性と本質的に調和しない企てをするか、期待にふける」人であり、「隠世者」のように社会から隠遁し、適切な教育によって「優れた知恵」や「洗練された紳士淑女の教養やたしなみ」（Foster 189-91）を身につけた人として

定義したように、世俗的な社会から田舎への隠棲やその清貧の暮らしぶり、知的な探求などが「ロマンティック」であると思なされたのである。

メーヴアーによれば、「ロマンティックな友愛」の一般的な特徴は、「隠棲、良い仕事、田舎家、園芸、清貧、声をあげて本を読んだり外国語を勉強したりする知的な営み、ゴシック趣味、日記、偏頭痛、感受性、そしていつもではないがしばしば独身の状態」(Mavor, *Ladies* 80)である。また、「ロマンティックな友愛」には「思いやり、誠実、感受性、共有のベッド、媚態、熱情」など今日では女性間の性的な愛着関係だけに見いだせるような要素もある。スラングスレンの貴婦人たちは五〇年以上もの間ベッドを共有し、夫婦のように“my Beloved”とか“my sweet love”の呼び名を使った。二人の関係はまさしく「私たちが現代の用語で結婚と見なすようなもの」(Mavor, *Ladies* vii)だった。それにもかかわらず、メーヴアーがロマンティックな友愛と現代のレスビアニズムの間に一線を画したのは、女性同士の愛着関係がホモセクシャルとして「生物学的に、それ故偏見を持って、定義される前」、すなわち十九世紀末以前には、その関係は「エデン的」(Mavor, *Ladies* xvii)であると思なされていたからだ。⁵

メーヴアーがこのように現代に蘇らせた十八世紀の用語「ロマンティックな友愛」を二〇世紀以前の中・上流階級の女性たちの間に見られる強い愛着関係を表すのに適用し、女性同性愛研究だけでなく歴史・文学研究に多大な影響を与えたのは、リリアン・フェダマンの『男性の愛を超えて』(一九八二)である。フェダマンは、十九世紀末から二〇世紀はじめに性科学者が女性同士の排他的で情熱的な繋がりを「レスビアン」であり「邪悪」であると定義するようになったが、それ以前の時代には、特に十八世紀には、そのような関係はノーマルで性的に無垢であると思なされていた、異性愛が支配的な社会の中で許容されていたところか、かなり流行していたと主張する。たとえば、十八世紀後半の小説には、セアラ・スコット(一七二〇—九五)の『ミレニウム・ホール』(一七六二)をはじめとして、女性間の密接な友情をテーマにしたものが多かったが、実生活上においても、ブルーストッキング・サークルのエリザベス・カーター(一七二七—一八〇六)とキャサリン・トールボット(一七二二—七〇)、同じくカーターとエリザベス・モ

ンタギュー、詩人アンナ・シーワードと養妹のホノーラ・スニード（二七五三―一七八〇）、近代フェミニズムの母メアリ・ウルストンクラフト（二七五九―一九七）と幼なじみのファニー・ブラッド（一七五七―一八五）などはすべてロマンティックな友愛関係を結んでいたという。スランゴスレンの貴婦人たちはその中でモデル的な位置を占め、彼女たちの話は「ロマンティックな友愛の偉大な〈成功の話〉」で、「社会的に許されているだけでなく、望ましい」関係であり、「精神的愛の最も高い理想とロマンティックな友愛の最も清い夢想の体現」として見なされていた、とフェダマンは断言する (Faderman, *Surpassing* 119-43, 120, 122)。

フェダマンは二〇世紀以前の女性同士の愛の関係から完全にセクシュアリティを消去し、男性とは全く関係のない女性中心のものとして提示したが、これは、一九七〇年代から八〇年代のいわゆるレスビアン・フェミニズムに通底する考えである。たとえば、エードリエン・リッチは一九八〇年の論文「強制的な異性愛とレスビアンの存在」で、女性同士の密接な繋がりの世界を提示するのに、「臨床的で狭い家父長制的定義」を連想させる「レスビアニズム」という語を避け、代わりに「レスビアンの存在」と「レスビアン連続体」という概念を提出した。「レスビアンの存在は、レスビアンが歴史的に実在したという事実と私たちが絶えずその存在を創造してゆくということを暗示する」(Rich 648)。一方、「レスビアン連続体」とは、「ただ単に一人の女性が別の女性と性的経験をしたとか、それを意識的に望んだという事実だけではなく、それぞれの女性の人生や歴史を通して、女性に同一化するという経験の領域すべて」(Rich 648)を包括するものである。リッチはまた、女性間の友情や仲間意識や共有される喜びを家父長主義的な狭い定義と区別し、再エロス化しようとした。「私たちがレスビアンの存在を定義するものの範囲を深め、広げるにつれて、私たちは女性の用語でエロティックなものを発見し始める。それは身体のことか一つの部分とか身体そのものに限られないものだ」(Rich 650)。同様な定義は、フェダマンの『男性の愛を超えて』の一九九八年の改訂版の序でもなされている。つまり、女性間の同性愛関係とは「関わり合い、強い感情の交換、性器的であり得るが、必ずしも性器的ではないエロティックな交換」(Faderman, *Surpassing* 19)なのである。

このように女性同性愛を女性に対するセクシャルな欲望ではなく、男性や男性的なものと全く関係のない女性中心的なものとする考え、つまりセクシュアリティの問題ではなく、ジェンダーの問題として捉える考えでは、女性同性愛者をフェミニズムに結びつけることになる。すなわち、女性同性愛を異性愛の支配する家父長制社会に対する批判精神のあらわれと見るのである。ちなみに、スランゴスレンの貴婦人たちの時代は近代的なフェミニズムの黎明期であった。モイラ・ファーガソンがアンソロジー『最初のフェミニストたち』（一九八五）に、スランゴスレンの貴婦人たちの一人バトラーの日記（一九三〇年）に出版された『ハムウッド文書』所収）からの抜粋を収めたのは（Ferguson, *First Feminists* 368-70）、彼女たちの強い絆が家父長制的な権威に対する反抗、抑圧的な異性愛結婚に対する批判として見なせるからに他ならない。

しかしながら、フェダマンのような新しいわゆる「一九〇〇年以前はノー・セックス」学派の考えは、のちに詳述するようにその理論を揺るがえすような新たな資料が発掘されたこともあって、一九九〇年代に入ってから、リサ・ムアやエマ・ドノヒューなどの女性同性愛史家たちによって見直しを迫られている。ムアは、フェダマンが除外したセクシュアリティを「ジェンダーに関係しているがそれとは区別される重要な社会的カテゴリー」（Moore, “Something,” 503）と見なし、十九世紀初頭においては、ロマンティックな友愛を女性の貞淑に結びつけるイデオロギーが、女性のホモセクシュアリティの危険性についての悪意にみちた糾弾、および女性自身による同性へのセクシャルな欲望の意識と衝突しながら共存していたと指摘した。一方、ドノヒューはフェダマンの本に女性間のセクシャルな熱情を示すテキストが排除されていることを批判するだけでなく、「性的でなく、道徳的に気高く、男性の権力にとって脅威でないというロマンティックな友愛の支配的なイデオロギー」と「女性間のそのような繋がりの実現」（Donoghue, *Passions* 109）を区別することが重要であると主張する。「たとえば、無性（asexuality）はヴィクトリア朝の女性の理想だったが、それは特定の女性が実際に無性（sexless）だったとか、そのように自分たちのことを考えていたという」ことを立証するものではない」（Donoghue, *Passions* 20）。ドノヒューはまた、女性間の愛の詩のアンソロジーの序で、

ロマンティックな友愛とは「特定の、性的でない種類の愛ではなくて、愛を表現するための文学的なコンヴェンション」(Donoghue, *Poems xxvii*)として捉えることができる」と述べている。

このような女性同性愛史研究の進展を念頭に置きつつ、次のセクションでは、スランゴスレンの貴婦人たちの理想的なイメージを作り出すのに貢献したテキストを見てみよう。

モリーへのヒソカ

スランゴスレンの貴婦人たちが「ロマンティック」なら、北ウェールズの地自体も「ロマンティックな風景」で有名だった (Watson 87-90)。ウェールズの博物学者トマス・ペナント (一七二六—九八) は『ウェールズ旅行記』(一七八四)において、スランゴスレンの溪谷について、「ここでは、ピクチャレスクの風景、感傷的な風景、あるいはロマンティックな風景にうるさい愛好家が自分の好みに思うがまま耽溺することができる」(Penant 1: 379)と称賛している。スランゴスレンの貴婦人たちは都会から遠く離れたロマンティックな場所に隠遁し、庭園や菜園造りにいそしむなど自然と交わった生活を送り、ゴシック趣味でプラース・ネウイズの壁面や柱や天井のありとあらゆるところにオータの浮彫り細工を施し、そして読書や風鳴琴を楽しんだ。こうした生活をおくる二人の噂は、一緒に住んで二、三年後にはひろまり、観光スポットとして旅行書にも記載されるほどだった (*Collection of Towns 110; Skrine 241*)。彼女らのもとには政治家のウエリントン公爵 (一七六九—一八五二)、詩人のウィリアム・ワーズワス (一七七〇—一八五〇)、詩人のロバート・サウジー (一七七四—一八四三)、陶器製造業者のジョサイア・ウエッジウッド (一七三〇—九五)、政治家・思想家のエドマンド・バーク (一七二九—九七)、ヘスター・リンチ・スレール・ピオッツィ、アンナ・シーワード、スコットランドの詩人・作家サー・ウォルター・スコット (一七七二—一八三二)、小説家のレディ・キャロライン・ラム (一七八五—一八二八) など当代の名士たちが続々と表敬訪問し、彼女たちの隠棲や友情を賞賛する言葉を

残している。ここでは、「エイヴォンの白鳥」たるシェイクスピアに比べられて「リッチフィールドの白鳥」として知られ、当時最も有名な女性詩人の一人だったシーワードの詩を取り上げよう。

前にも触れたように、生涯独身であったシーワードは九歳年下の養妹ホノーラ・スニードとロマンティックな友愛関係にあったことが指摘されている。また、その他にベネロツペ・ウエストン、モンペツソン嬢、エリザベス・コーンウォリスなどの女性たちとの関係も知られている。従って、シーワードが他の誰よりも強くスランゴスレンの貴婦人たちに関心をいだいたのは当然のことかもしれない。彼女がスランゴスレンのプラーズ・ネウイズを訪問したのは一七九五年の夏、四八歳のときである。そのときバトラーは五六歳、ボンソンビイは四〇歳だった。シーワードはその翌年に彼女たちに敬意を表する詩「スランゴスレン溪谷」を発表し、スランゴスレン溪谷にまつわる歴史上の出来事や人々の描写のあと、次のように二人の「清らかで不変の聖なる友情」や、親や親族などの「厳格な権威者」の説得に屈せずにアイルランドの地を逃れてきたことを褒めたたえた。

Now with a vestal lustre glows the Vale,

Thine, sacred Friendship, permanent as pure;

In vain the stern authorities assai,

In vain persuasion spreads her silken lure,

High-born, and high-endow'd, the peerless twain,

Pant for coy Nature's charms 'mid silent dale, and plain. ("Langollen Vale," lines 85-90)

今や、溪谷は貞潔な光りで輝く。／あなた方の清らかで不変の聖なる友情。／厳格な権威者はいたずらに襲い、／説得の言葉も空しく絹のおとりを広げる。／高貴な生まれで天分豊かな比類なきお二人は、／静かな谷間と平原で人目につかない自然の魅力を熱望する。

続いて、彼女たちの住まいのプラス・ネウイズとその周囲を囲われた楽園として描く。

Then rose the fairy palace of the Vale,

Then bloom'd around it the Arcadian bowers;

Screen'd from the storms of Winter, cold and pale,

Screen'd from the fervours of the sultry hours,

Circling the lawny crescent, soon they rose,

To letter'd ease devote, and Friendship's blest repose. ("Langollen Vale," lines 97-102)

それから溪谷の妖精の宮殿がそびえ立ち、次にその周りにアルカディアの木陰が突然現れた。寒くて薄暗い冬の嵐から護られ、／蒸し暑い季節の灼熱からも護られ、／芝生の三日月形の路を回るうちに、やがて彼女たちは／教養ある生活の安楽さと友情の神聖な休息に身を捧げた。

「アルカディアの木陰」は自然の脅威から二人を守っているだけではない。家父長制、結婚制度、異性愛、男社会が代表する都会や都会的なものなどの脅威から守っていると見えるだろう。ジョン・ミルトン（二六〇八―七四）のエデンの園は不平等な関係にある男女の楽園であったが、スランゴスレンの貴婦人たちの住処は女性を抑圧する男性や男性的なものの支配が及ばないもう一つのエデンの園である。シーワードはこのイメージを繰り返し使った。たとえば、「ボンソンビ嬢へ」という詩の最後では次のように、もう一つのエデンの園における「高潔な喜び」を描く。

By firmness won, by constancy secured,

Ye nobler pleasures, be ye long their meed,

Theirs, who, each meteor vanity abjured,

決意の固さで獲得され、貞節によってもたらされた、／汝ら高潔な喜びよ。汝らが久しく彼女たちの報酬に、／彼女たちのものに、なりますように。彼女たちは、流星のような虚栄を棄てて、／エデンの園で天使の暮らしを送っている。

また手紙の中でも、スランゴスレン渓谷を「小エーリュシオン」、「小エデン」、「エデンのような地域」として何度も言及したり、あるいはシェイクスピアの『お気に召すまま』（一六二三）のアーデンの森になぞらえて「ウエールズのアーデン」、バトラーとポンソンビイを『お気に召すまま』の二人の女友だち（変装してアーデンの森に向かい、そこで家を買ひ、一緒に暮らした従姉妹同士）になぞらえて「ロザリンドとシーリア」と呼んだ (Mavor, *Year* 196, 120, 198, 52)。

シーワードはこのようにスランゴスレンの貴婦人たちのエデン的な愛を称えたが、ここで留意すべきは、地上楽園のイメージや無垢な愛の強調は、伝統的に同性愛文学でよく使われてきたメタファーであったということだ。パーン・R・S・フォンによれば、ウエルギリウスの牧歌以来の（男性の）同性愛文学の伝統では、「幸福な谷、神聖な島、牧歌的な隠棲、もしくは緑の森の要塞」(Fon 13) などアルカディア的な理想郷は、男性同性愛者たちの避難所として使われてきた。そうした場所においてだけ、男性同性愛者たちはアウトローとしての社会的立場から自由になることができ、罰を受けることなく同性愛であることを明かすことができるのである。フォンはまた、同性愛文学の伝統では「ある種の精神的な価値や神話」、すなわち「同性愛は異性愛よりも優れていて、善や美の理解に達する神から授けられた手段である」(Fon 13) というメタファーも広く使われてきたと言う。ジョン・ボズウェルも、プラトンの『饗宴』で異性愛関係や感情は「低俗的」、同性愛関係や感情は「天上的」として特徴づけられていることを指摘し、この対照的な見方が後世の文学に多大な影響を与えたとしている (Boswell 74)。

フォンやボズウェルは男性同性愛文学についてだけ言及しているが、同様なメタファーは女性間のロマンティック

な友愛の文学においても散見する。たとえば、シャーロット・マッカーシー（生没年不明）の「満足、友へ」（二七四五）やデヴォンシア公爵夫人ことジョージアナ・スペンサー（一七五七―一八〇六）の「レディ・エリザベス・フォスターへ」（二七九六作）のような詩は、理想的な牧歌的な隠棲の中で二人の女性の至福を描いている（Donoghue, *Poems* xxxix）。また、十七世紀末のキャサリン・フィリップスは多くの詩で、女性への友情や精神的な絆やプラトニックな関係を強調し、女性の友情を「血縁もしくは結婚の絆よりももっと高潔、／なぜならもっと自由だから」（Katherine Philips, “A Friend,” lines 13-14）⁸と唱えた。スランゴスレンの貴婦人たちに関するシーワードの詩も、こうした文学伝統に則していると言えよう。

ただし、シーワードの「スランゴスレン溪谷」の最後の二連は、独自の境地を開く。次の引用は同詩の最後の三連からである。スランゴスレンの貴婦人たちに対する最大限の讃辞から、一転して詩人の望みへ移る様を見てみよう。

This gentle pair no glooms of thought infest,
Nor Bigotry, nor Envy's sullen gleam
Shed withering influence on the effort blest,
Which most should win the other's dear esteem,
By added knowledge, by endowment high,
By Charity's warm boon, and Pity's soothing sigh.
Then how should Summer-day or Winter-night,
Seem long to them who thus can wing their hours!
O! ne'er may pain, or sorrow's cruel blight,
Breathe the dark mildew thro' these lovely bowers,
But lengthen'd life subside in soft decay,

Illumed by rising Hope, and Faith's pervading ray.

May one kind ice-bolt, from the mortal stores,

Arrest each vital current as it flows,

That no sad course of desolated hours

Here vainly nurse the unsubsting woes!

While all who honour Virtue, gently mourn

LANGCOLLEN'S vanish'd Pair, and wreath their sacred urn. ("Langcollen Vale," lines 132-49)

この高貴なお二人には、どんな憂鬱な考えも群がらない。／どんな偏屈な考えも、嫉妬の陰気な微光も、／神聖な努力の上に生気を失わせるような影響力を及ぼさない。／その努力はたいいていの人から他の人からの熱烈な評価を勝ち得るようなものだ、／蓄積された知識によつて、高い天賦の才能によつて、／そして慈愛の暖かい賜物と憐憫の慰めるため息によつて。／それから、このように自分たちの時を駆けることができるお二人にとつて、／夏の日中や冬の夜はどれほどの長さに思えるのであろうか！／おお！ 苦痛も、悲しみの残酷な暗い影も、／いつまでもこれらの美しいあずまやに黒カビを生やしませんように。／延びた寿命が、増大する希望と信仰の広がる光りに照らされながら、／ゆるやかに衰えてゆきますように。／必滅の蓄えからの親切な水の稲妻の一撃が、／どちらの生命の流れも流れているときに止めてくれますように。／どんな侘びしい時間の悲しい歩みも、／ここでは静まらない悲痛をいたずらに心にいだきませんように！／美德を崇めるすべての人々が／スランゴスレンの姿を消した二人を静かに悼み、神聖な骨壺を花輪で飾る間は。

詩人は、これまでエデンの園におけるスランゴスレンの貴婦人たちの生活を称えてきたのに、突然、最後の二連に至つて、時間の世界に読者を投げ込む。そして、二人同時の死を願い、死後のヴィジョンまでも思い描く。シーワー

ドがこのように二人同時の死を願うのは、明らかに彼女自身がホノーラを早くに失った経験があったからだ。一七七三年にホノーラが結婚し、さらにその七年後に突然亡くなったため、シーワードは深い喪失感から立ち直ることができず、彼女への愛や彼女を失った悲しみをうたった詩を数多く書き残している。また、ホノーラの死後ずいぶんあとに書かれた手紙の中で、彼女と一緒に過ごしていたとき（一七六六年から一七七二年まで）のリッチフィールドは「エデンの園のような風景だった」(Faderman, *Surpassing* 133)と振り返った。シーワードにとって、ホノーラと過ごした楽園はすでに失われていた。それ故、スランゴスレンの楽園を羨望のままなぞしで見るともうなすける。そして、愛する者に先立たれた苦悩や苦痛を知っているからこそ、スランゴスレンの貴婦人たちには一緒に最期を迎えてほしかったのだろう。しかしながら、うがった見方をすれば、シーワードはこの最終連で、女性同士の関係は単に精神的な結びつきだけではなく、身体的な結びつきも重要であると暗示しているように思える。

それでは、スランゴスレンの貴婦人たちは自分たちのことをどのように認識していただろうか。ポンソンビイ自身が一七八九年に書いた短詩を見てみよう。

By vulgar Eros long misled,
I call'd thee Tyrant, mighty Love!
With idle fear my fancy fled
Nor e'en thy pleasures wish'd to prove.

Condemn'd at leaugh to wear thy chains,
Trembling I felt and ow'd thy might;
But soon I found my fears were vain,
Soon hugged my chain, and found it light. (Ponsonby, "Song")⁹

低俗な官能愛に惑わされて、／力強い愛よ！ 私はあなたを暴君と呼んでいた。／根拠もなく恐れて、私の想像は逃げ出し、／あなたの喜びを試そうともしなかった。／ついにあなたの鎖を身につける運命になって、／私は身が震えるのを覚え、あなたの力のせいだとした。／しかし、すぐに私の恐れは杞憂であることがわかり、／すぐに鎖を抱きしめ、それが軽いものだとわかった。

フエダマンはこの詩を、ポンソンビイが（女性間の）「セクシャルな愛とロマンティックな愛を区別し、自分の感情を後者と同一視していた」(Faderman, *Chloe* 34) 証拠であると解釈した。しかし、前述の同性愛文学伝統のメタファーから判断すれば、同詩はむしろドノヒューやルース・ヴァニタの読みのように、異性間の「低俗な」愛と女性間の愛の対比を描いたものとして捉えた方がよいだろう (Donoghue, *Poems* xxviii; Vanita 117)。ポンソンビイは女性間の「力強い愛」の虜になったことを知る。それまでは、彼女はそれが「低俗な」異性愛と同じだと思い、恐れていた。だが、異性愛が女性を抑圧し、縛りつけ、恐怖を与えるものに対し、女性間の愛の「鎖」は軽く、女性をむしろ解放し、喜びを与えるものであるとわかったのである。ポンソンビイはこのようにバトラーとの愛を、異性愛のようにセクシャルとしては考えていなかった。だが、異性愛とは違うという認識があったことは確かである。

女性同士の異常な愛情

スランゴスレンの貴婦人たちの時代、彼女たちを礼賛する声は大きかったが、二人の關係に疑いの目を向ける者が全くいなかったというわけではない。一七九〇年七月二四日付けのウェールズの地方新聞『ジェネラル・イヴニング・ポスト』は、「女性同士の異常な愛情」という見出しで、二人のことを記事にした。少し長いが全文を引用してみよう。

バトラー嬢とボンソンビイ嬢は上流社会からウェールズの某溪谷へと隠遁した。

二人の貴婦人ともアイルランドの偉大な一族の娘で、それぞれの名前を保持している。

オーモンド一族のバトラー嬢は何回か結婚の申し出をされたが、すべて断った。彼女の特別な友人であり話し相手でもあるボンソンビイ嬢がどの結婚に対しても妨げになつたと推定されて、二人を引き離すのがよいと考えられ、バトラー嬢は監禁された。

しかし、二人の貴婦人は一緒に駆け落ちを目論んだ。だが、すぐに捕まって、それぞれの親族のもとに連れ戻された。何度もバトラー嬢を結婚させようという試みがなされた。だが、どんなに勧められても誰とも結婚しない、と彼女が再三再四まじめに断言するので、両親はそれ以上うるさく縁談を持ち込まなくなった。

数ヶ月もたたないうちに、貴婦人たちは新たな駆け落ちを計画し、実行した。それぞれがわずかばかりの金を持ち、収入も少しあったので、隠棲場所はバトラー家の女召使いにだけ打ち明け、その場所に関して秘密を守るよう誓わせた。女召使いが言うことができるのは、彼女たちは元気で安全だから、友人たちはこれ以上尋ねることなく、年金を繰り越しておいてほしい、ということだった。その年金は現在まで繰り越されているだけでなく、増えている。

上述の美しい溪谷は彼女たちが居を定めた場所である。彼女たちは何年もそこに住んでいて、近隣の村人たちに溪谷の貴婦人たちの呼び名だけで知られている。

一ヶ月ほど前のある夜、この村の宿屋に三人の貴婦人と一人の紳士が立ち寄り、空気がなかったため、村人たちは女隠世者たちに外国の見知らぬ人々のための宿泊を依頼した。これは難なく許可された——とその時、見よ！ それらの外国人は彼女たちの親族だったのだ！ しかし、どんなに懇願しても貴婦人たちをそのすてきな隠遁の地から去らせることはできなかった。

バトラー嬢は背が高く、男性的である。彼女はいつも乗馬服を身につけ、玄関でスポーツツマンのような仕草で帽子を掛け、今もペティコートを着ているのを除いては、どこから見ても若い男性のように見える。

その反対に、ボンソンビイ嬢は優雅で女らしく、清らかで美しい。一七八八年度のステイル次官の年金リストには、エリノー「ママ」・バトラーとセアラ・ボンソンビイの名前があり、それぞれ五〇ポンドの年金である。多くの理由から、これらの年金受給者は溪谷の貴婦人たちであると思われる。その上、彼女たちの秘密を打ち明けられた女性

が二人にアイルランドの年金を送り続けている。

彼女たちの生活はこぎれいで、上品で、趣味がよい。彼女たちの召使いは二人の女性だけである。

ボンソンビイ嬢は家の中の義務と装飾をおこない、バトラー嬢は庭園やその他の地所を管理している。

(Qtd. in *Mavor, Ladies* 73-74)

バトラーとボンソンビイは上記の記事に憤慨し、名誉棄損の訴えを起こすべきかエドモンド・パークに相談した。しかし、パークは訴訟を勧めず、代わりに「名誉、友情、道義、思想の尊厳を尊重する仕方を知っているすべての人から尊敬されるにふさわしい美德を持っているが故に、中傷の暴力を受けるということで、慰めとしなければなりません」(*Mavor, Year 136*)と助言した。

では、この記事はどのように彼女たちを中傷しているのだろうか。まず、目につくのは「女性同士の異常な愛情」というタイトルをつけているけれども、彼女たちの関係に対し、「サフィスト」とか「トミー」など女性同性愛者を意味する当時の用語を用いて批判していないことであろう。その代わりに、彼女たちが独身の状態を自ら選択したこと、女性同士の特別な友情、乗馬服のような男性的な服装などについて詳しく書く。それらの特徴は、一つ一つを見たら、何ら罪にも問題にもならないものばかりだ。だが、総体として見てみると、二人の愛の異常性が醸し出される。

この記事はまた事実を歪めてまでも、二人の異常さを強調する。メーヴァーによれば、当時のバトラーは「若い男性」に見えるどころか、背が低く、小太りで、五一歳だったから (*Mavor, Ladies* 75) この記事を書いた記者が実際に二人に会ったことがないことは明らかである。にもかかわらず、記事はバトラーの服装や雰囲気を男性的に、ボンソンビイの様子を女性的に描き、それぞれの仕事として家の外での男性的な役割と家の中の女性的な役割を割り当てた。二人の女性はあたかも異性愛者同士の結婚生活を模倣しているかのようだ。こうした描写は、十八世紀後半に流行った「女性の夫」の話のように、二人の女性が一緒に住むならば、片方が男性の役割を担っていることを前提に

していると言える。しかも、実際のところ、メアリ・イーストのような例外的な「女性の夫」の事例¹⁰のように、お互い納得の上での同居であるのだから、尋常ならざる関係だ。実際のバトラーはイーストと違って女性であることを隠したことがなかったけれども、上記のような男性化の描写には、男性に取って代わる女性、すなわちジェンダーの境界を越えた女性に対する恐怖心や、女性同士の関係を異性愛のライバルとして危険視する姿勢を垣間見ることができ

る。

興味深いことに、『ジェネラル・イヴニング・ポスト』の記事が出た翌月には、ロンドンのゴシップ雑誌として有名な『都市と田園』が同じ表題でほとんど同じ内容の記事を掲載した。これは二人のゴシップが瞬く間に広がったことを示しているだろう。雑誌記事が地方新聞記事と違うのは、冒頭部分である。地方新聞では、「バトラー嬢とポンソンビー嬢は上流社会からウェールズの某渓谷へと隠遁した」とあるのが、ゴシップ雑誌では、「今や男性の社会からウェールズの某渓谷の荒地に隠遁したバトラー嬢とポンソンビー嬢は、男性に対し妙な嫌悪をいだき、事あるごとに男性を避けている」(“Extraordinary Female Affection,” *The Town and Country Magazine* 22 [August 1790]: 363) に直されている。ゴシップ雑誌は、地方新聞よりもっと明確に、二人の独身女性の男嫌いを明記していることに注目したい。

サフィスト

『ジェネラル・イヴニング・ポスト』や『都市と田園』がスランゴスレンの貴婦人たちを「サフィスト」のような女性同性愛者を意味する言葉を用いて中傷しなかったのは、新聞・雑誌という公のメディアでそれを公然と口に出すのは憚られたからだろうか。

しかし、私的な日記の中で同時代のサフィストたちの存在を記し、明らかに批判していたピオツィ夫人にとっ

て、女性の独身主義と女性同士の長期間の同居は、「サフィズム」を疑るに足る証拠だった。彼女は、一七九五年十二月九日の日記で、「二人の女性があまり長く一緒に暮らしているときにはいつでも」「性的な関係が「不可能であることを疑るようになってきている」時代になったと指摘し、注の中で、そのような関係は「サフィズム」であると明記した。ただし、同時に、自分自身としては女性間の性的関係が「不可能であると思っている」(Pozzi, *Thyridiana* 2: 949) と付け加えた。¹¹

ピオッツィ夫人の中で的女性間の性的関係の可能性を疑る気持ちと容認したい気持ちは、親しい友人・隣人として交流のあったスランゴスレンの貴婦人たちに対する相反する言説に現れている。つまり、手紙の中では、「美しくて気高い隠遁者たち」(一七九八年十一月十一日)とか「スランゴスレン渓谷の魅力的な田舎屋の住人たち」(一八〇〇年三月九日)として言及するだけで、二人の関係をいささかも怪しんでいない(Pozzi, *Intimate Letters* 168, 185)。スランゴスレンの貴婦人たちの無垢な関係を信じるフェダマンは、これに注目し、ピオッツィ夫人は汚れた社会から田舎に隠遁し、日々自然と交わる貴婦人たちと、フランスの宮廷やロンドンやパースのような都会に巣くっている世俗的なサフィストたちの間に明確な線を引いていた、と指摘する(Faderman, *Surpassing* 125)。ところが、このような論議はその後発見された新たな資料によって覆されることになった。一九四二年に出版された『スレーリアナ』に収められていた日記の他に、リズ・スタンリーが一九九二年の論文で指摘するように、マンチェスター大学図書館に手書きの日記が保管されていたのである。ピオッツィ夫人はその中で、スランゴスレンの貴婦人たちを「忌まわしきサフィスト」と呼び、だからこそ、さまざまな女性文筆家たちは男性の連れがいなときに彼女たちのところで一晚滞在したくないと思っているのだ、と書いていた(Stanley 163)。彼女は手紙の中ではいささかも触れていなかったが、日記の中ではひそかに二人のサフィズムを疑っていたのである。

プラトニックでない愛

ピオッツィ夫人の未刊行の日記よりもさらに衝撃的な日記も発掘されている。西ヨークシャー州ハリファックス生まれのジェントリー階級の独身女性アン・リスター（一七九二—一八四〇）の日記である。リスターは、兄が一八一三年に亡くなったため、かわりにシブデン・ホルルの推定相続人になり、一八一五年から伯父と叔母（二人とも独身）と一緒にそこに住み始めた。一八二六年の伯父の死後は、叔母とその地所の共同所有者になり、経済的に独立した。当時の女性としては並はずれて学識があり、英文学だけでなく、ギリシャ語、ラテン語、フランス語、数学、幾何学、歴史にも造詣が深かった。またヨーロッパ各国を訪れてはその地の上流階級の人々と交流をもち、ロシアを旅行している最中に四九歳の生涯を終えた。

このようなリスターが長い十八世紀のセクシュアリティ研究でにわか注目されるようになったのは、彼女が多くの女性たちとつきあい、彼女らとの熱烈な関係を日記に逐一克明に綴っていたからだ。彼女の日記の存在は二百年近く知られていなかったが、一九八四年になってハリファックス在住のヘレナ・ホイットブレッドによって発見され、リスターの癖のある筆記文字や綴りや暗号的表現などの解説がなされた。そして、一八一七年から一八二四年の間の日記が『私は私自身の心がわかつている』（一九八八）のタイトルで、一八二四年から一八二六年の間の日記が『愛以外の司祭はいない』（一九九二）のタイトルで出版された。¹²

リスターの日記の発見は、二〇世紀以前には女性間の愛はセクシャルなものではなかったというフェダマンの説を一蹴するものであった。彼女自身が他の女性たちとのセクシャルな関係を暗号で書き残していたからだ。たとえば、「キス」はオルガスムスの婉曲的な表現だった。少し例を挙げてみよう。

私たちは昨夜中ずっと話していて、起きあがる前の三〇分ほど目を閉じてうたた寝したただけだった。M—のところへ

行ったが、良いキスをするのができなかった。彼女が私の妻であると私が本当に感じるまで約束するのを断った。二度目に彼女のところへ行った。前よりうまくできた……。(一八二二年七月二三日) (Lister, *I Know* 159)

昨夜は二つのキス。私たちが眠る前に、一つのキスのほとんどすぐあとにもう一つ……前よりよく感じたけど、昨夜はすごくショックなほど遅かったので、私はひどく泣いたが、Mーに気づかれないようにそれを抑えた。

(一八二二年七月十三日) (Lister, *I Know* 194)

「Mー」とは、リスターが一八二二年以来最も長く情熱的に愛していたマリアンヌことメアリ・ロートン(旧姓ベルクーム)という女性のことである。二人の関係はマリアンヌが一八一六年に結婚しても終わることなく、彼女の夫の目を盗んで何年も続いていた。その間にリスターは他の女性ともつきあった。一八二二年七月二三日の日記によると、マリアンヌは夫から性病をうつされ、その結果リスターにも感染したらしいが、一八二二年十二月十四日付けの日記には、リスターの別の恋人、「タイプ」と呼ばれる六歳年上のイザベラ・ノークリフへの感染の恐れが記される。「昨夜、私は非常に良いキスを持った。タイプはそれほど良いキスを持たなかった。……私はいつもタイプに感染させるのではないかと恐れてきた。あの分泌物は一体性病なのかどうか怪しいと思う」(Lister, *I Know* 230)。

リスターはまた自分自身のセクシュアリティが同性志向であることを自覚していた。一八二一年一月二九日付けの彼女の日記にはこうある。

どんな男性の賞賛の跡も残らないように、モンタギュー氏の送別の詩を燃やした。それは私にはふさわしくない。私は女性だけを愛しているし、このように彼女たちからも愛されて、彼女たち以外の他の人の愛には胸がむかむかす⁹⁰。(Lister, *I Know* 145)

リスターがスランゴスレンの貴婦人たちを表敬訪問したのは、その翌年である。マリアンヌはその訪問の話を開

き、リスターに「あなたは彼女たちの関係がいつもプラトニックと思っているのかどうか、純粹な友情がこんなにも称揚されているのを信じているのかどうか、教えてください」と手紙に書いた。それに対して、リスターはこう一八二二年八月三日付けの日記に書く。

それは確かにプラトニックでないと思わざるを得ない。神よ、許したまえ。だけど私は自分の中をのぞいてみて、疑惑をいだいている。私たちの性質の弱さを感じるし、このような愛着が友情よりももっと優しい何かによって結ばれていないと、断言する気にはなれない。(Lister; *I Know* 210)

自らのセクシヤルな恋愛歴を赤裸々に記していたリスターは、ロマンティックな友愛のカップルとして名高い二人が「プラトニックでない」関係だと言い切った。自分のセクシユアリティを十全に認識し、かつまたそれを隠す術を心得た女性の言葉として、看過できない発言である。

新しいジェンダー観と女性同性愛

ランドルフ・トランバックは、リスターの日記が出版されたあとの一九九一年に、「彼女たち「スランゴスレンの貴婦人たち」は明らかに自分たちの関係をセクシヤルであるとは認識していなかった。その関係がセクシヤルであるとも提示しなかった。それ故、彼女たちを知っている者たちは二人の関係をセクシヤルとして見なさなかった」(Trumbach, "London's Sapphists", 121)と指摘している。確かに、スランゴスレンの貴婦人たちの同時代人の大多数がトランバックの指摘通りの反応だったろう。何しろ、ティム・ヒッチコックがいみじくもイギリスの十八世紀を「性革命」(Hitchcock 2)の時代と名づけたように、この世紀の間に、セクシユアリティや生殖や身体に対する見方が急激

に変容し、世紀の終わりまでには男性中心主義的で異性愛的な文化が出現していたからだ。たとえば、トマス・ラカーによれば、啓蒙主義以前の身体観は、二世紀のギリシャの医学者ガレノスの見方に基づく「一つの性／身体モデル」で、性差は種類ではなく程度の問題で、男性と女性の生殖器は本来同じものであり、男の場合生殖器が身体の外にあり、女の場合中にあるというだけのほんのちよっとした違いであると見なしていた。しかし、啓蒙主義以降は、性差の程度ではなく種類を問題とする「二つの性／身体モデル」へ移行していき、女性のセクシュアリティに対する見方も本来能動的で活動的なものから、受動的なものへと変化した。以前には女性のオルガスムスは（男性のと同じように）受胎に必要不可欠なものと考えられていたが、今では受胎には男性のオルガスムスだけが必要で、女性のは無関係であると見なされるようになった(Laqueur 3-8, 98-103, 149-63)。ルース・ペリーはラカーのいうこうした変化を「女性の脱性化」(Perry, "Colonizing," 116)と呼び、十八世紀はじめの淫らで、好色な「性的な存在」としての女性のイメージが、世紀の終わりまでには、貞淑で性的欲望のない、慈愛にあふれた「母性的な存在」として再定義されるようになったと論じる。こうして、スランゴスレンの貴婦人たちの時代には、女性の「本来の姿」は慎み深く、繊細で、母性的で、貞淑で、従順で、男性の性的欲望の受動的な対象であるという考えが支配的なイデオロギーになっていたのである。スランゴスレンの貴婦人たちが多くの同時代人からセクシャルでないロマンティックな友愛の理想的なカップルとして、社会的に排除されることなく礼賛されたのは、彼女たちが結局男性と何の関わりもなかったし、女性同士どんなに親密でも妊娠という外的な証拠を何ももたらさなかったが故に、性的欲望も熱情もない女性という当時の女性の美德の枠内で受け入れられたからだと言える。

しかしながら、新しいジェンダー観が支配するようになった「強制的異性愛」¹⁵社会では、異性間の挿入的な性行為だけが「自然」であり、それから逸脱した性行為はすべて「不自然」と見なされた。『ジェネラル・イヴニング・ポスト』や『都市と田園』の記者、ピオッツイ夫人、そしてリスターがスランゴスレンの貴婦人たちの「不自然な」関係に疑いの目を向けたのを、少数意見として簡単に切り捨てて諷刺にはいかないだろう。リスターは明らかに自分と

他の女性とのセクシャルな関係を把握していたが、スランゴスレンの貴婦人たちは自身は異性間の行為だけをセクシャルとして見なし、自分たちの関係もそうであるという認識はなかったかもしれない。だが、セクシャルとして認識していたか否かの問題は別にして、ヒッチコックが次のようにロマン主義時代の女性同性愛の特性をまとめていたことは注目に値する。「多くの人々にとつて、ロマンティックな友愛はただ単に肉体的な愛のパブリックな顔にすぎなかった——アン・リスターの女性関係は、彼女の日記がなかったら、まさしく〈ロマンティックな友愛〉のように見えただろう」(Hitchcock 87)。つまり、ロマンティックな友愛とサフィズムはコインの表裏の関係だということである。

奇妙な外観

実のところ、スランゴスレンの貴婦人たちのロマンティックな友愛という表向きの顔にも、サフィズムではないかと疑わせるような目立った特徴が一つあった。彼女たちは、サフィストとして悪名高かったダマー夫人と同じような服装をしていたのである。風景画家のジョゼフ・ファリングトン(一七四七—一八二二)は一七八九年四月十九日の日記の中で、「ダマー夫人の風変わりな目立っている。彼女は男性の帽子をかぶり、男性の靴をはき、男性のような上着も着ていた——こうして彼女はステッキを持って野原を歩き回っている」(Norton, *headnote, Sapphick Epistle* 356)と書いている。しかし、ダマー夫人は下にはズボンではなくスカートをはいていたらしい。トランバックは、「こうした男性的な上着と女性的なスカートという「両性具有的なファッション」は明らかに「女性たちを惹きつけるため」だったと論じている(Trumbach, "London's Sapphists" 132, 134)。

一方、『ジェネラル・イヴニング・ポスト』ではバトラーだけが乗馬服を着ていることになっているが、実際にはポンソンビーも同じものを着ていた。二人は肖像画を描かれるのを好まなかったもので、ほとんど残っていない。生前の唯一の肖像画は、メアリ・パーカー、のちのレディ・レイントン(一七九九—一八六四)が一八二八年に二人に内緒で

鉛筆でスケッチしたものである。このスケッチは二人の死後の一八八七年頃に、リチャード・ジェイムズ・レイン（一八〇〇―七二）によって水彩画とリトグラフ（図版11）にされた。この肖像画では、髪の毛を短く刈り込んだ二人はどうみても男性の老人のように見える。もう一つの肖像画はジェイムズ・ヘンリー・リンチ（一八六八没）によるリトグラフ（図版12）で、これも一八八七年頃に描かれたものである。ここでは、二人とも上は乗馬服に、下はスカートといういでたちで、山高帽をかぶっている。

彼女らの異様な外見についての驚きの声は同時代の人々からも聞こえてくる。俳優のチャールズ・マシューズ（一七七六―一八三五）は一八二〇年九月四日付けの妻宛ての手紙で、自分の舞台を観にきてくれた二人の印象を次のように記している。

私はお二人に一度も会ったことがないけれども、すぐに彼女たちだとわかりました。彼女たちが座っているとき、男性と区別できる点は一つとしてありません。刈り込んだ髪や髪粉、糊のきいた首巻、彼女たちがいつも、晩餐会でも、着ている男性用コートのように作られた乗馬服の上着、そしていつもの黒ビバー毛皮製の男性用山高帽。彼女たちはまさに尊敬すべき老齢の牧師のような様子でした。（*Mavor, Year 178*）

一八二五年八月二四日ウォルター・スコットに付き添ってブラウス・ネウイズを訪れたジョン・ロックハート（一七九四―一八五四）も、妻宛ての手紙で、「濃紺の乗馬服、巨大な靴、そして男の帽子、スカートをたくりあげている」二人は、「老水夫」のようだと書いている。しかし、同時に、彼は「村の保護天使」である二人の老女をこんなふうにかわうのはよくないと、反省した（*Lockett 4: 308-10*）。また、一八二四年九月二日に表敬訪問したワーズワスは、一八二四年に出版されたソネット「レディ・エレナー・バトラーとボンソンビー嬢に寄せて。スランゴスレン、ブラウス・ネウイズの地にて制作」では、ウェールズ語の「スランゴスレン溪谷」（*Glyn Cyfallgaroch*）を英語の「友情の溪谷」（*Vale of Friendship*）に置き換え、「愛し合っている姉妹よ、その愛はこの地上にあつてなお／時の手の届か



図版 12
ジェイムズ・ヘンリー・リンチのリトグラフ「スランゴスレンの貴婦人たち」(c. 1887)。ロンドン・ナショナル・ポートレート・ギャラリー、NPG D14047。



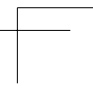
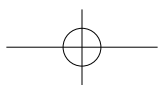
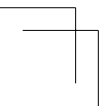
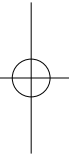
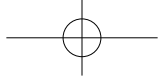
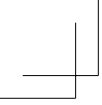
図版 11
リチャード・ジェイムズ・レインによるレディ・レイトンの絵のリトグラフ「スランゴスレンの貴婦人たち」(c. 1887)。ロンドン・ナショナル・ポートレート・ギャラリー、NPG D7815。

ぬ高みに登ることを許された」と絶賛したが、その詩に添えた回想では、二人の服装の非常に「奇妙な」様子を見て、「ローマカトリックの司祭」¹⁴のようだと記した。

メーヴアーは二人の奇妙な外見について、乗馬服はアイルランドでは田舎生活に最適な服装であると見なされていたし、短いヘア・スタイルは当時フランスで流行していたからだと説明している (Mavor, *Ladies* 178, 198)。しかしながら、ロマン主義時代のロマンティックな友愛関係にある女性たちで、スランゴスレンの貴婦人たちのようにダマー夫人と同じような両性具有的な服装をしていたものはいなかった。ダマー夫人と違って、スランゴスレンの貴婦人たちは「公然」とはサフィストと名指しされて非難されなかったし、自分たち以外の他の女性たちとの関係は全くなかったけれども、そのファッションは彼女たちの関係もサフィズムであることを仄めかしていたと言えるであろう。

第三部

イギリスのサツポーたち



◆◆第六章◆◆

十八世紀のサッポータチ

——ペンと縫い針の文芸的公共圏

大いなる文化的現象

ウィリアム・ウォルシュの『女性たちに関する対話』（一六九二）において、「女嫌い」という名の人物は、古代のサッポータチの男性的な知性とセクシュアリティを批判したとき、女性同性愛だけではなく知性という「新しい種類の罪」がイギリスの女性たちの間にも広がることを恐れた。¹ 実際、「女嫌い」の恐れは現実のものだった。

イギリスでは、一六四二年の内戦開始から王位空位期、そして一六六〇年のチャールズ二世による王政復古後、何度も出版を統制する法案が發布された。しかし、政府による出版統制は、一六六二年に発令された印刷許可法（煽動的、反逆的かつ無許可の書籍及び小冊子の印刷における濫用を防止し、印刷業および印刷機械を規制するための法律）が一六九五年に失効したとき終わりを告げ、十八世紀に多量の出版物が文学市場へ出回るようになった（Feather 43-50）。この世紀にはまた、識字率の増加や中産階級の興隆によって読者層が拡大したため、その需要に際るために、出版業者は新聞・雑誌のような定期刊行物の出版、予約購買や分冊出版のような廉価での出版、貸本屋など新しいやり方で、新しい文学市場を開拓した。こうした変化の恩恵に最も浴したのが女性作家たちである。

匿名や偽名出版も多かったため、女性作家の出版物の正確な数を把握することは難しい。しかし、一六六〇年から一八〇〇年までの女性の出版物の増加は、まさに「大いなる文化的現象」(Ferguson, "Women" 294) だった。ある統

計によると、十七世紀の最初の四〇年間では、女性による新しい出版は年に一冊で、全出版物のたった〇・五%しかなかったが、その後、毎年女性の新本出版が平均十二冊に増加し、全出版物の約一%になった。王政復古時代は政府による出版統制のために全出版物数は減少したが、女性の作品の割合は同じだった (Crawford 212-23, 265-66)。ところが、世紀が変わると、女性作家の出版物は急増し、とくに一七六〇年から一八〇〇年にかけての増加率は十年ごとに五〇%増という驚異的なものだったのである (Ferguson, "Women" 294)。

女性が扱ったジャンルも少なくない。十七世紀には、予言や祈祷など宗教書が多かったが、十八世紀には、詩、劇、小説、自伝、実用書、旅行書、翻訳、書簡、雑誌記事、教訓物語、助言書、教育書、社会的政治的小冊子など多方面にわたった。多くの女性は一つのジャンルだけを扱ったが、一九八〇年代以降のフェミニズム批評によって再評価されてきた女性作家たちのほとんどは複数のジャンルで名をなした。そして、一つのジャンルに携わった女性の数だけを見ると、詩が一番多く、次に小説だった。

たとえば、ジュディス・P・スタントンの統計によれば、一六六〇年から一八〇〇年までの九一三人の女性作家の中で小説を出版した女性が二〇一人に対し、詩を出版した女性は二六三人で一番多い。十年ごとの女性詩人の数は一七六〇年になるまで一人から十人までと少なかったが、一七七〇年代は十九人、一七七〇年代は三十六人、一七八〇年代は五五人、一七九〇年代は六四人と増加した (Stanton 250-51)。また、ロジャー・ロンズデイルによれば、十八世紀の最初の十年間で詩集を出したのはたった二人だったが、一七九〇年代には三〇人以上いた (Constable, introduction xxi)。ジェイムズ・ロバート・de・J・ジャクソンは一七七〇年から一八三五年のいわゆるロマン主義時代にイギリスとアメリカで詩集を出版した女性詩人の数を、一九八五年出版の『英詩史——一七七〇年から一八三五年まで』では、約四五〇人としていたが (Jackson, *Annals*)、一九九三年出版の『ロマン主義時代の女性の詩——出版目録』では、倍の約九百人に訂正している。また、同期間の詩集の初版数の推移は、一七七〇年代五八冊、一七八〇年代一一四冊、一七九〇年代二六三冊、一八〇〇年代二〇五冊、一八一〇年代二九九冊、一八二〇年代四二二冊、

一八三〇年から一八三五年までの六年間が二一七冊である (Jackson, *Romantic Poetry* 392-94)。ジャクソンの統計はイギリスとアメリカ両国の総計であるとはいえ、十八世紀末以降女性詩人の増加速度がますます早まったことがわかる。

これらの数字は、十八世紀イギリスの文藝的公共圏が、ユルゲン・ハーバマスのいうようにブルジョア階級の男性たちだけではなく (Habermas esp. ch. 2)、女性たちも構成メンバーであったことを如実に示しているだろう。『クリティカル・レビュー』第四号 (一七七七) は、メアリ・サヴェッジ (一七六三—七七活躍) の『種々の主題の折々の詩集』 (一七七七) への書評において、こうした自国の状況を、次のように西洋最初の詩人サッポータチを輩出した古代ギリシャと比べて、誇りを持って記している。

古代の一人のサッポータチの代わりに、われわれの小さな島では、同等の価値のある多くの名前とそれより優れた価値を持つ名前を何人か呼び集めることができる。後者はその能力を抒情詩の狭い区域に閉じ込めるところか、韻文と散文の両方のさまざまな種類の書き物において一流である。 (*Critical Review* 44 [1777]: 151)

古代ギリシャの抒情詩人サッポータチの名前が、イギリスの女性抒情詩人たちや抒情詩以外の分野においても才能を示す女性作家・詩人たちを称賛する際に、挙げられていることに注目したい。十八世紀イギリスにおいては、サッポータチは女性詩人たちの業績を評価する際の一つの重要な指標であると同時に、女性詩人たちにとっても、文藝的公共圏内に自分たちの場を確保するための基準であった。本章では、サッポータチを常に意識した十八世紀の女性詩人たちと文藝的公共圏のあり方の一様相を明らかにしてみたい。

ジェンダーの分離領域

まず、十八世紀の文芸的公共圏に女性作家たちが含まれると言っても、世紀初期にすでに「公」^{パブリック}と「私」^{プライベート}（もしくは「家庭内」^{ドメスティック}）の分離領域がジェンダーの用語で語られていたことから論を進める。たとえば、ジョゼフ・アディソンは、『スペクテーター』誌第八一号（一七一一年六月二日）において、上流階級の女性たちの間で、つけぼくろを顔の左側か右側かどちらの側につけるかによって、ホイッグ党支持かトーリー党支持かを示すのが流行していることに眉をひそめ、「女性の美徳は家庭的な性質があることである。家庭は私人の女性たちが輝くにふさわしい領域である」^{プライベート}（Joseph Addison 1: 349）と主張した。また同誌第三四二号（一七二二年四月二日）では、「女性の評判の最高のものは家庭生活にある。女性はその立ち居振る舞いが父の家もしくは夫の家に影響を及ぼすに従って、咎められるか賞賛に値する。女性がこの世でしなければいけないことはみな、娘、姉（妹）、妻、母としての義務の中にあるのだ」^{Joseph Addison 3: 271-72}と、私的な家庭領域における女性の役割を強調した。アレグザンダー・ポープも「あるレディへの書簡」^{（一七三五）}の中で、男性の公的領域と女性の私的な家庭領域とを峻別している。

But grant, in Public Men sometimes are shown,

A Woman's seen in Private life alone;

Our bolder Talents in full light display'd,

Your Virtues open fairest in the shade. (Pope, "Epistle II: To a Lady, Of the Characters of Women," lines 199-203)

しかし、男どもがときどき公共の場に姿を見せるとしても、／女性は私生活だけの中にいる。／われらの大胆な才能は白昼の明るいところで披露されるが、／あなたの美徳は日影の中で一番きれいに開くのだ。

『スペクテーター』誌からの最初の引用中にある「私人の女性たち」(“Private Women”)という語は、それと全く対蹠的な立場にある「売春婦」(“public woman”)を想起させるだろう。十八世紀に本を出版し、文芸的公共圏の一員になろうとする女性たちはまさに「私人」ではなく「公の女」になることを意味した。そして、それ故、売春婦のように淫らで不道徳であるというレッテルを貼られる恐れがあった。そうした恐れは、古代ギリシャのレスボスのサッポーを祖とする女性詩人たちにとつとりわけ強かったに違いない。なぜなら、同時代に伝わっていたサッポーのイメージは、一方では、「男性的な」詩的能力や知性を持つ例外的で特別な女性として賞賛されたが、他方では、そのセクシュアリティも「男性的」で淫乱であると批判されていたからである。サッポーに対するこうした毀誉褒貶は、結局のところ、名を成した知的な女性に対して男性がいだく脅威や女性一般への蔑視がいかに根強いものであったかの証左であろう。

「イギリス最初のフェミニスト」(Hild)とか「初期フェミニスト」(Perry, *Celebrated*)として知られるメアリ・アステルは、一七〇五年の手紙の中で、そのように男性の領域に踏み込んだ知的な女性に対する男性側の見方について、いみじくもこう述べている。男性たちは「これこれの女性らは彼女たちの性を超えて行動した」という賢明な評言をする」が、「そういう言い方をすることによって、彼らは、卓越した行動をした者は女性ではなくてペティコートをはいた男性である」と(Perry, *Celebrated* 25)言いたいのだと。男性優位社会においては、女性に対して「性を超えて行動した」という表現を使うことは、最大の褒め言葉のように思える。それは「男性と同等の」とか「男性のような」知性の持ち主であることを指しているからだ。しかし、アステルはその褒め言葉が実は女性蔑視であることに気がついていた。つまり、そういう知的な女性は「ペティコートをはいた男性」であると見なされているだけなのだ。ペティコートを身につけ、外見は女らしい。けれども、中身(頭の中)は女性ではなく男性なのである。

一方、女性詩人アン・フィンチ・ウィンチルシー伯爵夫人は、ペンを持つ女性が男性の特権的な領域に侵入した罪で罰せられることを十分認識していた。次の引用は、「序」というタイトルで知られる詩²からのものである。

Did I my lines intend for public view,
 How many censures would their faults pursue!
 Some would, because such words they do affect,
 Cry they're insipid, empty, incorrect.
 And many have attained, dull and untaught,
 The name of wit, only by finding fault.
 True judges might condemn their want of wit,
 And all might say, they're by a woman writ.
 Alas! a woman that attempts the pen,
 Such an intruder on the rights of men,
 Such a presumptuous creature is esteemed,
 The fault can by no virtue be redeemed.
 They tell us we mistake our sex and way;
 Good breeding, fashion, dancing, dressing, play,
 Are the accomplishments we should desire;
 To write, or read, or think, or to enquire,
 Would cloud our beauty, and exhaust our time;
 And interrupt the conquests of our prime;
 Whilst the dull manage of a servile house
 Is held by some our utmost art and use. ("The Introduction," lines 1-20)

もし私が自分の詩を公開しようと考えたら、／どんなにたくさんの譴責がそのあらを探そうとするだろうか！／その詩は退屈で中身がなくて正しくないと叫ぶ者もいるだろう、／そういう言葉を好んで用いる人たちだから。／そして多

くの者は愚鈍で無学なのに、／欠陥を見つけることによってだけ、才人の名前に到達していた。／真の判断者は私の詩の才知の欠如を批判するかもしれない。／そして誰もが言うかもしれない、それは女によって書かれたのだと。／ああ！書くことを試みる女性は／男性の権利の侵入者、／生意気なやつと思われるので、／その罪が贖われることは絶対ないのだ。／彼らは私たちに言う、私たちは自分たちの性とやり方を誤っていると。／良い行儀作法、ファッション、ダンス、服装、遊戯が／私たちが望むべき女性のたしなみであり、／書くこと、読むこと、考えること、あるいは尋ねることは／私たちの美しさを曇らせ、私たちの若い時を使い果たしてしまい、／そして全盛期に恋人を獲得することを妨げるだろうと。／その間、私たちの最高の専門技術であり有用である、隷属的な家の／単調な管理は、誰かによっておこなわれていると。

「書くこと、読むこと、考えること、あるいは尋ねること」は男性の領域であり、「良い行儀作法、ファッション、ダンス、服装、遊戯」や「隷属的な家の単調な管理」は女性の領域であるとすると同時代のジェンダー規範を十全に認識していたフィッチは、この詩の最後で、そういう時代や社会における女性詩人の処世術を示した。

Be cautioned then my Muse, and still retired;
Nor be despised, aiming to be admired;
Conscious of wants, still with contracted wing,
To some few friends, and to thy sorrows sing.
For groves of laurel thou wert never meant:
Be dark enough thy shades, and be thou there content. ("The Introduction," lines 59-64)

それ故、私のミューズよ、気をつけてください。そしてまだ隠棲しててください。／賞賛されるのを目指して、軽蔑されないうでください。／必要なものを自覚し、相変わらず縮んだ羽で／少数の友人たちへの歌や、あなたの悲しみ

の歌をうたってください。／あなたはかつて一度も月桂樹の森に向かったことはなかった。／あなたの木陰を十分暗くして、そこで満足してください。

実際、フィンチ自身、自分の詩を公表することに対しきわめて慎重な態度をとった。上記の「序」を含む多くの詩は、原稿のまま「友人たちの間で私的に回覧していた」(McGovern 33) だけだった。いくつかの詩は一六九一年と一七〇一年に出版されたが、作者名は隠されていた。一七一三年には生前唯一の詩集『諸々の詩』が出されたが、その第一刷の表紙には相変わらず「あるレディによって書かれた」とだけ記されていた。彼女の名前が現れたのはその第二刷以降だったのである。

イギリスの「サッポー」

詩を書くけれども、「公の女」にならないように努める。フィンチの女性詩人としての処世術は、十七世紀のキャサリン・フィリップスから学んだものだった。フィリップスはイギリスで最初に「イングランドのサッポー」として名を轟かせた詩人である。彼女のあとアフラ・ベイン(一六四〇―八九)も「サッポー」と呼ばれた。十八世紀に入ると、二人はそれぞれ賞賛される女性作家と批判される女性作家の代表的名前になったが、そのように評価を分けることになった一番の要因は、社会が女性に求める役割に忠実か否かの点である。

古代のサッポーが愛の詩、それも女性に対する愛の詩を書いたように、フィリップスは「オリンダ」のペンネームで、「ロザニア」のメアリ・オーブリーや「ルーカシヤ」のアン・オーエンへの愛をうたった詩を数多く書いたので、最初の女性詩人サッポーを連想されたのも無理はない。ベインにも「美しきクラリンドへ——私を愛した、女性以上の存在と想像される人」(二六八八)のような詩がある。だが後者が明らかに女性との性愛をうたったのに対し、フィ

リップスの詩は女性間の清い友情を称えるものだった。ペインはまたその他にも多くのエロティックな詩や劇などを精力的に出版したイギリス最初の女性職業作家であり、かつまた両性愛者ジョン・ホイルの愛人としての私生活もよく知られていた⁴ので、その不道德性が問題視された。対照的に、フィリップスは私生活上貞淑な女性として知られ、ほとんどの詩を手書き原稿のまま友人の間で回していただけであった。生前中に彼女に無断で出版された『比類なきK・P夫人の詩集』(二六六四)は出版直後に回収され、結局、彼女の完全な作品集『最も高い賞賛を受けるに値するキャサリン・フィリップス夫人比類なきオリンダの詩集』が世に出たのは死後の一六六七年である。同詩集の編者は彼女の友人で王室式部官のサー・チャールズ・コットレル(二六一五―一七〇二)であると長い間見なされてきたが、現在では不明とされている(Loscocco, *introductory note xiii*)。その序文は、一六六四年の海賊版出版に立腹したフィリップス(「オリンダ」)が「ポリアーカス」ことコットレルに宛てた一六六四年一月二九日付けの手紙を掲載して、彼女がいかに詩を出版することは女らしくないと思っていたかを示した。

「私は」出版するために詩を書いたことはこれまで一度たりともありませんでした。(中略)殴り書きしたもので称賛されるなんて全く期待していませんので、許されることもほとんど思っています。そして私はときどきその仕事「出版」が私の手の届かないところにあつて、私の性には適していないと思うので、永久にそれをしないと決心するつもりです。私の手から逃れてしまった、あの偶詠を記した紙を取り戻すことができたらいのに。私はずっと前にそれらすべてを捨ててしまいました。本当のことを申しますと、(中略)数名の親しい友人たちに私のバラッド(それらはそれ以上ましの名がないから)が見つかったとき、彼女たちはそれらを嫌いじゃないと思わせてくれたので、うっかり彼女たちの気晴らしのために何部か複製するのを許してしまったのです。しかし、このことと、大半の原詩を無くしてしまうほど複製にほとんど関心なかったことが、私の現在の不幸の原因であると思います。

(Preface, *Poems* [1667] n. pag.)

つまり、フィリップスは詩を書いたけれども、男性の領域である公の場に侵入することをしないで私的領域にとどまり、「公の女」（売春婦）のように女性としての美德を失うことはなかった。彼女が賞賛されたのはまさにこの点だ。上記の『詩集』の匿名編者は、序文の中で、「オリンダ」を古代のサッポーに匹敵する才能を持つ「イングランドのサッポー」として褒めたたえるが、同時に「徳」の点では古代のサッポーに勝っていると強調することを忘れてなかった。ちなみに下記引用中の古代基本徳目とは知恵、勇氣、正義、節制の自然徳のことであり、キリスト教基本徳目はそれに信、望、愛の三徳を加えて七徳である。

われわれが彼女をイングランドのサッポーと呼んだのも無理はなかった。彼女は詩と徳の両方において、前の時代のすべての女性詩人の中で最も高い評価を受けている。しかし、彼女は自分自身をオリンダと呼んだ。その名前はミューズの九女神に加わり、彼女たちのように永遠に崇められつづけるに値する。もしわれわれの言葉が古代におけるギリシャ語やラテン語、現在のフランス語のように、世界一般に知られているのなら、彼女の詩はわれわれの狭い島国の境界内に閉じこもらずに、大陸に住民がいる限り、あるいは海に岸がある限り、遠くまで広がっていくことであろう。彼女の徳に関しては、キリスト教基本徳目が古代の基本徳目に勝るように、サッポーの徳に勝った。（古代の基本徳目の点でも、オリンダは劣ってはいなかったが。）(Preface, *Poems* [1667] n. pag.)

同様に、同詩集に所収されたエイブラハム・カウリー（二六一―一六七）の献詩も、サッポーという名前によって不名誉なイメージが喚起されることに對する懸念を示し、「オリンダ」がいかにつつましく貞淑であるかを強調した。

They talk of *Sappho*, but, alas! the shame

III Manners soil the lustre of her fame.

Orynda's inward Virtue is so bright,

That, like a Lantern's fair enclosed light,

It through the Paper shines where she doth write,
Honour and Friendship, and the gen'rous scorn

Of things for which we were not born,

(Things that can only by a fond disease,

Like that of Girdles our vicious stomachs please)

Are the instructive subjects of her Pen. (Abraham Cowley, "Upon Mrs. K. Philips her Poems," stanza 4, lines 5-10)

人はサッポータチについて話す。だが、ああ！ 恥ずべき／悪行が彼女の名声の輝きを汚す。／オリンダの内なる美徳は非常に輝いているので、／灯ろうの美しい囲まれた光のように／それは彼女が書いている紙を通してきらめく。／名譽と友情、そしてそのためになれわれが生まれたのではなかったもの／（少女たちのように恋の病によってだけ、われわれの汚れた欲望を満足させることができるもの）／への手厳しい軽蔑こそ、／彼女のペンの教訓的な主題である。

一方、イギリス最初の女性職業作家と言われるアフラ・ベインは、一六八九年に出版したエイブラハム・カウリーのラテン語の『植物について』の第六巻の英訳中において、「サッポータチとオリンダとともに私を／永久に聖なるニンフにしてください」（Behn, Cowley's *Of Plants* 143）と、文学的名声を望む言葉を挿入している。しかし、ベインが「サッポータチ」と呼ばれたとき、それは侮辱的な使われ方だった。たとえば、大成功を収めた猥雑な劇『都会の女相続人』について、ロバート・グールド（一六六〇頃―一七〇八／〇九）は諷刺詩「劇場」（二六八九）で、「貞淑なサッポータチによって書かれた、あの汚れない知の作品である都会の女相続人」（Gould, "Play-House" 173）と皮肉った。また「シルビアの復讐と呼ばれる詩の女性作家への諷刺的書簡」（二六九二）では、ベインを「痛風と犯罪で有名なサッポータチ」（Gould, *Satyrical Epistle* 5）と呼んだ。ウィリアム・ウィチャリー（二六四〇頃―一七一五）の詩「愛の病もしくは劇のお産の床についていると思われる当代のサッポータチに寄せて」（二七〇四）は、「陰部」を世間にさらけ出すことと劇の公

開、子どもの出産と作品の出版を同一視し、売春婦としてのベイン像を広めた (Wycherley 191-92)。「サッポー」の名前の侮辱的な使われ方は、オウイディウスの「パオーンに宛てたサッポーの手紙」を英訳したポープによってもなされている。彼は才知ある女性について最も辛辣な言葉を残した男性の一人で、『髪の手盗み』(一七二二、一七二四)第四歌では、次のように女性の詩作をヒステリーと同一視した。

Parent of vapours and of female wit,
Who give th' hysteric, or poetic fit,
On various tempers act by various ways,
Make some take physic, others scribble plays; (*The Rape of the Lock*, Canto IV, lines 59-62)

憂鬱症と女性の才知の親は、／ヒステリーもしくは詩の発作を感染させ、／さまざまな気性の人にさまざまなり方で処置をし、／ある者には薬をとらせ、別の者には劇を殴り書かせる。

この四行に二七歳年上の友人アン・フィンチ・ウィンチルシー伯爵夫人が憤慨しているのを伝え聞いたポープは、次の「即興詩」を彼女に捧げた。

In vain you boast poetic names of yore,
And cite those Sappho's we admire no more:
Fate doom'd the fall of ev'ry female wit,
But doom'd it then when first Ardelia writ.
Of all examples by the world confest,
I knew Ardelia could not quote the best;

Who, like her mistress on Britannia's throne;
 Fights, and subdues in quarrels not her own.
 To write their praise you but in vain essay;
 Ev'n while you write, you take that praise away:
 Light to the stars the sun does thus restore,
 But shines himself till they are seen no more. ("Impromptu To Lady Winchelsea")

あなたが昔の詩人たちの名前を誇り、／われわれがもはや賞賛してもいないあのサッポータちを引き合いに出しても無駄である。／運命はあらゆる才知ある女性の落下／墮落を定めたのだが、／その後アーデリアがはじめて書いたとき、それを定めたのだ。／私は知っていた、世間で認められたすべての手本のうちで／最上の人をアーデリアが挙げることができないことを。／ブリタニアの王座にまします女王のように、／自分のものではない論争で戦い、そして勝つ人を。／あなたが彼女たちの称賛を書こうとしても無駄である。／まさに書いているときに、あなたはその称賛を取り上げているのだ。／太陽はこのように星々を光るようになってやるが、／星がもう見えなくなるまでずっと自分で輝いているのだ。

この詩の中で、ポープは「アーデリア」(フィンチのペンネーム)を賞賛しながら、才知ある女性たちへの誹謗を盛り込んでいる。つまり、彼によれば、アーデリアは過去の女性詩人たち(「サッポータち」)を褒めたたえるが、その称賛を書いた時点で彼女たちをけなしていることになる。なぜならアーデリアは彼女たちよりも優れた詩人だからだ。ちなみに彼が「才知ある女性の落下／墮落」と言うとき、サッポータのレフカスからの投身自殺を念頭においていることは間違いないだろう。サッポータはまさに落下／墮落した最初の「才知ある女性」だったのである。

そしてポープが特にその名で呼んだ女性は、メアリ・ウォートリ・モンタギューだった。彼女が一七一六年から一八年に外交官の夫とトルコに旅行したとき書いた書簡形式の旅行記は、手書き原稿のまま回し読みされ、大評判に

なった。⁵ ポープもそれを読んで、「僕がサッポアの断篇を楽しんだように、彼女「モンタギュー」の断篇を楽しんだ」(Reynolds, *Sophio Companion* 123) と絶賛していた。しかし、二人の仲が政治的な立場の相違などによって断絶すると、ポープは自分の詩の中で彼女を「サッポア」として何度も登場させながら、彼女を汚くて、乱交にふけていて、梅毒にかかり、うぬぼれが強い女として猛烈に攻撃し始めたのである。たとえば、モンタギューはトルコでおこなわれていた天然痘 (smallpox) の予防接種をイギリスで広めたことでも有名で、友人たちにも予防接種したのだが、ポープはそれを「ホラティウスの模倣第二編第一の諷刺詩」(二七三三)で、「梅毒に感染させられる」(pox) という語に引っかけた揶揄した。

Slander or Poison, dread from Delia's rage,

Hard words or hanging, if your Judge be Page.

From furious Sappho scarce a milder fate,

P—x'd by her love, or libell'd by her hate.

(“The First Satire of the Second Book of Horace Imitated, To Mr. Fortescue,” lines 81-84)⁶

デリアの激怒からくる恐怖の中傷か毒薬、／君の裁判官がページなら、ののしりか絞首刑。／怒り狂っているサッポアからは、もつと穏やかな運命はまれである。／彼女の愛によって**感染させられるか、彼女の憎悪によって誹謗されるかだ。

「ハーヴィー卿とレディ・メアリー・ウォートリへ」と題する未刊行の詩(一七三三頃作)でも、彼女の道徳と外観が中傷されている。詩中で「アドニス」と呼ばれる彼女の友人のジョン・ハーヴィー(一六九六—一七四三)も、ポープとの間でお互いに激しく攻撃し合うパンフレット戦争があった人物である。

When I but call a flagrant Whore unsound,

Or have a Pimp or Flatterer in the Wind,

Sapho enrag'd cries out your Back is round,

Adonis screams—Ah! Foe to all Mankind!

Thanks, dirty Pair! you teach me what to say,

When you attack my Morals, Sense, or Truth,

I answer thus—poor Sapho you grow grey,

And sweet Adonis—you have lost a Tooth. (“To Ld. Hervey & Lady Mary Wortley”)⁷

私が悪名高い淫婦は墮落していると思ったり、あるいはボン引きかおべっか使いのうわさをかぎつけただけで、／怒ったサッポータチはお前の背中は丸いと大声で叫び、／アドニスには金切り声をあげる——ああ、全人類の敵だ！と。／ありがとう。汚いお二人さんよ！ あんた方は／私の道徳、判断力、あるいは真実を攻撃しているときに、／私がお何を言うべきか教えてくれている。／私はこう答えるのさ——哀れなサッポータチよ、あんたは白髪になった。／そして甘ったるいアドニスよ——あんたは歯なしになった。

女性の弁解

「サッポータチ」の名前がこのように才知ある女性を中傷するために使われていた時代、女性詩人たちはしばしば一六六七年のフィリップスの詩集に収められた彼女の手紙を手本にした。つまり、世間からの批判を逃れ、自分の名誉を守るために、女性たちは詩集の作者であることを匿名や偽名やイニシヤルで隠す傾向にあったが、堂々と本名を明記する場合、序文などにおいて、女性が出版したことについての弁解を記したのである。⁸

たとえば、メアリ・チャドリー（一六五六一七一〇）はフェミニスト的な詩『女性の擁護』（一七〇一）では作者名

をイニシャルにしていたが、本名で出版した『折々の詩集』(一七〇三)では、「はしがき」において、それは「私の余暇にしたこと、孤独な生活の慰みだった」(Chudleigh, preface, *Poems* n. pag.)と、自分の詩作活動は私的なものであったことをわざわざ強調した。またセアラ・ファイジ・エジャトン(一六七〇—一七二三)は『折々の詩集』(一七〇三)で著者名としてイニシャルを用いただけではなく、「献辞」では、「世間を騒がすつもりはありませんでしたが、偶然の出来事があつて出版を余儀なくされました」(Egerton, dedication, *Poems* n. pag.)と弁解した。アイルランド出身のメアリ・バーバー(一六九〇頃—一七五七)は生前何冊も本名で出版した詩人だが、彼女もまた『折々の詩集』(一七三四)の「はしがき」で、「女性が大胆にも出版のために書くこととするときはいつでも彼女の領域から踏み外していることを、私はよくわかっています。それ故、私の読者に是非お伝えしなければならぬと思うことは、私の詩は、詩を出版しようとする他の人たちが示してきた考えのどれとも全く違う考えのもので書かれたということです。つまり、私の目的は主として私の子どもたちの心を教育することだったのです」(Barber, preface, *Poems* xvii)と、自己弁解した。彼女が詩集を出版するのは、名声を得るためではなかったのである。

詩は女性読者のために書かれたもので、内容も私的で女性的なものに限っているというのも弁解の常套句だった。チャドリーは『散文と詩のさまざまなテーマに関する評論』(一七二〇)の「読者へ」において、「私は自分の書いたものが男性の注意を引くのに値すると思うほどうぬぼれが強くない」と述べ、自分の詩は「レディに」向けてだけ書いたものであると断言した(Chudleigh, to the Reader, *Essays* n. pag.)。エジャトンも前述の詩集の「献辞」の中で、「私たちの性は非常に狭い行動の範囲内に限られているので、もっと大きい重要な事柄が私たちの目に留まることはめったにありません。女性のペンに唯一ふさわしいテーマ(ふさわしいのがあるとすればですが)は愛のように思えます」と、詩のテーマにジェンダー差があることも認めた。

面白いことに、詩を書くことに対する女性の弁解そのものが詩のテーマになることもあった。ジェーン・ブリアトン(一六八五—一七四〇)は、生前は匿名で詩(*Martin*)を出版したことがあったが、死後の一七四四年になってはじめ

て詩集が出版された。その詩集に収められた「一七一八年ロンドンで書かれたアン・グリフィス夫人への手紙」で、彼女は次のようにうたっている。

That I am dull is what I own and know;
But why I mayn't be privileged to show
That Dullness to a private Friend or two
(As to the World Male Writers often do),
I can't conceive. Dullness alone's my Fault,
Guiltless of impious Jest, or obscene Thought!
None e'er can say that I have loosely writ,
Nor would at that dear Rate be thought a Wit.
Fair Modesty was once our Sex's Pride,
But some have thrown that bashful Grace aside:
The *Behns*, the *Mamleys*, heed this motley Train,
Politely lewd and wittily profane;
Their Wit, their fluent Style (which all must own)
Can never for their Levity atone:
But Heaven that still its goodness to denote,
For every Poison gives an Antidote;
First, our *Ovind*a, spotless in her Fame,
As chaste in Wit, rescu'd our Sex from Shame;
And now, when *Heywood's* soft seducing Style
Might heedless Youth and Innocence beguile,

Angelic Wit and purest Thoughts agree
In tuneful *Singer*, and great *Winchisea*.

For me, who never durst to more pretend

Than to amuse myself, and please my Friend:

If she approves of my unskilful Lays,

I dread no Critic, and desire no Praise.

(Breteton, "Epistle to Mrs Anne Griffiths, Written from London, in 1718," lines 69-95)

私が鈍いことは自分で認めて知っている。／しかし、なぜその鈍さを友達の人や二人に／（男性の作家たちがしばしば世間に向かって示すように）／見せることを許されていないのか、／私にはわからない。鈍さだけが私の欠点で、／不敬なふざけや卑猥な考えをしたことがないのに！／今まで誰一人私がふしだらに書いたと言える者はいないし、／そんな調子なら利巧者だと思ふ者もないだろう。／汚れない慎みはかつて私たちの性の誇りだった。／しかし、その恥じらいを含んだしとやかさをわきに置いてしまった者もいた。／ベイン一派、マンリ、一派は慇懃に猥褻で、当意即妙に下品な／この種々雑多な一行の先頭に立つ。／彼女たちの能弁なスタイル（それは皆が持たねばならないものだが）は、／彼女らのはしたなさを少しも償っていない。／しかし、まだありがたいことに、天の善を示すために、／というのには、どの毒も解毒剤があるから、／最初に、才知において貞淑なように、名声に汚れない／私たちのオリ、ン、ダ、が、私たちの性を恥辱から救った。／そして今や、ヘイ、ウ、ツ、ドの柔らかな魅惑的なスタイルが／不注意な若さや無垢をたぶらかしているとき、／天使のような才知と最も清い考えが／音楽的なシン、ガ、と偉大なウインチル、シーの中で同じになる。／私については、自分の楽しみや友人を喜ばせることより他のことを／生意気なもしょうとしたことが一度もなかったのだ、／もし友人が私の下手な歌を認めてくれたら、／私はどんな批評家も恐れないうし、どんな賞賛も望まない。

ここでは、女性作家たちがベインとフィリップスの二つの系統に分けられている。ベイン側のメアリ・ドラリヴィエール・マンリー（一六六三―一七二四）は四つの劇や『ニュー・アタランティス』（一七〇九）などの小説や政治的パンプルットを書いた職業作家で、政治的な雑誌『女性のタトラ』（一七〇九）や『エグザミナー』（一七一）の編集にも携わった。エリザ・ヘイウッド（一六九三―一七五六）は生前ロマンス、小説、劇、翻訳、詩、政治的なノンフィクションなど七〇以上を出版した多作家であり、月刊誌『女性のスペクテーター』（一七四四―四六）の編者でもあった。一六九七年の劇『才女』——もしくは下稽古中の詩人三人組』の中では、マンリーは劇作家・小説家・詩人・哲学者のキャサリン・トロッター・コックバーン（一六七九―一七四九）や劇作家・小説家のメアリ・ピックス（一六六六―一七〇九）とともに、ベイン以後の「才女」（Female Wits）三人組として揶揄されていたが、一七二五年以降は、ヘイウッドの著作集に賛辞を寄せたジェイムズ・スターリングの命名に従って、ベイン、マンリー、ヘイウッドが「美しい才女三人組」（the fair Trinvirate of Wits）として有名だった（Sterling I: sig. a2）。上記に引用した一七一八年作の詩では、ブリアトンは早くもこの三人組を「ベイン一派」とひとまとめにし、その「はしたなさ」を批判する一方で、フィリップス側の女性作家として、「フィロメラ」（ギリシャ神話。ナイチンゲールに変身したアテネの王女）の名前で詩集を出版していたエリザベス・シンガー・ロウ（一六七四―一七三七）とアン・フィンチ・ウインチルシー伯爵夫人の名前を挙げて、彼女たちの貞節さを賞賛した。そして、自分自身も「フィリップス一派」であることを明示するために、自分の詩の読者は私的な狭い親密圏内にいる友人たちであると強調したのである。

ペンと縫い針の文芸的公共圏

十八世紀も半ばを過ぎると、女性が出版することが珍しくなくなってきた。一七六九年、クララ・リーヴ（一七二一―一八〇七）は『独創的な詩集』の「読者への挨拶」で次のように述べている。

自分が物書きであると人に知られてはいけない、私の性は乗り越えることができない欠点である、人類一般は私の性の文学的功績の主張に対して偏見を持っている、と私は以前には思っていました。しかし、今では、その逆の例が日々起こっているのです、それが間違っていたことを確信します。私は多くの女性の書き手たちが好意的に受け入れられ、作家の階層に入ること認められ、公衆にたっぷり褒美をいただいているのを目にします。彼女たちの成功に励まされて、私は同じ有利な立場への候補者として一身を捧げています。

(Reeve, address to the Reader, *Original Poems xi*)

しかしながら、女性の出版物に対する評価基準は相変わらずジェンダーの分離領域と道徳的美徳にそっているか否かという点だった。前に引用したジェーン・ブリアトンはずでに一七一八年時点で女性作家たちを二つに分けて考えていたが、十八世紀半ば以降、男性たちもそうした基準に基づいて女性の文学伝統を二つに類別し、一方の伝統のみを賞賛するようになった。たとえば、ジョージ・バラード（二七〇六―五五）は、『グレイトブリテン女性回顧録』（一七五二）の「はしがき」において、「わが国の非常に多くの才能ある女性たち」がこれまで無視されてきたけれど、「イングランドがヨーロッパのどの国よりも文学の才芸で有名な女性を数多く産出してきたことは確かである」(Ballard 2)と力説した。そして同書に、十四世紀に神の啓示を著したノリッジのジュリアナ（二三四二頃―一四一三頃）から、十八世紀はじめの詩人・古典学者のコンスタンシア・グリアアソン（二七〇五頃―三三二）まで、その書き物や豊かな学識で称えられてきた六二人の女性たちの伝記を収めた。それらを見ると、これらの才能ある女性作家たちは、ある基準で選別されていることがわかる。つまり、キャサリン・フィリップス、詩人・哲学者・ロマンス作家・劇作家のマーガレット・キャヴェンディッシュ・ニューカースル侯爵夫人（二六二四頃―七四）、詩人・画家のアン・キリグリュエ（二六六〇―八五）、メアリ・チャドリー、詩人のメアリ・モンク（二六七八頃―一七一五）、アン・フィンチ・ウインチエルシー伯爵夫人、詩人のフランシス・ノートン（二六四四―一七三二）、メアリ・アステルなど、道徳的美徳、しとやかさ、慈悲深さ、信心深さ、家庭的なことなどで有名な作家たちは含まれているが、アフラ・ベイン、メアリ・ピック

ス、メアリ・ドラリヴィエール・マンリーのような不道徳で悪名高い職業作家たちは除外されていたのである。マーガレット・K・M・イーゼルは、バラードのこうした選別を男性の書き物とは違う女性の書き物の領域の創出として解釈している (Ezell 89)。

ジョン・ダンカム(一七二九—八六)は、『女性讃歌』(初版一七五四、第二版一七五七)¹¹において、ジェーン・ブリアートのようにはっきりと女性作家たちを二種類に分けた。彼はまず、女性の土地相続権や王位継承権を否認したサリカ法典(フランクサリ支族の制定した法律)のように女性詩人の権利が「横柄な男性」によって不当に奪われている現状を指摘し、その是正に乗り出す。

Shall lordly man, the theme of ev'ry lay,
Usurp the muse's tributary bay;
In kingly state on *Pindus'* summit sit,
Tyrant of verse, and arbiter of wit?
By *Salic* law the female right deny,
And view their genius with regardless eye?
Justice forbid! and every muse inspire
To sing the glories of a sister-quire! (Duncombe, *Feminiad*, lines 1-6)

横柄な男性に、あらゆる歌のテーマを、／ミューズの貢物の月桂樹を、篡奪させるのか?／詩の暴君、そして才知の権威者に、／ピンドスの山頂の王座に座らせるのか?／サリカ法典によって女性の権利を否定し、／彼女たちの天分を無関心な目で眺めさせるのか?／正義が禁じ、あらゆるミューズが女性歌手団の／栄光をうたうよう靈感を与えますように!

今や「わがブリテンの乙女たち」は、「くびき」につながれた東洋の女性たちと違って、「知恵の聖なる森」を自由に歩きまわることが出来る (*Feminiad*, lines 45-50)。そして、さまざまな芸術の分野で活躍している。

With various arts our reverence they engage,
Some turn the tuneful, some the moral page,
These, led by Contemplation, soar on high,
And range the heav'ns with philosophic eye;
While those, surrounded by a vocal choir,
The canyas tinge, or touch the warbling lyre. (*Feminiad*, lines 57-62)

彼女たちはさまざまな芸術でわれわれの尊敬を呼び起こす。／ある者は美しい調べの頁を、ある者は道徳的な頁をめくる。／黙想に導かれた者は高みに舞い上がり、／哲学の目で天空をさまよう。／一方、声楽隊に囲まれた者は、／画布に色をつけるか、美しい音色のリラを奏でる。

このように女性たちが多方面で活躍するグレイトブリテン島はサッポー一人を輩出した古代ギリシャのレスボス島をしのぐものである。

Nor need we now from our own Britain rove
In search of genius, to the Lesbian grove,
Tho' Sappho there her tuneful lyre has strung,
And amorous griefs in sweetest accents sung, (*Feminiad*, lines 104-07)

今やわれわれは天才を探しに、わがブリテンから／レスボスの森へと彷徨う必要はない。／レスボスの森ではサッポ

ーが快い響きのリラを奏で、／恋の悲しみを最も美妙的な口調でうたったけれど。

しかし、ダンカムはいわゆる新旧論争において、数の多さだけで近代の優勢を唱えるつもりはない。上の引用に続く詩行では、古代ギリシヤのサッポータの才能は場所と時間を超えて直接イギリス最初の「サッポータ」たるキャサリン・フィリップス（「オリンダ」）に受け継がれていると記すが、後者の「貞淑」、「清純」、「慎み深さ」などを称賛することによって、近代の優勢を強調するのである。

Since here, in Charles's days, amidst a train
Of shameless bards, licentious and profane,
The chaste ORINDA rose; with purer light,
Like modest Cynthia, beaming thro' the night:
Fair Friendship's lustre, undisguis'd by art,
Glow's in her lines, and animates her heart;
Friendship, that jewel, which, tho' all confess
Its peerless value, yet how few possess! (*Feminiad*, lines 108-115)

彼女のあと、チャールズ二世の時代に、／恥知らずの吟遊詩人たちの一行の間から、／貞淑なオリンダが立ちあがったのだ。さらなる清純な光で、／慎み深い月の女神キュンティアのように、夜を通して輝きながら。／美しい友情の光彩は、作為によって隠されずに、／彼女の詩行の中で輝き、彼女の心を活気づける。／誰もがその無双の価値を認めているけれど、／友情を、あの宝石を、持っている人がどんなに少ないことか！

ダンカムはそれから、フィリップスのあとを継いだアン・フィンチ・ウィンチルシー伯爵夫人、キャサリン・トロ

ッター・コックバーン、エリザベス・シンガー・ロウ、詩人のフランセス・シーモア・ハートフォード伯爵夫人（のちサマセット公爵夫人）（二六九九―一七五四）、詩人のアン・ハワード・アーウィン子爵夫人（二六九六頃―一七六四）、詩人のメヘタベル・ウエズリー・ライト（二六九七―一七五〇）、詩人の「コーネリア」ことジュデイス・クーパー・マダン（一七〇二―一八二一）、詩人のメアリ・リーパー（一七二二―一七四六）、詩人・古典学者・翻訳家のエリザベス・カーター、詩人の「フラビア」ことマーサ・フェラー（一七二九―一八〇五）、詩人の「フロリメル」ことE・ペニングトン（二七三四―五九）、コンダクト・ブック作家・教育理論家の「デリア」ことヘスター・マルソ・シャポーン（二七二七―一八〇二）、そして詩人・画家の「ユージーニア」ことスザンナ・ハイモア（一七二五―一八二二）という称賛すべき女性作家たちの系譜を掲げた。第二版では、小説家・劇作家のフランシス・ムーア・ブルック（一七二四―一八九）の名前も追加している。¹²

彼女たちが「貞淑なミューズ」のもとで書いているに対し、「淫らなミューズ」のもとにいるのはメアリ・ドラリヴィエール・マンリー、劇作家のスザンナ・セントリーヴァー（二六六七頃―一七三三）、アフラ・ベイン、そして自分の恥辱を公表した三人の自伝作家たち、テレシア・コンスタンシャ・フィリップス（二七〇九―一六五）、レティシア・ピルキングトン（一七〇八頃―一五〇）、フランセス・アン・ハウズ・ヴェイン子爵夫人（一七二五頃―一八八）だった。ダンは後者の作家たちを「悪徳の友であり、美徳の女性の敵」と見なし、彼女らにいくら才能があろうとも前者の作家たちのように褒めたたえられないことはないかと断定した。

The modest Muse a veil with pity throws
 O'er Vice's friends and Virtue's female foes;
 Abash'd she views the bold unblushing mien
 Of modern Manley, Centivre, and Behn;
 And grieves to see One nobly born disgrace

Her modest sex, and her illustrious race.
 Tho' harmony thro' all their numbers flow'd,
 And genuine wit its ev'ry grace bestow'd,
 Nor genuine wit nor harmony excuse
 The dang'rous sallies of a wanton Muse:
 Nor can such tuneful, but immoral lays,
 Expect the tribute of impartial praise:
 As soon might Phillips, Pilkington and V—
 Deserv'd applause for spotless virtue gain. (*Feminiad*, lines 139-52)

貞淑なミュージズは哀れんでペールをかける、／悪徳の友であり、美徳の女性の敵の上に。／彼女は、現代のマンリー、セントリーヴァー、ベインの／大胆で恥知らずの態度を見て赤面する。／そして高貴な生まれの者が彼女の慎み深い性と、／彼女の輝かしい一族を汚すのを見て悲しむ。／心地よい音は彼女らの調べの中を流れ、／本物の才知はそのあらゆる気品を授けたけれども、／本物の才知も、心地よい音も、／淫らなミュージズの危険なほとばしりを赦すことはない。／このような美しい調べだが不道徳な詩は／公明正大な称賛を授かることは期待できない。／フィリップス、ピルキングトン、V***がたやすく／汚れなき美徳には当然の喝采を博することがあるように。

このような女性作家たちの二種類の区別は、結局のところ、ダンカムにおいても、ジェンダーの分離領域に基づいていた。つまり、「淫らなミュージズ」側は、「分別ある主婦」であることよりも「学者」であることを優先し、夫に犠牲を強いる女性作家であるに対し、「貞淑なミュージズ」側は、「家事が優秀なことに喜び」を感じ、暇な時間を「訪問、トランプ遊び、そして陰口」で浪費するのではなく、「ペン」を使っている女性作家なのである (*Feminiad*, lines 84-85, 94-98)。

従って、『女性讃歌』の最後に登場する「アオニアの乙女」の言葉は、女性作家のあるべき姿を端的に示している点で見逃せない。「アオニアの乙女」はまず「うたうのをやめよ、優しき若者よ」(*Feminiad*, lines 342)と詩人の「私」(「ダンカム」)に呼びかけ、彼が女性讃歌をうたったことを褒めたたえる。ジョスリン・ハリスはオーガスタン・リプリント・ソサエティー版の序文の中で、この最後の部分は別の人によって書かれたようだ指摘している(Harris v)。シルビア・ハークスターク・マイヤーズの推測によれば、ダンカムの友人のエリザベス・カーターかもしれないが、たふんのちに彼の妻になるスザンナ・ハイモアらしい(Myers 129)。いずれにせよ、「アオニアの乙女」は次に「姉妹の歌い手たち」に向かって、次のようにアドバイスするのである。

"And ye, our sister choir! proceed to tread

"The flow'ry paths of Fame, by Science led!

"Employ by turns the needle and the pen

"And in their fav'rite studies rival men!

"May all our sex your glorious track pursue,

"And keep your bright examples still in view!" (*Feminiad*, lines 345-50)

「そして、あなたの方、わが姉妹の歌い手たちよ！／知識によって導かれた名声の花道を辿りなさい！／縫い針とペンを代わる代わる使い、／そしてお気にいりの分野で男性たちと競い合いなさい！／すべての女性があなた方の栄光に満ちた足跡を追い、／あなた方の輝かしい見本をいつも目を離さず見えていますように！」

女性詩人が「名声の花道」を辿るためには、男性のようにペンを使うだけではなく、家庭的な道具である縫い針も忘れてはいけない。そして男性と競い合うためには、男性の公的な領域を侵すのではなく、女性の私的で家庭的な領域で活躍しなければならない。文芸的公共圏内のこうしたジェンダーによる分離領域の主張は、一九八〇年代以降の

フェミニズム批評でしばしば唱えられた文学伝統のジェンダー別の単純な見方——主流の男性の文学伝統と反主流の女性の文学伝統——では十分に説明できないものを含んでいる。¹⁴ダンカムの詩で明らかになったのは、女性の文学伝統自体が望ましいものとそうでないものの二つに分かれているということである。ペインの系列の女性作家たちは女性の慎みを忘れ、ペンだけを持っていた。彼女たちは男性作家たちと同じ文芸的公共圏に属していたと言えるかもしれないが、それは女性作家としては望ましいあり方ではなかった。一方、フィリップスの系列の女性作家たちは女性としての美德をなくすことなく、ペンと縫い針の両方を持っていた。彼女たちは男性作家たちと同じ文芸的公共圏だけにどっぷり浸かっているのではなく、あるいは普通の女性たちのように私的で家庭的領域だけにとどまるのでもなく、その両方の領域が重なっている曖昧な中間領域に自らの場をおいていたと言えよう。女性の文芸的公共圏として望ましいのは、この曖昧な領域だったのである。

貞淑なサッポータチの伝統

とはいえ、ダンカムの『女性讃歌』出版頃までには、ペンだけを持つ男性的文芸公共圏とペンと縫い針を持つ女性的文芸公共圏のどちらの側に属しているかに関わりなく、女性作家たちの文学的業績が男性作家たちと同じ土俵の上で称えられていたことも忘れてはならないだろう。セオフィラス・シバー（一七〇三—一七五八）の編纂と推定¹⁵されてきた『スウィフト司祭の時代までのグレートブリテンおよびアイルランド詩人伝』（一七五三）全五巻には、チヨースター（二三四二頃—一四〇〇）からジョナサン・スウィフト（一六六七—一七四五）の時代までの詩人二〇一名が所収されているが、そのうち女性は十四名で、第二巻にキャサリン・フィリップス、マーガレット・キャヴェンディッシュ・ニューカースル侯爵夫人、アン・キリグリュ、第三巻にアフラ・ペイン、メアリ・チャドリー、アン・フィンチ・ウインチェルシー伯爵夫人、第四巻にメアリ・ドラヴィエール・マンリー、スザンナ・セントリーヴァー、エリザ

ベス・トーマス（一六七五—一七三二）、エリザベス・シンガー・ロウ、第五巻にコンスタンシア・グリアソン、キャサリン・トロッター・コックバーン、レティシア・ピルキングトン、メアリ・チャンドラー（一六八七—一七四五）が含まれている。ここでは、ダンカムのいう「貞淑なミューズ」側も「淫らなミューズ」側もともに男性と同じ名譽ある席につくことを許されているのだ。そしてフィリップスの詩的能力が同時代の男性作家たちによって絶賛されたように、ベインについても男性作家たちによる賛辞の声が紹介されるとともに、彼女の劇が猥褻であることに對しては、「当時の趣味が墮落していた」(Cibber's: 24) ためそれに合わせただけであると擁護されている。

ダンカムの『女性讃歌』出版の一年後の一七五五年には、ジョージ・コールマンとボンネル・ソートン編集の『著名女性詩集』全二巻も出版された。イギリス女性詩人のアンソロジーとして最初の同書には、前述の『女性回顧録』、『詩人伝』、『女性讃歌』に挙げたメアリ・チャドリ、キャサリン・トロッター・コックバーン、アン・キリグリュー、マーガレット・キャヴェンディッシュ・ニューカースル侯爵夫人、キャサリン・フィリップス、メアリ・モンク、アン・フィンチ・ウインチェルシー伯爵夫人、コンスタンシア・グリアソン、エリザベス・シンガー・ロウ、エリザベス・カーター、ジュデイス・クーパー・マダン、メアリ・リーパー、アフラ・ベイン、レティシア・ピルキングトンに、新たにメアリ・バーバー、メアリ・ジョーンズ（一七七八没）、メアリ・マスタートーズ（生没年未詳）、¹⁶メアリ・ウォートリ・モンタギューが加わり、総勢十八人が収録されている。悪名高いベインやピルキングトンも含まれているように、コールマンとソートンの編集方針も『詩人伝』とよく似ている。「はしがき」では、同アンソロジーは「カウリー、ドライデン、ロスコモン、クリーチ、ポープ、あるいはスウィフト」(Colman and Thornton, preface 1: iii) という同時代の男性作家たちによって絶賛された女性詩人たちを集めたものであると明記される。しかし、『詩人伝』と違って、バラードやダンカム寄りの考えも持っていた。つまり、次の引用にあるように、収録した女性詩人たちの能力が男性詩人に匹敵していることを強調しながらも、能力のジェンダー差、すなわち、女性は男性よりも「繊細」な点を強調しているのである。

本書はおそらく女性に呈することができる最も確固たる賛辞であります。それは、偉大な能力が男性たちだけに限られているのではないということ、そして天分が女性の胸の中で、しばしば男性と同じような激しさで輝き、そしておそらく男性よりもっと繊細に輝くということを永久に証明するものです。(Colman and Thornton, preface 1: iii)

しかし、コールマンとソートンよりもダンカムの「貞淑なミューズ」の言説の方が影響力が強く、その後何度も繰り返された。たとえば、エリザベス・カーターの『折々の詩集』(一七六二)所収のリットルトン卿(一七〇九―一七三三)の詩「——夫人の手稿詩を読んで」では、サッポーターに比してカーターの道徳的優勢が褒めたたえられている。引用最終行の「モンタギュー」は、いわゆるブルーストッキング・サークルの中心的立場にあったエリザベス・モンタギューのことであり、カーターもそのメンバーだった。

Such were the Notes that struck the wond'ring Ear
 Of silent Night, when, on the verdant Banks
 Of *Siloe's* hallow'd Brook, celestial Harps,
 Accorded to seraphic Voices, sung
Glory to God on high, and on the Earth
Peace, and Good-will to Men!—Resume the Lyre
 Chantress divine, and ev'ry *Briton* call
 It's Melody to hear—so shall thy Strains,
 More pow'rful than the Song of *Orpheus*, tame
 The savage Heart of brutal Vice, and bend
 At pure Religion's Shrine the stubborn Knees
 Of bold Impiety—*Greece* shall no more

Of Lesbian Sappho boast, whose wanton Muse,
 Like a false Syren, while she charm'd, seduc'd
 To Guilt and Ruin. For the sacred Head
 Of Britain's Poetess the Virtues twine
 A nobler Wreath, by them from Eden's Grove
 Unfading gather'd, and direct the Hand
 Of Montague to fix it on her Brows. (Lord Lytton, "On Reading Mrs.—'s Poems in Manuscript")

感嘆する耳に聞こえる静寂な夜の調べはこういうものだった。／そのとき、シロエの聖なる小川の青葉の茂った／堤の上で、天上の豎琴が／天使の歌声に合わせてうたっていた、／天にまします神への賛美と地上の平和と人間への親善を！——リラを再び始めよ、／聖なる女性歌手よ。そしてあらゆるブリテン人と呼んでそのメロディーを聴かせよ——そのようにあなたの詩歌は／オルフェウス、「ギリシャ神話。動物・木・岩でさえも魅了した豎琴の名手」の歌よりも力強く、／野蛮な悪徳の獐狂な心をおとなしくさせ、／清らかな宗教の聖堂でずぶとい不敬の頑固な膝を／曲げさせるでしょう。——ギリシヤにはもう二度と／レスボスのサッポーを自慢させはしない。その淫らなミュージックは、／不実なセイレン「ギリシヤ神話。美しい歌声で船乗りを誘い寄せ、船を難破させた半人半鳥の海の精」のように、人を魅惑しながら、／罪と破滅へと誘惑する。ブリテンの女性詩人の／聖なる頭のために、力天使は／エデンの木立からしおれることなく摘んできた／もつと崇高な花冠を編み、彼女の額にそれを載せるように／モンタギューの手を導いてやるのだ。

同じくブルーストッキング・サークルに属していたアンナ・レティシア・エイキン・バーボウルドも、『詩集』(一七七三)に収めた「ロウ夫人への詩歌」において、世紀はじめのエリザベス・シンガー・ロウを「私たちのもつと貞淑なサッポー」と呼んで、同様の賛辞を呈した。

SUCH were the notes our chaster Sappho sung,
 And every Muse dropp'd honey on her tongue.
 Blest shade! How pure a breath of praise was thine,
 Whose spollless life was faultless as thy line:
 In whom each worth and every grace conspire,
 The christian's meekness, and the poet's fire.
 Learn'd without pride, a woman without art;
 The sweetest manners and the gentlest heart. (Barbauld, "Verses on Mrs Rowe," lines 1-8)¹⁸

私たちのもつと貞淑なサッポータチがうたった調べはこんなものだった。／そしてあらゆるミューズが彼女の舌に蜜を落としました。／聖なる影よ！ どれほど清純な称賛のささやきがあったものだったことか。／あなたの汚れない人生はあなたの詩と同じく申し分なかった。／あなたの中であらゆる価値とあらゆる美質が相重なる。／キリスト教徒の柔和さと詩人の炎が。／学識あるのに傲慢ではなく、わびとらしさのない女性、／最もしとやかな物腰と最も穏やかな心。

同詩はロウ夫人が夫の死後隠遁し、敬虔な生活と偽善活動を送ったことを綴ったあと、貞淑な女性詩人の伝統を示す次の言葉で締めくくると。

Bright pattern of thy sex, be thou my Muse;
 Thy gentle sweetness thro' my soul diffuse:
 Let me thy palm, tho' not thy laurel share,
 And copy thee in charity and prayer.
 Tho' for the bard my lines are yet far too faint,
 Yet in my life let me transcribe the saint. ("Verses on Mrs Rowe," lines 39-44)

あなたの性の輝かしいかがみよ、私のミューズになってください。／あなたの優しい柔和さを私の魂に広めてください。／あなたの月桂樹「栄冠」でなくとも、あなたのヤシの木「勝利」を私に分ち合わせてください。／そして慈善と祈りにおいてあなたのまねをさせてください。／詩人として私の詩句ははるかに弱々しいけれども、／死ぬまで聖者を書き写させてください。

ブルーストッキング・サークルの女性作家たちが古代ギリシャよりも現代のイギリスの文学的優勢を示す証拠であるのは、メンバーのハンナ・モア（一七四五—一八三三）にとつてもそうだった。モアの『幸福を探して——牧歌劇』は初版が一七七三年だが、その年のうちに第二版が出版され、翌年には第三版から第五版までいき、翌々年には第六版が出るほど人気があった詩である。興味深いのは、モアが一七七四年の第三版になってはじめて「エピローグ」を追加して、仲間の女性作家たちを擁護していることである。

「エピローグ」は二人の若いレディの会話からなる。第二のレディは、女性は詩を書くことをやめねばならないと言う。なぜなら、男性たちからは、「学がある女性」は怖がられて、避けられるし、同性からも次のような非難が浴びさせられるからだ。

“What!—does she write? A slattern, as I live—

“I wish she'd leave her books, and mend her cloaths,

“I thank my stars I know not verse from pose:

“How well foe'er these learned ladies write

“They seldom act the virtues they receive;

“No useful qualities adorn their lives,

“They make sad Mothers, and still sadder Wives.” (More, *Search after Happiness* 43)

「何ですって！——彼女は書いていますか。確かにふしだらな女です。——／彼女が本を捨てて、服を繕ってくれることを願うわ。／私は自分が韻文と散文の見分けがつかない幸運に感謝します。／これらの学識あるレディたちがいつもどんなに上手に書いても、／彼女たちは自分たちが吟詠する美徳をおこなうことはめったにありません。／彼女たちの人生を飾る有用な素養は何もなく、／彼女たちは嘆かわしい母親になり、そしてさらにもっと嘆かわしい妻になるのです。」

これに対し、第一のレディは、なじみの新旧論争の論理で反論する。

I grant this satire just, in former days,
 When Sappho's and Corinna's tun'd their lays,
 But in our chaster times 'tis no offence,
 When female *virtue* joins with female sense;
 When moral CARTER breathes the strain divine,
 And Aikin's *life* flows faultless as her *line*;
 When all-accomplish'd MONTAGU can spread
 Fresh-gathered laurels round her SHAKESPEARE's head
 When *wit* and *worth* in polish'd Brookes unite,
 And fair MACAULAY claims a Livy's right. (*Search after Happiness* 43-44)

もっと以前の時代、サッポーやコリンナが詩を奏でていた時代には、／この嫌味は正しいと私は認めます。／しかし、私たちの清浄無垢な時代では、それは悪気ではありません。／この時代では、女性の美徳が女性の分別と結合し、／道義をわきまえたカーターが神の詩歌を放ち、／そしてエイキンの人生が彼女の詩と同じように申し分なく流れ、／学識

のあるモンタギューが彼女のシェイクスピアの頭のまわりに／摘んだばかりの月桂樹を広げることができ、／上品なブルックの中で才知と価値が一つになり、／そして美しいマコーリーがリウイウス「ローマの歴史家」の権利を主張しているのです。

イギリスの「清浄無垢な」同時代の典型的な女性作家たちとしてここで挙げられている名前は、エリザベス・カーター、アンナ・レテイシア・エイキン・バーボウルド、エリザベス・モンタギュー、フランシス・ムーア・ブルック、歴史家のキャサリン・マコーリー（一七三二―九二）の五人である。

『マンズリー・レヴュー』第五〇号（一七七四年四月）は、ハンナ・モアの悲劇『頑固な捕虜』（一七七四）への書評の冒頭で、上の五人のうちマコーリーを除く四人と、モア、そして新たに詩人・小説家・劇作家のシャーロット・レノックス（一七三〇―一八〇四）、アイルランド詩人のフランシス・グレヴィル（一七二四―八九）、劇作家・翻訳家・小説家のエリザベス・グリフィス（一七二七頃―九三）、詩人のメアリ・ホエートリー（一七三八―一八二五）を足した総計「九女神」¹⁹のブルーストッキングたちの活躍を自慢する詩を掲載した。

To Greece no more the tuneful maids belong,

Nor the high honours of immortal song;

To MORE, BROOKS, LENOX, AIKIN, CARTER due,

To GREVILLE, GRIFFITH, WHATELEY, MONTAGU!

Theirs the strong genius, theirs the voice divine;

And favouring Phoebus owns the BRITISH NINE. (*Monthly Review* 50 [April 1774]: 243)

美しい調べの乙女たちはもはやギリシャのものではない。／不滅の歌の名誉もギリシャのものではなく、／モア、ブルック、レノックス、エイキン、カーター、／グレヴィル、グリフィス、ホエートリー、モンタギューに与えられるべ



図版 13
リチャード・サミュエル油絵「アポロ神殿の女神たちに扮した肖像画」(「グレートブリテンの九女神」)(1778)。エリザベス・イーガーとルーシー・ペルツ『燦爛たる女性たち』(2008) 60 頁に再録。



図版 14
ページによるリチャード・サミュエルの絵の彫版画「グレートブリテンの九女神」(1777)。エリザベス・イーガーとルーシー・ペルツ『燦爛たる女性たち』(2008) 62 頁に再録。

きなのだ！／強い天分は彼女らのもの、聖なる声も彼女らのもの。／そしてポイボス「詩・音楽・予言を司る太陽神アポロン」はえこひいきしてイギリスの九女神をわがものとする。

一七七四年には、メアリ・スコット（一七五二頃―九三）の『女性の擁護者』も出版された。これはダンカムの『女性讃歌』第二版に挙げられた十五人の「貞淑なミュージズ」のリストを拡大し、バラードの『女性回顧録』に挙げられていた十六世紀のキャサリン・パー（一五一二―四八）から同時代のアンナ・レティシア・エイキン・バーボウルドまで、六〇余名の女性作家たちを擁護することを目論んだ詩である。ただし、レティシア・ピルキングトンに軽く触れることを除いて、ダンカムのいう「淫らなミュージズ」側の名前はない。同詩の最後でダンカムや、「女性の学問の権利」（一七四八）²⁰ という詩の中で女性教育を提唱したトマス・シーワード（一七〇八―九〇）に対して感謝の意を表しているけれども、スコットが改めてここで自分と同じ性の作家たちを擁護するために自らペンをとったのは、創造的活動の評価においていまだにジェンダー差があると考えたからだ。「あるレデイに」と題した序文において、彼女は次のように指摘する。

魂における両性の区別、学問の両性の区別、そして女性にとって適切な徳目という区別についてまでも、これまでどれほど立派な名声を博した作家たちによって言われてきたことであろうか。彼らは、私たちが模倣芸術を学ぶのを許してきたとしても、私たちが専門的な学問の知識をつけるのを禁止してこなかっただろうか。彼らは、真実を冷静に追究する女性よりも、その能力を物憂げに怠惰な状態でさびせておく女性の方を好意的な目で見ていないだろうか。そして、彼らの見解の指図を黙諾することが、女性における分別の唯一の規準であると思われているのではないだろうか。（Mary Scott vi）

と同時に、スコットは現在の文学的状況を見て、女性に対する偏見がなくなる兆しを感じていた。

しかし、男性たちが今私たちの性の能力に関して自分たちの狭い偏見をしきりに得意がっているのと同じくらい、その偏見を公言するのを恥じる時代がくるだろうと、私は心ひそかに思っています。ごく少数のそのような変化を私はずでに見てきています。というのは事実はそうした見解を強力に打ち砕く傾向にあり、最近では、ほとんどあらゆる文芸部門で、女性作家たちが榮譽を担って出現してきているからです。この小品の執筆後も数人が出てきました。世間の評判は、シャボン夫人の「精神の向上についての書簡」やモア嬢の「幸福を探して」というタイトルの優雅な牧歌劇の優れた価値を立証しました。「ボストンのホイートリー氏の黒人召使フィリス・ホイートリーの詩集」やペイター・ノスター・ロウのG・ロビンソンのために印刷された新刊書「あるレディの詩集」も称賛に値する価値をかなり持っています。(Mary Scott vii)

「最近」出現してきた女性作家とは、主としてブルーストッキングたちや彼女たちと親交があった人々である。上の引用には、ハンナ・モアとヘスター・マルソ・シャポーンが挙げられているが、詩の中では、エリザベス・モンタギュー、キャサリン・マコーリー、小説家のセアラ・フィールディング（二七一〇―六八）、随筆家のキャサリン・トルボット、フランシス・グレヴィル、シャーロット・レノックス、エリザベス・グリフィス、メアリ・ホエートリー、アンナ・レティシア・エイキン・バーボウルドにも触れている。その他、上の引用中にはアメリカ出身の黒人詩人フィリス・ホイートリー（一七五三頃―八四）の名前があり、詩の中では、宗教作家のアン・ステイール（二七一七―七八）、コンダクト・ブック作家のセアラ・ペニングトン（二七四〇―八三）などについても言及される。これらのほとんどが、バラード、シバー、コールマンとソートンのテキストに登場していなかった名前であり、女性作家のすそ野の広がりを示しているだろう。

料理本作家のサッポ

ここで本章の第一節で引用した『クリティカル・レビュー』第四四号におけるメアリ・サヴェッジへの書評が七七七年に出たことを思い出したい。古代ギリシヤで名を成した女性作家が詩人のサッポ一人だったに對し、イギリスの一七七〇年代は、確かに、多くの女性作家たちが多種多様な文芸分野に出現していた時代だった。そして年代が下がるにつれて、こうした女性作家たちの活躍は加速度的に拡大していくことになる。しかし、それでもなお、メアリ・スコットがいまだに性差別主義があると指摘したように、ペンと縫い針を両方持たねばならないという女性独特の文芸的公共圏の考えは形を変えて根強く残っていたのである。

『マンズリー・レビュー』第四八卷（二七七三）の一月号と二月号の二回、ウィリアム・ウッドフォール（二七四六一八〇三）によって書かれたバーボウルの『詩集』（二七七三）への書評は、男性に匹敵する女性の創造的能力を賞賛しながらも、女性作家にはなお一層の女性らしさを求めるといふ時代を反映している。書評の対象は前述の「ロウ夫人への詩歌」が収められていた詩集である。ウッドフォールは、一月号では、それを「思想の公正さ、想像力の活力はミルトンやシェイクスピアの作品に次ぐ」（Woodfall 54）と絶賛した。だが、二月号では、「われわれは女性、が姿を見せてほしいと願っていた」と本音をもらす。

われわれは女性、が姿を見せてほしいと願っていた。そして、彼女の莊重な作品の非凡な才能や学識に感服しながらも、もっと優しい小品の感受性や熱情に心が動かされたいと思っていた。エイキン嬢は、ほとんどの女性作家たちと同じように、愛のテーマにおいて、幾分かわれわれを失望させた。女性たちはその喜ばしき熱情によって世界を支配し、それを完全に理解していると思われるのに、女性作家たちの著作で描かれることはめったにない。もしエイキン嬢のような手から女性の心のこの熱情の特性を授けられたのなら、どんなに喜ばしいことであろうか！

(Woodfall 133)

なぜならウッドフォールにとって、両性は本質的に異なっているからだ。

われわれは心からわが国の女性作家たちの優秀さに敬意を表する。だが、その性が識別される時代は来ていない。身体と同じように精神にも性がある。卓越をめぐる競争はこの事実に対する無知から生じており、男でも女でもない混合格種の論争者たちによって双方の側で統御されているのだ。女性は男性と同じようにその種類において完璧である。女性が男性より劣るのは、女性の持ち場を離れ、女性の領域の外で傑出することを目指したときだけである。このことは、日常生活においてだけではなく、芸術や哲学の全分野において、真実である。あらゆる生物にたまに性の誤りのようなものがあるように、この規則にも例外があるかもしれないが、公正な観察者は自然の一定不変性を見て、自然の意図に耳を傾けるのである。(Woodfall 137)

ウッドフォールは本質的な性差論者として女性の詩の望ましいテーマは「愛」であると考えたが、同様の声は女性からも挙がった。ハンナ・モアは『さまざまな主題に関する随筆』(一七七七)の序文において、詩のサブジャンルのジェンダー区分を唱えている。つまり、女性の詩は「緑の牧場や心地よい谷間」たる牧歌や田園歌であるに対し、「パルナツソスの険しい坂」たる「高尚な叙事詩、辛辣な諷刺詩、そして悲劇のミューズのもっと大胆な成功裡の飛翔は、男性の大胆な冒険家たちのために取っておかれていると思える」のだ。前者が「美しく、柔らかく、そして繊細」なら、後者は「崇高、剛気、そして男らしさ」の特徴を示す。さらに前者が「気楽さ、純真、そして清浄」なら、後者は「壮大、威厳、そして力」である。モアにとって、これらの違いは優劣を示すのではない。両者がそれぞれ領域において「その本来の、はつきりした、借り物でない価値」(More, *introduction, Essays* 6-9)で輝くのである。

しかし、このような詩のジャンルやテーマのジェンダー区分は現実の状況とは一致していない。特に女性の出版物数が爆発的に増えた一七八〇年代以降のロマン主義時代、名を馳せた女性たちは男性的な叙事詩や諷刺詩も書いた

し、女性のテーマとして期待されるような愛、教育、家庭的なことだけでなく、政治、戦争、経済、植民地問題、人種問題、反奴隷制なども取り上げた。また、詩の他に戯曲、小説、教育書、政治的・フェミニスト的論文、回顧録なども執筆するというように、一人の女性作家が一つの文芸ジャンルではなく複数のジャンルで活躍し、男性作家たちと同じようにフランス革命や奴隷制などに関する公の意見を形成するのに貢献した女性たちもいた。²¹それ故、一七八五年には、ジョセフ・タワーズ（一七三七—九九）は匿名で出版した『女性たちについての対話』中の第七の対話で、「この国では、前の時代に、非常に天分に富んだ文筆をたしなむ女性たちがいた。しかし、現在のようにイングラントにこれほど多くの女性作家たちがいて、同時にこれほど議論の余地のない業績を挙げた時代はかつてなかった」(Towers 152)と称えた。そして、これまで馴染みの名前に加えて、新たに詩人のアンナ・シーワード、詩人・小説家・翻訳家のヘレン・マライア・ウィリアムズ（一七六一頃—一八二七）、小説家・劇作家のフランシス・バーニー（一七五二—一八四〇）、劇作家・詩人のハンナ・カウリー（一七四三—一八〇九）などを挙げている。一七九五年になると、マライア・エッジワース（一七六七—一八四九）が『文筆をたしなむ女性たちへの手紙』の中で、「文筆をたしなむ女性たちの最近の数は数年前よりもはるかに多い。彼女たちは社会の中で一つの階級を形成し、公衆の目を満足させる程度高い地位とふさわしい評判を得ている」(Edgeworth, *Letters 7*)、²²ことを誇るまでになった。

ところが、それでも女性作家に対するジェンダー区分の評価は容易には消え去らなかつた。男性と同等の女性の権利の擁護を唱えたメアリ・ウルストンクラフトの死後、保守派のリチャード・ポルウェル（一七六〇—一八三八）は『女らしさを失った女たち』（一七九八）において、ウルストンクラフトを頭とする「アマゾン軍団」の女性作家たち——アンナ・レティシア・エイキン・バーボウルド、メアリ・ロビンソン、詩人・小説家のシャーロット・スミス（一七四九—一八〇六）、ヘレン・マライア・ウィリアムズ、詩人のアン・イヤーズリー（一七五二—一八〇六）、メアリ・ヘイズ——を「自然の法」に背く「女らしさを失った女たち」であり、性的に奔放な女性たちとして痛烈に批判した。その一方で、ハンナ・モア派のエリザベス・モンタギュー、エリザベス・カーター、ヘスター・マルソ・シャポ

ーン、アンナ・シーワード、ヘスター・リンチ・スレール・ピオッツイ、フランシス・バーニー、小説家・詩人のアン・ラドクリフ（一七六四—一八二三）を女性の慎ましさを失っていない作家として称賛した。女性作家をジェンダーと道徳的美徳の言説で是認される側と否認される側に腑分けするやり方は相変わらず続いていたのである。

ポルウェルの『女らしさを失った女たち』が出版された年の十二月には、『マンズリー・レヴュー』の編者ラルフ・グリフィス（一七二〇頃—一八〇三）が、新シリーズの第二七巻に掲載したエリザベス・ムーデイ（一八一四没）の『詩的な些細なこと』（一七九八）への書評において、「独創的で学識のあるご婦人方の時代」の到来を告げた。

われわれが生きている洗練された今の時代は、独創的で学識のあるご婦人方の時代と命名してもよいかもしれない。彼女たちは文芸の優雅な方の部門で非常に優れているので、われわれは躊躇なく次の結論を下すことができる。すなわち、両性間の長年にわたって世間を騒がした論争はついに終結を迎えたのであり、女性が生まれながらの能力において男性に劣っているのかわいのか、あるいは男性よりも精神的な業績に秀でることができないのかというのはいや問題にならないのである。（Griffiths 442）

一瞥すると、グリフィスは男女に知的な能力差はなくなったことを称えているようだ。しかしながら、女性が優秀なのは「文芸の優雅な方の部門」であると述べているように、彼もまた文芸的公共圏内のジェンダー区分を前提としている。そして、上記の引用のあと、書評の対象のムーデイを「わが国の卓越した女性詩人たちのリスト」に加えるときでも、詩集のタイトルを『些細なこと』にした彼女の「慎み深さ」（Griffiths 442）ところが気に入っているのである。ちなみに、グリフィスはここで、前に引用したリットルトン卿のように、「Poetess」（女性詩人）の語を用いて、「Poet」（男性詩人）と一線を引いている。

ムーデイは今日ではほとんど知られていない詩人だが、グリフィスと親しかった夫のクリストファー・レイク・ムーデイ（一七五三—一八一五）とともに、『マンズリー・レヴュー』の定期的な投稿者だった。それ故グリフィスの褒

め言葉もさもありなんと思われる。だが、彼女自身は『詩的な些細なこと』に収めた一編の詩の中で、グリフィスに褒められるような女性詩人像を嘲笑の対象にしていた。そのタイトルは、非常に興味深いことに、「サッポーは彼女の本を焼き、料理法を磨く」である。本章を締めるにあたり、最後にこの嘲笑詩を見てみたい。

詩人の「私」はまず大好きなイタリア詩人——グアリーニ、ダンテ、ペトラルカ、アリオスト、タッソーの本を全部焼き払ってしまう。そして「料理法の女神」に次のような願い事をする。

Goddess of Culinary Art,

Now take possession of my heart!

Teach me more winning arts to try;

To salt the ham, to mix the pie;

To make the paste both light and thin,

To smooth it with a rolling-pin; (Moody, "Sappho Burns her Books and Cultivates the Culinary Arts," lines 17-22)²⁸

料理法の女神よ／さあ、私の心を捕らえてください！／私にもっと人を引きつける術を私に教えてください。／豚のもも肉を塩漬けにし、パイを混ぜ、／生地をふわふわに薄くして、／麵棒で滑らかにする術を。

なぜなら、自分の死後残るものは男性と同じ領域の芸術(詩)ではなく、女性本来の領域の芸術(料理法)だけである(こと)を見とおしているからである。

Now fancy soars to future times,

When all extinct are Sappho's rhymes;

When none but cooks applaud her name,

And naught but recipes her fame. ("Sappho Burns her Books and Cultivates the Culinary Arts," lines 37-40)

今や空想は未来の時へと飛翔する。／そのとき、サッポータチの詩はすべて消滅し、／料理人以外誰も彼女の名前を褒めそやさない。／そしてレシピ以外何も彼女の名声ではない。

ムーディはここで一人称ではなく三人称の「サッポータチ」として語り、詩の代わりに料理法を書くことにより、愚かにも名前も名声も失ってしまうであろう自分自身の未来を描く。そして、そのように十八世紀末の女性作家の置かれた文学的状况を皮肉りながら、古代ギリシャのサッポータチが今や、男性に匹敵する詩的能力を持っていたことで有名な詩人像から、女性固有の文芸領域である料理本作家に変容させられる運命にあることも暗示している。十八世紀末になつて、ペンと縫い針で象徴される女性の文芸的公共圏に、サッポータチも引きずり込まれたのである。

◆◆第七章◆◆

アンナ・シーワードとサッポアの伝統

ブリテンのサッポア

率直さと哀れみと審美眼を持ってブリテンのサッポアを称えてください。「彼女の結ばれていない髪の毛は風に揺れ」、アポロン神殿に奉納の堅琴を掛けているところです。私はパオンのような者がいたことは知っています。彼が亡くなったあと、サッポアは彼の未亡人に年百ポンド差し出すとともに、娘の扶養も十分しました。

(Jane West to Bishop Percy, qtd. in Ashmun 276-77)

このように作家ジェーン・ウエスト（一七五八―一八五二）は、『古英詩拾遺』（一七六五）の編纂者でドロモアの主教トマス・パーシー（一七二九―一八一二）に宛てた一八一一年八月二二日付けの手紙の中で、アンナ・シーワードを「ブリテンのサッポア」と呼んだ。

一七四二年、ダービーシア州のイームでトマス・シーワードの長女として生まれたアンナ・シーワードは、一七五〇年に父親がスタフォードシア州のリッチフィールド大聖堂参事会員になって以来、一八〇九年に亡くなるまでのほとんどの生涯をリッチフィールドで送った。シーワード家の友人で医師のエラズマス・ダーウィンに鼓舞されて、彼女は幼い頃から詩を書き始め、やがて当代で最も高名な女性詩人の一人になる。ロマン主義時代の多くの女性詩人たちが小説も書いたに対し、終始詩人として通じたシーワードにつけられた異名は多い。最も有名な異名は「リッチフ

「イーランドの白鳥」で、明らかに「エイボンの白鳥」たるシェイクスピアになぞらえたものだ。その他、存命中には、「ブリテンの詩人女王」とか「哀歌のミューズ^{エレジ}」としても賞賛された。だが、これらの異名よりもっと注目すべきは、ウエストがシーワードの死後彼女の詩的才能を賞賛するために授けた「ブリテンのサッポー」という称号である。

古代ギリシャの最初の抒情詩人として有名なサッポーの名前は、西洋の長い歴史の間、現代に至るまで、各国で幾度となく女性詩人たちに授けられてきた。イギリスのロマン主義時代では、「サッポー」として人口に膾炙していた女性詩人は、シーワードではなくメアリ・ロビンソンであった。ロビンソンは最初の詩集を出版して以来雑誌や新聞でその称号で賞賛され続けた。一八〇一年に死後出版された『故ロビンソン夫人の回顧録および遺稿集』や一八〇六年に出版されたロビンソンの三巻からなる詩集にも、彼女をサッポーと呼ぶ賛辞の詩が多く掲載されている。一方、シーワードがサッポーと呼ばれたのはウエストの私信の中でだけであって、公の場ではない。それにもかかわらず、ウエストからの上述の引用は次の二つの点で軽視すべきではないだろう。

まず第一に、ウエストは、古代ローマ詩人オウィディウスが『女主人公たち』中の第十五番目の「パオーンに宛てたサッポーの手紙」で描いたようなサッポーのイメージを喚起することによって、シーワードを異性愛者として描いていることである。オウィディウスのサッポーは、年下の美青年の渡し守パオーンに失恋したため、レフカスの岩上から海へと身を投げて自殺しようとする直前に、彼への愛を切々とうたう。このサッポーとパオーンの話は、アレグザンダー・ポープによって英訳された詩（一七二二）を通して、十八世紀のイギリスでかなり普及していた。第二の、もっと注目すべき点としては、オウィディウスやポープがサッポーを同性愛者からの転向者として描いていることである。サッポーはパオーンという一人の男に夢中になる前に、多くの女性たちを愛していた。しかし、パオーンに恋に落ちた今、女性たちにかつて感じた熱情を「私の罪深き愛」(Sappho to Phaon, line 18) (傍点引用者)として退ける。彼らはこのようにサッポーの同性愛を明らかにするが、同時にそれを後悔すべき過去の出来事として片づけてしま

う。となれば、ウエストも同じようにシーワードの同性愛的傾向を退けたと考えられないだろうか。

上述の手紙の中で「パオン」と呼ばれる男性は、おそらくリッチフィールド大聖堂の聖歌助手であるジョン・サヴィルを指すであろう。パーシー主教の意見では、シーワードはサヴィルに「不適切な愛着」(Bishop Percy to Jane West, qtd. in Ashmun 185, 275)を持っていた。二〇世紀初期の伝記作家マーガレット・アシユマンによれば、独身のシーワードと既婚者であるが別居していたサヴィルの関係は一七七〇年代初期から彼が亡くなった一八〇三年まで続き、近隣にうわさが立っていた(Ashmun 179-87)。そしてサヴィルの死後、シーワードは彼の借金を清算し、「彼の娘と孫娘の安楽な生活のためにいろいろ手配した」(Ashmun 239-40)と云う。

アシユマンはまた二〇代はじめのシーワードにT氏やリチャード・ヴァイス騎兵隊騎手などの求婚者たちがいたことも指摘した(Ashmun 179-87, 25-29)。生涯独身で、父親の家から離れなかった女性に、言い寄る男性や結婚を申し込む男性が一人や二人いたとしても何の不思議もない。しかしながら、シーワードの詩や手紙を見ると、彼女が人生の中で最も愛した人は実のところ、サヴィルではなく、また他のどの男性でもなく、養妹のホノーラ・スニードだったことがよくわかる。ホノーラがシーワード家の養女になったのは一七五五年、五歳のときだった。アンナの実の妹のセイラが一七六三年に亡くなると、九歳違いのアンナとホノーラは非常に強い愛情のきずなで結ばれるようになる。しかし、ホノーラは自分の父親の家に戻ってから二年後の一七七三年に、アイルランドの発明家・教育家リチャード・ラヴェル・エッジワース(一七四四―一八一七)と結婚した。彼は五ヶ月前に最初の妻を亡くしたばかりで、その妻との間にできた子どもが小説家のマライア・エッジワース(一七六七―一八四九)である。³ホノーラは結婚してわずか七年後の一七八〇年に、肺病で突然この世を去った。シーワードは数多くの詩でホノーラに対する情熱的な愛情や彼女を失った深い悲しみをうたっている。ホノーラの死後三〇年たち、自分自身の死期が近いときになってもなお、「ホノーラよ、もう二度と見る事ができないのね!／私の魂を励ましてくれたあなたの感情豊かな瞳を」

〔“To Remembrance,” lines 66-67〕と嘆き悲しんでいた。

シーワードが現代的な意味でのレスビアンかどうかは不明である。だが、ホノーラの死を嘆いている間、彼女は少なくとも四人の他の女性たち——エリザベス・コーンウォリス、モンペッソン夫人、ペネロッペ・ウエストン、ファーン嬢——と親密な愛情関係にあり、彼女たちについての詩も書いた。「クラリッサ」と呼んだコーンウォリスとの関係については、一八〇四年に次のような意味深長な言葉を残してもいる。「それが発覚したら、あたかも私たちがそれぞれ違った性であり、私たちの交際が罪深いかのように、二人ともひどく苦しめられ、みじめになるにちがいないりません」(Pearson 275)。シーワードはまたいわゆる「スランゴスレンの貴婦人たち」——ウェールズのスランゴスレンで五〇年以上も一緒に暮らしたアイルランドの貴族出身の二人の女性、エレナー・バトラーとセアラ・ポンソンビー——とも親しく、彼女たちを称える詩をいくつか書いた。彼女たちの家プラス・ネウイズをはじめ訪ねた次の年に発表した「スランゴスレン溪谷」(一七九六)は、最も長く、最も有名な詩である。⁴

女性への愛をうたったシーワードの詩は同時代の人々によって発禁処分が付されることもなければ、不道德だと批判されることもなかった。女性への愛が熱烈に表現されていたけれども、それはいつも友情と見なされていたからだ。このような愛は、エリザベス・メーヴァーが一九七一年出版の「スランゴスレンの貴婦人たちの伝記で使用して以来」、「ロマンティックな友愛」という十八世紀に流行った用語で言及されている。メーヴァーは、スランゴスレンの貴婦人たちの関係は「私たちが現代の用語で結婚と見なすようなもの」(Mavor, *Ladies xvii*)だったけれども、同時代の多くの人々はそれをロマンティックな友愛として賞賛したと論じた。フェダマンは『男性の愛を超えて』(一九八一)でロマンティックな友愛という用語を二〇世紀以前の中・上流階級の女性同士の熱烈な親密関係を表すのに適用し、二〇世紀以前には女性間の愛は性的に無垢な関係であると見なされていたので、異性愛社会の中の女性の美德の枠内で広く許容され、尊敬すらされていたのだと主張した。「ロマンティックな友愛に反対してやめさせようとはすることはめったになかったようだ」とフェダマンはいう。なぜなら、「ロマンティックな友愛関係の女性たちは、キス、愛撫、抱き締めなどを含め、肉欲にふけることすら、生殖に関係あるとはとてもありそうになかったので、性に対し

最も保守的な時代でも、お互いの肉体を愛でる言葉をはっきり口に出すことが許されていた」からである。また、このような関係が「邪悪もしくは病氣」とか「レスビアン」として定義されるようになったのはフロイト以後の時代だからだ (Faderman, *Surpassing* 77, 80, 411-42)。

フェダマンの画期的な研究書のおかげで、シーワードのホノーラについての詩やスランゴスレンの貴婦人たちにについての詩は、ステイヴン・クート編集の古代から現代までの同性愛詩のアンソロジー『同性愛詩のペンギンブック』(一九八三)、リリアン・フェダマン編集の十七世紀から現代までの女性同性愛詩のアンソロジー『クローイ・プラス・オリヴィア』(一九九四)、エマ・ドノヒュー編集の『女性間の詩』(一九九七)、テリー・キャッスル編集の『女性同性愛文学』(二〇〇三)などに収められるようになった。⁵ それにもかかわらず、ロマン主義時代の文学批評家たちは依然として「エヴァンダーとエミラ」や『ルイーザ』(二七八四)のような異性愛詩を女性詩人の男性との恋愛の反映として解釈する傾向にある。⁶ また、ロマン主義時代の女性詩人の発掘作業の一環として一九九〇年代中頃から新しいアンソロジーが陸続と出版されたが、その編者たちはシーワードが女性同性愛詩人である可能性について全くと言っていいほど考えていない。彼らはアンソロジー掲載の詩として、ほとんどの場合、女性への愛をうたっている詩よりも自然描写などの詩を多く選び、伝記や脚注や注解では、シーワードの人生における同性愛の話を削除するか、ホノーラとの関係を単なる友情として提示し、ホノーラについての詩もそのような友情の詩として紹介している。⁷ 最も奇妙なのは、ポーラ・R・フェルドマン編集の『ロマン主義時代のイギリス女性詩人選集』(一九九七)である。どのアンソロジーよりもホノーラについての詩を多く収録しているにもかかわらず、頭注欄では二〇世紀初頭の伝記作家アシュマンの記述に従い、異性愛者としてのシーワードを印象づけているのだ。⁸ 結局、ロマン主義時代に関する最近の出版物で、シーワードを「女性同性愛」の項で扱っているのは、イアン・マッカルマン編集の『オックスフォード版ロマン主義時代必携』(一九九九)だけという現状である (Cara Tute, "Sapphism," *McCalman* 688-89)。シーワードの多くの詩にはホノーラへの愛が非常に明らかなのに、どうして多くの文学批評家たちはその同性愛的な意

味を否定したり見逃したりしてきたのだろうか。女性同性愛の詩に対する偏見でないとしたら、フェダマンが現代の性的な女性同性愛とそれ以前の時代の性的でないロマンティックな友愛を区別したため、皮肉にも後者の関係が普通の友情関係のように聞こえるからではないだろうか。

その間に、女性同性愛史研究はますます進展している。同性との性的な関係を克明に記録した十九世紀はじめのアン・リスターの日記が一九八一年にヘレナ・ホイットブレッドによって発掘され、一九八八年と一九九二年に出版されたこともあって、一九九〇年代に入ると、フェダマンの理論は他の歴史家たちによって異論を唱えられるようになった。特に、エマ・ドノヒューは『女性間の情念』(一九九三)において、王政復古時代から十九世紀はじめまでの多種多様な女性同性愛文化や女性同性愛者(および両性愛者)——性的でない女性間のロマンティックな友愛から明らかに性的な関係まで——を明らかにし、「ロマンティックな友愛は支配的なパラダイムではなく、ほんの一部にすぎなく」(Donoghue, *Passions* 268)と断言している。アリソン・オーラムとアンマリ・ターンブルも、『女性同性愛史原典資料集』(二〇〇一)の序文において、ロマンティックな友愛を女性同性愛の原型の一つと見なした(Oram and Turnbull 50)。また、ティム・ヒッチコックは『イギリスのセクシュアリティ——一七〇〇年から一八〇〇年まで』(一九九七)で、「多くの人々にとって、ロマンティックな友愛はただ単に肉体的な愛の顔だった」(Hitchcock 87)と述べている。スランゴスレンの貴婦人たちのように、同一カップルがある時はロマンティックな友愛の理想として見なされ、ある時は「プラトニックでない」(Lyster, *I Know* 210)関係だと疑られるケースもあった。従って、フェダマンはホノーラについてのシーワードの詩を性的でないロマンティックな友愛の紛れもない証拠であるかのように読んでいるけれども、われわれは、ドノヒューが言うように、「ロマンティックな友愛の支配的なイデオロギーの説明——すなわち、性的でなく、道徳的に気高く、男性の権力にとって脅威でないこと——と、女性間のそのような繋がり

の現実との間」(Donoghue, *Passions* 109)を区別する必要があるだろう。ドノヒューはまた、女性間の愛の詩のアンソロジーの序文の中で、ロマンティックな友愛とは「特定の、性的でない種類の愛ではなくて、愛を表現するため

の文学的なコンヴェンション」(Donoghue, *Poems xxvii*)として捉えることができる。述べている。それでは、シーワードは詩の中でどのようにホノーラへの愛を表現したのであろうか。本章では、それを詳しく検証することによって、彼女が文字通り「ブリテンのサッポー」——最初の女性同性愛詩として有名なサッポーの断篇詩の伝統を受け継ぐ女性詩人——であったことを明らかにしたい。

喪失した愛の詩

メアリ・ロビンソンと違って、シーワードはサッポーについて直接言及したものを残していない。だが、おそらくサッポーの断篇詩や名声やポープの詩「パオーンに宛てたサッポーの手紙」についてはよく知っていただろう。というのは、彼女は早熟にも三歳のときに、父親から「ミルトン、シェイクスピア、そしてそのあとのイギリスの作家たち、特にアン女王時代の作家たち」(Ashmun 8)を教わったからだ。彼女が当時としては珍しいほど教養のある女性になったのは読書によってだった。彼女が飼っていた雌犬の名前が「サッポー」(Ashmun 180)であるのも決して偶然ではないだろう。さらにまた、ある詩の中で、シーワードはホノーラに「私のレスビア」(“Sonnet IX,” line 1)と呼びかけている。「レスビア」はレスポスのサッポーを想起させる名である。古代ローマの抒情詩人カトゥルスは「レスビア」という名前の愛人に宛てた多くの猥雑な詩を書いた。そのうちの一篇の「51番」(“Ille mi par esse deo videtur”)は、サッポーの「断篇31」のリライトで、語り手のジェンダーを女性から男性に変えている。カトゥルスと同じように、後世の作家たちもしばしば「レスビア」を異性愛者サッポーと結びつけた。たとえば、匿名作家の詩『レスビア——一つの物語』(一七五六)では、サッポーは十五歳の魅力的なレスビアとして登場し、男性に容易に誘惑されて、それを知った父親に「売女」と叫ばれ、母親に「もうだめだわー」(Lashua 12)と嘆かれた。『サッポーとパオーン』(二七九六)においてサッポーを完全に異性愛者化したメアリ・ロビンソンも「レスビアと彼女の恋人」

という詩を書いた。それは男性の恋人の死を嘆くサッポールの物語である。シーワードはこれらの作家たちと全く違って、詩人／語り手のジェンダーが女性であるのを隠そうと決してしないで、「レスビア」に向かって、「あなたの役割は／人生の主たる天恵の中で大きいのだから」(“Sonnet IX,” lines 6-7)、「ずっと自分と一緒にいてくれるよう強く望んでいるのである。

オウィディウス（とポープ）のサッポールが愛する女性たちを「私の詩のテーマ、そして私の情熱の対象」(Pope, “Sappho to Phaon,” line 233)と見なしたように、ホノーラはシーワードのミューズであり、詩の主題だった。しかし、彼女のサッポールと違って、シーワードは一人の男性のために詩を書くのをやめることはしなかったし、ホノーラを愛するのをやめることもなかった。彼女がホノーラについての詩を書いたのは驚くほど長い期間で、一七六〇年代後期から一八〇九年に亡くなる直前までに及ぶ。大多数の詩は巧妙にサッポールの「断篇31」に固有の三角関係を描くが、サッポールの詩に見られる愛欲的で熱烈な傾向、すなわちジョゼフ・アディソンが読者にとって読むにはあまりにも「危険」すぎると見なした「魅惑的な愛情と恍惚」(Joseph Addison 2: 366)のような表現は、シーワードの詩にはない。しかし、もしサッポールの詩が、古典学者ベイジ・デュボイスが言うように、「つかまえてどころのない、錯覚を起こさせる断片的な言葉のネットの中で不在の人、欲望を覚える相手を作り出すために書く」(DuBois 52)という欲望で動機づけられているとするならば、シーワードの詩も同じように不在の愛する人、失われた時間、失われた喜びへの熱烈な切望や思慕によって作られていると言えるのである。

ホノーラが結婚する随分前から、喪失の感覚はシーワードの詩に充満していた。最も初期の詩の一つ「ホノーラ、哀歌」は、ホノーラがイングランド西部のシュロップシアに一ヶ月間滞在するためにリッチフィールドを離れた一七六九年五月に書かれた。同詩は詩人の大げさな嘆きの声で始まる。「ホノーラが逃げた。私は彼女の大好きな景色を探している、／あわただしい足取りで。彼女にそこで会えるから。」それからホノーラの「愛しい変わらぬ形象」を捉えようとする。それは「アンナの愛のように鮮やかで、完璧な」(“Honora, An Elegy,” lines 1-2, 18, 32) 形象^{イメージ}である。

「ホノーラ・スニード嬢への書簡、一七七二年五月」は、ホノーラが実父の家に戻った一七七一年のあとに書かれた詩である。詩人はこの「緑の人里離れた場所」に一人座り、「私の魂の妹」の喪失を嘆く。「あなたの笑みはもう二度と私の滅入った心を元気づけない。／あなたの言葉も私の耳にもう響いてこない。」それ故、彼女は「そこに佇む。あらゆるものが／あの不在の乙女そっくりに装っているように思える場所に。／ここでは木陰や芝生が彼女の特徴や形象を伝える。／ああこんなにも遠くにあり、こんなにも近くにもあるものを！」（“Epistle to Miss Honora Sneyd, May 1772,” lines 15, 35, 11-12, 49-52）。

ホノーラの結婚前後の時期には、もっと深い喪失感と消すことのできない悲しみが表現される。「過ぎ去った時間、一七七三年一月作」は同年七月の結婚を予期して作られ、『スランゴスレン溪谷およびその他の詩』（一七九六）の中に収められて出版された。¹⁰この詩の中で、シーワードは「戻れ、幸いなる時よ！」（“Time Past, Written Jan. 1773,” line 1）と叫ぶ。しかし、彼女は知っている。暖炉のそばで「私の愛するホノーラ」と一緒に過ごした、あの陰鬱な冬の夕べを二度と取り戻すことができないのを。

Affection, —Friendship, —Sympathy, —your throne
Is winter's glowing hearth; —and ye were ours,
Thy smile, HONORA, made them all our own.
Where are they now? —alas! their choicest powers
Faded at thy retreat; —for thou art gone,
And many a dark, long eve I sigh alone,
In thrill'd remembrance of the vanish'd hours,
When storms were dearer than the balmy gales,
And the grey barren fields than green luxuriant vales. (“Time Past,” lines 28-36)

愛情——友情——共感——あなたの玉座は／冬の赤々と燃える暖炉。——そしてあなたは私たちのもの。／ホノーラよ、あなたの笑みはそれらをみな私たちのものにした。／それらは今どこにあるのだろうか？——ああ、それら選り抜きの力は／あなたがいなくなると衰えてしまった。——あなたが行ってしまったから。／そしてたくさんの暗い、長い夕べを私は一人で嘆く。／うららかな微風よりも嵐の方が好ましく、／緑の鬱蒼と茂った谷間よりも灰色の荒野の方が大切だった／消え去った時間を、身震いしつつ思い出しながら。

シーワードの失われた愛はソネット連歌でも表現される。ペトルルカ以来ソネット形式の詩は主に異性愛関係をうたってきたので、その形式をシーワードが女性への愛を描くために用いたことは注目すべきである。シーワードのソネット連歌はホノーラの結婚直前から彼女の死後何年も経るまでの間書かれ、他のソネットとともに一七九九年に『*やまびなまな*主題の独創的なソネット集』として出版された。

「ソネット10、ホノーラ・スニードに寄せて。一七七三年四月」では、詩人はホノーラの心変わり——「私がある中に住んでいる暖かい愛のまなざしの代わりに、／冷たい挨拶が私を迎えるに違いないとき」——を恐れる。そして次のように嘆く。

... I could not bear

Such dire eclipse of thy soul-cheering rays;

I could not learn my struggling heart to tear

From thy loved form, that thro' my memory strays;

Nor in the pale horizon of despair

Endure the wintry and the darken'd days. ("Sonnet X. To Honora Sneyd. April 1773," lines 9-14)

私は耐えることができなかつた、／人を元気づけるあなたの光線がそのように陰るのを。／私は自分の身もたえす心に教えることはできなかつた、／私の記憶の中でさまよっているあなたの愛しい姿を引きはがすことを。／また絶望の青白い地平線で、／冬のように寒い、暗い日々耐えることもできなかつた。

結婚した同じ月に書かれたいくつかのソネットでは、「誓った愛が冷たい軽蔑に変わる」(“Sonnet XII, July 1773,” line 10)と嘆いただけではなかつた。「恩知らず！ 私たちがかわいがって愛したあの姿で／こんなひどいことをすばやくするなんて！」(“Sonnet XIV, July 1773,” lines 1-2)とホノーラを責める。しかし、「ソネット 19、——へ寄せつては、「さらば、偽りの友よ！——私たちの愛の場面は終わった！」と言っているにもかかわらず、二人がいつか再び会うだろうと何かすかな希望をまだいだいている。

O! when we meet, — (to meet we're destin'd, try
To avoid it as thou may'st) on either brow,
Nor in the stealing consciousness of eye,
Be seen the slightest trace of what, or how
We once were to each other; — (nor one sigh
Flatter with weak regret a broken vow! (“Sonnet XIX, To —,” lines 9-14)

ああ！ 私たちが会うとき——（私たちは会う運命なの。／その運命を避けることができるならやってみなさい。）二人の表情に／私たちがかつてお互いに何であったのか、どのようであったのか、／ほんのかすかでも跡が浮かんでいるのが、／こっそり盗み見る目に、見られませんが！——誓いを破ったことを愚鈍にも後悔し、嘆息をもらしませぬように！

再会の期待は、その後、ホノーラの早すぎる死によって完全に打ち砕かれた。シーワードはこの時点まで自分から愛するホノーラを奪ったエッジワースについて何も語っていなかったが、今や彼を厳しく批判し始める。「ソネット 31、疎遠になった友のあの世へ旅立ちつつある魂に寄せて」では、エッジワースの冷血さを強調する。彼の「目は陽光に輝く、／あなたの命が急速に引き潮になっているにもかかわらず。」（中略）沈黙の悲哀でうなだれるべき者が／俳優について熱弁をふるい、趣味に決定を下しているのだ」（“Sonnet XXXI. To the Departing Spirit of an Alienated Friend,” lines 11–14）。実際のところは、エッジワースはシーワードが批判するように残酷ではなく、ホノーラの病気を非常に心配し、ロンドンの医者やリッチフィールドのエラスマス・ダーウィンなどに診察してもらっていた（Kelly, introduction, *Anna Seward* xv）。それにもかかわらず、「ソネット 32、前のソネットの主題の続き」において、シーワードはホノーラの死を彼のせいだと非難し続ける。彼との結婚がホノーラの死を早め、ホノーラを永遠に失うことになったからだ。

Behold him now his genuine colours wear,
That specious false-one, by whose cruel wiles
I lost thy amity; saw thy dear smiles
Eclipse'd; those smiles, that used my heart to cheer,
Wak'd by thy grateful sense of many a year
When rose thy youth, by Friendship's pleasing toils
Cultured;—but Dying!—O! for ever fade
The angry fires,—Each thought, that might upbraid
Thy broken faith, which yet my soul deplores,
Now as eternally is past and gone

As are the interesting, the happy hours,
 Days, years we shared together. They are flown!
 Yet long must I lament thy hapless doom,
 Thy lavish'd life and early-hasten'd tomb. ("Sonnet XXXII. Subject of the Preceding Sonnet Continued")

見よ、彼は今はじめて本性をあらわす。／あのまことしやかな不実者。彼のあこぎな手管で、／私はあなたとの交友を失い、あなたのかわいい笑みに／影がさすのを見た。私の心を励ましてくれたその笑みは、／あなたの長年の感謝の気持ちから起こり、／青春時代には、友情の心地よい拘束によって／養われたものだった。——しかし、今にも消えそうになっている！——おお！ というのは、怒りの激情は／いつも薄れるからだ。——あなたが誓いを破ったことを／私の魂はまだ嘆き悲しんでいるが、それを厳しく非難したい思いはみな、／今や永遠に終わってしまった。／私たちが一緒に過ごした面白く幸せな時間、／日々、年月のように。それらは飛ぶように過ぎてしまった！／しかし、私はこの先も長い間嘆き悲しむに違いない、／あなたの不幸な運命、あなたの豊かな人生と早められた墓を。

このソネットの最後の二行が示すとおり、シーワードはホノーラを哀悼し続けた。「ソネット33、一七八〇年六月」では、「夢の精」に向かって、「ホノーラを私の目の前に現してください」「彼女のきれいな顔を、ああ、それを私の魂に見せてください！」(“Sonnet XXXIII. June 1780,” lines 10-11, 14)と懇願している。「ソネット44」では、「恍惚とした瞑想」に「ホノーラの笑顔、若さ、美しさ、優しさが輝いていたときの／彼女の姿」(“Sonnet XLIV,” lines 5-6)を取り戻してくれと頼んでいる。

シーワードがこのようにホノーラへの愛に忠実だったに対し、エッジワースは彼女の死後八ヶ月でその妹のエリザベスと三度目の結婚をした。シーワードにとって、これは彼の愛が気まぐれなことを示す証左だったに違いない。「眠りの守り神への祈り、一七八七年十月」では、ホノーラの墓が六年間もの間「不実な愛によって見捨てられ、忘れられてゐる」(“Invocation to the Genius of Slumber, Written, Oct. 1787,” line 46)と指摘する。

私の愛の幻影

シーワードの深い喪失感、以上のような明らかに自伝的な詩だけではなく、『アンドレ少佐の死を悼む哀悼詩』においても示される。イギリス軍人ジョン・アンドレ（一七五〇—一八〇）が一七八〇年十月二日にアメリカで不名誉にもスパイとして処刑された事件は、当時イギリス国内で一大センセーションを巻き起こしていた。彼の処刑の翌年の一七八一年に出版された『アンドレ少佐の死を悼む哀悼詩』は、一七八〇年出版の『クック船長の死を悼む哀歌』とともに、シーワードの名声を確認たるものにした詩である。たとえば、賞賛者の一人ウィリアム・ヘイリー（一七四五—一八二〇）は、「シーワード嬢に寄せて」という献詩で、彼女を「哀歌のミュージズ」と呼び、「こんなにも優しくうたわれた死者たち」(Hayley, "To Miss Seward. Impromptu," line 10, 26)を羨んでいた。

アンドレはシーワードの知人であり、短期間だがホノーラの恋人であった。彼の処刑はホノーラの死の数ヶ月前におこなわれた。『アンドレ少佐』で、シーワードはアンドレとホノーラの恋愛を描き、彼らはひそかに婚約していた（「誓った愛の純潔な絆」）が、アンドレに金がないためホノーラの父親（「親の権力」）によって反対されたのだと仄めかす (*Monody on Major Andre*, lines 107-08)。これは金銭ずくの結婚に対するシーワードの批判の一つの表れである。¹²しかし、ここでそれよりもっと注目すべきは、シーワードが二人の恋愛を誇張して描いていることだ。すなわち、ホノーラの結婚の噂を聞いて、アンドレは陸軍に入隊し、その結果処刑へと至ってしまったのだという。事実はそのようではなかった。彼はホノーラの結婚の二年前の一七七一年に、失恋のせいではなく、会計係の仕事に飽きたから陸軍に入隊したのである (Kelly, introductory note to *Monody on Major Andre*, *Anna Seward* 58)。エッジワースの描写のときと同じく、シーワードはここでもアンドレの悲恋を脚色している。それはおそらく自分自身の喪失感を描くためであろう。アンドレがホノーラを嘆くのを辿りながら、シーワードは同時に自分自身の悲しみを詳述する。アンドレはホノーラの細密画を二枚、一枚は自分のため、もう一枚はシーワード（彼女はアンドレによって「ジュリア」と

呼ばれた)のために描いた。その細密画に言及して、シーワードは次のように嘆き悲しむ。

Blest pencil! by kind fate ordain'd to save
 HONORA'S semblance from her early grave.
 Oh! while on JULIA'S arm it sweetly smiles,
 And each lorn thought, each long regret beguiles,
 Fondly she weeps the hand, which form'd the spell,
 Now shroudless mould'ring in its earthy cell! (*Monody on Major Andre*, lines 57-62)

聖なる鉛筆よ！ 情け深い運命によって／ホノーラの似姿を彼女の早すぎる墓所から救い出すよう定められたものよ。／おお！ それがジュリアの腕の上でにこやかに微笑み、／孤独な思い、長い哀惜をみな紛らすとき、／彼女はそうした魔法をかけたあの手を悲しんで泣く。／今は経帷子もなく土の墓の中で朽ち果てた手を！

「親愛なる亡き友よ！ 永久に変わらぬ若者よ」(*Monody on Major Andre*, line 81)とアンドレを悼むとき、彼女は同時にホノーラを悼んでいる。

Dear lost HONORA! o'er thy early bier
 Sorrowing the muse still sheds her sacred tear!
 The blushing rose-bud in its vernal bed,
 By zephyr's fann'd, by glist'ring dew-drops fed,
 In June's gay morn that scents the ambient air,
 Was not more sweet, more innocent, or fair. (*Monody on Major Andre*, lines 95-100)

親愛なる亡きホノーラよ！ あなたの早すぎる墓の上に／詩人は今もなお悲しみながら聖なる涙を流している！／春の花壇の赤らんだ薔薇のつぼみは／周囲の大気を香らせる六月の陽気な朝に、／西風にあおられ、きらめく露のしずくに養分を与えられるが、／もはやかくわしくもなく、清浄でもきれいでもなかった。

「ように、アンドレの嘆きの声が「ホノーラが死んだ！ 私の幸せなライバルの花嫁が！」(Monody on Major Andre, line 117)で始まるとき、それはシーワードの声と区別しがたい。特にアンドレにホノーラの細密画を「私の愛の幻影」(“Shade of my love”)として言わしめていたときがそうだ。

“What though HONORA’S voice no more shall charm!

“No more her beamy smile my bosom warm!

“Yet from these eyes shall force for ever tear

“The sacred image of that form so dear?—

“Shade of my love!—though mute and cold thy charms,

“Ne’er hast thou blest my happy rival’s arms!

“To my sad heart each dawn has seen thee prest!

“Each night has laid thee pillow’d on my breast!

“Force shall not tear thee from thy faithful shrine;

“Shade of my love! thou shalt be ever mine! (Monody on Major Andre, lines 259–68)

「ホノーラの声にもはや魅せられることはない！／彼女のにこやかな笑みに私の胸が熱くなることもない！／けれども、何がこの目から力づくで永久に／あんなにも愛しいあの姿の聖なる像を引き裂くことができようか？——／私の愛の幻影よ！——あなたの魅力は無言で冷たいけれど、／あなたはかつて一度も私の幸せな恋敵の腕を祝福したこと

はなかった！／どの暁も、あなたが私の悲しい心に抱き締められているのを見てきた。／どの夜も、あなたを私の胸を枕にして寝かしてきた！／力づくであなたをあなたの忠実な聖堂から引き裂くことなんかできないだろう。／私の愛の幻影よ！ あなたは永遠に私のものだ！

シーワードにとって、「私の愛の幻影」（細密画）は本物のホノーラの代替であり、彼女との永遠の結合を提供するものである（「あなたは永遠に私のものだ！」）。同じ様に、彼女の悲しみに打ちひしがれた詩もまた二人の失われた関係の代替として、そして失われた関係を回復する企てとして、見なすことができるかもしれない。換言すれば、彼女の詩は不在のホノーラのもとに達し、失われた時、失われた喜びを取り戻す手段だった。シーワードが愛する人の喪失を嘆く詩を書くたびに、ホノーラは灰の中から不死鳥のように蘇る。そのとき、「私は彼女と再び生きるのだ。／再びあの穏やかな瞳が私の上で輝くのだ！／私は彼女の声を聞くのだ！ 彼女の腕が私の腕に置かれているのを感じるのだ！」（"Invocation to the Genius of Slumber, Written, Oct. 1787," lines 32-34）。

シーワードは明らかにわかっていた。自分とホノーラとの距離がなくなることはない。それは身体的な距離であると同時に、時間的な距離であった。ホノーラは結局死んでいた。シーワード自身にとってだけでなく、シーワードの同時代の読者たちにとってもそうだった。ここで注目すべきは、プロの詩人としてのシーワードの経歴がホノーラの死後の一七八〇年に出版された『クック船長の死を悼む哀歌』から始まったことだ。本章でこれまで見てきた詩はすべて、そのあとで出版されたものである。シーワードが非難される恐れもなくホノーラへの愛を公然とうたうことができたのは、ホノーラが結局すでにこの世にいなかったからだだった。

◆◆◆ 第八章 ◆◆◆

二人の女性と一人の男性の楽園

—— アンナ・シーワードの『ルイーザ』

異性愛的読みの傾向

『クック船長の死を悼む哀歌』（二七八〇）と『アンドレ少佐の死を悼む哀悼詩』（二七八一）によって名声を確立したアンナ・シーワードは、その後『ルイーザ』、四通の書簡の詩小説（二七八四）によって人気作家になった。一七八六年司法長官ジョージ・ハーディング宛ての手紙の中で、シーワードも「私はそれが私の作品中最上で最良のものであるとわかっています」（Ashmun 124）と自慢した書簡体形式の物語詩だ。詩人自身の序によれば、彼女は十九歳のときにこの物語詩の最初の三五行を書き、その後長い間放置していたのを、出版の十六ヶ月前に「偶然に発見し」、完成したという（*Poetical Works* 2: 221）。この完成理由について、キャロライン・フランクリンは、同詩の復刻版（一九九六）に付け加えた序文で、当時シーワードはリッチフィールド大聖堂の聖歌助手で既婚者だが妻と別居していたジョン・サヴィルと恋愛関係にあり、こうした「詩人自身の絶望的な愛の体験」が彼女を詩の完成へと向かわせたのだと推定している（Franklin viii）。

このように、従来のロマン主義時代の文学批評家たちの間では、恋愛詩とくれば異性間の愛を前提にして読み、女性詩人の恋愛の対象として必ずと言っていいほど男性が言及される傾向があった。しかし、シーワードの場合、かような異性愛偏重は彼女の詩を誤読する誘因になるだろう。第七章で述べたように、リッチフィールドの親の家で生涯

独身のまま過ごしたシーワードは男性よりも女性に対し強い愛情をいだいていた。特に養妹のホノーラについては、彼女の死亡後もずっと長い間忘れることができず、彼女への愛や彼女を失った悲しみをうたった詩を数多く書いていた。それらの詩は最初の女性同性愛詩人として有名なレスボスのサッポアの伝統下にあった。この章では、従来の異性愛中心主義の批評傾向にもう一つ石を投ずるために、シーワードの代表作『ルイーザ』を取り上げ、異性間の恋愛の枠組みをとる同詩においても、詩人の関心がいつも異性間の恋愛や結婚よりも女性同士のロマンティックな友愛関係に向けられていることを明らかにする。

絶望的な愛の体験

まず最初に、シーワードはサヴィルとの「絶望的な愛の体験」から『ルイーザ』を完成したというフランクリンの推定を否定しなければならない。仮に詩人の「絶望的な愛の体験」がこの詩を完成させたとしても、その愛とは男性のサヴィルというよりも女性のホノーラを指す可能性の方がずっと大きいからだ。『ルイーザ』の出版年はシーワードが四一歳のときだが、それはホノーラの死（一七八〇年四月三〇日）からわずか四年しか経っていない。その頃シーワードはサヴィルについての詩を全く書いていないのに、ホノーラを喪失した悲しみをうたった詩だけでなく、ホノーラの夫エッジワースの病気の妻に対する冷淡さを攻撃する詩や、ホノーラの死後わずか八ヶ月後に彼女の妹と三度目の結婚をしたエッジワースの節操のなさを仄めかし、ホノーラの死後六年間彼女の墓が「不実な愛によって見捨てられ、忘れられている」〔*Invocation to the Genius of Slumber, Written, Oct. 1787, line 46*〕のを批判する詩を書いていた。また、四〇代はじめに書いた手紙では、次のように男性の愛のうつろいやすさを糾弾していた。

男性というものは、自分の子どもたちを除いて、どんな人に対しても純粹で混じりけのない愛情をいだくことがめつ

たにできないのです。一般に、最も立派な男性ですら男性の知人に友情を捧げ、子孫に愛情を注ぎます。女性の恋人や妻に対しては、しばらくの間は、もつと熱烈な、もつと神聖な愛情を、もつと優しく、もつと活気に満ちた友情を、感じていきます。しかしながら、この不可解な、この魅惑的な感情は（それを私たちは愛という名前で理解しているのですが）、しばしば想像力の幻覚であることがわかります——それを信じる女性を惑わす流星で、平安や自由のみ込んで無くしてしまう池や流砂までそれを追いかけたときに、消えてしまうのです。（Constable 3: 29-30）

このように男性に対する絶望的な愛について悩んでいたところか、男性の愛への不信感を募らせていた時期に、シーワードは『ルイーザ』を完成させた。その物語詩を構成する四通の書簡の日付を見ると、第一の書簡はホノーラがリッチフィールドに最後に戻った年であり、彼女の死の前年にあたる一七七九年の十月二一日付け、残りの三通はすべて彼女の死の翌年にあたる一七八一年で、彼女の死の月である四月の、それぞれ十五日、二一日、二五日付けである。物語の書簡の日付は恣意的かもしれないが、詩人が創作の間他の誰よりもホノーラのことを考えていたらしいと思わせるに十分な設定であろう。

恋愛書簡詩の伝統の転覆

実際、『ルイーザ』の中心的なテーマは一瞥すると男女間の恋愛や結婚であるように見えるけれども、明らかに、ヒロインとその婚約者の男性との関係よりも、ヒロインとその女友達との関係の方に力点が置かれている。

『ルイーザ』の表現様式は実験的で新しく、書簡体形式の感傷小説のような詩である。四通の書簡がハッピー・エンドへと向かう一つの長い物語の四章にあたる。この物語詩の序の中で、シーワードはアレクサンダー・ポープとジャン・ジャック・ルソー（一七二一―一七八）のスタイルに従い、「出来事」よりも「パッション情念」を描いたと述べている。そして、ポープの一七一七年の詩「アベラードに宛てたエロイーザの手紙」におけるエロイーザの「情熱的な愛」

と、マシユー・プライアー（二六六四—一七二二）の一七〇九年の詩「ヘンリーとエマ」におけるエマの「より貞節な優しさ」を融合し、かつまた「前者の官能性と後者のあまりにも屈從的な柔弱さ」を避けることによって、男性詩人たちのヒロインたちよりも「もつと欠点のない」、理想的な感受性のヒロインを創り出すことを目論んだという（*Poetical Works* 2: 219）。シーワードのヒロインのルイーザ（Louisa）という名前自体、歴史上の中世フランスの尼僧エロイーズ（Heloïse）をモデルにした情熱的なヒロインたち——ポーブのエロイーズ（Eloïsa）やルソーのエロイーズ（Heloïse）（『新エロイーズ』「二七六二」）など——に由来しているのは間違いない。

さらに注目に値するのは、シーワードがポーブのような男性作家たちによって書かれた恋愛書簡詩におけるヒロインを改良しようとしながら、同時に重要な点でその恋愛書簡詩の伝統を覆していることである。リンダ・S・カウフマンによれば、オウイデイウスの『女主人公たち』から始まった恋愛書簡文学の伝統では、ヒロインは「自分を誘惑し、裏切り、あるいは単に置き去りにした」男性が読むように彼に宛てて手紙を書く。恋愛書簡の前提条件はヒロインの最愛の人の不在である。なぜなら、「最愛の人がそばにいるなら、手紙を書く必要がない」（Kauffman 17）からだ。伝統的なヒロインは不在の愛する男性に宛てて、二人を別れさせた力に怒り、過去の喜びを思い出し、彼の不義を推察し、彼の冷淡さを嘆くなど、揺れる感情や情念のほとばしりを書き綴る。ところが、シーワードのヒロインは自分の感情を婚約者のユージーニオに手紙で伝えないし、彼からの手紙を直接受け取ることもしない。その代わりに、ルイーザとユージーニオの二人とも共通の友人である女性エマに宛てて手紙を書く。シーワードの物語詩においては、エロイーズとアベラードのような男女の悲恋物語に相当するルイーザとユージーニオの物語は、間接的に語られるのである。

第一の書簡は、四年前から東インドに在住するエマに宛ててルイーザが書いたもので、ルイーザの婚約破棄を伝えている。ユージーニオは父親の貿易関係の仕事のために旅立ったが、四ヶ月後音信不通になり、代わりに彼が別の女性と結婚したという噂がたった。それを聞いたルイーザは悲しみのあまり自殺を考える。第二の書簡は、東インドか

ら帰国途中のエマに宛ててユージーニオが書いたものである。彼は、父親が破産したため家族を貧窮から救うため、やむなく以前悪漢から救出した大金持ちの女性相続人エミラと結婚したことを明らかにする。そして最後に、彼にとってルイーザへの愛を忘れることがどんなに難しかったか、彼の死後にルイーザに伝えてほしい、とエマに頼んでいる。エマはユージーニオの頼みを無視して、彼の死を待たずにすぐさま彼の手紙をルイーザに転送する。「彼女「エマ」からユージーニオの弁明の手紙を受けた次の日」(*Poetical Works 2: 265*)、ルイーザはエマに宛てて第三の書簡を書く。ルイーザはユージーニオの本当の気持ちを知って慰められ、彼と別れる運命を受け入れ、自殺を思いとどまる。第四の書簡は、ルイーザからエマに宛てたものである。ユージーニオの父親であるアーネストがルイーザのもとを訪れ、エミラが放蕩のあまり病気にかかり死に瀕している、ルイーザに会いたがっていることを伝える。ルイーザが行くと、臨終の床につくエミラは、ユージーニオを奪ったことの赦しを請うとともに、彼との間の娘の世話をしてくれるよう頼む。このように『ルイーザ』を構成する四通の書簡のすべての宛先がエマである。同詩におけるエマの役割は一体何であろうか。

エリザベス・フェイは、エマが「テクストの理想的な読者、共感的だが遠くにいる読者としての役をつとめている」(*Ey 133*)と注釈する。ルイーザもユージーニオも、エマに対し、現実の詩の読者が彼らの書簡を読んで彼らの苦境に同情してくれるような感情的な反応を求めているからだ。エマの役割を理想的な読者とするフェイの解釈は説得力があり、一七六二年十月から一七六八年六月までに至るシーワードの若い頃の手紙を想起させるものである。これらの手紙は、シーワードの死後、ウォルター・スコット編集の『アンナ・シーワード詩集』(二八〇九)の第一巻に「シーワード嬢の文学的書簡からの抜粋」として出版され、すべての宛先が虚構の人物と思われる「エマ」になっている(*Poetical Works 1: xliii-cvii*)。

しかしながら、『ルイーザ』においては、エマはただ単にルイーザとユージーニオのそれぞれの感情をそれぞれに伝える仲介的役割や、二人の愛の物語を読む一般的な読者としての役割を担っているだけではない。看過できないの

は、彼女は書簡の書き手でもあるということである。ユージーニオの書簡の最後の二〇行、「親愛なるルイーザよ！——彼を赦してあげなさい。／あんなにも残酷に見えるやり方であなたの愛の火を消そうとした人を！」で始まる箇所 (*Poetical Works* 2: 263-64) は彼女の手によるものだ。換言すれば、「ユージーニオからエマへ」というタイトルがつけられた第二の書簡は、実際には、エマがルイーザに直接宛てて書いた短い手紙で終わっているのである。ルイーザは第二の書簡に含まれたエマの手紙を読んだあと、第三の書簡を書く。彼女たちはこのようにお互いに文通を続ける。その上、テキストの四通の書簡のうち三通がルイーザからエマに宛てたものであることを鑑みれば、シーワードが二人の女性の関係に特別に重きを置いていたことは明白であろう。

ロマンティックな友人

テキストの登場人物の一人として、エマはまたルイーザとユージーニオの共通の友人よりもっと重要な役割があられている。第一の書簡で、ルイーザは彼女とエマが幼い頃から喜びも悲しみも共有した親密で共感的な間柄であったと言っている。

... one have been our pleasures, one our cares,
From the first dawn of those delicious years,
What time, inspir'd by joy's enlivening powers,
We chas'd the gilded insect through the bowers; (*Poetical Works* 2: 223)

私たちの喜びは一つであり、私たちの心配も一つだった、／あのかぐわしき年月の最初の夜明けからずっと。／喜びの命を与える力に鼓舞されて、どれほどの時を／私たちは木陰の中を黄金色の虫を追いかけたことか。

ルイーザにとって、エマは「私の胸の痛みを優しく嘆いてくれる人！／私の魂の友、そして私の心の妹！」
(Poetical Works 2: 238) である。これらの表現はいわゆるロマンティックな友愛文学の中で使われるきまり文句であり、彼女たちがそうした親密な関係であることを仄めかしている。その上、ルイーザはユージーニオに裏切られた悲しみをわかつてくれる唯一無二の友としてエマに手紙を書きながら、同時に、父親と一緒に東インドに旅立つエマとの別離ほど悲しいものはなかったと、切々と訴えている。

No grief my bosom at our parting knew,
 But that of bidding thee a long adieu;
 And the sweet tears, that such soft sorrows bring,
 Fall, as light rain-drops in the sunny spring; *(Poetical Works 2: 225)*

私の胸は、私たちの別れに際してあなたに長い別れを告げるほどの／悲しみをかつて経験したことがなかった。／このような優しい悲しみによってもたらされる甘い涙が／落ちる、晴れ渡った春の日の淡い雨のしずくのように。

伝統的な恋愛書簡詩がヒロインが男性の恋人と遠く離れ、直接話ができないという前提条件によって成り立っているならば、シーワードの詩においてはヒロインが手紙を書くために彼女のロマンティックな友人を遠方の地へ向かわせる必要があったと言えるだろう。

エマがルイーザのもとを去らねばならなかったのは、彼女の父親の東インドでのおそらく通商の仕事のためだった。ユージーニオがルイーザのもとを去ったそもそもの理由も同じである。

Where Thames expands with freedom's wealthy pride,

Attractive Commerce calls him to her tide;
 As with firm step she runs along the strand,
 And points to the tall ship, the distant land.
 His rising interests on the call attend,
 For with a father's prosperous fate they blend. (*Poetical Works* 2: 232)

テムズ川が自由の裕福な誇りを持って広がっているところで、／魅力的な通商が彼をその流れに呼び寄せる。／川は確かな歩みで岸辺にそって流れ、／背の高い船に遠方の地を指し示しているので。／彼の上向きの利益がその呼びかけに伴う。／なぜならそれは父親の繁栄する運と混じり合っているから。

当時大流行していた感受性文学は通商よりも感情を重視し、商業批判をおこなった。シーワードの物語詩は感受性文学の典型として、愛し合う二人が男女であれ女同士であれ、離ればなれになる原因を当時のイギリスの商業主義に置いていると言える。しかし、ルーイーザにとって、ユージーニオとの別れはエマとの別れほど悲しくはない。彼が旅立つときは、「別れの悲しみ」の感情よりも彼の愛への「寛大な信頼」(*Poetical Works* 2: 233)の気持ちの方が強かった。だからであろう。エマに宛てた書簡の中で、彼に対する怒りを、故意かどうか不明だが、第二人称で直接ぶつけるところまでいく。

Thy love, a sacrifice to glut thy pride!
 Ah! What avail the riches of thy bride!
 Can they avail, remorseless as thou art,
 To tear the wrong'd Louisa from thy heart?
 Gold, and ye gems, that lurk in eastern cave,

Or to the sun your gay resplendence wave,
 Can joys sincere, one heart-felt transport live
 In aught ye purchase, or in aught ye give? (*Poetical Works 2: 234*)

あなたの愛は、あなたのうぬぼれを満たすために犠牲になった。／ああ！ あなたの花嫁の財産が何の役に立つのでしょう！／あなたは悔やんでいないけれども、花嫁の財産は得になるのかしら？／あなたの心からルイーザを不当にも引き裂いて。／黄金よ、そして東の洞穴に潜むか、／もしくはそのきらびやかな輝きが太陽に揺らめく汝ら宝石よ。／汝らを買うもの、あるいは与えるものの中に／心からの喜び、偽りのない感情の高ぶりがあるかしら？

ユージーニオはルイーザの愛よりもエミリアの財産を選んだ。彼の行動を通して、ルイーザはどの女性も男性から同じ苦しみを受けていることを知る。「とうとうのは、黄金と目のくらむ地位はいつも、／男性の堅い心の中では、愛の殺人者であることがわかるから」(*Poetical Works 2: 228*)と、彼女は言う。実際、ルイーザの失恋の物語は「珍しくも、不思議でもない。／私の苦しむ姉妹たちはどこの谷間でも嘆いている」(*Poetical Works 2: 228*)。前に述べたように、『ルイーザ』出版当時、シーワードはエッジワースの気まぐれや男性一般の愛の移ろいやすさを攻撃していた。また、若い頃から、配偶者の財産目当ての結婚を非難してきた。「文学的書簡」中の一七六四年の手紙では、彼女の実の妹のセアラと金持ちだが中年のジョゼフ・ポーターとの結婚が決まったとき、結婚を女性を幽閉する「鳥かご、確かに金でできているけれど、それでもやはり鳥かご」(*Poetical Works 1: cxxiv*)であると見なした。初期の詩の一つ「エミリアに宛てたエヴァンダーの手紙」では、大金持ちの娘エミリアと財産のない男性エヴァンダーの愛は結局、彼女の「父親の高慢な侮蔑」(“Evander to Emilia,” line 7)⁵によって阻止されたことが描かれる。『アンドレ少佐の死を悼む哀悼詩』でも、同様にアンドレとホノーラのひそかな婚約がホノーラの父親によって破棄されたと仄めかされている (*Monody on Major Andre*, lines 107-08)。『ルイーザ』では、「金がない」(*Poetical Works 2: 243*)のために結婚相手として

ふさわしくないとされるのはヒロインの方であるけれども、金銭ずくの結婚はシーワードが繰り返し批判してきたものだったのである。

多くの恋愛書簡文学では、棄てられたヒロインは自殺を考える。しかし、自分の命を終わらすよりもむしろ恋人が自分のもとに戻ってくるという幻想やお互いに恋情に燃えているという幻想を育み、そうすることで彼に棄てられたという自分の運命に逆らおうとする (Kaufman 17-18)。同様に、シーワードの棄てられたヒロインのルイーザもいったんは自殺を考えるが、すぐさま思い直す。しかし、伝統的な恋愛書簡文学のヒロインたちと違って、彼女はユージーニオを「私の軽蔑の卑劣な対象」として切り捨て、「不実なユージーニオについてはほんのわずかでも考えるような無駄なことはいない!」(*Poetical Works* 2: 239)と断言する。そのとき彼女の心にあるのはエマのことであり、エマの帰国を心から望む言葉で第一の書簡が終わる。

第三の書簡では、ルイーザが絶大な信頼を置いているのはユージーニオではなくエマであることが明らかにされる。ルイーザはユージーニオの本当の気持ちが変わっていないことを知って苦悩が和らげられたが、それは第二の書簡に書かれた彼の言葉を信じたからではない。彼の潔白と愛を保証するエマの言葉を信じたからである。

Oh! how o'er-joy'd my dazzled sight surveyed
 These words, in Emma's characters pourtray'd,
 "He is not guilty!"—rapid from my tongue
 They, exulting iteration, sprung.
 "Read, dear Louisa, and acquit the heart,
 "That bears in all thy griefs so large a part."

 Disorder'd sounds my lips pronounce, nor spare

The useless question to the unconscious air.

“Does that dear hand yet trace Louisa’s name?”

“Will it this love, his innocence proclaim?”

“How may this be? — Yet Emma says ‘tis so.”

Then did I read, and weep, and throbb, and glow,

Approve, absolve, admire, and smile, and sigh,

Till pensive Peace shone mildly in my eye: (*Poetical Works* 2: 267-68)

おお！ どんなに大喜びでこれらの言葉をまぶしい目でしげしげとみたことか。／それらはエマの筆跡でこう書かれている。／「彼は無実です！」と。——それらは私の舌から速やかに／飛び出した。こおどりして何度も何度も。／「親愛なるルイーザよ、読んでください。そしてあなたの深い悲しみの中でこんなにも大きな部分を占めている／心を無罪放免してください。」／（中略）／私の唇は乱れた音を立て、／無益な問いを意識を持たない空中に発するのを控えもしない。／「あの愛する手はまだルイーザの名前をなぞっているのかしら？／それはこの愛を、彼の無実を、はつきりと示しているのかしら？／どうしてそんなことがありうるの？——けれども、エマがそれはそうだと言っている。」／それで私は読み、涙を流し、胸がどきどきし、ほてり、／是認し、免除し、賞賛し、微笑み、ため息をつき、／やがて哀愁を帯びた平穩が私の目の中で穩やかに輝いた。

ルイーザはそれから故郷の田舎に引きこもる。「私の出生地の谷間の春めいた美しさ」は、ユージーニオが飛び込んだ都会的な商業世界と対局にあるイギリスの田舎の自然風景である。ルイーザはその「お気に入りの木陰」でかつてユージーニオと幸せに過ごした時を思い出す。「ここで私ははじめてあの優雅な若者を見た。／そして、ここで彼は永久不変の真実を約束してくれた。」注目すべきは、この牧歌的な風景にもう一人重要な人物、すなわちエマがいたことだろう。「そして、ここで、私のお友達よ、あなたに向かって私はよく嘆き悲しんだものだった。／人生がもは

や魅力を失い、希望も紛らせてくれないときに」(*Poetical Works* 2: 272)。ルイーザとユージーニオとエマは後者の二人が出て行くまで、こうした楽園的な場所で子ども時代と青春時代を過ごした。それ故、この物語詩の大団円において、復楽園のイメージが巧みに喚起される。そして、そのときでも、ルイーザの呼びかけは元恋人の男性に対してではなく、ロマンティックな友愛関係にある女性に対して向けられている。

O come, my EMMAL....

.....

Haste then to share our blessings, as they glow
Through the receding shades of heaviest woe! —
As spring's fair morn, with calm, and dewy light,
Breaks through the weary, long, and stormy night,
So now, as through the vale of life we stray,
The Star of Joy returns, and leads us on our way! (*Poetical Works* 2: 293-94)

おお、来てください、私のエマよ！／(中略)／急いで私たちの幸福を共有しに来てください。最も激しい悲痛の影が退くにつれ、／幸福は輝きを増しているのですから！——／春の好天の朝が、穏やかに露を帯びた光とともに、／疲れ果てた長い嵐の夜を切り開くように、／今や、私たちが命の谷間をさまようとき、／至福の星が再び点り、私たちの道中私たちを導くのです！

日常生活から隔絶した牧歌的な世界もしくは地上楽園は同性愛者たちの場所としてしばしば文学で描かれたモチーフである。ロマンティックな友愛の詩もこの文学伝統に従っている場合が多い。その意味からして、ルイーザの楽園(「命の谷間」)にはエマが不可欠であるが、エマに比べると、ユージーニオの存在はいつも二義的と言わざるを得ない。

女性の子クシユアリテイの罰

ジャンネット・トッドはルソーの『新エロイーズ』について次のような指摘をしている。「サン＝ブルーとジュリは恋人同士であるが、はじめはサン＝ブルーとクレアが恋人同士である。ジュリとクレアは友人同士であり、おそらくルソーの遠慮がちの表現を無断借用するならば——〈友人以上の何か〉であろう」(Todd, *Women's Friendship* 133)。つまり、ジュリとクレアはロマンティックな友愛関係だと言っているのである。シーワードは、一七六二年十月付けの「文学的書簡」の中で、上記のようにクレアとジュリをサン＝ブルーの愛をめぐるライバルとして描くやり方に反駁した。

友情の領域において、クララ「ママ」はかげりのない光で輝いていた。しかし、エロイーズの恋人に対する一方的な情念は、優しいよりもっと活発で、恋するよりもっと分別のある気質の者には適していないように思える。そうした情念は、彼らが結ばれそうだったとき彼らを幸福にしようとし、彼らの別離が避けがなくなったとき彼らに馬鹿なまねをさせないようにする彼女の努力の光を汚すことになる。

著者の意図がサン＝ブルーの志操堅固を賞賛するためであることはわかる。しかし、その目的のためには、新しい対象が導入される方がよかったと思う。(Poetical Works 1: III) (傍点引用者)

それ故、ジュリ、クレア、サン＝ブルーというルソーの冒頭の三角関係とは違って、シーワードは自分自身のエロイーズの物語に第四の有力な登場人物(「新しい対象」)を導入した。ユージーニオと結婚したエミラは、ルイーズと家柄や財産の点だけでなく女性のセクシユアリテイの点においても対照的である。一言で言えば、エミラは放蕩な貴族階級の女性であり、「官能の時代の美しきカリユプソー」や「愛の手管にたけた女プロテーウス」(Poetical Works 2: 250, 252)のような異名をとる。ならず者に襲われているところをユージーニオに救われて、彼女は彼を愛するよう

になる。彼が「村娘」(*Poetical Works* 2: 251)にすぎないルイーザを愛していることを知ると、エミラの自尊心はひどく傷つけられ、彼をその恋人から奪い取るために、彼を誘惑しようとする。ユージーニオはその場面を次のように記している。

Sometimes, with archness laughing in her eyes,
Hangs on my arm, and ridicules my sighs;
And oft with coyer tenderness appears,
While love's warm glances steal through shining tears:
Now, with arch'd brow, and supercilious stare,
Affects the empress dignity of air;
And now, as reasoning with a wayward heart,
In trances, broken by the frequent start,
With pausing step she wanders through the grove,
A female Proteus in the wiles of love! (*Poetical Works* 2: 252)

時々、目にちやめつけたつぶりの笑みを浮かべ、／私の腕にすがりついて、私のため息をつくの冷やかす。／そして多くの場合、もっと恥ずかしそうに氣遣う様子を見せながら、／きらきら光る涙ごしにそとと熱烈な愛の目配せをする。／今、アーチ形のまゆと傲慢な凝視で／女帝の威嚴の雰囲気醸し出しているのに、／次にはもう、氣まぐれな心で考えているように、／忘我の状態からしょっちゅうはっと目覚めながら、／森の中を休み休み、歩き回っている。／彼女は愛の手管にたけた女ブローテウスだ！

結婚後、彼女は良い妻でも良い母親でもないことが判明する。彼女は赤子の娘に母乳をやらない。家で子ども世話をしないで、胸や手足を露わにした「淫らな服」(*Poetical Works* 2: 280)に身を包んでオペラや観劇や仮面舞踏会に

出かける。やがて「浅黒いオペラ・ダンサー」(*Poetical Works 2: 286*)と浮気をするようになる。そして、「恥辱の愛」(*Poetical Works 2: 287*)すなわち遊蕩の当然の結果として、病に倒れ、突然死ぬ。

このように物語のプロット上極めて都合よく起るエミラの死は、彼女によって象徴される「財産、地位、そしてそれらに伴う豪華絢爛さ」(*Poetical Works 2: 292*)の敗北を指すだけではない。性的な放縦にふけた女性に対する罰や女性のセクシュアリティの拒絶も意味している。「コーネリアへの書簡」という詩の中で、シーワードはアレグザンダー・ポープの考え——男性は「仕事に専心する者もいれば、快楽に溺れる者もいるが、／どんな女性も本質は放蕩者である」——を攻撃したことがあった(“*Epistle to Cornelia*,” lines 181–82)。「ルイーザ」では、彼女は女性の本質やセクシュアリティを本質的に淫らであると見なすポープの考えは絶対の間違っていると仄めかす。ユージーニオの父親アーネストが言うように、「自然の法の聖なる力」(*Poetical Works 2: 285*)に従っているのは、性的に淫らな女性ではなく母性的な女性だからだ。

女性の本質的に性的ではなく母性的であるとするシーワードの女性観は当時の新しいジェンダーとセクシュアリティ観を反映している。トマス・ラカーは『セックスの発明』(一九九〇)で、十八世紀後期に生物学的性差の概念が「二つの性／身体モデル」から「二つの性／身体モデル」へと移行するに伴い、女性のセクシュアリティの概念も能動的で淫らなものから、受動的で貞淑なものへと再定義されるようになったと指摘する(Laqueur 39, 98–103, 149–63)。ルース・ペリーはさらに、こうした「女性の脱性化」の動きは「主に、女性を性的な存在ではなく母性的な存在として再定義することによって成し遂げられた」(Perry, “*Colonizing*,” 116)と言う。つまり、十八世紀後期には、思いやり、慈愛、共感など母性的な感情は肉欲と正反対のものとして見なされ、子どもの養育、特に授乳という母親の役割がますます重要視されるようになったのである。

それ故、『ルイーザ』に戻れば、アーネストがどうして次のように嘆いたのかわかるだろう。

'One scene, alas! my heart can ne'er forget,
 'Nor memory paint it without keen regret,
 'That in the female breast, so form'd to prove
 'The sweet refinements of maternal love,
 'Disdain, and guilty pleasure, should controul,
 'And to its yearnings indurate the soul.
 'Consummate from her toilette's anxious task,
 'EMIRA, hastening to the midnight mask,
 'The apartment enter'd, where EUGENIO stood,
 'And near me lean'd, in deeply musing mood.
 'My folding arms their rosy infant prest
 'To the fond throbbings of a grandsire's breast.
 'She, with the tones of petulant reproach,
 'And neck averted, call'd her tardy coach. (*Poetical Works* 2: 280)

「ああ！ わしの心は一つの情景を決して忘れない。／それを思い出すと必ず身を切るような後悔の念にかられる。／女の胸は甘く清澄な母の愛を示すように／造られたのに、その胸の中では、／侮蔑とやましい喜びが支配し、／その渴望に魂を慣れさせている情景を。／気がかりな化粧の仕事を終えて、／真夜中の仮装舞踏会へと急ぐエミラが／部屋に入ってきた。そこにはユージーニオがいて、／深い瞑想に沈んだ様子で、わしの近くで前かがみになっていた。／わしの組んだ腕は彼らのバラ色の幼児をひしと抱き寄せた、／激しく動悸を打つ祖父の胸へと。／彼女は、怒りっぽくどがめる口調で、／顔をそむけながら、／ぐずぐずしている馬車を呼んだ。」

エミラの胸は赤子に授乳する器官というよりも性的な喜びの象徴的器官である。エミラは古いタイプの女性のジェンダーとセクシュアリティを代表すると言えよう。一方、ルイーザは新しいタイプの女性を代表する。エミラが「ふけられる」(“frolic”)、「不遜な」(“insolent”)、「傲慢な」(“haughty”)、「うぬぼれの強い」(“vain”)、「放縦な」(“licentious”)、「手練手管さ用づる」(“artful”) (*Poetical Works* 2: 248, 250, 251, 252) などの形容詞で性格づけられているに對し、ルイーザは次のように描かれている。これはユージーニオの言葉である。

... had I never seen the matchless grace,

The touching sweetness of Louisa's face;

Where from each feature beams, or mildly plays,

Refined intelligence, with varying rays;

Where native dignity, with air serene,

Conscious, not arrogant, adorns her mien;

While from those eyes, in scorn of artful wiles,

The tender spotless soul looks out, and smiles, — (*Poetical Works* 2: 249-50)

私はかつて一度もルイーザの顔のような類いまれな優雅さを、／人の心を動かす愛らしさを、見たことがなかった。／彼女の顔の一つ一つの造作から、洗練された知性が／そのままに変化する光を発し、優しく戯れる。／生まれながらの気高さが澄み渡った雰囲気で、／自覚しているが、傲慢ではなく、彼女の物腰を飾っている。／その目からは、手練手管を用いる奸計を軽蔑して、／優しい汚れない魂が覗き、微笑んでいる——

物語のはじめから終わりまで、ルイーザは「美しい天使のような乙女」(*Poetical Works* 2: 277) すなわちセクシュアリティのない純潔無垢の女性のみである。男性作家たちが描いたエロイーズたちと違って、婚約者のユージーニオ

と性的な関係を持ったことがない。それは、彼の裏切りを知ったあと、「このように若い時に萎れていくけれども／私は今でも無垢の平安、真実の誇りを持っている」(*Poetical Works 2: 239*)と断言していることから明らかだ。また、手紙の中で自分を棄てた男性への恋情や欲情を表現していないし、他の男性と結婚するようなこともしていない。さらに、ユージーニオの妻の死後、彼と結婚するかどうかすら不明である。死の床で悔い改めたエミラはルイーザにこう言った。

“Love her, LOUISA—love her—I implore,
 “When lost Emira—wounds thy peace no more!
 “Oh! Gently foster in her opening youth,
 “The seeds of virtue—honour—faith—and truth. (*Poetical Works 2: 291*)

「あの子を愛してあげて、ルイーザよ——あの子を愛してあげて——お願いですから、／エミラが亡くなったときに——あなたの平安はもう二度と傷つかないわ！／おお！ あの子の発育期のはじめに優しく育ててください、／美德——名誉——信義——そして真実の種を。」

エミラはルイーザにユージーニオの二番目の妻になって彼の娘を継母として育ててほしいと頼んでいるかのようだ。ところが、結局、詩の最後で暗示されているのは、ルイーザがユージーニオとエマと一緒に以前の無垢な牧歌的世界へ戻るといっただけである。その後ルイーザがエミラの子どもを育てるといっことはあり得る。「あなたがそうすると私はわかっている」(*Poetical Works 2: 291*)と、末期のエミラが確信していたように。しかし、それでもルイーザとユージーニオが結婚するかどうかははっきりしていない。ルイーザはテクストを通して性的に無垢で、汚れない、天使のようだったので、われわれはこの物語が終わったのちも、そうであり続けるのではないかと推定したくなる。

彼女は純潔を保持したまま、子どもを養育する母親になるだろう。母親になるということが性的行為の当然の結果であることを鑑みれば、性的でない母親という概念は矛盾しているように見えるかもしれない。しかしながら、シーワードの時代、女性は「生まれつき」性的ではない存在として再定義されるようになり、母性と性的欲望は互いに両立しないと考えられていた。ルイーザが性的でない母親の女性になると言っても決して不適切ではないのである。

二人の女性と一人の男性の楽園

『ルイーザ』は、一七八四年の出版年のうちに四版までいき、一七八九年にはアメリカ版、一七九二年には第五版が出るほど、非常な人気を博した。その人気の秘密は多分にセクシュアリティの全くないヒロインの描き方にあつたに違いない。これは十八世紀後期に起こった女性のセクシュアリティの消滅と母性に対する新たな強調の動きに一致していた。「金持ちと貧乏人、貴族と労働者、男性と女性」の間の社会的平等を求める革命的な声があがった時代には、「女性が政治的平等を求めておこなうかもしれない潜在的に転覆的な主張を相殺する」ために、「男性と女性の生理学的性差」を再発明し、それによって、女性を「脱性化」(Perry, "Colonizing," 115) することが重要視されたのである。一七九〇年代後半以降、人々の詩の好みが素朴で日常的な詩へと移り変わるにつれ、感受性の詩の代表であるシーワードの詩はその型にはまった擬人法やレトリックを駆使した古典的な書き方が時代遅れになり、「時に明瞭さの欠如、時に道理の欠如、そして気取りのきざし以上のもの」(Rev. of *Langollen Vale, The British Critic* 7 [April 1796]: 405) を批判する声も聞こえるようになった。彼女の死後出版の詩集を編集したウォルター・スコットも、序の中で、「あまりにも日常生活や自然の表現から遠いので、人気を保持することができなくなっていた」(Walter Scott 1: xxv) と指摘している。しかし、それにもかかわらず、保守派のリチャード・ポルウェルは、一七九八年出版の諷刺詩『女らしさを失った女たち』の中で、シーワードをハンナ・モア側の貞淑な女性作家たち、「女らしさを失った女」

ではない作家たちの一人に数えて、「この国の女性詩人たちのうちの最高位」と称えた。そして、『クック船長』と『アンドレ少佐』の二編の哀歌と『ルイーザ』について、「第一級の偉業である。これらの魅惑的な詩のどれでもシーワードの名前を不朽にするのに十分であろう」(Polwhele 33)と絶賛した。クローディア・L・ジョンソンの解釈によれば、ポルウェルは“unsex'd”を、マクス夫人が“unsex me”と言ったように、男性を憎む女性とか男性になりたない女性の意味で使っているのではなく、また「自然の行動と思われる異性愛」に逆らう女(すなわち不自然な同性愛者)の意味でも使っていない。「まるでその反対に、ポルウェルにとって、女らしさを失った(unsexed)女は性欲が異常に強い(oversexed)のである。(中略)女らしさを失った女であることが含意しているのは、(中略)異性愛的情緒なしに際限なく異性愛にふけることである」(Claudia L. Johnson 9)。メアリ・ウルストンクラフトのような急進的な女性作家たちが「女らしさを失った女」であるのは、彼女たちが淫らで、「自然の法を軽蔑している」(Polwhele 6)からだ。一方、一生独身を貫いたシーワードやそのヒロインのルイーザが「女らしさを失った女」ではないのは、二人とも一度も男性と性交渉がなく、明らかに新しいジェンダー観に従った女性だったからであろう。

十八世紀末の「性的ではない女性」の台頭は女性間のロマンティックな友愛の流行と決して無関係ではない。女性同士がいくら親密でも、彼女たちは結局男性と何の関係もない故に、不道徳であると非難されることがなかった。『ルイーザ』が人気を博した時代は、女性間のロマンティックな友愛が流行の絶頂期にあっただけでなく、そのような関係は「不自然な」性的関係すなわち「サフィズム」ではないかと疑る声があがり始めた時期である。性的でないロマンティックな友愛と性的な「サフィズム」の概念は両極にあるように見えるが、実際のところはそうではない。スランゴスレンの貴婦人たちの場合のように、同じカップルがロマンティックな友愛の理想として称えられたり、サフィズムではないかと疑られたりした。これらは十八世紀後期の女性同性愛の多様性と複雑性を示す証である。

だが、強いてロマンティックな友愛とサフィズムの相違点を挙げるとするならば、前者よりも後者の方が結婚に対してもっと軽蔑し、独身状態をもっと賞賛していることであろう。『ジャック・キャヴェンディッシュ』から尊敬すべ

き、とても美しいダ***夫人に宛てたサッポー風の書簡（二七七八「？」）で、匿名作家はダマー夫人をサッポーの伝統下にある女性同性愛者「トミー」の一人として提示しながら、そういう女性たちがいかにジェンダーの分離主義を好み、異性との結婚を嫌悪したかについて皮肉な批評を加えている。

Ye Sapphick Saints, how ye must scorn

The dames with vulgar notions born,

Who prostitute to man;

Who toil and sweat the tedious night,

And call the male embrace delight,

The filthy marriage plan. (*Sapphick Epistle* 372)

汝らサッポーの聖徒たちよ。どうして卑しい考えを持って生まれたご婦人方を／軽蔑しなければならぬと言い張るのか？／そういうご婦人方は男に身を売る。／単調で退屈な夜、骨折り仕事をして汗をかく。／そして、汚らしい結婚の目的である／男の抱擁を嬉しいと言う。

ピオツィ夫人も一七九四年一月二五日付けの日記で同様なことを書いている。何人かの女友達が一緒に暮らしていたラスボン嬢の家は、「罪深い独身主義で暮らしている不潔な鳥たちのかごだったと思われる。」そしてピオツィ夫人は、シーワードのロマンティックな友人の一人である「ウエストン嬢」がどうしてあれほど結婚を嫌がるのかと訝り、こう結論づけた。「ウエストン嬢はどの女の子もそのように好きになるのが常だった」(Piozzi, *Thraliana* 2: 868n3)。

上記のような結婚に対する極度の嫌悪感、メーヴァーによって「ロマンティックな友愛の必携書」(Mavor, *Ladies* 83)として言及されているセアラ・スコットの小説『ミレニアム・ホール』(一七六二)においては見られない。

スコットは未亡人たちや婚期を過ぎた独身女性たちが田舎で一緒に暮らすのを描くが、おそらく「結婚嫌いとして非難されないために」(Donoghue, *Passions* 127) 彼女たちに教区の貧しい娘たちの結婚の手助けをさせている。それは次のような理由からである。「私たちは婚姻制度を社会の善人たちにとって絶対に必要なものと見なしています。それは一般的な義務です。でも、どんな古代の身分保障権によっても、騎士の務めを果たす義務を負わされた者は、自分自身の炉辺を楽しむのを選んだとしたら、自分の代わりに代理の者をおくることによって免除されたかもしれない。それと同じように、私たちは同じ特権を使うのに多くの人に代理になってもらい、そして確かに自分たちがその中に入ることができることよりもはるかにもっと結婚生活を奨励しているのです」(Sarah Scott 163)。

生涯独身であったシーワードは、虚構のロマンティックな友愛関係を描く際、スコットよりもはるかにもっと慎重だった。『ルイーザ』では首尾一貫して、女性間のロマンティックな友愛は異性間の関係に影を落とし、金銭のための結婚は厳しく批判されている。それにもかかわらず、結婚制度そのものには反駁していない。その上、女性間のロマンティックな友愛は少しも性的なものとして描かれておらず、また異性間の恋人関係や婚姻関係に取って代わるべき望ましい関係としても提示されていないので、広く一般に容認されている異性愛社会や異性間の結婚制度にとって脅威ではないように見える。それどころか、『ルイーザ』の終わりまで仄めかされているのは、ヒロインがこの先ロマンティックな友人の女性と恋人の男性と三人で一緒に幸せに暮らすであろうということである。シーワードはこのように十八世紀後期における異性愛社会と適合可能な女性同性愛の二様相を描いた。

◆◆◆ 第九章 ◆◆◆

甦った女性詩人

——メアリ・ロビンソンの『サッポーとパオーン』

イングランドのサッポー

メアリ・ロビンソンの一七九一年出版の『詩集』への書評で、『マンズリー・レビュー』第六号（一七九二）は、彼女を「イングランドのサッポー」と呼んだ。

審美眼と判断力のある人々は、（中略）本詩集を精読後、われらがイングランドのサッポーをより一層高く評価するだろう。その中のいくつかの詩はおそらく、レスボスの婦人の「われわれのところまで伝わり、知っている限りにおいて」最上の作品に匹敵している。それは、優しさ、感情、詩的イメージ、思いやり、気品、そして何よりもまず表現の繊細さにおいてであるが、最後の点では、わが国の才女はギリシャのサッポーの作品についてわれわれが知っているものすべてよりはるかに優れている。（*The Monthly Review* 6 [1791]: 448）

一七九四年十月十四日の『モーニング・ポスト』紙も、ジョシユア・レノルズ（一七三三—九二）による一七八四年作のロビンソンの肖像画（ロンドンのウォレス・コレクション所蔵）を暗示しながら、次のように報じている。ロビンソンの上記『詩集』の口絵（図版15）には、このレノルズが描いた絵をT・パークが彫版したものが選ばれていた。



図版 15
T・パークによるレノルズの絵の彫版画「ロビンソン夫人」、メアリ・ロビンソン『詩集』（1791）口絵。

彼らは彼女の書き物を二年このかた偶像崇拜的に心酔し、彼女を「イングランドのサッポー！」と呼んで、それにホラティウスの詩の「銅像よりも未長く、残る記念碑を打ち立てた！」を加え、彼女の文学的名声は「レノルズなる者の絵筆よりも長く続くであろう！」と言った。

(*Morning Post* [14 Oct. 1794] 3, qtd. in Curran 20)

このように、レスボスのサッポーの名前は、西洋の長い歴史の間、現代に至るまで、各国で幾度となく女性詩人たちを賞賛するとき、彼女たちに授けられてきた。たとえば、十七世紀のフランスでは、マドレイヌ・ド・スキュデリーが「フランスのサッポー」として有名だったし、十七世紀後期のイギリスでもキヤサリン・ファイリップスが最初の「イングランドのサッポー」としてもはやされていた。十八世紀には「スエーデンのサッポー」、「ロシアのサッポー」、「ドイツのサッポー」などもいた。十九世紀以降も、イギリスのレティシア・エリザベス・ランドン（一八〇二—三八）やクリスティーナ・ロセッティ（一八三〇—九四）などをはじめとして、フランス、ドイツ、アメリカ、ルーマニア、ロシア、ポーランドなど西洋諸国にそれぞれのサッポーたちがいたし、現代ですらもいる。最初の女性詩人としてのサッポーの名前はまさに西洋の女性の詩の伝統とともに生き続けていると言っよい。

しかしながら、ロビンソンは「サッポー」という威厳ある敬称が女性にとって必ずしも非常な名誉になるとは限らないことを知っていた。それどころか、多くの点で、その名前が才能ある女性たちに対する文学的セクシズムを内包

していると信じていた。一七九六年出版の『サッポーとパオーン——真正のソネット連歌集およびギリシャの女性詩人の詩的話題と逸話に関する所見』は、明らかに同時代の文学的セクシズムを攻撃し、自分自身や他の女性作家たちを擁護するという政治的意図を持って、オウイディウス以降何度も語られてきたサッポーとパオーンの有名な話を書き換えている。この章では、まずロビンソンを『サッポーとパオーン』を書くことに駆り立てた動機を吟味し、それからいかに彼女が古代ギリシャのサッポーを同時代の女性作家たちの象徴的人物として描いているかを見てみる。

イギリスの文学的セクシズム

『サッポーとパオーン』の序文にあたる散文部分は、「序」「読者へ」、そして「サッポーの話」からなり、テクスト全体の三分の一以上も占める。その中で、ロビンソンは同書の政治的意図を躊躇なく明かしている。彼女が繰り返し指摘するのは、イギリスが古代ギリシャや同時代の他のヨーロッパ諸国よりも文化的に遅れている国であることである。彼女によれば、古代ギリシャ人たちは詩人たちが「予言の力」(Sappho 15)を持っていると見なして、彼らに対し深い尊敬の念をいだいていた。また、「自由な教育」のおかげで、男性の作品も女性の作品も平等に正しく評価していた。それ故、「彼らがサッポーに敬意を払ったとき、女性ではなくミュージズを崇拜したのだ」(Sappho 27)。これに対し、イギリスは、「すべての啓蒙国の中で最も文学的価値を無視している国である」(Sappho 16)と、ロビンソンは批判する。この国の詩人は「妬みに襲われ、悪意で苦しめられ、姿を隠した刺客の潔癖すぎる批評によって傷ついている」(Sappho 14)。しかし、詩人や哲学者たちは「もしどこか他の国に生まれていたら、最も誇らしい榮譽を授けられ、子々孫々まで不朽の名声を与えられたであろう」(Sappho 16)。ここでロビンソンが特に攻撃するのは文学的セクシズムである。「わが国の傑出した女性たち」は、「宮廷の後援もなく、権力者の保護も受けずに、文学の道をたゆまず歩み、精神的卓越さという消えることのない輝きで、自分たちを気高くしている」(Sappho 16)。ところが、

それにもかかわらず、彼女たちの才能は過小評価されているのだ。

従って、ロビンソンにとって、サッポーは二つの理由で重要だった。まず第一に、サッポーは女性の「精神的卓越」を世に広く知らしめた最初の女性詩人として、ロビンソンや他の女性作家たちが目指すべき理想像だったからである。プラトンはサッポーを「第十番目のミューズ」として崇めたが、ロビンソンはそれに付け加えて、サッポーの才能は他の作家たちの妬みをかきたてたほどだったと言う。彼らは「彼女の私的な性格に影を落とそうとした。」しかしながら、その影は「彼女の詩的才能の輝きを前にして縮み上がった」(Sappho 22)。このように、ロビンソンは巧みにサッポーと十八世紀の啓蒙主義の光のメタファーを結びつけ、彼女の詩を「感傷的なもの、熱烈なもの、そして恋情的なもの、規範」としてだけではなく、「この上なく啓蒙的な魂の真正の流露」(Sappho 25)として掲げる。友人のウイリアム・ゴドウィン(一七五六—一八三六)やメアリー・ウルストンクラフトのように、社会の「ゆっくりとした緩慢な進歩」を信じ、「才能ある人々が朽ちることのない柱のように聳え立つ」(Sappho 14-15)新しい時代、とりわけ才能ある女性たちの輝きが彼女たちを抑圧してきた闇を追い払う時代の到来を予測するロビンソンにとって、サッポーは「予言的媒介者」(McGann, "Mary Robinson" 70; McGann, *Poetics* 109)だったのである。

サッポーが重要な第二の理由は、彼女の「精神的卓越」が後世の者たちによって抑圧され、否定されてきたからだ。ロビンソンは歴史上のサッポーと後世に伝わっているいわゆる虚構上のサッポーを明確に区別し、後者のサッポーをイギリスの抑圧された女性作家たちを象徴していると見なす。十八世紀のイギリスに伝わっているサッポー像で最も支配的なものは、紀元後一世紀のオウイデイウスの「パオーンに宛てたサッポーの手紙」のサッポーだった。ロビンソンは「読者へ」の中で、次のようにそのオウイデイウスの詩とそれを英訳したポープの詩に言及し、彼らの描くサッポー像は詩人サッポーを軽視していると批判する。

オウイデイウスとポープは、パオーンに対するサッポーの情念を褒めたたえた。しかし、彼らの描写はどんなに美し

く仕上げが施されていても、ギリシヤの女性詩人に光彩を添えるというよりもむしろ、その価値を下げる傾向にある。

(Sappho 18)

sappho の受容史が彼女の虚構化の歴史であることを鑑みれば、ロビンソンの批判は核心をついているだけではない、ロビンソン自身に向けられた「イングラントの sappho」という名称に潜む軽蔑の色を彼女が充分承知していたことを示すものである。紀元前十世紀頃の叙事詩人ホメロスが「詩人」(the Poet) だったように、紀元前七世紀頃の抒情詩人 sappho は「女性詩人」(the Poetess) として有名だった。しかし、死後数世紀のうちに、彼女の名前には性的に淫らな女性のイメージが付きまとうようになっていった。そして、このイメージを固めたのが、オウイディウスだった。彼の描いた sappho は、年下のパオーンに恋に落ちる以前は多くの女性たちを愛した同性愛者であり、今ではパオーンに棄てられてもお、羞恥心も捨てて彼への燃えるような愛を赤裸々に告白する多情な女性だった。彼女はレフカスの岩上から落ちる以前に、性的に墮落し、詩人としての名声を落としていたのである。²

オウイディウスによって後世に伝わることになった sappho の好きなイメージは、才能があり想像的な仕事をする女性作家たちに対する社会的偏見を端的に反映していると言える。特にロビンソンの時代には、女性作家たちに対する批判は常に彼女らの性的墮落の暴露を含んでいた。たとえば、『 sappho とパオーン』の出版の二年後には、保守主義者のリチャード・ポルウエルが、進歩主義的な女性作家たちを「女らしさを失った女たち」として非難し、彼女たちの政治的思想を過度の感受性すなわち淫らなセクシュアリティと結びつけた。そしてロビンソンを、ウルストンクラフトが率いる「女らしさを失った女たち」のグループの一人と見なした (Polwhele 16)。ロビンソンにとって、こうしたセクシュアル・ハラスメントはポルウエルの諷刺詩よりもずっと以前から、個人的な意味においても受ける恐れがあった。なぜなら、彼女は人気のあるプロの作家になる十年以上前に、オウイディウスの sappho のように「棄てられた女性」であり、かつまた「墮落した女性」だったからである。

「パーディタ」

彼女は若い頃からその美貌が一目を集め、わずか十五歳で年季契約の事務員と結婚し、夫の借金のために生まれたばかりの娘とともに監獄で一年暮らした経験があるが、その後生活費を稼ぐために女優になり、一躍有名になった。しかし、もっと有名になったのは、一七七九年十二月三日、彼女が二一歳のとき、『冬物語』のパーディタ役の演技で当時十七歳のプリンス・オヴ・ウェールズ（のちのジョージ四世）（一七六二—一八三〇）の目を引き、彼の最初の愛人になってからである。一年後彼が他の女性に心を移したため棄てられたが、二人の短くも華麗な情事はすぐさま一大スキャンダルとなって世を騒がした。たとえば、一七八〇年に出版された諷刺詩「フローリゼルとパーディタ」は「ああ、ポーリーはかわいいそうな娼婦」の節回しでうたうよう指示し、プリンス・オヴ・ウェールズとロビンソンと彼女の夫の関係を次のようにからかっている。

She never play'd her Part so well,

In all her Life before,

Yet some, as well as Florizel,

Knows how she plays the W—

Her husband too, a puny Imp,

Will often guard the Door;

And humbly play Sir Peter Pimp,

While she performs the W—. (“Florizel and Perdita,” lines 25-32, qtd in Steen 123)

彼女は今までの人生で／こんなにも上手に演じたことはなかった。／だけどフローリゼルだけでなく、誰かさんも／



図版 16
シャーウィンとパークの彫版画「フローリゼルとパーディタ」、『メアリ・ロビンソンの回顧録』（1895）162 頁に面した挿絵。



The new Victoria, or Horzel driving Perdita.

図版 17
「新型馬車、あるいはパーディタを馬車で運ぶフローリゼル」、『ランブラーズ・マガジン』（1783年8月）中の戯画。マーガリート・ステイーン『迷える人—メアリ・「パーディタ」・ロビンソン伝』（1937）158 頁に面した挿絵。

知っているのさ、どんなふうにも彼女が売*を演じたか。／けちな小鬼の彼女の旦那も／しばしばドアを見張り、／かしまつてポン引きピーター卿を演じる。／彼女が売*をやっている間にね。

一七八三年八月の『ランブラーズ・マガジン』に載った諷刺画（図版17）では、プリンス・オヴ・ウェールズが手綱を引く大きな山羊の二頭立て馬車に「パーディタ」が乗り、後ろに従僕として侍る彼女の夫が彼女に「六万ポンド

の譲渡証書」と書かれた紙を手渡ししている様子が描かれる。劇場で彼女を見初めたプリンス・オヴ・ウェールズは、彼女の愛を射止めるために自分が成人になったとき二万ポンドを支払うという証書を渡していた。結局その約束は果たされなかったが、七千ポンドの借金があったロビンソンは一七八一年に「フロリーゼル」たる彼からの熱烈なラブレターを彼の父親のジョージ三世に五千ポンドで売ることに成功し、また翌年にはホイック党首領のチャールズ・ジエイムズ・フォックス（一七四九—一八〇六）の仲介で、二万ポンドの証書を引き渡すのと引き替えに五百ポンドの年金を確保した。上記の諷刺画は、このような金銭ずくの二人の関係を茶化しているのである。

ロビンソンはプリンス・オヴ・ウェールズとの仲をとりもったモールデン卿や、上記のフォックスともつき合い、一七八二年頃から九八年までは、対米戦争で活躍したバナスター・タールトン大佐（一七五四—一八三三）の愛人になったが、これらの恋ももちろんゴシップの種であった。一七八二年九月二一日の『モーニング・ポスト』紙は「船のニュース」で次のように揶揄している。

武装船タールトン号はパーデイタ・フリゲート艦を捕まえた。（中略）巡航中多くの捕獲物、特にフロリーゼル号をとった、巨大な素晴らしく綺麗な船底の船。（中略）数年前にはフォックス号に捕まったが、すぐあとでモールデン号にまた捕まり、タールトン号と出会ったとき贅沢なひとそろいの新しい策具装置をつけていた。

(*Quid. in Ingamells 19*)

一七八二年八月二〇日に出たジエイムズ・ギルレイ（一七五七—一八二五）の「雷神」と題する諷刺画（図版18）では、雄々しくて自慢に満ちたタールトン、頭が羽飾りになっているプリンス・オヴ・ウェールズ、そして背景のいかげわしい建物の戸の上に足を大きく広げて座っているロビンソンが描かれる。けばけばしい看板は「野菜と煮込んだビーフ、毎晩あつあつ」と宣伝し、明らかにロビンソンを消費され、楽しまれる肉と同一視した。



図版 18
ジェイムズ・ギルレイ「雷神」(1782)。マーガリー
ト・ステューン『迷える人—メアリ・「パーディタ」・
ロビンソン伝』(1937) 182 頁に面した挿絵。

ができるほど年をとっている。しかし彼女自身や、彼女の死後この仕事を引き継いだ者が、隠そうとしたものを詳しく述べるつもりはない。彼女は多くの美德と多くの欠点を持っていた。願わくは、水の上に欠点が書かれて、通り過ぎるそよ風によって消されますように！」(The Critical Review 33 [1801]: 295) と、複数の男性たちとのスキャンダルがあったことを仄めかした。

このようにロビンソン自身が人々の注目的になっていたなら、彼女の詩が偏見なく正当に評価されるとは考えられないだろう。実際、『ジェントルマンズ・マガジン』第六一号(一七九二)はロビンソンの一七九一年出版の『詩集』への書評の中で、上述の『マンスリー・レビュー』の書評に水をさすかのように、次のように皮肉っている。

彼女のスキャンダルの記憶はその後も長い間人々の脳裏から消えなかつた。彼女に「イングランドのサッポー」のタイトルを授けた『マンスリー・レビュー』は用心深い書き方で、「この独創的で著名なご婦人は、その個人的な魅力と精神的な才芸の両方で公衆の注意を引きつけてきた」(Review of Poems [1791], by Mary Robinson, The Monthly Review 6 [1791]: 448) と記した。彼女が一八〇〇年に亡くなってからも、『クリティカル・レビュー』第三三号(一八〇二)は、彼女の自伝『故ロビンソン夫人の回顧録』(一八〇二)への書評の中で、「われわれはその時期を思い出し、話を書き足すことに亡くなってからも、『クリティカル・レビュー』

彼女の出版物の功績を全く損なうことなく、われわれは以下のことを認めたい気持ちである。もし彼女がその個人的な優雅さや才芸で目立っていなかったら、(中略)彼女の詩的な趣味が影響を及ぼす範囲は限られており、友人たちからは懇篤な賞賛を浴びるだろうが、公衆からはほとんど注目もされず、褒賞もなかったであろう、と。

(*The Gentleman's Magazine* 61 [1791]: 560)

サッポーの名誉回復

従って、ロビンソンは、このような偏見に満ちた批評を退けるために、そして何よりもまず詩人としての自分の名誉のために、是非とも詩人サッポーの名誉を回復する必要がある。⁷『サッポーとパオーン』の序文中の「サッポーの話」で、彼女は十八世紀におけるサッポーの二つの賛辞を紹介している。一つはアデイソンが一七一一年の『スペクター』誌でサッポーの詩を賞賛したものである。ロビンソンは、サッポーの詩は「魅惑的な愛情と恍惚」(Joseph Addison 2: 366)で満ちているとアデイソンが言った箇所を、「感受性の鮮明な輝き」で満ちているという表現に変えて、そのあとで「全部残存していたら読むには危険だったかもしれない」と、アデイソンの表現を少し変えて引用した。だが、ロビンソンはアデイソンのサッポー評に満足で、「現代の潔癖すぎる上品さ」を示すものとなし、詩人サッポーを正しく評価していないと断じた(*Sappho* 24-25, 27)。

これに対し、一七八八年に出版されて以来版を重ね、一七九一年に英訳されたフランスの聖職者ジャン・ジャック・バルテルミの『小アナカルシスのギリシャ旅行記』は、ロビンソンにとって、「ギリシャの女性詩人の擁護であると同時に賛辞」(*Sappho* 27)だった。フランスにおけるサッポーの虚構化の歴史を辿ったジョアン・デジャンは、バルテルミが「政治的サッポー」(*Dajean* 157)を創り出したと主張している。バルテルミの話の中では、サッポーがレスボスからシチリアへ渡ったのは、ダシエ夫人以来伝統的に言われてきたようにパオーンを追いかけたからではな

く、腐敗したレスボス社会での革命的行為のせいで亡命したからだ。しかし、ロビンソンが「サッポーの話」の最後に長々と引いているバルテルミからの抜粋は、フランス革命者の先駆者のようなサッポーのことは何も言及していない。その代わり、偉大な詩人としてのサッポーの過度な感受性に焦点を合わせている。



図版 19
「サッポー」、メアリ・ロビンソン
『サッポーとパオーン』（1796）口絵。

サッポーはレスボスの女性たちに文学の趣味を吹き込む仕事にとりかかった。彼女たちの多くは彼女から教えを受け、外国の女性たちも大勢彼女の弟子になった。彼女は彼女たちを愛しすぎるほど愛した。別なふうにあつて愛するなんてできなかったからだ。そして、あらん限りの激しい情念で自分の愛を表現した。あなた方がギリシヤ人たちの極端な感受性のことをよくご存じで、彼らの間では最も無垢な関係がしばしば情熱的な愛の言葉を借用していることがおわかりになったら、そんな表現に驚かないでしょう。(Sappho 28)

バルテルミを通して、ロビンソンはサッポーのレスボスの女性たちに対する愛を非難から擁護している。彼女たちに対する愛こそサッポーの詩の源泉であり、その上、サッポーと彼女たちの関係は文学の師と弟子の関係であったのだ。リンダ・H・ピーターソンの言葉を借りれば、サッポーは「女性の共同体と女性の文学伝統の可能性」(Peterson, "Becoming" 41)を象徴すると言える。

意義深いことに、サッポーの詩的創造や女性の文学伝統において、男性たちは主要な役割を果たしていなかった。このことは、ロビンソンがサッポーの有名な異性愛物語をソネット連歌のテーマに取り上げたとき、いつも彼女の詩

の下に潜んでいるようである。次の節では、『サッポーとパオン』の序文におけるロビンソンの主張がどのようにソネット連歌で具現化されたかを見てみる。

ロビンソンの真正なソネット

ロビンソンは、彼女のソネット形式が「真正」（すなわちイタリア風ソネットもしくはペトルルカ風ソネット）であることを強調する。イギリス風もしくはシェイクスピア風ソネットは三つの四行連句に二行連句がつくに対し、真正なソネットでは八行連句と六行連句 (*abbaabba cdecde or cedecc*) からなる。多くの母音を持つイタリア語と違って、英語でこの韻を踏むのはかなり難しい。「それはミルトン以来どんな著名な人物「男性」も使ったことがなかった」(*Sappho 7*)と、ロビンソンはジョンソン博士の言葉を引いている。従って、このソネット形式を女性のロビンソンが採用するということは、彼女が作詩能力において、イギリスで最も偉大な男性詩人のうちの一人であるミルトンに匹敵することを示しているだろう。

真正なソネット形式を用いることによって、ロビンソンはオウイデイウスとポープが採用した哀歌調の書簡体形式と、彼らが描くサッポー像に対する批判を示そうとする。オウイデイウスの詩の冒頭部分では、サッポーはすでにパオンに棄てられてしまったあとである。悲しみにくれるサッポーは哀歌調の書簡を彼に宛てて書く。なぜなら、彼女の有名な抒情詩体よりも哀歌形式の方が深い悲しみを表現するにふさわしいからだ。

Forstian et quare mea sint alterna requiras
 carmina, cum lyricis sim magis apta modis.
 flendus amor meus est—elgiae flebile carmen;
 non facit ad lacrimas barbidos ulla meas. (Ovid, Epistle XV, "Sappho Phaoni," lines 5–8)

おそらくあなたはまた、叙情詩形の方が私にもっとふさわしいのに、／どうして私の詩が「哀歌調に」替わったのかとおたずねになるかもしれません。／私は私の愛のために泣かねばならないのです。——そして哀歌は涙を流す詩歌です。／私の涙に抒情詩はふさわしくありません。

デジヤンの解釈によれば、オウイディウスはこのように sappho から抒情詩人としての彼女のアイデンティティを奪い、彼女にただ単に哀れな、棄てられた女性としての役を振り当てた。そうすることによって、オウイディウスは哀愁に満ちた書簡の本当の作者として sappho に取って代わることができ、そして彼女の不滅の名声ではなく自分自身の不滅の名声を確立できた (DeJean 74, 77)。ロビンソンはこうした「女性の文学的権威の篡奪」(DeJean 77) に反論し、オウイディウスやその追従者ポープが描く sappho がもとの女性の声を喪失してしまっていることに批判の声を強める。彼女のソネットのエピグラフとして、オウイディウスから上記ラテン語引用のうちの最後の二行と、ポープによる英訳「愛は、より悲しい調べで私の涙が流れるように教え、／そして私の心を悲しみの哀歌へと向けさせた」("Love taught my tears in sadder notes to flow, / And tun'd my heart to elegies of woe") ("Sappho to Phaon," lines 7-8) を選んだのはそのためである。

ロビンソンの sappho

『 sappho とパオーン』を通して、ロビンソンは読者にオウイディウスとポープの「パオーンに宛てた sappho の手紙」に戻るよう誘導する。導入的な最初の三つのソネットと結論部の「ソネット44」の間に、一人称単数で語る sappho の物語が置かれている。その物語は、ソネットのタイトルに従えば、「 sappho が自分の情欲を発見する」(ソネット4) から、「彼女は彼をとりこにしようとする」(ソネット13)、「パオーンは彼女を棄てる」(ソネット22)、「

「パオーンについていく」ことを決心する（「ソネット29」）、「シチリアに到着する」（「ソネット33」）を経て、「非業の死を遂げる前、レフカスの岩上における彼女の黙想」（「ソネット43」）にまでゆっくり進む⁸。しかしながら、このけだるい進行にもかかわらず、ロビンソンのサッポーは、物語の発端を示す「ソネット4」からすでに、オウイディウスとポープのサッポーの運命を知っている。

Why, when I gaze on Phaon's beauteous eyes,

Why does each thought in wild disorder stray?

Why does each fainting faculty decay,

And my chill'd breast in throbbing tumults rise?

Mute, on the ground My Lyre neglected lies,

The Muse forgot, and lost the melting lay;

My down-cast looks, my faltering lips betray,

That stung by hopeless passion, — Sappho dies!

Now, on a bank of Cypress let me rest;

Come, tuneful maids, ye pupils of my care,

Come, with your dulcet numbers soothe my breast;

And, as the soft vibrations float on air,

Let pity wait my spirit to the blest,

To mock the barb'rous triumphs of despair! ("Sonnet IV: Sappho discovers the Passion")

どうして、私がパオーンの美しい目を見つめるとき、／どうしてどの思いも激しく混乱してさまようのかしら？／どうして失神の機能も衰え、／私の冷え冷えとした胸はときどき乱れて高まるのかしら？／私のリラは忘れ去られて地

面に静かに横たわる。／ミューズは忘れられ、哀愁をそそる歌も失われている。／私のうなだれた眼差しは、私の口ごもる唇は、示している、／望みのない情欲で苦しんでいることを。——サッポーは死ぬ！／さあ、イトスギの土手で私を休ませておくれ。／おいで、快い響きを出す乙女たちよ、私が世話する弟子たちよ。／おいで、お前たちの美しい調べで私の胸を慰めておくれ。／そして、柔らかな振動が空に漂うとき、憐憫に私の魂を聖なる者へと運ばせておくれ。／絶望の無慈悲な勝利をあざけるために！

第一行目から三行目までは、このソネットのタイトルどおり、話し手の「私」がはじめてパオーンを見たとき、いかに狂えるような熱烈な情欲を感じたかを示す。しかしながら、第四行は明らかにポープの詩の二二六行目（下記の引用の最終行）、パオーンが彼女を棄ててシチリアに逃げていってしまったことを嘆く言葉を反映している。

When first I heard (from whom I hardly knew)

That you were fled, and all my joys with you,

Like some sad statue, speechless, pale, I stood,

Grief chill'd my breast, and stopp'd my freezing blood: (Pope, "Sappho to Phaon," lines 123-26)

最初に私が、（誰から聞いたかほとんど知らないけれど）／あなたが逃げてしまったと、私の喜びも全部あなたとともに消え去ったと、聞いたとき、／何か悲しい彫像のように、言葉もなく、青ざめて、私は立っていた。／悲嘆が私の胸を冷たくし、私の凍える血を止めた。

同様に、ロビンソンの五行目はポープの六行目（下記の引用の二行目）に共鳴している。

Ask not the cause that I new numbers chuse,

The Lute neglected, and the Lyric muse;
 Love taught my tears in sadder notes to flow,
 and tun'd my heart to Elegies of woe. (Pope, "Sappho to Phaon," lines 5-8)

私が新しい韻律を選んだ理由をお尋ねにならないでください。／リュートはなおざりにされ、抒情の詩風も忘れ去られた。／愛は私の涙にもっと悲しい調べで流れるように教え、／私の心を悲しみの哀歌の気分に合わせて。

そしてロビンソンの六行目から八行目は、ポープの次の詩行を想起させるものである。サッポアの詩的な声の喪失はパオンの愛の喪失が原因であると示される箇所だ。

Alas! the Muses now no more inspire,
 Untun'd my lute, and silent is my Lyre,
 My languid numbers have forgot to flow,
 And fancy sinks beneath a weight of woe.

.....
 Absent from thee, the Poet's flame expires: (Pope, "Sappho to Phaon," lines 228-31, 240)

ああ！ ミューズの女神たちはもう靈感を与えてくれない。／私のリュートは調子はずれ、私のリラは音を出さない。／私のものうい調べは流れるのを忘れてしまった。／そして空想が悲しみの重みの下に沈む。／(中略)／あなたがいなくなり、詩人の炎は消える。

換言すれば、ロビンソンのサッポーはパオンへの熱烈な愛に目覚めるやいなや、それが「望みがない」(八行目)愛であることや、自分がもはや詩人ではなくなることを知っている。それ故、語り手の「私」が、「私は死ぬ！」の

代わりに、「サッポーは死ぬ！」と叫んでいることは看過できない。ロビンソンは明らかに第一人称の「私」と第三人称の「サッポー」を区別し、前者をパオンへの愛に囚われた単なる女性、そして後者をリラを奏で、歌をうたう詩人として考えた。詩人「サッポー」の死は未来時制ではなく現在時制で描かれているので、女性の「私」はすでに詩人としてのアイデンティティを喪失している。そしてさらに注目すべきは、「私」が詩人「サッポー」の死を自覚したあと、六行目で、「さあ、イトスギの土手で私を休ませておくれ」と、自分の自殺願望を口にかけていることである。(イトスギは、墓地に多く植えられる針葉樹で、喪の表象である)。「私」はオウイデイウスやポープが描いたようにパオンに棄てられて絶望のあまり死を望むのではなく、詩人としてのアイデンティティを失ったから、自らの肉体的な死を望んでいるのだ。

ロビンソンのサッポーの物語は、「ソネット4」にすべて凝縮されていると言っても過言ではない。ロビンソンはこのあとも意図的にパオンへの愛にとりつかれた「私」と詩人「サッポー」の間に明確な線を引きながら、後者の死を何度も描く。たとえば、「ソネット19、彼の不変の愛を疑る」は、語り手の「私」の「さらば」という声から始まる。

Farewell, ye coral caves, ye pearly sands,
 Ye waving woods that crown yon lolly sleep;
 Farewell, ye Nereides of the glift ring deep,
 Ye mountain tribes, ye fawns, ye sylvan bands:
 On the bleak rock your frantic minstrel stands,
 Each task forgot, save that, to sigh and weep;
 In vain the strings her burning fingers sweep,
 No more her touch, the Grecian Lyre commands!

In Circe's cave my faithless Phaon's laid,
 Her daemons dress his brow with opiate flow'rs;
 Or, loit'ring in the brown pomegranate shade,
 Beguile with am'rous strains the fateful hours;
 While Sappho's lips, to paly ashes fade,
 And sorrow's cank'ring worm her heart devours! ("Sonnet XIX. Suspects his constancy")

さらば、汝らサンゴの洞よ、汝ら真珠の真砂よ、／向こうの高い断崖を飾る汝ら揺れる木々よ。／さらば、汝らきらめくわだつみの海の精たちよ、／汝ら山の種族よ、汝ら小鹿よ、汝ら森の群れよ、／荒涼たる岩の上にあなた方の狂乱した詩人は立つ。／ため息をついて泣くこと以外のどの仕事も忘れて。／彼女の燃える指はむなしく弦をかきならす。／もはや彼女の爪弾きが、ギリシャのリラを意のままにすることはない！／キルケの洞窟に、私の不実なパオーンはいる。／彼女の悪霊たちは彼の額を催眠の花々で飾る。／あるいは、褐色のザクロの木の日陰をさまよいながら、／恋の調べで運命のときを紛らす。／その間、サッポアの唇は青白い灰に色あせ、／そして悲しみの害虫が彼女の胸をむさぼり食うのだ！

「私」は、かつて詩の主題であったレスボスのさまざまな自然物に「さらば」と告げ、「荒涼たる岩の上にあなた方の狂乱した詩人は立つ」(第五行)と嘆く。あたかも「私」が、オウイデイウスのサッポアのあの最も有名な場面、レフカスの岩上に立ち、今にも飛び降りようとしている場面を思い起こしているかのよう。そして「私」は、詩人サッポーを自分とは区別して、「彼女の燃える指」(第七行)、「彼女の爪弾き」(第八行)、「サッポアの唇」(第十三行)、「彼女の胸」(第十四行)と、第三人称を使用し続ける。他方、第一人称は一度だけ第九行目で使われ、「私の不実なパオーン」がホメロスの『オデュッセイア』中のキルケのような妖婦にパオーンが囚われているのを嘆いている。「ソネット23、サッポアの憶測」でも同様に「私」と「サッポア」は分かれている。

To *Aethra's* scorching sands my Phaon flies!

False Youth! can other charms attractive prove?

Say, can Sicilian loves thy passions move,

Play round thy heart, and fix thy fickle eyes,

While in despair the Lesbian Sappho dies?

Has Spring for thee a crown of poppies wove,

Or dost thou languish in th' Italian grove,

Whose altar kindles, fann'd by Lover's sighs?

Ah! think, that while on *Aethra's* shores you stray,

A fire, more fierce than *Aethra's*, fills my breast;

Nor deck Sicilian nymphs with garlands gay,

While Sappho's brows with cypress wreaths are dress'd;

Let one kind word my weary woes repay,

Or, in eternal slumbers bid them rest. ("Sonnet XXIII. Sappho's Conjectures")

エトナ山の焼けつく砂地へ私のパオーンは逃げる！／不実な若者よ！他の女の色香が魅力的だとわかるかしら。／ねえ、シチリアの恋人たちはあなたの情欲を動かして、／あなたの心にじゃれつき、あなたの気紛れな目を止めさせるのかしら、／レスボスのサッポーが絶望のあまり死ぬときに、／春はあなたのためにポビーの花の王冠を編んだの？／それとも、あなたはイダリウムの小森で思い悩んでいるの？／その祭壇は火がつき、愛する人のため息にあおられている。／ああ！考えてください、あなたがエトナ山の地をさまよっている間、／エトナ山よりもっと激しい火が、私の胸を満たしていることを。／シチリアの乙女たちを陽気な花輪で飾らないでください、／サッポーの額がイトスキの花冠で飾られているときに。／一つの優しい言葉を私の疲れ果てた苦悩に返してください。／そうでなければ、私の苦悩に永久の眠りにつくよう命じてください。

ここでも、「私のパオーン」(一行)、「私の胸」(十行)、「私の疲れ果てた苦惱」(十三行)と言う「私」が、「レスボスのサッポーが絶望のあまり死ぬ」(五行)、「サッポーの額がイトスギの花冠で飾られている」(十二行)と、「サッポー」の死を現在時制で語っていることに注目したい。

詩人「サッポー」はすでに死んでいる。ロビンソンは、このメッセージを繰り返すことによって、同時代の女性作家たちが置かれた文学的状况を暗示しようとする。ソネット連歌を通して、パオーンへの愛は「光を嫌い、死を望むこと」(“Sonnet VI. Describes the characteristics of Love,” line 13)と同義であり、語り手の「私」を理性の光から遠ざけ「狂気」(“Sonnet XI. Rejects the Influence of Reason,” line 10)に追いやり、「精神的な夜の荒涼とした迷路」(“Sonnet VII. Invokes Reason,” line 14)に閉じ込めるものである。これに対し、詩や詩的創造力は「より崇高な情念」(“Sonnet V. Contemns its Power,” line 2)である理性、「明るく光景」(“Sonnet VII. Invokes Reason,” line 13)、「太陽の光」(“Sonnet XXV. To Phaon,” line 11)と結びつけられている。異性愛と試作の対立関係が闇と光の対比で描かれている(ことから明らかのように、パオーンへの愛にとりつかれ、詩人としてのアイデンティティを喪失している語り手の「私」は、啓蒙から永久に遠ざけられているのである。「サッポーの死」を嘆く「私」の声は、ロビンソンの時代の抑圧された女性作家たちの嘆きに他ならない。

ロビンソンはサッポーの物語をさらに進める。「ソネット41、レフカスから飛び降りる決心をする」になると、「私」がパオーンへの愛から解放され、詩人「サッポー」と結合するという希望に満ちた未来像が描かれることになる。だが、それは、詩の舞台がレスボスからシチリアに移った「ソネット33、シチリアに到着する」ですすでに暗示されていた。

I wake! delusive phantoms hence, away!

Tempt not the weakness of a lover's breast;

The softest breeze can shake the halcyon's nest,

And lightest clouds o'er cast the dawning ray!

'Twas but a vision! Now, the star of day

Peers, like a gem on Ætna's burning crest!

Wellcome, ye Hills, with golden vintage crest;

Sicilian forests brown, and valleys gay!

A mournful stranger, from the Lesbian Isle,

Not strange, in loftiest eulogy of Song!

She, who could teach the Stoic's cheek to smile,

Thaw the cold heart, and chain the wond'ring throng,

Can find no balm, love's sorrows to beguile;

Ah! Sorrows known too soon! and felt too long! ("Sonnet XXXIII. Reaches Sicily")

私は目覚める！ 人を惑わすまほろしよ、ここから立ち去れ！／愛する人の胸の弱さを試すな。／最も柔らかなそよ風がアルキユオーンの巢を揺らし／最も淡い雲が夜明けの光をおおう！／あれは幻影に過ぎなかつた！ 今や、日中の星が／エトナの燃え盛る山頂の上に寶石のように、顔をのぞかせる！／ようこそ、金色の葡萄の収穫をまとつた、汝ら山々よ。／シチリアの茶色の森と陽気な渓谷よ！／レスボスの島から来た、悲しみに沈んだ見知らぬ人よ！／非常に高く称揚されている歌では、知られているけれど。／彼女は、禁欲主義者のほおに笑うことを教え、／冷たい心を溶かし、感嘆している人の群れをつなぎとめておくことができたのに、／今は愛の悲しみを紛らす乳香を見つけたことができない。／ああ！ あまりにも早く知られ、あまりにも長々と感じて悲しむよ！

「私」は、シチリアに着くやいなや、「目覚める！」と叫ぶ。そして「日中の星が／エトナの燃え盛る山頂の上に寶石のように、顔をのぞかせる！」のを見る。これは、「私」が男性への愛に監禁されていた夜の闇から目を覚まし、夜明けの太陽（「日中の星」）もしくは太陽神のアポロ（詩と音楽と予言の神）を歓迎する、まさにその瞬間である。た

だし、このソネットでは、「私」は依然として「レスボスの島から来た、悲しみに沈んだ見知らぬ人」たる「サッポ
ー」と区別されている。また、「彼女は（中略）愛の悲しみを紛らす乳香を見つけることができない」と、詩人の無
力さも嘆いている。しかし、「サッポー」の死はもはやどこにも言及されていない。

「ソネット³⁴」、サッポーのヴィーナスへの祈り」では、女性の「私」と詩人の「サッポー」の区別は曖昧になる。

Venus! to thee, the Lesbian Muse shall sing,

The song, which Myttellenian youths admir'd,

When Echo, am'rous of the strain inspir'd,

Bade the wild rocks with madd'ning plaudits ring!

Attend my pray'r! O! Queen of rapture! bring

To these fond arms, he, whom my soul has fir'd;

From these fond arms remov'd, yet, still desir'd,

Though love, exulting, spreads his varying wing!

O! source of ev'ry joy! of ev'ry care!

Blest Venus! Goddess of the zone divine!

To Phaon's bosom, Phaon's victim bear;

So shall her warmest, tend'rest vows be thine!

For Venus, Sappho shall a wreath prepare,

And Love be crown'd, immortal as the Nine! ("Sonnet XXXIV. Sappho's Prayer to Venus")

ヴィーナスよ、あなたにレスボスのミュージーズはうたうだろう。／ミティリニの若い人たちが称賛した歌を。／そのとき
エコーは見事な調べに恋して、／荒れ果てた岩々に拍手喝采で鳴り響くよう命じたのだ！／私の祈りを聞いてくださ

い！ おお！ 歡喜の女王よ！／私の魂が燃え立たせた彼を、この愛する腕のところに連れてきてください。／この愛する腕から立ち去られたけれど、今でも欲望を感じる彼を。／愛は、有頂天になって、移り気の羽を広げているけれど！／おお！ あらゆる喜び、あらゆる懸念の源よ！／聖なるヴィーナスよ！ 天上の女神よ！／パオンの胸にパオンの犠牲者を連れていてください。／そうすれば、彼女の一番熱く、一番優しい誓いはあなたのものではない！／ヴィーナスのために、サッポーは花冠を用意しましょう。／そして九女神のように不滅な恋愛の神に冠を頂かせましょう！

はじめの八行は、サッポーが復活する未来を描く。「レスボスのミューズ」たるサッポーは、かつて郷里のレスボス島のミティリニでうたったように、美と愛の女神ヴィーナスにうたうだろう。第三行目の「エコー」（ギリシャ神話の森のニンフ）への言及は、エコーが肉体が消滅し声だけになってもなおナルキッソスへの愛を持ち続けたように、「私」は肉体が滅び、「サッポー」の詩的な声を取り戻したときですら、パオンへの愛を忘れてしまうことはないことを暗示しているように見える。しかし、このような印象は第五行目以降すぐに追い払われる。「サッポー」の未来の復活は、「私」が死んだあとではなくて、パオンを「この愛する腕のところに連れてきてください」という「私の祈り」をヴィーナスがかなえたあとなのである。実は、「ソネット35、パオンを非難する」ではつきりと述べられているように、この祈りは決してかなえられることはない。それにもかかわらず、「ソネット34」の最後から四行目で、「パオンの胸に、パオンの犠牲者を連れていてください」という声があがったことは注目すべきである。パオンへの愛の虜だった語り手はこれまで常に第一人称単数形で示されていたが、ここではじめて「パオンの犠牲者」として客観視される。そしてそのあとも「彼女の一番熱く、一番優しい誓い」と第三人称の使用が続く。と同時に、「パオンの犠牲者」と代名詞の「彼女の」は最後から二行目の「サッポー」を指すようにも思える。このようにロビンソンの人称の使い方は曖昧だが、その曖昧さはそれだけ一層「私」と「サッポー」の同一化を予期させるように働くと行ってよいだろう。

「私」と詩人「サッポー」の完全な同化が描かれるのは、「私」が自殺する決意をした様を描く「ソネット41」、レフカスから飛び降りる決心をする」のすぐあとにくる「ソネット42」、パオンへの彼女の最期の訴え」においてである。

Oh! can'st thou bear to see this faded frame,
 Deform'd and mangled by the rocky deep?
 Wilt thou remember, and forbear to weep,
 My fatal fondness, and my peerless fame?
 Soon o'er this heart, now warm with passion's flame,
 The howling winds and foamy waves shall sweep;
 Those eyes be ever clos'd in death's cold sleep,
 And all of Sappho perish, but her name!
 Yet, if the Fates suspend their barb'rous ire,
 If days less mournful, Heav'n designs for me!
 If rocks grow kind, and winds and waves conspire,
 To bear me softly on the swelling sea:
 To Phoebus only will I tune my Lyre,
 "What suits with Sappho, Phoebus suits with thee!" ("Sonnet XLII. Her last Appeal to Phaon")

おお！ あなたはこの死んだ体を見るのに耐えることができようか、／岩だらけの海原によって変形し、押しつぶされたものを。／あなたは覚えていて、泣くのをこらえるだろうか、／私の破滅的な溺愛を、そして私の比類なき名声を。／今情念の炎で熱くなっているこの心の上に、やがて／吹きすさぶ風と泡立つ波が押し寄せるでしょう。／その眼は死の冷たい眠りの中で永久に閉じ、／そしてサッポーの名前を除いて、彼女のすべてが滅びるでしょう。／しかし、

もし運命の三女神がその残酷な怒りを一時差し控えるならば、／もし岩々が親切になり、風と波が力を合わせて／高波の海の上で私をそっと支えてくれるならば、／ポイボスだけに私は私のリラを奏でるでしょう。／「サッポーに似合うものは、ポイボスよ、あなたにも似合う！」

タイトルどおりパオンへの最期の言葉で始まるこのソネットは、「私」と「サッポー」を区別していない。第四行目「私の破滅的な溺愛を、そして私の比類なき名声を」(傍点引用者)では、パオンへの愛だけでなく詩的な名声も「私」のものである。また続く詩行では、「私」が死んだのち、詩人「サッポー」として復活する未来のヴィジョンが示される。八行目中の「サッポー」とは「私」のことであり、死によって肉体が朽ちても、偉大な詩人としての名声(「サッポー」という名前)だけは永久に生き続けることを意味している。

さらに興味深いことは、終わりの六行が「しかし」で始まり、はじめの八行で暗示されていた「私」の死を打ち消し、かわりに別の可能性、すなわち投身自殺が未遂に終わった場合のことを描いていることだ。そのとき、「私のリラを奏でる」のは「私」(傍点引用者)であり、前にみた「ソネット」と違って、ヴィーナスではなく、ポイボス(太陽神としてのアポロで詩歌、音楽、予言などを司る)に歌を捧げるのである。「私」のパオンへの愛がいつも夜や暗闇と結びついていたことを思い出したい。自殺未遂後、「私」は暗闇から脱してパオンへの愛を完全に忘れ、詩人としてのアイデンティティを取り戻すのである。

重要なことに、「ソネット42」の最終行は、ポープの「パオンに宛てたサッポーの手紙」からの引用である。ロビンソンは注でオウイデウスのラテン語の同箇所も引いている。彼らの詩では、これはサッポーが自殺前に書いた自分の墓碑銘の中の言葉を指す。彼らのサッポーは、それほど自らの死を確信していた。これに対し、ロビンソンはそれらの言葉を自殺未遂のコンテキストに置くことにより、パオンへの愛にとりつかれていた「私」の完全な消滅と、詩人「サッポー」として蘇生する未来を確信していると言えよう。

従って、ロビンソンのサッポーはオウイディウスやポープのサッポーのように死をパオーンからの避難所として見なしていない。「ソネット43、非業の死を遂げる前、レフカスの岩上における彼女の黙想」で示されるように、「私」は「理性の静穏な光」を取り戻すために、積極的に死を歓迎する。そして、「そのとき、私のリラは愛の恐ろしい支配を軽蔑するでしょう。／そしてもっと高尚な情念よ、もっと高尚なテーマを呼び起こしておくれ！」(“Sonnet XLIII. Her Reflections on the Leucadian Rock before she perishes,” lines 10, 13-14) (傍点引用者)。換言すれば、「私」は本来のアイデンティティを取り戻すためにレフカスの岩上から海へと飛び込まねばならない。オウイディウスやポープのサッポーがこの世で生きるにはあまりにも弱い女性であったに対し、ロビンソンのサッポーは詩人として蘇生する(fire)ために果敢にも飛び降りる(fall)のである。¹⁰

もう一人のサッポー

ロビンソンはこのようにサッポーの話をオウイディウスやポープが予想しなかった筋書き——レフカスの岩上からの落下後のサッポーの来生のヴァイジョン——で終えた。サッポーがいつ、どこで、どのようにして亡くなったのかは今日まで謎のままである。¹¹ロビンソンは「サッポーの話」の中で、サッポーが伝説どおり「レフカスから飛び降りて、海で亡くなった！」(Sappho 29)とこうバルテルミの理論に従った。それ故、彼女のソネット連歌におけるサッポーの話の結びは示唆に富む。というのは、サッポーの詩人としての蘇生は明らかに女性の文学伝統の真の意味での始まりを示しているからだ。やがてもう一人のサッポーが出現するであろう。彼女は、女性詩人の声を黙らせ、弱々しく、淫らで、男性への愛に悩む女性へと変えてしまう男性たちの陰謀や企てを巧みに逃れて、女性の詩的権威を取り戻すであろう。

ロビンソンは彼女の時代には数多くのイギリスのサッポーたちが潜在していると感じていた。死の一年前にアン・

フランス・ランデルのペンネームを用いて出版した『イングランドの女性たちへの手紙』(二七九九)¹²では、「現在、地球上でイングランドほど数多くの気高くて傑出した女性たち(精神的に、という意味だが)を生み出している国はいない」(Letter 64)と、同時代の文学界に言及する。しかし、「彼女らの多くは世に知られずに暮らしている。(中略)国の名譽のしるしも、一般の人々に賞賛されるといふ公の評判も、高い地位も、肩書きも、公平無私で申し分のない報酬も、イギリスの女性著述家には与えられていない。」一方、外国では、「優れた才能は性別がないとされ、天才は、ギリシャのヴィーナス像の姿の下に隠れているように、あるいはファルネーゼ・ヘラクレス像の姿の下に隠れているように、いつも、創造者の最も優れた最も気高い才能の一つの天才として崇められる」ので、イギリスの女性作家たちは「名声を求めて、外国に逃げなければならぬ。」そして実際に、小説家のメアリ・ハミルトン(一七三九—一八一六)やヘレン・マライア・ウィリアムズは、「イギリスでは、顧みられず、ほとんど無名だったが、大陸では偶像化されていると言っているほどなのだ!」(Letter 64-65)。

ロビンソンはさらに、自国の女性作家たちに対する男性の根強いセクシズムを指摘する。「私は、男性の教育者や演説家、立法者、そして虐げられた女性をうわべだけ賞賛する者が、次のように断言するのを聞いたことを思い出す。「社会が経験する災厄の最たるものが、女性著作家だった!」(Letter 65-66)。また、別の箇所では、ポルウェルが「女らしさを失った女」たちを嘲笑し、攻撃したような昨今の反ウルストンクラフトの風潮を次のように指摘する。

「男性の」偏見(もしくは方針)は、いわゆる男性的な女性に悪評をもたらすよう努めてきて、実際とてもうまくいっている。男性的な女性という言葉の意味を説明すれば、啓蒙的な理解力のある女性のことである。そういう存在は社会の中で認めるにはあまりにも恐ろしく、許容されることはかなり少ない。(Letter 72)

それにもかかわらず、ロビンソンは女性のペンこそがセクシズムを追放する唯一の手段であると力を込めて断言した。

女性は話す力を駆使することを咎められてきたので、首尾よくペンを手に取ってきた。彼女たちの書き物は精神の精力と最も該博な知識を獲得する能力の両方を体現する。印刷機は、そこからブリテンの女性たちの非凡な才能が不滅な名声へとあがる記念碑になるだろう。彼女たちの作品は、彼女たちの教育が進歩的になるにつれて、年ごとに、一流の男性の同時代人たちの労作と対等の名声の分け前を要求するだろう。(Letter 90-91)

サッポーの蘇生

従って、ロビンソンが一八〇〇年十二月二六日で亡くなる年に「サッポー」の名前で詩を発表したことは、象徴的な出来事であると言わざるを得ない。それは、一七九七年十二月から一八〇〇年十月まで『モーニング・ポスト』紙に夥しい数の詩を発表していたときに使用した少なくとも八個のペンネームのうちの一つで、一八〇〇年の一月から十月までの間頻繁に使われた。詩人として用いたその他のペンネームは、「ローラ・マライア」、「オベロン」、「ジュリア」、「レスビア」、「ポーシヤ」、「ブリジェット」、「タビサ・ブランブル」である(Pascoe, "Mary Robinson" 260)。¹³ロビンソンの投稿詩は、ペンネームによって作風や声が異なる。たとえば、「サッポー」や「レスビア」は愛の詩、「オベロン」という男性名は女性を称賛する詩、「タビサ・ブランブル」は批評的な声をあげる詩を書いた。¹⁴ジュディ・ス・パスコーは、ロビンソンがこのようにペンネームを多用することによって詩的実験をおこなうのが容易になり、性的スキャンダルと結びついていた「彼女自身の名前の重みから一息つけた」(Pascoe, "Mary Robinson" 262)と説明している。

実際、ロビンソンは亡くなる数年前になってようやく、墮落した女性としての過去の自分を殺すのに成功したと思ったかもしれない。彼女は、ダニエル・スチュアート(一七六六—一八四六)が『モーニング・ポスト』のコラムの有給寄稿者として雇った一番最初の詩人で、S・T・コウルリッジ(二七二—一八三四)、ロバート・サウジー

(二七七四―一八四三)、ワーズワスなどよりも早かった。スチュアート・カランは、それを彼女が誰よりも知られていたからだと指摘する(Curran 19)。新進のロマン派詩人たちが最初の著作を出版したばかりだったに對し、ロビンソンは一七九一年から一七九七年までの間だけを見ても、詩集を十一冊、小説を六冊、政治的論考を一冊出版し、作家として確固たる地位を築いていた。一七九七年にロングマン社が出した人気小説家のリストの中に彼女の名前が入ったほどだ(Curran 17)。「モーニング・ポスト」はそんな彼女の人気を利用した。彼女の名字を太字で印刷して目立たせ、彼女の投稿詩だけでなく、次の投稿詩の宣伝、追従的な評、彼女の病についての最新の記事、新刊書の売り込みなども頻繁に掲載した。そして、一七九八年一月二〇日の号では、次のように報じている。

「現代作家伝」の出版業者はロビンソン夫人に、イングリランドのサッポー、という威厳あるタイトルを正式に認めた。それはわが国の文壇によって長らく彼女に授けられてきたタイトルである。

(*Morning Post* [20 January 1798] 2, qtd. in Pascoe, "Mary Robinson" 258-59)

「現代作家伝」("The Lives of Living Authors")とは、デイビット・リヴァースが匿名で一七九八年に出版した『グレイトブリテン現代作家文学的回顧録』全二巻のことであろう。¹⁵その第二巻に掲載された「メアリー・ロビンソン夫人」の項は、過去のスキヤンダルについては「ある名高いフローリゼルの目に止まって、公衆の評価が急速に上がりつつある最中に舞台を去った」とごく簡単に触れるだけで、ほとんどの紙幅を一七七五年の処女詩集出版から同時代までの彼女の文学的業績に費やし、特にその詩的能力を賛美した。

ロビンソンの詩の美しさは彼女にイングリランドのサッポーという威厳あるタイトルをもたらした。彼女は時に弱々しく、時に誤った好みに落ちる。しかし、彼女の詩からだによってくる詩的イメージ、感情と思いやり、暖かさと優雅

さ、そして何にもまして、表現の繊細さに、彼女の読者が物惜しみなく拍手喝さいしないなんてまずめったにあり得な¹⁵。 (Rivers 2: 215)

一七九八年と言えば、『アンティ・ジャコバン・レヴュー』やポルウェルなどの保守派からロビンソンにも批判の矢が投げられた年である。しかし、ロビンソンは急進的な『モーニング・ポスト』などからの応援にこたえるかのよう¹⁶に、その後も同紙に定期的に詩を寄稿しながら、一七九八年から自伝を書き始め、一七九九年の一年間には『偽りの友人』や『庶出の娘』のような小説と『イングランドの女性たちへの手紙』、一八〇〇年十月には翻訳ジョゼフ・ヘイガールの『バレルモの絵』、同年十一月には生前最後の詩集『リリカル・テールズ』¹⁶を出版した。また、死後出版された『故ロビンソン夫人の回顧録および遺稿集』全四巻のうちの第二巻の終わりに付け加えられた「一七九九年十二月から一八〇〇年十二月までに書かれた詩のリスト」には、ロビンソンが人生最後の一年間に七四編の詩を生み出したことが示されている。彼女は一七八三年以来流産のあとの病気が原因で足が不具になっていた上、晩年はますます健康がすぐれなかった。それを鑑みると、驚くべき創作力の持ち主であったと言わざるを得ない。

ロビンソンが晩年これほど精力的に執筆活動に励み、多くの出版物を出したのは、借金返済のために金が必要だったからだと言われている¹⁷。だが、彼女にとって、それはまた「サッポー」として蘇生するためだったのではないだろうか¹⁸。前に述べたように、ロビンソンは『モーニング・ポスト』紙上で、一八〇〇年の一月に入ってから頻繁に自ら「サッポー」と名乗った。一方、『モーニング・ポスト』は一八〇〇年一月二七日に、こういう記事を載せている。「ジョーダン夫人は二三日前の本紙に登場したサッポーの優雅な詩に美しい曲を作った。」そして、二月八日にはすくなく、「ジョーダン夫人によって作曲されたサッポーの詩は、ロビンソン夫人のペンによる」と、正体を明かした (Pascoe, “Mary Robinson” 263)。ロビンソンはサッポーであり、サッポーはロビンソンだったのである。

『回顧録』第四巻の最後には、「生前ロビンソン夫人に宛てたさまざまな友人からの賛辞」として三五の詩や散文が

収録され、そのうち十二がロビンソンを「サッポー」と呼んで称えている。本章を閉めるにあたり、その中の一つ、古典の翻訳者・詩人のウィリアム・タスカー（一七四〇—一八〇〇）がロビンソンの『サッポーとパオーン』を読んだあと彼女に宛てて書いた詩を紹介しよう。タスカーはサッポーがロビンソンに生まれ変わったと見なしていた。

When Sappho, from the lofty sleep,
O'erwhelm'd with dire despair,
Plung'd headlong in the foaming deep
To end her hopeless care;

Venus, who saw the tuneful maid
Bend o'er the yawning wave,
Sent her own son, the nymph to aid—
He came too late to save!

But as her trembling spirit rose,
To seek its calm abode,
VENUS, in pity to her woes,
This gentle boon bestow'd:
No more the victim of despair
Shall Sappho's spirit rove;
But on the earth, divinely fair,
Claim every gazer's love:

In thee the wondrous Nymph appears
More tuneful, more divine;

She brings new music from the spheres,

For oh! her lyre is thine. (William Tasker, "To Mrs. Robinson" *Memoirs* [1801] 4: 116-17)

サッポーが聳え立つ絶壁から、絶望に打ちひしがれて、望みなき心労を終わらすために、泡立つ海原へまっさかさ
まに身を投げたとき、美しい歌を奏でる乙女が、大きく開いた海の上に向かうのを見たヴァーナスは、自分の息子
にその娘を助けに行かせた——彼は来るのが遅すぎて救えなかった！しかし、彼女のおのの魂が、穏やかな住
まいを求めて上がったので、ヴァーナスは彼女の悲しみを哀れみ、次の優しい恵みを授けた。もう二度とサッポー
の魂は、絶望の犠牲者となつてさまよわずに、この地上で、神々しいほど清らかに、あらゆる見つめる人の愛を求
めることでしょう。あなたの中に、あの驚くべき乙女が現れる、もっと美しい歌を奏で、もっと神々しくなつて。
彼女は天空から新しい音楽をもたらす。というのは、おお！彼女のリラはあなたのものなのだ。

◆◆◆ 第十章 ◆◆◆

ウルストンクラフトとサッポーと女性のセクシュアリティ

『女性の権利の擁護』のサッポー

「サッポー、エロイーズ、マコーリー夫人、ロシアの女帝、マダム・デオン」(Works 5: 146n14)——これらは、メアリ・ウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』(二七九二)における自分自身の注で、男性に施されるような教育を受けた理性的で男性的な女性の数少ない例として挙げた名前である。サッポーは紀元前七世紀頃のギリシャのレスボス島出身の抒情詩人。エロイーズは師・恋人の神学者ピエール・アベラールと熱烈な書簡を交わした中世フランスの尼僧。十八世紀のイギリスでは、それぞれ主としてアレグザンダー・ポープの詩「パオンに宛てたサッポーの手紙」(二七〇七)と「アベラードに宛てたエロイーズの手紙」(二七二七)を通して知られている。他の三人はウルストンクラフトの同時代人で、彼女に影響を与えた『教育に関する書簡』(二七九〇)の著者キャサリン・マコーリー、ロシアの皇帝ピョートル大帝の後で、皇帝の死後即位したエカチエリーナ二世(一七二九―九六)、そしてフランスの外交官でルイ十五世の密使としてロシアやイギリスで暗躍したシユヴァリエ・デオンことエオン・ド・ボーモン(二七二八―一八一〇)を指す。ただし、最後の人物だけは、一八一〇年に亡くなったときはじめて解剖学的に男性であることが判明した。しかし、それまで三〇年以上もの長い間軍事上の才能や政治および文学の才能を持った女性としてヨーロッパ中で最も有名な異性装者だった。² それ故、ウルストンクラフトが例外的な女性として「マダム・デオン」を挙げたのも無理はない。のちにメアリ・ロビンソンも『イングランドの女性たちへの手紙』(二七九九)の脚注の中

で、女性であるが故に不当な評価を受けている生きた例として「マダム・デオン」に言及している。「この非凡な女性が軍人や大使の困難な仕事についていたとき、その特殊な才能、進取の気性、そして強固な意志は殊勲の誉れをもたらした。しかし、ああ！ 彼女が女性であることがわかったとき、最高の称賛表現が、〈奇矯、ばかばかしくて男性的な無鉄砲、滑稽と同時に吐き気を催す〉に変わったのだ」(Robinson, *Letter 71n*)。

そこで、実は男性であった「マダム・デオン」を除いて、上記の四人の女性たちを改めて眺めてみると、最も奇異を覚える名前はサッポーではないだろうか。なぜなら、サッポーは確かに「男性的」という形容を授かった西洋最初の女性だったけれども、古代以来、その男性に匹敵する詩的能力の女性詩人としての名声には、彼女の「男性的」なセクシュアリティ(女性同性愛、もしくは一人の性に満足できないほどの過剰な性欲)に対する批判や揶揄が常につきまとい続けていたからだ。一方、『女性の権利の擁護』についての従来の批評では、「女性のセクシュアリティに対する否定的で規範的な非難」(Kaplan 5)、「女性の身体と女性の欲望」への「嫌悪」(Poovey 77)、「フェミニストの女嫌い」(Gubar 145)などが指摘されてきた。いわば女性のセクシュアリティを抑圧もしくは否定したウルストンクラフトと、同性愛者としてのサッポーはどのような関係があるのだろうか。本章では二人の関係に注目することによって、ウルストンクラフトのフェミニズムが提示する女性のセクシュアリティの問題について考察する。

サッポーに関する知識

ウルストンクラフトの友人のメアリ・ロビンソンは、ソネット連歌『サッポーとバオーン』(二七九四)の序文にあたる散文部分で、サッポーの伝記、オウイディウスやポープの「パオーンに宛てたサッポーの手紙」、『スペクテーター』誌に掲載されたサッポーの断篇詩やアディソンのコメント、古来の評価の変遷など、サッポーに関するかなりな知識を披露している。その上で、ソネット連歌では、オウイディウスやポープのサッポーとバオーンの話を大胆に書

き換え、女性詩人の相たるサッポーの名誉を回復しようとした。ロビンソンのサッポーは同性愛者ではない。それどころか、パオーンへの愛に囚われた異性愛者としての「私」は、あらゆるセクシュアリティから解放された女性詩人としての「サッポー」へと変貌を遂げる。ロビンソンはまた、『イングリランドの女性たちへの手紙』においても、男性と精神的に平等な女性たちの一人としてサッポーの名前を挙げている (Letter 43)。

このようなロビンソンと違って、ウルストンクラフトがサッポーに言及したのは、最初に挙げた『女性の権利の擁護』の他には、一七八九年の『アナリティカル・レヴュー』第四巻に掲載した書評中に一ヶ所あるだけである。書評の対象はマーク・アンソニー・メイラン師の『子どもたちのための説教』(二七八九)で、その中に所収の讃歌の「一つがサッポーのオードの模倣詩であり、もう一つが『スペクテーター』中のアデイソンの讃歌の一つのパロディーである」(Works 7: 124)と指摘した。

「サッポーのオードの模倣詩」とは、メイラン師の第十四番目の説教「病のあとの健康について」のあとに付けられた讃歌のことを指しているであろう。それは病の諸々の症状を示すために、サッポーの「断篇31」の後半部分(アンプロース・フィリップスによる英訳では、第三連と第四連に相当する箇所)に近い表現から始まっており、最後に健康をもたらしてくれた神に感謝している (Melan 1: 205-06)。一方、「アデイソンの讃歌の一つのパロディー」とは、メイラン師の第十五番目の説教「聖金曜日について」のあとに付けられた『スペクテーター』から変えた讃歌 (Melan 1: 220-21) のことであろうと思われる。アデイソンの『スペクテーター』誌には、讃歌が何回か掲載されているが、メイラン師がもじったのは、第二二三号(一七二一年十二月五日)に掲載されたフィリップス訳によるサッポーの「ヴィーナスへの讃歌」(「断篇1」)である。メイラン師は、恋に苦しむサッポーがヴィーナスに助けを求め、死後罪と恐怖でおびえる「私」が救世主の贖罪に救われる話に変えた。このように、メイラン師の両方の讃歌とも原詩とはかなりかけはなれているので、ウルストンクラフトは、「読者はそれがサッポーのオードの模倣であると聞いて笑うだろう」と評している。

なにぶんにも言及が少ないので、ウルストンクラフトがサッポーについてどの程度知っていたかは不明である。しかし、『女性の権利の擁護』における女性のセクシュアリティの描き方を見ると、ウルストンクラフトもロビンソンのように伝統的なサッポー像を書き換えようとしたことがわかる。ウルストンクラフトの場合、それは女性のセクシュアリティについての伝統的な見方の修正を意味した。

放蕩なセクシュアリティ批判

『女性の権利の擁護』において、ウルストンクラフトはポープの「あるレディへの書簡」からの有名な詩句、「どんな女性だって内心では放蕩者だ」を引いている (*Works* 5: 187)。これは、女性のセクシュアリティを生来的にふしだらであると思わず伝統的な考えを端的に示す。

ポープは皮肉っているだけだが、ウルストンクラフトは女性の放蕩なセクシュアリティを厳しく批判した。そのため、従来の批評では、ウルストンクラフトのフェミニズムの「女嫌ご」 (*Gubar* 145) が指摘されてきた。しかしながら、ここで考慮に入れておかねばならないことは、ウルストンクラフトが女性の性欲や性行為のすべてを否定したのではなくたことである。つまり、次の引用で示されるように、生殖のための欲望などは自然によって定められた高尚なものとして認めていたのだ。

自然は、他の事柄と同様に、性欲に関して、性欲の満足を、種を保存するための自然な厳然たる法則にすることによって、性欲を高尚にし、そして官能的快楽に多少の知性や愛情を混ぜる。人の親になるのだという感情が単なる動物的な本能と混じり合って、性欲に威厳を与えるのだ。そして子どもを宿すためにしばしば逢瀬を重ねる男女は、共通の感情をいだくことによって、互いの関心と愛情を深める。その時に女性は、容姿を飾ることよりも、もっと高貴な義務を果たさねばならないのだから、男性の気紛れな色欲の奴隷であることに甘んじたりはしないであろう。 (*Works* 5: 208)

女性が果たすべき「高貴な義務」とは、子どもを生み、理性的な人間に育てるといふ母親としての義務のことである。ウルストンクラフトは、その義務を女性の重要な社会的役割の一つとして考えた。それ故、「母親としての第一の義務」(Works 5: 209)であるところの妊娠の目的からはずれた女性のセクシュアリティを「淫ら」とか「慎みがない」として手厳しく批判したのである。

『女性の権利の擁護』では、そのように淫らな女性として特にフランスの女性たちや上流階級の女性たちがやり玉に挙がっている。「一種の感傷的な性欲」がもてはやされているフランスの「女性たちは、動物でも本能的に守るような節度までを、お堅い、と見なす」、そして「肉体的な自制 (Personal reserve) や、家庭生活において清潔さや思いやりを何よりも大切に尊重すること」(Works 5: 66)を軽蔑する。また、「愚かできざな」上流階級の女性たちは、「早熟で不自然なやり方で、女性の欲望や愛情を普通以上にたかぶらせるので、美德の基礎そのものを危うくし、社会全体に腐敗を拡げている」(Works 5: 75)。ウルストンクラフトはそのような女性たちの結婚生活を「合法的な売春」(Works 5: 129, 218)と呼び、男性の性の奴隷になっている点では、トルコのようなイスラム教国の貴族男性の妻妾たちが一緒に住まう「ハーレム」に在ると同じであると説く。結婚後、「着飾り、塗りたくり、そして、神の造りたもうたものにあだ名をつけて喜ぶ」ような「愚かな」女性は、「ハーレムにふさわしいだけだ。彼女たちが、しかるべき判断力を持って家庭を管理するなど、どうして期待できようか？ また、彼女たちがこの世に生み落とした哀れな赤子を世話するなど、どうして期待できようか？」(Works 5: 76)。「ハーレム」の女性たちのように、妻は、「夫の愛情を確実にするために、ことさらに技巧を用いたり病的な弱さを装うことまでしなければならぬのか？」(Works 5: 98)。

「ハーレム」はまた、リサ・L・ムアが指摘するように、大勢の女性たちが一緒に閉じこもったとき起こる同性愛のイメージをかきたてる (Moore, *Dangerous* 147)。ウルストンクラフトは、「たくさんの女性が保育室や学校や修道院などで一緒に閉じ込められることに、反対する」(Works 5: 198)。なぜなら、彼女たちは「同じ部屋で眠り、一緒に

体を洗う」ときに「汚らわしい慎みのない習慣」(“nasty, or immodest habits”)を身につけたり、「無知な召使たち」から「汚らわしい悪戯」(“nasty tricks”)を教わるからだ (Works 5: 197)。これらは、寄宿学校の男子生徒たちが仲間から教わる「汚らわしい下品な悪戯」(“nasty indecent tricks”) (Works 5: 236) から類推して、自慰や同性愛のことを指しているだろう。十八世紀には、自慰は身体的精神的に有害であると考えられていたが、とりわけ女性の場合、自慰と同性愛は関連があるが故に禁止されていた。たとえば、一七〇八年に出版され、十九版までいった自慰禁止を唱えるベストセラー書『オナニア』の補遺版では、女性は自慰をするとクリトリスが大きくなって、「女性同性愛者」(“Fricatives,” “Triables,” “Subigatives”)とか「両性具有者」(“Hermaphrodites” [sic])になり、他の女性と男がするようなことをすると記されている (Supplement to the Onania 154-63)。また、ウルストンクラフトが嫌悪しているものに、寄宿学校で大勢の少女が「一緒に体を洗う」(Works 5: 197) ことがあるが、これは、トルコ旅行記などで描かれた、公衆浴場における女性同士の淫らな行為を暗示しているだろう。

ウルストンクラフトは、「適度に肉体的な自制 (personal reserve) をすることは、威厳のある性格を築く基礎なのだから、女性同士の間でも保たなければならない。さもないと、彼女たちの精神が、強さや慎みを得ることは決してない」(Works 5: 198) と、女性間の度が過ぎた身体的な接触到警告を発した。「肉体的な自制」という表現は、上流階級の女性たちに関して前に引用した個所でも用いられていた。ウルストンクラフトは女性同性愛者と上流階級の女性のどちらもポープが皮肉ったとおりの「放蕩者」であり、淫らなセクシュアリティを持つと見なしたのである。そして本書第一章で通観したように、サッポアのセクシュアリティに関する伝統的な見方もまさにこの線に沿っていた。しかしながら、ポープと違って、ウルストンクラフトは女性のセクシュアリティが淫らであるのは生来的なものではなく、男性の「放蕩者」(Works 5: 187) によってそのように文化的に構築されたものであると主張する。つまり、「男性における清純チャステイティの欠如」(Works 5: 208) が次のようにすべての元凶なのだ。

実際、こそこそうろつき廻っている好色漢は、しばしばひどく官能的になるので、彼は女性の心地よさを微に入り細に入り述べてきた。そこで、女性の心地よさ以上にもっと心地よいものが求められるようになり、イタリアやポルトガルでは、男性は、代り映えもしない女性以上のものに憧れて、性が曖昧な人たちの会に出席する。

このような男性族を満足させるために、女性は組織的に淫らにさせられるのである。男性のすべてが放蕩の極みに達しているわけではないだろうが、男性は愛情なき性行為にふけることによって、男女の双方を墮落させているのだ。なぜならば、こういうことによって男性の好みは腐敗するし、また、あらゆる階級の女性は、男性のこの悪趣味を満足させるようにと自分たちの行為を合わせ、それによって快楽と権力を手に入れるからである。その結果、女性の大きな存在目的の一つ、すなわち、子どもを生み育てるといふ仕事を考えるならば、当然持たねばならない心身の強さを、女性は失ってしまつて、母親としての第一の義務を果たすだけの十分な力を持たない。そして、本能を高貴なものに高める、親としての愛情などは、好色の犠牲にしてしまい、彼女たちは子宮内の胎児を駄目にした、あるいは生まれた子どもを捨てたりする。(Works 5: 208-09) (傍点引用者)

上記の引用で注目すべきは、「性が曖昧な人たちの会」(傍点引用者)という表現であろう。「性が曖昧な人たち」とは明らかに男性同性愛者、特に「モリー」と呼ばれた男娼(女役の男性同性愛者)を指す。引用ではイタリアやポルトガルの地名だけが挙がっているけれども、エドワード・ウォードの『第二部ロンドン・クラブ』(一七〇九?)⁷が示すように、男性同性愛者たちが集うクラブの発祥地はイギリスのロンドンであり、十八世紀はじめからサブカルチャーを形成していた(Ward, *Second Part* 56)。その中で「モリー」は女装し、なよなよした物腰をした女性的な男性で、まさに「性が曖昧な人たち」だった。生殖のための性行為しか認めないウルストンクラフトにとって、不毛な同性愛行為は許し難かったのは当然である。ただし、上記の引用で彼女の批判の矢が、性が曖昧な「モリー」というよりも、女に飽き足らずに「モリー」のもとに通う男性に対して向けられているのを見逃すべきではない。その種の両性愛者の男性像は、ランドルフ・トランバックによれば、西洋において古くからあるもので、十八世紀後半になるまで

ことさらに問題視されていなかった。だが、世紀後期には、男性は女性を能動的・積極的に求める異性愛者であることを示さねばならず、社会的な役割もそうした性的欲望から生じるという考えが支配的になりつつあった(Trumbach, "Sex" 90-91)。そのような時代、ウルストンクラフトは、トランバックのいう「古いパターン」(Trumbach, "Sex" 91)の両性愛者の男性を「放蕩の極み」に達しているとはっきりと断じた。そして、女性が「放蕩者」になるのは、「モリー」になびく男性の「放蕩者」を性的に満足させて女性のもとに引き留めようとするからだ、と考えたのである。それ故、ウルストンクラフトは他の女性たちに対し、「もっと、もっと男性的に」(Works 5: 74)なれと願う。「放蕩な男性たちは、女性が心身を強くすると女らしさを失うだろう、と叫ぶだろう」(Works 5: 242)。だが、心身ともに強い男性的で理性的な女性だったら、「放蕩の男性に愛着すること」(Works 5: 188)など絶対にならないだろう、とウルストンクラフトは確信していた。

時が移り、いつの日にか女性が私から望んでいるような姿になったとせば仮定してみるなら、その時には、あの恋愛でさえも今よりももっとと厳肅な威厳を得るであろうし、恋愛自体の炎の中で清められるであろう。そして美德は、彼女たちの愛情に真の思いやりデリカシーを与えるであろうから、彼女たちは放蕩の男性などには嫌悪を感じて、見向きもしなくなるであろう。現在は、女性の本領は感じることだけだが、その時には、理性を用いるようになって、女性は容易に外見の格好良さに迷うことはないだろう。そして、悪徳を売り物にする女性の十八番として、いつも駆り立てられ濫用されてきたあの感受性を、軽蔑することをたちどころに学ぶであろう。また、誘惑やいちやつきを軽蔑することを、たちどころに学ぶであろう。(Works 5: 188-89)

換言すれば、ウルストンクラフトの理想とする男性的で理性的な女性は、当時支配的な女性像であるところの「情欲のない女性」であり、生殖以外の目的では性行為をしない「母性的な女性」に近い。⁸しかしながら、当時の「情欲のない女性」が一般的に男性の性的欲望の受動的な対象であることを意味したに対し、ウルストンクラフトの

理想的な男性的女性は「放蕩の男性などには嫌悪を感じて、見向きもしなくなる」(Works 5: 189)。かような男嫌いは、ウルストンクラフトが考える男性的女性の代表的人物の一人がサッポーであったことを想起してみると、非常に興味深いものである。なぜなら、ウルストンクラフトはここで、寄宿学校のように閉じ込められた空間において起こる淫らな女性同性愛を修正するような、女性同士の愛情関係の可能性を示唆しようとしているのではないかと思われるからである。

『メアリ』

ウルストンクラフトの最初の小説『メアリ』(二七八)を見ると、この推論はなんら突飛な思いつきではない。主人公のメアリは『女性の権利の擁護』の男性的女性のプロトタイプの女性である。友人アンが典型的な弱々しい女性で、「美しいものや可愛いもの」(Works 1: 19)を愛でるのに対し、メアリは「考える力」(Works 1: 5)を持ち、「天才の飛翔や抽象的な思索」を好み、「理解力に訴える」(Works 1: 19)書物を読む男性的な女性として描かれる。そして、メアリはアンに対し同性愛的感情をいだいている。メアリはアンを「世界の誰よりも愛し」、「この友と始終一緒にいることこそ(中略)最高の至福ではないだろうか」(Works 1: 20)と思う。メアリの「アンへの友情は彼女の心を占めており、情欲パッションに似ていた」(Works 1: 25)。メアリは「私は彼女なしには生きることができない！ 私には他に友達がない。もし彼女を亡くしたら、この世は私にはどんなに砂漠になるでしょう」(Works 1: 32)とまで言う。にもかかわらず、小説は、二人の女性の関係を性的なものとして描いていない。メアリは、親の取り決めで結婚した留学中の夫への手紙の中で、病気のアンを看病しているにつれ、彼女に対し「母親のような愛情」をいだくようになったと打ち明ける。一方、夫も二人の女性の関係を「ロマンティックな友愛」(Works 1: 25)として見なし、二人が長期間一緒にいるのを黙認した。ウルストンクラフトの時代、サッポーの名前から派生した“Sapphism”や“Sapphist”が淫ら

な女性同性愛(者)を意味するのに対し、「ロマンティックな友愛」は、女性間はかなり親密な友情関係を示すのに使われた、ありふれた用語だった。リリアン・フェグマンのような女性同性愛史家は、「ロマンティックな友愛」はセクシュアルでない関係を示し、そのような関係は二〇世紀以前には社会的に容認されていたと説明している。ウルストンクラフトの小説の中で、メアリの夫が女性同士の「ロマンティックな友愛」を何ら危険視していないのは、彼にとつて、結婚生活を脅かすものではなかったからだろう。女性間の「ロマンティックな友愛」に対する当時の一般的な反応はまさにそうだった。つまり、女性同士の「ロマンティックな友愛」関係は夫や恋人などとの異性愛関係と両立しうる関係として認められていたのである。

しかしながら、その一方で、『メアリ』は、「単なる肉体が崇拜する」(Works 1: 36) かなる性的な情欲パッションも否定的に描く。いや、そもそもメアリ自身が肉体を有したセクシュアルな存在ではない。「彼女の理解や愛情が対象を持ったとき、彼女は滋養を必要とする肉体を持っていたことをもう少しで忘れてしまつた」(Works 1: 17)。いわば「脱性化」の最たる女性であるメアリは、夫との夫婦生活ですら拒む。「夫が彼女の手をとり、愛のような何かを言つたら、すぐさま気分が悪くなり、気が遠くなつて、思わず知らずに、地面が開いて自分を飲み込んでくれたらいいのにと願つてしまつた」(Works 1: 73)。そして、小説の最後で、「娶つたり、嫁いだりすることのない」(Works 1: 73) 神の世界へ行くことを望む。このように夫に対するメアリの嫌悪を描くことによつて、ウルストンクラフトは親の取り決めによる結婚を批判するというよりも、異性愛行為自体への極端な性的拒絶を示しているようだ。アンの死後、メアリは有徳だが病弱なヘンリーに恋に落ちるが、彼との愛もプラトニックのままである。そして、見逃せないことに、メアリが夫に対していなく拒絶や嫌悪の感情を癒してくれたのが、アンの「ロマンティックな友愛」であつて、ヘンリーとの精神的な不倫関係ではなかった。「極度の嫌悪が彼女の心に根をはつていた。彼「夫」の名を聞いただけで胸がむかついた。しかし、アンの咳を聞くときや、アンの弱つた体を支えているとき、すべてを忘れることができた」(Works 1: 22)。『女性の権利の擁護』では、男性的な女性は放蕩な男性に「愛情を持つこと」(Works 5: 186) など決

してないだろうとウルストンクラフトは確信していたが、その考えの萌芽はすでにメアリに体现されていたのである。

ウルストンクラフトの異性愛者化

これまで見てきたように、ウルストンクラフトの理想とする男性的女性には、他の女性に対する母性的かつ脱性的な女性同性愛的感情と、異性愛関係への根強い嫌悪が同居していた。『女性の権利の擁護』の著者としてのウルストンクラフトは自分自身を男性的な教育が必要な他の女性たちと区別し、例外的な男性的女性の一人として提示しているとしばしば指摘されるが、それは彼女の女嫌いというよりむしろ、男嫌いのあらわれであったと言えよう。しかしながら、ウルストンクラフトが理論上どんなに男性的女性の脱性化を唱えたにしても、実際にオウイデイウスのサッポーの淫らなセクシュアリティの影から完全に逃れることは難しかった。同時代の人々はむしろ、ウルストンクラフトを賞賛するときも批判するときも、サッポーの名前を使っていないけれども、サッポーを連想させるような言説を用いながら、彼女のセクシュアリティを俎上に載せる傾向があった。

たとえば、詩人・歴史家・奴隷貿易廃止論者のウィリアム・ロスコー（一七五三—一八三二）は、『エドマンド・バークの人生、死、そして素晴らしき業績』（一七九二）というバラッドの中で、バークの『フランス革命の省察』（一七九〇）に反論して『人間の権利の擁護』（一七九〇）を出版したばかりのウルストンクラフトを、「アマゾン」の登場として称えた。

And lo! an Amazon stept out,
One Wollstonecraft her name,

Resolved to stop his mad career,
Whatever chance became. (Roscoe 7)

そして見よ！ 一人のアマゾンが進み出た。／彼女の名前は某ウルストンクラフト、／彼の血迷った経歴を終わらせる決心をした、／どんな機会であっても。

「アマゾン」とは、伝説上の勇猛な女戦士の部族の名前で、古くから、戦う女や男性的な女性の代名詞として使われてきた語である。テリー・キャッスルによれば、この語はまた女性同性愛者の別称でもあった (Castle, *Apparitional* 9)。そのようなアマゾンのセクシユアリティについて、ロスコーは言及していないが、ウィリアム・ゴドウィンはウルストンクラフトの死の翌年に出版した『女性の権利の擁護の著者の思い出』(二七八)において、かなりはつきりと暗示している。ゴドウィンによれば、ウルストンクラフトは十六歳のとき知り合った二歳上のファニー・ブラッドと「何年もの間、心の支配的な情念がかきたてられたほどの熱烈な友情」(Godwin 19)を結んだ¹¹。また、ウルストンクラフトが「無鉄砲だが、生き生きと向上心に燃えた」男性的女性であるに對し、ファニーは「繊細で敏感な礼儀正しさ」を備えた女性的女性であり、二人の最初の出会いはゲーテの「ヴェルテルとシャーロット」の出会いのようだった (Godwin 20-21)。

リリアン・フェダマンはウルストンクラフトとファニーの関係を当時流行の「ロマンティックな友愛」の例として挙げているが (Faderman, *Surpassing* 139-42)、「ジャネット・トッドはウルストンクラフトの最近の伝記の中で、それは「エロティックであり、セクシャルですらあったかもしれない」(Todd, *Mary Wollstonecraft* 23)と推定している。真実は不明だが、ゴドウィンの見方は明らかにフェダマンと同じだった。彼は、二人の関係が『メアリ』の中に小説化されていたと述べている (Godwin 59)。そうすることによって、ウルストンクラフトのファニーへの尋常ならざる愛情を、小説のメアリの夫のように、社会で容認されている「ロマンティックな友愛」として示したのである。

ファニーとの関係で強調された男性的なウルストンクラフト像は、『女性の権利の擁護』の話に進んだとき、その著者像としての「堅くて、ややアマゾンのな気性」(Godwin 82)に再び現れる。「アマゾン」の語によってかきたられる同性愛的イメージは、ファニーとの関係を呼び起こすものだ。にもかかわらず、看過できないことに、ゴドウィンはこの時点でウルストンクラフトを男性的から女性的な女性へと転換しようとし始める。つまり、ウルストンクラフトを「たくましくして強い、骨がこつこつした女丈夫」というよりむしろ「美しい容姿」で「女らしい態度」の女性として提示するのである(Godwin 82, 83)。その上さらに、『女性の権利の擁護』を出版後のエピソードとして、ウルストンクラフトが画家のヘンリー・フュースリ(一七四一—一八二五)に失恋したこと、革命期のフランスでアメリカ人ギルバート・イムレイ(一七五四—一八二八)との間に婚姻外の娘ができたこと、そしてゴドウィンと正式に結婚する前に妊娠した経緯までも事細かに述べた。ゴドウィンは、ウルストンクラフトと自分自身を含む男性たちとの関係、特にイムレイとの(おそらくはじめての)性体験を強調することによって、彼女を異性愛者化しようとしていると言える。ウルストンクラフトは三四歳でイムレイに出会って恋に落ちる前は、『メアリ』のヒロインのように異性愛行為に対し極端な性的拒絶があったのだらう。フュースリとは「プラトニック」(Godwin 97)な関係だったと、ゴドウィンはわざわざ述べている。

さらに、ウルストンクラフトとイムレイの関係は伝説上のサッポーとパオンの関係に似ている。いずれの女性も一人の男性と出会ったことによって、同性愛から異性愛へセクシュアリティが転向した。そして、愛した男性が不実であったことを知って悩み、ついに彼に棄てられた。サッポーはパオンへの愛を忘れるためにレフカスの岩上から身を投げて亡くなったが、イムレイとの恋に悩んだウルストンクラフトも二度自殺未遂を図る。一度目は、一七九五年四月にフランスからロンドンに戻ったとき、イムレイと若い女優の関係を見つけたからである。同年五月にアヘンチンキのような薬物を過量摂取したらしいが(Todd, *Mary Wolstonecraft* 287)、ゴドウィンは何によるのか記していない。二度目の自殺未遂の手段の方が書き残す価値があったのだらう。イムレイによって命を救われたウルストンクラ

フトはその直後に彼の仕事の代理人として六月に北欧へ出発し、十月にドーヴァーに帰着する。そしてまたもやイムレイの不貞を知り、今度はパトニー橋からテムズ川に身を投げた。¹² スケールはかなり小さいけれども、サッポーの入水自殺さながらだ。だが、幸いなことに、サッポーと違って、ウルストンクラフトは助かった。ジョゼフ・アディソンが記しているように、伝説によれば、レフカスから海へ投身して助かると、「愛の傷つきやすい感情のすべて」が癒されて、二度とそのような「情念」^{パッション}に逆戻りしないという (Joseph Addison 2: 366)。そのように、ウルストンクラフトは結果的に不実なイムレイを忘れて新たな人生、すなわちゴドウィンとの結婚に踏み出すことに成功したのである。

「女らしさを失った女」のセクシュアリティ

ゴドウィンによる以上のようなウルストンクラフトの描き方は、一七三五年のジョン・アディソンによるサッポー擁護のように (John Addison, "The Life of Sappho," 252)、¹³ 結局異性愛者になったのだからという理由で、それ以前の同性愛的な関係を容赦しようとする気持ちのあらわれだったかもしれない。しかしながら、当時フランス革命に対する反動期に入っていたイギリスでは、彼の『思い出』は皮肉にも逆の効果をもたらし、『思い出』と同時に出版された『女性の権利の擁護の著者の遺稿集』中の未完の小説『女性の虐待あるいはマライア』とともに、保守派の人々に急進主義が道徳的墮落へ導く典型的な例としてウルストンクラフトを攻撃する際の格好の証拠材料として使われることになった。『女性の虐待』は「不公平な法律や社会の慣習から起こる、女性特有の苦難や抑圧」(Works 1: 83)を示すという政治的目的を持つが、¹⁴ そこには自伝的要素が多く織り込まれているだけでなく、著者の名前の変形であるマライアとイムレイを彷彿させる男性の姦通の描写があった。それ故、たとえば、『ブリテイッシュ・クリティック』第十二巻(一七九八)は、『思い出』に描かれたウルストンクラフトの恋愛や死の床での無神論的態度に嫌悪を表明

し、『女性の虐待』を女性の美德である貞節を侮辱するものとして批判、最後にウルストンクラフトを「優雅さもなく快楽にふける好色家」であったとして締めくくった (*The British Critic* 12 [1798]: 228-33, 234-35)。また、急進的な思想の壊滅をねらって一七九八年七月に創刊されたばかりの『アンティ・ジャコバン・レビュー』は、『女性の虐待』では女性が情欲に従うことは女性の「生得の権利」であり、それを禁じることは「女性の虐待の最たるものの一つ」であるとされていると酷評し、この理論を実践したさまが『思い出』に描かれているとした (*The Anti-Jacobin Review* 1 [1798]: 92-93, 98)。同誌は二年後の死亡記事のセクシオンでも、ウルストンクラフトを「売春婦」と呼び、『女性の虐待』においては「女性の最も酷い虐待は結婚であり、最も神聖な権利は姦通であるとされている」 (*The Anti-Jacobin Review* 5 [1800]: 93-94) と批判した。¹⁵

また、『女性の権利の擁護』のウルストンクラフトがいみじくも「女性が心身を強くすると女らしさを失う (unsexed)、と放埒な男どもは叫ぶだろう」 (*Works* 5: 242) (傍点引用者) と予言していたように、“unsexed” という語が急進的な女性作家を攻撃する武器として使用されたことは興味深い。トマス・ジェイムズ・マサイアス (一七五四頃—一八三五) は諷刺詩『文学の営み』の第一部を一七九四年五月、第二・三部を一七九六年六月、第四部を一七九七年六月に出版した。その第四部の「広告」で、彼は「わが国の女らしさを失った女性作家たち (Our unsexed female writers) は、今や政治の迷路でわれわれや自分たち自身を教えるというか、まごつかせ、フランスの狂乱でわれわれを暴徒に変える」 (Mathias ii) と記した。一七九七年九月のウルストンクラフトの死の翌年一月にゴドウィンの『思い出』が出版されたあと、国教会派の牧師で『アンティ・ジャコバン・レビュー』の寄稿者の一人リチャード・ポールウエルはウルストンクラフトのようなフランス寄りの急進派女性作家たちを攻撃するために、マサイアスの言葉を援用して、諷刺詩『女らしさを失った女たち』 (一七九八) を出版した。クロードティア・L・ジョンソンの解釈では、ポールウエルは“unsexed”の語によって、「男性を憎むか、男性になりたい」女性でもなければ、また「同性愛」の女性でもなく、むしろ「性欲が異常に強い」 (“oversexed”) 女性のことを意味した (Claudia L. Johnson 9)。

しかしながら、ポルウェルがこの語によって男性的女性と女性同性愛者のことを想定していなかったとは断定できないだろう。というのも、彼がウルストンクラフトについて知っている知識はもっぱらゴドウィンの『思ひ出』によるものだからだ。しかも、ポルウェルは注の中でウルストンクラフトのような急進派の女性たちを「アマゾン軍団」(Polwele gn)と呼ぶ。そして、そのすぐ下でユウエナリスの第六の諷刺詩の第二五二行、かぶとをかぶった女性は女であることを捨てていることを示した箇所をラテン語で引いている。ユウエナリスの第六の諷刺詩のもっと前の方では、古代の女性だけの酒神祭において女性同士が淫らな行為にふけり、そのあとで男を引き入れるシーンが描かれていた。¹⁶ユウエナリスの『諷刺詩』はジョン・ドライデン(一六三一—一七〇〇)が一六九三年に英訳して以来何度か翻訳されていたので、¹⁷十八世紀でこれについて知っていたのはラテン語を解する男性だけではなかった。ピオッツィも一七八九年四月一日や一七九五年十二月九日の日記で、ユウエナリスに言及している(Piozzi, *Thraliana* 2: 740, 949n3)。¹⁸ゴドウィンは男性的なウルストンクラフトが実は女性的であることを示して同性愛者化したけれども、ポルウェルはそれこそ男性的女性たるウルストンクラフトの淫らなセクシユアリティの証左として捉えていたに違いはない。ちようど同性愛から異性愛へ転向したという伝説上のサッポーが、そのセクシユアリティは一つの性にとどまらないほど貪淫であると思なされてきたように。

◆◆第十一章◆◆

舞台の上の異性装とジェンダー

——マライア・エッジワースの『ベリンダ』

『ベリンダ』の真のヒロイン

マライア・エッジワースの『ベリンダ』（二八〇二）は読者の期待を裏切る小説である。

フランシス・バーニーの『エヴェリーナ』（二七七八）や『カミラ』（二七九六）のように、小説の冒頭はタイトル名の若い女性が社交界に出て行くという典型的な設定だ。美しくて教養もある田舎娘ベリンダ・ポートマンは、バース在住の伯母スタノップ夫人の勧めで、ロンドンのレディ・ドラクールのもとに預けられ、社交界にデビューして、ふさわしい結婚相手を探す。ベリンダはパーティーで知り合った金持ちの貴族クラレンス・ハーヴィーに恋心をいだくが、彼には秘密の恋人がいるらしい。のちに、この女性は彼によって理想の妻になるよう純粹無垢のままに育てられたヴァージニアであることが判明する。その間、ベリンダは浪費家のレディ・ドラクールを反面教師とし、代わりにレディ・ドラクールの初恋の相手である家庭的なレディ・アン・パーシヴァルを規範とし、レディ・アンに勧められて、西インド諸島のクレオールであるヴァインセント氏と婚約する。ところが、結婚式前日に、彼がギャンブラーであったことが発覚し、破談となる。一方、ヴァージニアが恋しているのはハーヴィー氏ではなく絵の中の「白い騎士」（実はサンダーランド船長）であることがわかる。結局、ベリンダの結婚相手としてふさわしい男性は初恋の相手ハーヴィー氏であるとレディ・ドラクールに促されて、大団円を迎える。

しかし、このようなベリンダの話は、『ベリンダ』の中の一つのプロットであってすべてではない。むしろ、全三巻のうち最初の二巻では、ベリンダのロンドンの滞在先であるレディ・ドラクールのめぐる話の方が支配的である。その上、ベリンダは常に理性的で感情に溺れない、品行方正な娘として描かれているので、どちらかと言えば面白くない、退屈な印象を与えがちだ。これに対し、レディ・ドラクールは社交界の華で遊蕩にふける粋な上流階級夫人としての公の顔と、乳癌に罹っているのをひそかに悩み苦しむ私的な顔を併せ持つという複雑な性格づけがなされており、女同士の決闘のような興味深いエピソードにも事欠かない。だからであろう。『マンズリー・レヴェュー』（一八〇二年四月）は、『ベリンダ』の初版（一八〇二）を書評したとき、「ヒロインの性格は全くと言っていいほど面白くないので、作品のタイトルになるのに優れているレディ・ドラクールの権利を強奪してしまったように見える」と酷評した。いや、それどころか、ベリンダは「女性登場人物の完璧なモデルとしてわれわれの最高の愛と尊敬を得る資格もない」とまでも言い切り、その理由として、彼女がハーヴィー氏に失恋したあとすぐに、いとも容易にヴィンセント氏の求婚に答えたことを挙げている。同書評はまた、第二版（一八〇二）にも触れ、それが「修正・改良版」と銘打っているにもかかわらず、マイナーな改訂にとどまっていることに不満の意を表した（Chulleanain 462-64）。その後、ジュリア・キャヴァナも『イングリッド女性文学』（一八六三「一八六二」）の第二巻で、「真のヒロイン」はレディ・ドラクールであると断言した（Kavanagh 2: 140）。現代でも、『ベリンダ』はベリンダについての小説ではな⁵」(Kowaleski-Wallace 242)と主張する批評家がいる。

おかしなことに、エッジワース自身、自分の創り出したベリンダに満足していなかったようだ。「あの棒か石のようなベリンダの冷静な従順さに本当に腹を立てたので、ページをびりびりに破くことができるものならそうしたかった——それに全く彼女を訂正する気も辛抱もないわ——貸し馬車の御者が『お前を直すだつて！ 新しいものを創った方がいい』と言ったように」（一八〇九年十二月二十六日付けR夫人宛ての書簡）(Butler 494)。実際、バーボウルド夫人編集の『イギリス小説家シリーズ』に収められた第三版（一八一〇）では、大幅な改訂が施されたが、ベリンダ像に

関しては訂正されていない。第三版の主たる改訂は、父親のリチャード・ラヴェル・エッジワースのアドバイスに従い、「紳士方がぞっとするほど嫌う」(一八一〇年一月十八日付けバーボウルド夫人宛ての書簡) (Butler 496) 主題、すなわち異人種間の恋愛や結婚の話の削除である。イングリランド人のベリンダとクレオール人のヴァインセント氏との婚約を匂わせるものは全部カットされるとともに、貧しい白人娘のルーシーとヴァインセント氏の黒人召使いジューバとの結婚が、ルーシーとジュームズ・ジャクソンというイギリス名の男性との結婚に修正された¹⁾。

しかしながら、非常に興味深いことに、エッジワースは一八一〇年の改訂に負けず劣らず大きな改訂を『ベリンダ』初版時になしている。彼女の三番目の継母のフランシス・エッジワースの『マライア・エッジワースの思い出』(二八六七)の中に収められた一八〇〇年五月十日付けの『家庭外と家庭内』と題された『『ベリンダ』の草案』は、出版された版とは多くの点で違いがある。たとえば、ハーヴィー氏は借金をかかえた放蕩者だが、改心して国会議員になるといふ人物像である。また、ヴァインセント氏やジューバ、ヴァージニアや彼女の父親の植民地開拓者など、植民地に関係する人々は全く登場しない。さらに、これらの違いよりもっと注目すべきは、レディ・ドラクルが乳癌の手術によって亡くなってしまうことだ。彼女の死によって、ベリンダのヒロインとしての立場は揺るぎないものになっている。ベリンダは伯父の遺産が転がり込んだため大金持ちになり、最後に「家庭外の幸福よりも家庭内の幸福」(Chulleain 462)を求めて、改心したハーヴィー氏と結婚するのである。

草稿におけるレディ・ドラクルの死の設定は明らかに、「家庭外」では華麗な社交生活を送るが、「家庭内」では夫との仲が冷え切り、母親としての役目も果たさない女性に対する罰である。ここで看過できないのは、彼女が次のような性格を持つと書かれていることだ。「威勢のよい、無鉄砲な挙動はたまたま流行のものだが、彼女は、女だけではなく『男も思いきってやるすべてのこと』において、すべての先人や競争相手を超えようと努める。彼女の野心は風変わりである。』そして「ふざけ好き」で、「賭博好きでないのに賭博をし」、「威勢のいい人、策士であり、夫の嫉妬をかきたてるために好きでもない男といちゃつく」、「政治屋、選挙運動員、元気のいい女」(Chulleain 457-

50)。このようなレディ・ドラクルの性格は、出版されたいずれの版においても強調されていない。そうした奇矯を代わりにすべて担うのは、草稿では登場していなかったハリエット・フリーク夫人である。出版された版では、フリーク夫人の「顔つきは人目を引くひどく風変わりなところがあり」、行動は「奇癖」(Belinda 37, 40)に満ちている。彼女は男性の衣装を着続け、男性のような振る舞いをする。その結果、死に相当する罰を受ける。レディ・ドラクルが乳癌ではないと判明するのは、そのあとだ。このとき、レディ・ドラクルの悲劇の話は喜劇に変容する。フリーク夫人はある意味でレディ・ドラクルを『ベリンダ』の真のヒロインに持ち上げた立役者であり、ベリンダより興味深いとされたレディ・ドラクルよりもっと興味深い人物である。本章では、『ベリンダ』におけるこの奇妙な男装の喜劇的女性と、レディ・ドラクルとの関係に焦点を当てて、エッジワースがいかに異性装とジェンダーの逸脱や、良き妻、良き母としての「適切な女性」像を描いたかを考察する。

フリーク夫人のフリーク

レディ・ドラクルはベリンダを社交界デビューさせた仮面舞踏会で、十年來の親友のフリーク夫人が、かねてより反目し合っていたラトリッジ夫人側に寝返ったことを知り、憤る。レディ・ドラクルは帰宅後ベリンダに乳癌の秘密をそっと打ち明ける。そして、その翌朝、ベリンダにこれまでの人生とフリーク夫人とのいきさつを語る。第三章「レディ・ドラクルの話」と第四章「続レディ・ドラクルの話」は、その話である。

彼女はヘンリー・パーシヴァルに失恋し、彼の気を引こうとしてドラクル卿と結婚した。だが、パーシヴァル氏は挑発にのらずに、その六ヶ月後気だてのよい女性レディ・アンと結婚してしまう。失望したレディ・ドラクルは贅沢三昧の結婚生活を送るが、愚か者で頑固な上大酒飲みの夫を軽蔑し、冷え切った夫婦関係になっている。また、結婚後五年間で三人の子どもをもうけたが、長男は死産し、母乳育児を実践したのに長女は三ヶ月で病死したので、

次女のヘレナは自分で育てず乳母に預け、その後家庭教師と寄宿学校に教育を任せた。そして、このように夫や子どもをないがしろにした生活を送るレディ・ドラクールの心の「ずきずき痛む空虚」(Belinda 37)を満たしてきたのが、フリーク夫人だったのだ。

フリーク夫人は、「レディ・ドラクールの話」の中で次のような登場の仕方をする。レディ・ドラクールがローレス大佐とラトリッジ夫人宅でトランプ遊びをしたあと、帰りの馬車に乗り込もうとしたときだ。「洗練された様子の若者」が馬車のドア近くまでやってきて、レディ・ドラクールをじっと見つめた。「私はこのようなことでどきまぎする女ではなかったけれど、その若者が私のあとに続いて馬車に飛び乗ったときは本当にびっくりしました。彼は気が狂っていると思い、キヤーと叫ぶ勇気だけがありました。ローレスは侵入者をつかんで外に引きずり出そうとしました。引きずり出すと、若者は甲高い声でこう叫びました。『これはどういふつもり？ あなたは一体誰？』——『私の名前はローレスだ。——おまえは一体誰だ？』これに対する答えは哄笑でした。その笑い声で私はそれがハリエット・フリークだとわかりました。——『私が誰ですって！ ただのフリーク(Freak)よ！』と彼女は叫んだのだ」(Belinda 40)。

実際、「フリーク」(Freak)夫人は「フリーク」(Freak)以外の何者でもない。オックスフォード英語辞典によれば、「freak」が「異常なもの」、「常軌を逸したもの」、あるいはサーカスの見世物の「怪物」や「奇形」の意味としてはじめて使われたのは一八四七年であり、それ以前は「気まぐれ」、「奇行」、「悪ふざけ」、「いたずら」の意味しかなかった。コリン・アトキンソンとジョー・アトキンソンはそれを根拠に、フリーク夫人の「ふざけ」^{フロリッシュ}「好きの面を指摘している」(Atkinson and Atkinson 100)。そして確かに、フリーク夫人は、レディ・ドラクールとローレス大佐の情事の噂(そのためローレス大佐はドラクール卿によって決闘で殺された)、レディ・ドラクールとラトリッジ夫人との女同士の決闘、ヴィンセント氏の黒人召使いジューバを夜ごと脅かした女魔術師^{オレヴァ}の光る人影、レディ・ドラクールを悩ませた故ローレス大佐の幽霊、ベリンダを中傷する内容のヴィンセント氏宛ての匿名の手紙など、小説の中で起こるほと

んどの騒動、事件、陰謀に裏でからみ、主要な登場人物たちのそれぞれのプロットにコミカルな味を加えている。しかし、彼女にとってそうした行動はすべて「ふざけ」という一般的な、便利な名」(Belinda 283)のもとでおこなわれていた。

しかしながら、フリーク夫人の「フリーク」はただ単に「ふざけ」を指すだけではない。時代錯誤とはいえ、彼女には「怪物」や「奇形」のように人目を引く異様性もつきまとう。レディ・ドラクルははじめてフリーク夫人に出会ったときの印象を次のように語っている。「彼女は紛れもなく不器量な印象でした。けれども、彼女の顔はひどく風変わりなところがあるので、誰でも彼女をじっと見つめてしまいました。そして、彼女は人に見つめられるのが嬉しかったのです——特に私に——。それで、私たちはお互いにびったり合いました——私が見つめる人で、彼女が見つめられる人として」(Belinda 37)。

「人に見つめられる」のが好きなフリーク夫人は自分の「フリーク」(異様)性をあえて誇示するような態度や行動をとる。彼女の「フリーク」が最も顕在化しているのは、衣装だ。現在と違って、十八世紀のイギリスでは、衣装にジェンダーの明確な区別があり、男性はズボン、女性はスカート(ペティコート)をはいしたが、フリークは小説に登場している間ずっと男装の麗人ならぬ、男装の醜女である(レディ・ドラクルが指摘したように、彼女は「不器量」だった)。それも、女性が男装していることがただちにわかるような服の着方ではない。レディ・ドラクルは次のように述べている。「彼女は非常に快活かつ誠実に若い放蕩者の役になりきっているので、普通のまじない師では誰も彼女について何か女性的なものを見つめることができないうと、私は確信しています」(Belinda 41)。

ここで「若い放蕩者の役」(傍点引用者)と記されるように、フリーク夫人は小説内で実に見事に男性を演じている。「無遠慮に男っぽい腕を組んで馬車のドアにもたれかかる」、「コート袖で銃を磨く」、「テーブルに帽子を投げる」、「ブーツの底を鞭でうつつ」(Belinda 43, 50, 212, 213)など、一挙一動が男性の仕草である。それ故、小説内の登場人物たちはフリーク夫人の見かけや演技に容易に騙され、男装の人物の正体がフリーク夫人だと判明するまで、その人物

を男性であると信じ込んでいる。その意味において、フリーク夫人は、これもアトキンソンらによれば時代錯誤になるが (Atkinson and Atkinson 100n12) 一六〇五年を最後に廃語になっている“freak” (「しきりに闘いたがる人」)、「戦士」を意味するが、一般的には「男」を指す詩語。その異形の一つが“freak” (OED) であると言えよう。

舞台の上のジェンダー・トラブル

異性装による惑わしやジェンダーの混乱は、十八世紀の劇においておなじみのトリックである (Straub, “Guilt”, 142; Straub, *Sexual 127*)。『ベリンダ』にはそうした場面が他にもある。ベリンダが社交界にデビューした仮面舞踏会において、「男の服を着た未亡人のブレードー」(Belinda 16) に扮するのははじめレディ・ドラクールの予定だったが、のちにフリーク夫人に代わる。しかし、仮面舞踏会で実際にその役になっていたのはフリーク夫人の夫フリーク氏だった。それを知らないレディ・ドラクールは「未亡人のブレードー」が「仮面をとる」(Belinda 60) まで、その正体に気づかない。フリーク氏はこのようにエリザベス朝時代のシェイクスピア喜劇において男性に扮した女性役を演じる男優のごとく、二重にジェンダーを混乱させている。レディ・ドラクールの館では、男性が女装する場面もある。訪問客のハーヴェー氏は張り骨で扱げたスカートをはいてフランス革命からの亡命貴族女性に扮し、初対面の貴族未亡人をだませるかどうかが、レディ・ドラクールと賭をする。しかし、レディ・ドラクールが故意に落とした櫛を思わず拾おうとしたとたんに、スカートで譜面台をなぎ倒してしまい、本当の性が発覚してしまふ (Belinda 67-68)。

これらの男性たちの性の変装とフリーク夫人のそれとの大きな違いは、前者が仮面舞踏会や上流階級の館でのお茶会など数時間だけの間だったのに対し、後者は小説に登場している間中というかなり長期間であったことである。また、前者が上流階級の人々のゲームや座の余興の意味合いにとどまるのに対し、後者は十八世紀のイギリスにおいて

有名だった実在もしくは虚構の男装の女性たちや男性的な女性たちの総合カタログの様相を呈している。しかも、ただ単にそれらの女性たちの集合体もしくは寄せ集めを反映しているのではない。彼女たちをあたかも舞台の上にいるかのようにコミカルに演じているのだ。

たとえば、十八世紀にはハンナ・スネルのように兵士として男装し、戦場で武功をあげた実在の女性たちの話や、その種の「女性兵士」をテーマにした劇や詩やバラッドが流行っていたが、フリーク夫人はまさに「女性兵士」のようになり、「紳士方の部隊と一緒に銃を撃ち、揺るぎ岩をよじのぼって、そのてっぺんで将校の号令で執銃教練をおこなった」(Belinda 236)。実在の女性兵士たちは男性の衣服を着て、男性の行動をうまくまねている間、「男性」として見なされ、本当の性がばれることがなかったが、フリーク夫人の場合もそうだ。ベリンダは遠方から彼女の姿を見てこう言う。「あそこに登っていったのは一人の男性だわ。彼は手に銃を持っているみたいね。」(Belinda 235)。しかし、女性兵士たちは自国のために勇敢に敵と戦ったが、フリーク夫人が銃を撃つのは、舞台の上で役者が演技をする以上の意味はない。ベリンダが「彼は気晴らしのために執銃教練している——いえ、下の観客たちの気晴らしのためだわ。彼を眺めている仲間たちがいる」(Belinda 235)と言うように、フリーク夫人はあくまでも観客のために女性兵士役を上手に演じている。

別の時には、フリーク夫人はエッジワースと同時代の男装の女性たちや男性的な女性たちの戯画となる。第三章の「レディ・ドラクールの話」の中で、彼女がレディ・ドラクールに、「今までどこにいたと思う？ 下院の傍聴席よ。四時間死ぬほど詰め込まれたわ。だけどシエリダンの演説を聴くと約束していたから、聴いたの」(Belinda 40)と自慢げにいう場面は、現代の読者にはなぜそれが自慢になるのかわかりにくいだろう。しかし、当時のイギリスでは、女性は議会の傍聴席に入ることができなかった。だから、アイルランド生まれの劇作家・議員のリチャード・ブリンズリー・シエリダン(一七五〇—一八一六)の演説を聴くために、音楽の才能で有名な妻のエリザベス・リンレイ・シエリダン(一七五四—九二)は男装して入った(Atkinson and Atkinson 105)。また『ロンドン・タイムズ』の一七八

八年三月六日号は、二人の女性劇作家レディ・エグランタイン・ウォレス（一八〇三没）とエリザベス・インチポールド（一七五三—一八二二）が議会に入るために男装したと報じている。「レディ・ウォレスはブリッ、チズ、をはいて議会を訪れた最初の女性の名誉を担っていない。インチポールド夫人は男装して上院と下院の両方に頻繁に出席している」(Kirpatrick, explanatory notes 488n46)。議会を傍聴するフリーク夫人がこれらの女性たちのパロディであることは明らかだ。男装すれば、男性の公共圏にも容易に入り込み、男性の特権を享受することができる。だが、フリーク夫人の場合、何か高邁な主義主張があつてそうしたのではない。女性であるとはばれるかどうかについてラトリッジ夫人と五〇ギニーの賭をしたからである。フリーク夫人はその「賭けに勝った」(Belinda 50)ことを自慢したのだ。

フリーク夫人ははじめの頃レディ・ドラクールによって「卓越した男性的な理解力」(Belinda 48)を賞賛された。しかしながら、実際のところ、彼女はメアリ・ウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』(一七九二)で理想的な理性的女性像として描いた「男性的な美徳の模倣、あるいは、もつと適切に言えば、その行使が人間の品性を気高くし、動物界の序列の中で女性の地位を高めるような才能や美徳を身につけた」女性というよりもむしろ、ウルストンクラフトが批判する男性の行爲、すなわち「狩猟や射撃や賭博」(Wollstonecraft, Works 5: 74)に夢中になる女性である。フリーク夫人はまた教養のない女性で、ベリンダが本を読むのに反対する。「本なんか天才の独創性を台無しにするだけだ。自分で考えることのできない者にとつてはいい。——けれど、自分の意見を作り上げるとき、読書は役に立たない」(Belinda 214)というのが、「反対の理由である」。

非常に滑稽なことに、この発言がなされるのは、「女性の権利」というタイトルを持つ十七章である。ベリンダは今や自分とドラクール卿の根も葉もない噂を信じたレディ・ドラクールと仲違いし、パシヴァル家に身を寄せている。パシヴァル家にはレディ・ドラクールの娘ヘレナやドラクール卿の叔母のマーガレット・ドラクール夫人、そしてのにべリンダが婚約することになるヴィンセント氏とその黒人召使いジューバも逗留していた。フリーク夫人がパシヴァル氏ともレディ・アンとも知り合いでもないのに彼らの家に勢いよく入ってきたとき、ベリンダは一人

でパーシヴァル氏に勧められた本を読んでいた。フリーク夫人は読書を軽蔑し、ベリンダを舞踏会に誘い出そうとするが、うまくいかない。そのときパーシヴァル氏が帰宅したので、フリーク夫人は彼に対するベリンダの評価を下げるために、ウルストンクラフトのようなフェミニストを気取りながら、彼に論争を挑むのである。

保守派のリチャード・ポルウエルが急進派の女性たちを「女らしさを失った女たち」として攻撃したのは、ウルストンクラフトの死の翌年の一七九八年。『ベリンダ』出版当時には反ウルストンクラフトの嵐は最高潮に達していた。そのような情勢に抗うかのように、フリーク夫人は保守的なパーシヴァル氏を叩きのめそうとする。だが、彼女の主張は急進主義者から寄せ集めたキャッチフレーズを勇ましく唱えるだけで、中身がない。たとえば、『女性の権利の擁護』を想起させるように、「女性、繊細さ」が女性を隷属状態にするといい、「私は隷属が嫌い！ 自由万歳！」、「私は女性の権利の擁護者です」、「私は女性の繊細さの敵です。それが彼女たちを不幸にすると確信しているから」(Belinda 216)と叫ぶ。また、メアリ・ヘイズの『エマ・コートニーの回顧録』(一七九六)のヒロインが男性に求愛したことを想起させるように(Hays, *Emma Courtney* 79-83)、「女が男を好きになったとき、どうして彼女は彼のところへ行って、正直に話さないのか？」と問い、そうしないのは「偽りの繊細さ」(Belinda 216)だと批判する。あげくの果てに、「現代の社会制度は根本的に間違っている。どんなものであれ、間違っている」(Belinda 217)と断定するが、自分の手で社会を改良する気は少しもない。

一方、パーシヴァル氏が「人生の上品な衣と呼ばれてきたものを引き裂くことによって、われわれは物事が改良されるのを見るべきなのか？」(Belinda 217)とフリーク夫人に反論するとき、彼は明らかにエドマンド・バークの『フランス革命の省察』(一七九〇)からの有名な表現を引いている。バークは「人生の上品な衣」が引き裂かれると、その結果必ず「弑逆、親殺し、瀆聖など」(Burke 171)が起り、社会は改良されることはないと主張した。彼のいう「人生の上品な衣」とは社会的しきたりや風習のことである。これに対し、フリーク夫人は「衣」を「濡れていようと乾いていようと、世の中で最もべらぼうに下品なもの」(Belinda 217)として一蹴する。そして、乱暴に立ち上がっ

たあまり、自分の「服の一部」を引き裂いてしまう。これは彼女の急進主義的主張を実際に遂行したかのような場面である。しかしながら、バーク的な「衣」への嫌悪観は、フリーク夫人の男装に対する執着とは全く相容れないものだ。結局のところ、彼女は自分の「衣」を破いたとき、自らの主張を自ら大きな声で笑い飛ばし、滑稽なことにペリンドアの部屋でこそこそ服の繕いをするのである。

フリーク夫人はまた十八世紀後期のイギリスに登場したサフィストたちを喚起する。当時、男性的な女性はしばしば同性に対して不自然な欲望を持つ女性として見なされた。たとえば、諷刺詩「サッポロ風の書簡」(一七七八「?」)では、西洋最初の女性同性愛者サッポロは「最初のトニー」(*Sapphick Epistle* 359n)と呼ばれ、十八世紀末のダマー夫人はその後継者だった。十八世紀末のピオッツィの日記では、サフィストは「怪物」^{モンスター}の別称であり、その性癖は男性的な意味合いを込めて「奇妙な」^{ストレンジ}と形容された(Piozzi, *Thraliana* 2: 740, 949n3)。十九世紀初頭の女性同性愛者アン・リスターの日記でも、同じく女性同性愛者のピックフォード嬢が友人仲間から「ブルー」^{ストッキング}で、「男性的」と見なされ、「フランク・ピックフォード」と呼ばれたことや、リスターも「彼女に対して紳士であるかのように感じ、そのように待遇した」(Lyster, *I Know* 234, 271)と書かれている。また、リスター自身も男っぽい外見と雰囲気を持っていたので、ハリファックスの地元民からは「ジェントルマン・ジャック」(Whitbread, *Introduction, I Know* xxiv)と呼ばれ、パリでは男性に間違えられることもあった(Lyster, *No Priest* 37)。フリーク夫人はこれらの男性的な女性同性愛者を模倣するかのようになり、レディ・ドラクールの前に「洗練された様子の若者」として現れ、後者をどきまぎさせただけでなく、後者の耳元で「あなたは私たちのうち誰を恐れているの? ローレス? 私? それともあなた自身?」(*Belinda* 42)とささやいて、女性間の妖しい関係の危険性を仄めかす。そして、実際、十年もの間、レディ・ドラクールの心を彼女の夫の代わりに占有してきた。

「女性の権利」の章では、フリーク夫人は、パーシヴァル家にいるペリンドアの前に、囚われの乙女を救いに来た中世の騎士として姿を見せ、ペリンドアを褒めたたえ、彼女の「無二の友」(*Belinda* 218)になろうとするが、成功しない。

ベリンダにとって、「彼女の敵意より彼女の友情の方がもっと恐ろしい」(Belinda 219) からだ。男に取って代わろうとする女性は、これから結婚しようとする若い娘にとって、「不適切なだけでなく危険な友人」(Moore, *Dangerous Women* 92)なのである。ベリンダと違って、揺るぎ岩のところにいる男装のモートン嬢はその危険な関係に陥っている。彼女は、「このフリーク夫人と一緒に住むために自分の友人たちのもとから逃げ出し」、「ありとあらゆる種類の悪さとはかげたこと」に引き込まれ、「今や、フリーク夫人以外の友人はだれもない」(Belinda 237, 238)。

フリーク夫人はさらにまた小説の中でベリンダの叔母のスタノップ夫人によって「シュヴァリエ・デオンとの相似」(Belinda 190)を指摘される。シュヴァリエ・デオンとして知られるエオン・ド・ボーモンは、ロシアおよびイギリスとの秘密外交に暗躍したフランスのルイ十五世の密使である。デオンは一八一〇年に八二歳で亡くなってはじめて解剖学的に男性であることが判明したが、それまで三〇年以上の間ヨーロッパ中で有名な女性だった。⁶デオンが外交官としてイギリスに来たのは一七五二年だが、一七六〇年代に女性であるとの噂がたはじめ、一七七〇年代にはデオンの本当の性をめぐってゴシップ記事が蔓延し、賭けの対象にもなった。たとえば、『都市と田園』第三巻一七七一年五月号は、「一七七一年五月二四日、メドメンハム修



図版 20
「既婚婦人の陪審員団によるデオン嬢公判」、『都市と田園』3 (1771) 249 頁に面した挿絵。



図版 21
「ド・ボーモン嬢、もしくはシュバリエ・デオン」、『ロンドン・マガジン』(1777年9月) 443頁(「デオン・ド・ボーモン嬢の回顧録」の記事)に面した挿絵。

道院にて、シュヴァリエ・デ*ンの身体に関して既婚婦人の陪審員団による調査」(図版20参照)、同年六月号はその続きの「三日から二日に延期された審判、デ*ン夫人欠席のため」の記事を報道し、デオンの曖昧な性を女性に決めた(“Examination of a Jury of Matrons”; “Jury Adjourned”)。一七七六年九月七〜十日付けの『ウエストミンスター・ガゼット』は、ある紳士がデオンは女性であると明言し、「もしデオンが男性か、両性具有者か、それとも女性以外の別の生き物であると判明したら、十万ポンド支払う」ことを約束したと報じた(Kates, “D’Eon” 167)。一七七七年には、賭け金の支払いをめぐって民事訴訟が起こされ、イギリスの高等裁判所によって正式に女性であると裁定された。『都市と田園』第九卷一七七七年七月号の「ボーモント嬢こと(いわゆる)シュヴァリエ・デオンの回顧録」の記事はこの裁定内容をはじめに伝えている(“Memoirs of the (soy disant) Chevalier D’Eon” 339)。一方、デオンの曖昧な性への興味は相変わらず続き、『ロンドン・マガジン』第四六卷の一七七七年九月号は「デオン・ド・ボーモン嬢の回顧録」の記事の挿絵として、半分男性で、半分女性のデオンの肖像画(図版21)を掲載した。しかし、結局のところ、エドマンド・バーク編集の『アニユアル・レジスター』第二四卷(一七八二)中の「シュバリエ・デオンの話」は、「彼女は実に当代で最も非凡な人物であると認めざるを得ない。われわれは何度も女性が男性に変身して、戦場で義務を果たすのを見てきた。だが、こんな

にも多くの軍事上の才能と政治および文学の才能を併せ持った人物を見たことがない」(“Account of the Chevalier d’Eon” 29) と絶讃した。

フリーク夫人は衣装の点を除いて、そのように賞賛されるシュヴァリエ・デオンとは似ても似つかないが、第二章でロンドン西部のトウィッケナムにおいて密偵活動に携わる。ただし、彼女がひそかに探るのは国家的機密ではなく、レディ・ドラクールの不倫である。不倫の証拠を掴んで公表し、レディ・ドラクールを辱めるためと、不倫の手助けをしたベリンダの名声を傷つけるという二重の目的のために、フリーク夫人は「作戦を開始した。彼女は密偵の役に身を落とすのも恥じなかった。ふざけという一般的な、便利な名がそんな卑劣な言行も隠してくれるだろうと思つた。彼女は『夜、男の服を着て、敵の動きを調べに出撃するのはすばらしく面白い』と断言した」(Belinda 293)。

実際のところ、病の床にあるレディ・ドラクールはベリンダと和解し、また夫や娘とも仲直りして彼らに乳癌の秘密を打ち明け、手術を受ける決心をしていた。その手術のために、トウィッケナムに居を移していたのだ。従つて、フリーク夫人が彼女の寢室を覗く密偵行動は実に滑稽である。フリーク夫人は外科医をレディ・ドラクールの恋人だと勘違いし、喜び勇んで帰ろうとしたとたん、庭師が泥棒よけにしかけたバネ仕掛けの「人捕りわな」^{マントラップ}に足がとらえられ、大怪我をしてしまう。それでも、彼女はかけたベリンダに向かって、「レディにとつて名誉よりも足を失つた方がいいとあなたはきつと認める。私としては、寢室に男を捕まえるならいっそ自分が人捕りわな^{マントラップ}にかかりたい」(Belinda 293) と空威張りをする元気があつた。しかしながら、足の怪我がひどくて「二度と男の服を着て有利な立場に見えるようにならない」(Belinda 294) ことがわかると荒れ狂い、翌朝すくすく姿を消す。フリーク夫人が『ベリンダ』にはじめて登場したとき、レディ・ドラクールは「この笑劇^{マントラップ}が気まぐれだか何でもいいものではないで終わるの?」(Belinda 41) と尋ねていたが、フリーク夫人が「人捕りわな^{マントラップ}」で足を「切られ」(Belinda 294) 象徴的に去勢されることによって、「笑劇」も「フリーク」も幕を迎えるのである。

性転換の脅威

『ペリンド』の他の女性登場人物たちと同様、フリーク夫人が身体的に女性であることは確かだ。ヴィンセント氏に「彼女のことを愛人とか妻として考えるような趣味の男はまずいね」(Belinda 219)とけなされているけれども、すでにフリーク氏と結婚して「夫人」と呼ばれている。にもかかわらず、これまで見てきたように、彼女はその男性的な衣服と振る舞いによって、ジェンダー的には「男性」である。いや、あたかも舞台の上のズボン役の女優のように、上手に「男性」を演じてきた。

しかしながら、ズボン役の女優なら、舞台を下りれば女性に戻るはずだが、フリーク夫人の場合、もとの性に戻らないかもしれないという恐れが常につきまとっている。彼女は「男性の服を着ているときが一番くつろいだ」(Belinda 41)。それ故、二度と窮屈な女性の衣服に戻ることはないのではないか。つまり、男装し続け、「男性」のままにとどまるのではないか。随筆家・詩人のリー・ハント(一七八四―一八五九)は実際にこの懸念をいっていた。彼は当代きつてのズボン役の喜劇女優ドロシー・ジョーダン(二七六一―一八一六)についてのエッセイで、女優が舞台の上で男性の権威を侵害しているとか男性的な振る舞いをしていくことではなく、男性の服を着ていることに対し、次のように批判する。

女優の男装は、舞台の習慣の中で最も野蛮で、有害で、そして不自然なものの一つである。それは、劇作家の創作能力の欠如から生じたり、好色な心か、あるいは驚いたことに、女優の多芸な気質から生まれたりしてきた。現代のうちに俳優が劇作家を支配しているとき、上手な役者はたいして自分たちの気に入る役を演じてよいからだ。いずれの場合でも、それは、劇作家の見込みと女優の適切な芸風にとって有害である。というのは、もし女優が男性の演技をうまく成し遂げるなら、男性の衣装とともに男性であることから完全に抜け出すことは決していないからだ。彼女はオウィディウスのイピスに似ている。性を変えてもとに戻らないのである。(Leigh Hunt 166-67)

男装が単なる変装で、明らかなパロディにとどまるならば、何ら問題はない。だが、性を変えてもとに戻らないなら、話は別だ。オウイディウスの『変身物語』中の「イピスとイアンテの話」では、男の子として育てられたイピスは長じて美しい女性イアンテと結婚するために、イシス女神に祈願して、本当の男性に変えてもらう。一七一七年出版のジョン・ドライデンの英訳では、その変身の過程はまず肌の色の白さが消え、顔つき、眼差し、髪の毛、声などが男らしくなり、そして最後に、「隠れていた局部がどうとう姿を見せ、飛び出し、伸び、そして男の体へと膨らみ始めた」(Ovid, "The Fable of Iphis and Ianthe" 329)と、性器の変化で終わった。

こうした脅威——ジェンダーの境界を逸脱したら、二度と戻れない脅威——は、十七世紀中頃から十八世紀中頃までの医学書や旅行記に多く散見する「両性具有者」のイメージを伴う。それらの文献では、男女両性の性器を保有する「両性具有者」は奇形な「怪物」として見なされ、しばしば「真正の両性具有者」、「男の両性具有者」、「女の両性具有者」の三種類に分類された。そして「女の両性具有者」は女性同性愛者だと考えられた。フリーク夫人はまさにこの「女の両性具有者」になりはてる。黒人のジュوباが見抜いたように、彼女は女でもなく、さりとて男でもなく、「男女」(the man-woman) (Belinda 207)である。彼女はのちに去勢されるはずの「足」を持っているのだ。そしてさらに恐ろしいことに、こうした身体変化に伴い、フリーク夫人自身も、自分のジェンダー・アイデンティティに混乱をきたすようになる。パーシヴァル氏がダケダイモン(スバルタの正式名)の女性たちのベールは彼女たちを「冒瀆的なまなざし」から守っていると云ったとき、彼女は切り返している。「私はダケダイモンの女たちのことなど全然知らない。私が男子——女子と言うべきか——生徒だったとき、おさらばしたわ」(Belinda 217) (傍点引用者)。

男装はジェンダーの境界を混乱させるだけでなく、身体的な性転換をもたらすかもしれない。レディ・ドラクールは、まさにこうした性転換の蓋然性にひそかに怯え、悩み、苦しみ続ける。そもその原因は、フリーク夫人によって、「男性の服を着たら見物人すべてを魅了するだろう」(Belinda 46)とおだてられ、男装してラトリッジ夫人と決闘したからだ。そのため、二人は田舎の人々によって、川の中に入れられそうになる。この騒動は女性が決闘したから

ではなく、女性が「男性の服を着て」決闘したからだった。男装は彼らの「粗野な礼儀正しさ」の規準からはずれていた。レディ・ドラクールはこう言う。「愚かな馬鹿者たちだわ！ もし私たちがペティコートを着てなぐりあったら、彼らは絶対にその半分も憤慨しなかったでしょうに。ペティコートがなかったので、もう少して私たちの破滅、いや少なくとも私たちの不名誉になるところでした」(Belinda 51-52)。

しかし、レディ・ドラクールにとつて、フリーク夫人のように「見物人」のために男装し、決闘を演じた報いは大きかった。銃が暴発し、胸に傷を負ったのである。彼女はその傷のせいで乳癌に罹ったと思ひこむ。病んだ乳房は「見るも恐ろしい見世物」(Belinda 26)であり、それを切除しなければ必ずや死が訪れる。にもかかわらず、彼女は長い間自分の病気を女召使いのマリオットと、のちにベリンダ以外の誰に対しても秘密にし、医師の診察を拒み続けた。そして家の中では「ものうげで、気むずかしく、憂鬱」だったが、公の場や人前では「活気があって、元気で、機嫌よく」装う「女優」、「虚構の人物」であり、「お祭り騒ぎの女主人の役」(Belinda 7)をこなした。フリーク夫人は舞台上で「男性」を演じていたが、レディ・ドラクールは夫や子どもをかえりみない「家庭的でない女性」、「母性的でない女性」を演じていたと言つてよい。健康で賢い子どもたちの母親で、家庭的な「女性の鑑」(Belinda 111)のレディ・アン・パーシヴァルと対照的に、母親の役目を全く果たしていないレディ・ドラクールは「怪物」(Belinda 93)と呼ばれたりする。この名称はレディ・ドラクールとフリーク夫人の類似を端的に物語っているが、さらに興味深いのは、レディ・ドラクールが三度「アマゾン」に言及していることだ(Belinda 29, 182, 276)。「アマゾン」とは、ギリシャ伝説で黒海沿岸あたりに住むとされた女性戦士の部族の名である。弓を引きやすいように右乳房を切り落としたことからアマゾン(ギリシャ語で「乳なし」の意)と呼ばれたという。以来、アマゾンは戦う女や男性的な女性の代名詞として使われた。イギリスの十八世紀に流行した女性兵士たちはまさにアマゾンだったし、ウルストンクラフトら急進派の女性たちも「アマゾン軍団」(Polwhele 6n)と呼ばれた。また、テリー・キャッスルによれば、アマゾンは女性同性愛者の別称でもあった(Castle, *Apparitional* 9)。従つて、『ベリンダ』では直接言及されてい

ないが、フリーク夫人ももちろんアマゾンであると言える。一方、乳癌にかかったレディ・ドラクールはベリンダ宛ての手紙の中で、自分のことを「アマゾン」(Belinda 29)と同一視しているが、その一方で、長い間「アマゾンの手術」(Belinda 182)たる乳房切除手術を受けることに限らない恐怖感をいだき続ける。それは女性としての身体を喪失し、女でも男でもない怪物の身体へと性転換することに対する恐怖に他ならない。彼女は結局生きるために手術を受ける決心をするが、そのときですら、術後に世間の人々から「改心したアマゾン」(Belinda 276)として揶揄され続けるのではないかと心配する。「改心したアマゾン」とは自己矛盾に満ちた語である。彼女が「改心」とは、公の場かむっていた仮面を脱いで「家庭的な女性」(Belinda 96)に戻ることを意味するであろう。レディ・アン・パースヴァルはそれがレディ・ドラクールの「自然の性格」(Belinda 95)であると信じていた。しかしながら、「家庭的な女性」になることは身体的に「アマゾン」になることと相反する。それ故、「改心したアマゾン」は嘲弄の対象であって、賞賛の対象には絶対になれないのである。

舞台の上の女性の幸せ

エッジワースは処女作の『文筆をたしなむ女性たちへの手紙』(一七九五)以来、女性教育に深い関心を寄せていた。『ベリンダ』の「広告」でも、同書のジャンルを「愚劣、錯誤、そして悪徳」をまきちらす「小説」ではなく、「教訓物語」(Belinda xxix)であると提示している。『ベリンダ』の草稿では、レディ・ドラクールの乳癌による死によって、家庭内での女性の役割の重要性と女性の幸せがより一層強調された。一方、出版稿では、フリーク夫人の男性性が除去され、テクストから消去されるやいなや、レディ・ドラクールの乳癌は妄想の産物であると判明し、彼女は性転換の脅威から完全に解放される。もはや彼女が「家庭的な女性」としての本来の姿に戻るのを妨げるものはない。ベリンダは彼女がレディ・アン・パースヴァルのように「家庭生活の喜び」(Belinda 304)を味わうだろうと信じる。

従って、『ベリンダ』はその草稿と同じく、女性にとつて家庭的な女性になることが女性の幸せであるという教訓を示すのが目的だったように思える。しかしながら、読者のそうした期待はレディ・ドラクールによって見事に裏切られる。彼女自身が自分のことを次のように客観視し、新たな恐れを口にしていくからだ。「従順なレディ・ドラクールのような女性は気の毒な動物だわ。見る価値もない。飼ドメステイい馴ケイらされるようになったら、彼女はさらにひどい状態になつていくでしょう」(Belinda 296)。

レディ・ドラクールが家庭的ドメステイになることは幸せどころか、「さらにひどい状態」になることである。「さらにひどい状態」とはどういうことであろうか。残念なことに、小説の中では何ら明確な答えが提示されていない。代わりに、フリーク夫人が消えた今、レディ・ドラクールが小説のプロットを陰で操作する役を担わされ、あらゆる問題を収束に向かわせる。たとえば、彼女が性転換の恐怖から解消される前は、フリーク夫人の曖昧なジェンダーのように、イングランドと西インド諸島の植民地間の境界、あるいは白人と黒人の人種間の境界も曖昧で、黒人のジューバは白人の女召使いと結婚できた。今や、レディ・ドラクールはこのような異人種間の結婚を阻止し、両者の境界に明確な線を引こうとする。つまり、「イングランドの国会議員は世間の目(それが自分が見る唯一の目だが)から見たら、西インド農園主の息子よりもよい縁組みだ」(Belinda 339)と、ベリンダの結婚相手としてクレオールクレオールのヴィンセント氏よりも正統なイングランド男性のハーヴィー氏を強く薦めるのである。十八世紀には、「クレオール」の語は植民地で生まれた人を指し、その親はヨーロッパ人かアフリカ人であったが、ヨーロッパ人の血筋を引くクレオールでも黒人の血が混交しているという烙印が押され、人種的にヨーロッパ人と区別された(Greenfield 219)。従って、レディ・ドラクールの考えは、本章のはじめの方で引用した異人種間の結婚をぞっとするほど嫌う「紳士たち」と同じであったと言える。

『ベリンダ』は最終的に、異人種間の関係を排除した白人同士の適切な伴侶との理想的な結婚、そうした結婚によつてもたらされる幸せ、そして夫と子どもに囲まれた幸福な家族という、家庭小説における典型的な結末によつて文字

通り「幕を閉じる」。「大団円」と題した最後の章で、「さて、私のお友達の皆様」と、レディ・ドラクルは他の登場人物たちに向かって声をかける。「あなた方のために私がこの小説を終わらせてさしあげましょうか？」(Belinda 449)。ベリンダは「小説家たちは結論に向かって物事を急がせるような間違いを何も犯しませんわ。あの感情の変化のために十分な時間を与えないような間違いをね。状況の変化で感情の変化がすぐに起こることはありません」と忠言するけれども、レディ・ドラクルは「話をもう五巻引き延ばす」(Belinda 449)代わりに、小説とは全く別のジャンルの終わり方を提案する。すなわち、劇の閉幕である。レディ・ドラクルはその舞台の女優兼演出家だ。彼女は次のように納め口上を述べる。

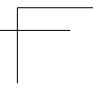
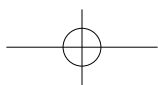
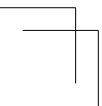
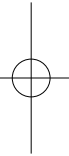
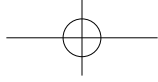
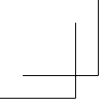
舞台効果のために、私にあなた方全員を適切な姿勢に配置させてください。私たちが幸せに見えないなら、何が幸せっていうの？ サンダーランド船長——すみませんが、ヴァージニアと一緒に彼女の父親の足下に跪いてくださいませんか——(中略)クラレンスよ、あなたはベリンダに結婚を申し込む権利があるし、その手にキスしてもいいわ——いいえ、ミス・ポートマン、これは舞台のルールなの——さて、私のドラクル卿はどこかしら？——私たちが仲直りしたことを示すために、彼は私を抱擁しなければならぬわ——ほら、やって来た——小さいヘレナの手を引いて、ドラクル卿の登場——とてもいいわ！——さい先良い不意打ちよ、ご主人様——じつと立っていて、お願いだから、あるがままのあなたがいいの——かわいいヘレナ、お父さまの手を離さないで——ほうら、とってもかわいいから自然だわ！——では、レディ・ドラクルは、彼女が改心したことを示すために、前へ進んで、観客に教訓を授けます——教訓！——しかり、

「私たちの話は教訓を含んでいる。そして明らかにあなた方全員がそれを発見するだけの理解力を持っている」(Belinda 450-51)

小説の中では、ベリンダもヴァージニアもそれぞれの初恋の相手ハーヴィー氏とサンダーランド船長との結婚をま

だ承知していない。にもかかわらず、レディ・ドラクールは、二組の若いカップルが結婚によるハッピー・エンドを迎えるのを予期させるように、そして自分自身とドラクール卿と娘のヘレナの三人が幸せな家族であることを示すように、全員が「舞台効果」と「舞台のルール」にのっとって、「適切な姿勢」をとるように指図している。こうした人為的なハッピー・エンドは、適切な相手との結婚や「家庭内の幸福」のリアリティのなさを露呈していると言えよう。「私たちが幸せに見えないなら、何が幸せっていうの？」とレディ・ドラクールが述べているように、女性が幸福であるかどうかは、「観客」にそのように見えるかどうかという見かけや演技にかかっている。レディ・ドラクールが舞台の上でいくらヘレナが「かわいくて自然だわ」と褒めたたえようとも、その「自然さ」は所詮演技にすぎない。また、当然のことながら、レディ・ドラクールが「改心したこと」、すなわち「家庭的な女性」になったことも演技にすぎない。

ならば、レディ・ドラクールが言う「私たちの話」の「教訓」とは一体何だったのだろうか。『ペリンダ』はその点を謎にしたままで幕を下ろす。同書が「教訓的物語」として「広告」されていたことを想起するならば、これはきわめて皮肉に満ちた終幕だと言わざるを得ない。エッジワースは結局のところ、この小説に教訓性を求める読者をかかっているのではないか。まさにレディ・ドラクールが言うように、「物事ってのは、私の期待とは全く反対の成り行きになる」(Belinda 448)。『ペリンダ』は「教訓的物語」というよりもむしろ、エヴリマン版の裏表紙に印刷された「摂政時代の絶頂期におけるロンドンの風俗——と間違い——喜劇」というキャッチフレーズどおりの作品である。マージョリー・ライトフットも同書の「風俗喜劇」的諷刺を指摘している(Lightfoot 122-31)。観客(読者)は、風俗喜劇の舞台で繰り上げられるジェンダーの逸脱に恐怖や脅威を感じることなく、男装の女性のさまざまな戯画、パロディ、諷刺、皮肉、文学的引用や引喩に笑いこぼれ、楽しめばよいのかもしれない。『ペリンダ』を読んだあと、劇作家のシェリダンが「マライアは舞台のために書くべきだと示唆した」(Butler 314)らしいが、それも無理からぬことだと言わざるを得ない。



注

はじめに

1. サッポールの残存する断篇詩の数は、以下のローブ古典文庫版による。David A. Campbell, trans., *Greek Lyric I: Sappho and Alcaeus*, Loeb Classical Library 142 (Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1982).
2. 本書におけるサッポールに関する古代証言 (*testimonia*) はローブ古典文庫版のナンバリングとキャンベル訳による。

第一部 サッポールの歴史／物語

第一章 レスビアン誕生秘話

1. これはギリシヤの抒情詩人アナクレオン（紀元前五七〇頃―四七五頃）の言葉。Anacreon, *test.* 10, qtd. in Campbell, introduction xii.
2. ギリシヤ神話では、ゼウスとムネモシユネの間に生まれた「ミューズの九女神」は、弁舌と叙事詩をつかさどるカリオペー、歴史をつかさどるクレイオ、抒情詩・恋愛詩をつかさどるエラト、笛・抒情詩をつかさどるエウテルペ、悲劇をつかさどるメルポメネ、讃歌をつかさどるポリュヒュムニア、舞踏と合唱をつかさどるテルポシコレ、喜劇をつかさどるタレイア、天文をつかさどるウラニアである。
3. 本書におけるオウィディウス「パオンに宛てたサッポールの手紙」からの引用は、次の版による。Ovid, *Heroides and Amores*, trans. Grant Showerman, Loeb Classical Library 41, 2nd ed. (Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1977).
4. 古代のセクシュアリティに関しては、Dover, *Halperin* 29-33、フバーツを参照。
5. ギリシヤの学者アテナイオス（二七〇頃―二三〇頃）の『食卓の賢人たち』（三世紀初期頃）の中で引用される (Athenaeus 6: 13, 596e)。
6. サッポールの詩の消滅に関しては、次を参照。Barnstone 274-75; Jay and Lewis 14; W. R. Johnson xvii-xix; Reynolds, *Sappho Companion* 81; Snyder 57.

7. 十五・六世紀のイタリアとフランスの sappho 評に関しては次を参照。Dejean 29-42; Lipking 71-72; Reynolds, *Sappho Companion* 83-85。十六世紀のイギリスの sappho 評に関しては次を参照。Andreadis, "Sappho" 110-11; Andreadis, *Sappho* 35; David M. Robinson 188-91; Lipking 74; Reynolds, *Sappho Companion* 84-86。
8. 十六世紀イタリアとフランスにおける sappho の詩集出版に関しては次を参照。Dejean 313; Reynolds, *Sappho Companion* 84, 97。
9. *The Heroicall Epistles of the Learned Poet Publius Ovidius Naso, in English Verse*, trans. George Turberville (London: Henry Denham, 1567) sig. O5^r, qtd. in Andreadis, *Sappho* 30。
10. *Ovids Heroical Epistles*, trans. John Sherburne (London: printed for William Cooke, 1639) sig. G9^r, qtd. in Andreadis, *Sappho* 32。
11. 本書におけるポープからの引用は「断りのない限り」次の版に於て。Alexander Pope, *Poetical Works*, ed. Herbert Davis (Oxford: Oxford UP, 1966)。
12. *A Treatise of Hermaphroditus* by John Henry Meibomius, *A Treatise of the Use of Flogging in Venerual Affairs* により一緒に出版されたが「頁付けなどは独立している」。
13. ランドルフ・トランバックは、イギリスの十八世紀末期までには現代的な意味での男性・女性同性愛者が登場したと考え、異性愛者を含め全部で四種類のシエンター説を唱えている (Trumbach, "London's Sapphists" 112-41)。
14. 本書におけるフインチの詩「序」からの引用は「*Poems by Anne, Countess of Winchelsea*, ed. John Middleton Murry (London: Jonathan Cape, 1928) により」。
15. 詳しくは本書第六章一二五—二七頁参照。
16. 詳しくは本書第六章一二九—三二頁参照。
17. 出版のいきさつに関しては「Donoghue, *Passions* 54 を参照」。
18. リクター・ノートンの指摘によれば「この箇所は匿名作家による *Pretty Doings in a Protestant Nation* (1734) 23-24 からの盗作である (Norton, *Mother* 397)」。 *Pretty Doings* のファクシミリ版は「*Eighteenth-Century British Erotica II*, vol. 1, ed. Janne Barchas (London: Pickering, 2004) 349-410 に所収されている」。
19. ドノヒューによれば「女性同性愛者の意味としての「トニー」の最初の使用例は匿名の詩 *The Adulteress* (1773) の中にある (Donoghue, *Passions* 5)」。
20. ペトロニウス (二七頃—六六) とユウェナリス (六〇頃—二八頃) はローマの諷刺作家。ウェスウィウス山はイタリア南部ナポリ湾頭の活火山。なお、ヘスター・リンチは一七六三年にヘンリー・スレールと結婚し、一七八一年の夫の死後、一七八四年にイタリアの音楽教師ガブリエル・マリオ・ピオッツィと再婚した。本書では常に彼女をピオッツィとして言及する。
21. マリー・アントワネットの同性愛の噂について「詳しくは Castle, *Apparitional* 127-31; Lynn Hunt 118-21 を参照」。

22. セアラ・シドンス夫人はロンドンの有名な悲劇女優。その夫の詩の最終行では、“to Damn her”が“to Dancer”と地口になっている。
23. ただしフーコーが言及するのは主として男性同性愛についてである。ウィークスは二〇世紀になって女性同性愛と異性愛の分極化が起こったとし、それ以前の女性間の愛に「レスビアン」の語を適用するのを控えた(Foucault 43; Weeks 94-95)。

第二章 「第十番目のミューズ」の系譜

1. 本書におけるサッポアの断篇詩(正)からの引用は、断りのない限り、ローブ古典文庫版のキャンベル訳による。
2. ダシエ夫人について詳しくは、DeJean 57-58を参照。
3. プルタルコス(四六頃―一二〇頃)はギリシャの伝記作家・歴史家で、『英雄伝』を書いた。バルカンはローマ神話の火と鍛冶の神ウルカヌスのこと。バルカンの息子カークスは三つの頭を持ち、口から火を吹く怪物で夜盗。
4. 実際には、この話はベールの事典のサッポアの項の注(B)で要約されていた(Boyle, [1710]: 2670)。
5. ヴェリヴェリの小説に影響されて、アイルランドのヘンリー・トレシャム(一七五一頃―一八一四)はそれを題材にした十八枚(題扉含む)のアクアチントを一七八四年に出した。トレシャムの一連の絵(ブリティッシュ・ミュージアム所蔵)は、十八世紀後期のサッポアの絵画的表象を探る上で非常に興味深い。ヴェリヴェリの小説とトレシャムの絵に関して、詳しくはStein 159-61, 265-73; Tomory 124-26を参照。
6. 本書におけるメアリ・ロビンソンの『サッポアとバオン』からの引用は、初版に基づく以下の版による。Mary Robinson, *Sappho and Phaon* (Delmar, New York: Scholars' Facsimiles & Reprint, 1995)。ロビンソンのサッポア像について、詳しくは本書第九章参照。なお、ロビンソンによるバルテルミからの引用(本書二〇九頁参照)は、冒頭部分が原文とは違っている。

第二部 十八世紀のジェンダーとセクシュアリティの表象

第三章 「女性兵士」の異性装とジェンダーの境界

1. チャークに関しては、本書第四章七六頁参照。
2. 十八世紀後期になると、ホーラス・ウォルポールは近代フェミニズムの母メアリ・ウルストンクラフトを「ペティコートをは

いたハイエナ」(Todd, *Mary Wollstonecraft* 168)と攻撃した。マデレン・カーンはこれをウォルポールがウルストンクラフトを男性化するどころか非人間化したと指摘する (Kahn 43)。男性優位と既得権力を脅かされる男性側の恐怖の大きさとそれを脅かす女性に対する侮蔑の程度において、「女らしさを失った女」としてウルストンクラフトを誹謗したりチャード・ポルウェルよりも、ウォルポールの方が数段上だったと言える。

3. *The Life and Adventures of Mrs. Christian Davies* (1740); *The Female Soldier; Or, The Surprising Life and Adventures of Hannah Snell* (1750); *The Life and Adventures of Maria Knowles* (1800?); *The Intrepid Female: Or, Surprising Life and Adventures of Mary-Anne Tabot, otherwise John Taylor, in Kirby's Wonderful and Eccentric Museum* (1820). なお『カービーの不思議で奇妙な美術館』には、トールボットの伝記「勇敢な女性」(Kirby 2: 160-225)の他に、スネル (Kirby 2: 430-38)、メイヴィス (Kirby 3: 420-26)のそれぞれの伝記も含まれる。
4. *Eighteenth Century Collections Online* には本文の頁数は同じだが挿絵の数が違う二種類が収められている。挿絵のない版は次のリプリント版が出てくる。 *The Female Soldier; Or, The Surprising Life and Adventures of Hannah Snell* (1750; Los Angeles: U of California, 1989). 本書における『女性兵士』からの引用はすべてこのリプリント版による。
5. スネルのその後の人生については、Stephens ch. 10を参照。
6. *The Valorous Acts Performed at Gaunt, by the Brave Bonny Lass Mary Ambree* に関して、詳しくは Dugaw, introduction xii n15; Dugaw, *Warrior* 31-42を参照。
7. 十八世紀までの女性戦士のバラッドの流行について、詳しくは Dugaw, *Warrior* chs. 1-3を参照。
8. ただしフリードリが引用しているのは、初版ではなく、一七五六版である。
9. *The Second Part, of the London Clubs* の第一部は、*The History of the London Clubs, or, the Citizens Pastimes* のタイトルで出版された。
10. 「女性の夫」メアリ・ハミルトンについて、詳しくは本書第四章を参照。

第四章 「女性の夫」のジェンダー偽装とセクシュアリティ

1. チャーコクの自伝は一九八〇年代後期頃から注目されるようになった。たとえば、次を参照。Folkenflik 97-116; Smith 102-22; Straub, "Guilty Pleasures" 142-66.
2. *London Chronicle, or, Universal Evening Post* 5 (9 June 1759): 448; *London Chronicle* 7 (2 February 1760): 117; *London Chronicle* 7 (24 March 1760): 291; *London Chronicle* 7 (5-8 April 1760): 338; *London Chronicle* 15 (17 February 1764): 161. 出典は、Donoghue,

- Passions* 66-69 にある。また Norton, *Mother* 405-06 を参照。
3. "Historical Chronicle," 10 July, *Gentleman's Magazine* 36 (July 1776): 339; "A Circumstantial Account of an Extraordinary Affair which Lately Happened at Poplar," *Gentleman's Magazine* 36 (August 1766): 359-60; "Historical Chronicle," 21 October, *Gentleman's Magazine* 36 (October 1766): 492-93. 同じ話の『カービーの不思議で奇妙な美術館』の第三巻に「女性の夫ジェイムズ・ハラの奇妙な話」のタイトルで収録された (Kirby 3: 414-18) が、説明の細かいところで違いがある。たとえば、『カービー』では二人の同居期間は三六年ではなく三四年であり、メアリ・イーストの本当の性が発覚した経緯も異なる。また、『ノートン』であれば、イーストの話は、『アニュアル・レジスター』(一七六六)の六月と十月、『ロンドン・クロニクル』(一七六六)の七・八・九月号においても掲載された (Norton, *Mother* 425n33-35)。この話の概略については Donoghue, *Passions* 70-73; Norton, *Mother* 405-06 を参照。
4. 最初の話は次に掲載された。"Historical Chronicle," 18 June, *Gentleman's Magazine* 43 (June 1773): 298; "Chronicle," 19 June, *Annual Register* (1773): 111. マン・トロウの話は次に掲載された。"Historical Chronicle," 5 July, *Gentleman's Magazine* 47 (July 1777) 348; "Chronicle," 3 July, *Annual Register* (1777): 191-92. これらの話の概略については Donoghue, *Passions* 69; Norton, *Mother* 412 を参照。
5. 本書におけるフィールディングの『女性の夫』からの引用は次による。[Henry Fielding,] *The Female Husband: or, The Surprising History of Mrs. Mary, Alias Mr. George Hamilton* (London: printed for M. Cooper, 1746). なお、同書のフランクリン版は次に収録されている。Eighteenth-Century British Erotica, Vol. 5, ed. Rictor Norton (London: Pickering, 2002) 393-417.
6. メアリ・ハミルトンの事件の真相とフィールディングの『女性の夫』との違いについては、詳しくは Baker 213-24 を参照。
7. 医学書や性手引き書における女性の両性具有者と同性愛者に関して、本書第一章二六一-二八頁参照。
8. Sommerst Quarter Sessions Rolls, Ref. No. 314,7(6), qtd. in Baker 220.

第五章 「スランゴスレンの貴婦人たち」——ロマンティックな友愛とサフィズム

1. 本書では、Ladies of Llangollen を邦語ではじめて紹介した蛭川久康氏に従い、ウェールズ語の読みの表記の「スランゴスレン」にした。メアリ・ゴードンの伝記小説を翻訳した古木宜志子氏は英語読みの「ランゴローレン」を用いている。なお、本書におけるスランゴスレンの貴婦人たちの伝記的記述は、Mavor, *Ladies* による。
2. Anna Seward, "Llangollen Vale, inscribed to the Right Honourable Lady Eleanor Butler, and Miss Ponsonby," line 86. 本書におけるアンナ・シーワートの作品からの引用は、すべて *The Poetical Works of Anna Seward*, ed. Walter Scott, 3 vols. (1810; New York:

- AMS Press, 1974) 248。
3. William Wordsworth, "To Lady Eleanor Butler and the Honble Miss Ponsonby. Composed in the grounds of Plas-Newydd, Llangollen" (1827), lines 13–14. この詩は Bell 354; Oran and Turnbull 60 に再録されている。本章注 14 も参照。
 4. 代表的なものとしては、Fadenman, *Surpassing*; Haggerty を参照。
 5. 女性間の愛をエディンで精神的な関係と捉えることは、十九世紀の女性間の「姉妹愛」(sisterhood)へと通じる。これに関しては、Cott 233–34 を参照。十九世紀アメリカにおける女性間の無垢な関係については、Smith-Rosenberg を参照。
 6. 詳しくは本書第七章参照。
 7. ちなみに、ドナ・ランドリーは労働階級詩人のメアリ・リーパーの詩の特徴として「法の保護を奪われた女性たちの牧歌的な緑の世界」を挙げているが、女性間の関係を示すのに、「ロマンティックな友愛」ではなく「サフィック」の語を用いている(Landry 82)。
 8. キャサリン・フィリップスの詩からの引用は次の版による。*Poems by the Most Deservedly Admired Mrs. Katherine Philips The Matchless Orinda* (London: printed by J. M. for H. Herringman, 1667).
 9. Ponsonby, "Song" (wr. 1789, pub. 1930) の引用は、Donoghue, *Poems* 32 に48。
 10. 本書第四章七八頁参照。
 11. ピオッツイの日記における「サフィスト」や「サフィズム」の記述について、詳しくは本書第一章三七—三九頁参照。
 12. リスターの日記について詳しくは、拙稿「アン・リスターのレスビアン日記」を参照。
 13. トランバックによれば、十八世紀末期は強制的な異性愛が台頭した時代だった。詳しくは、Trumbach, "Sex" を参照。
 14. この詩に添えた回想については、次の版を参照。*The Poetical Works of William Wordsworth*, ed. Edward Dowden, 7 vols. (London: George Bell & Sons, 1892) 3: 352. なお、この版における同詩のタイトルは、「To the Lady E. B. and the Hon. Miss P」になっている(3: 47–48)。

第三部 イギリスのサッポータチ

第六章 十八世紀のサッポータチ——ペンと縫い針の文芸的公共圏

1. 本書第一章三〇—三一頁参照。
2. チャールズ・H・ヒナントによれば、フィンチはこの詩を一七一三年出版の『諸々の詩』の序詩として考えていたらしい

- (Hinmant 13)。
3. ウェルズリー・コレッジ所有のフィンチの五三編の草稿詩(ウェルズリー・マニユスクリプト)のうち、ポープへの献詩「To Mr Pope In answer to a copy of verses occasion'd by a little dispute upon four lines in the Rape of the Lock」の一編だけが、*Works of Mr. Alexander Pope* (1717) に収められて出版された(McGovern and Hinmant, editors' note xliij)。
 4. ベインズジョン・ホイルトとの関係については、Todd, *Secret Life* esp. 174-84, 303-05 を参照。
 5. *Letters of the Right Honourable Lady Mary Wortley Montagu* の出版は彼女の死の翌年の一七六三年である。
 6. ポープの詩中の「デリア」は、メアリー・スコット・デロレーン侯爵夫人(一七〇三-一七四四)のこと。ジョージ二世の愛人で、嫉妬にかられ女官を毒殺しようとした噂があった。また、「ページ」とは、弱い者いじめで有名な裁判官フランシス・ページ卿(一六六一-一七四一)のこと。
 7. "To Ld. Hervey & Lady Mary Wortley" の引用は、*Minor Poems*, ed. Norman Aul, completed by John Butt (London: Methuen, 1954) 357-358。
 8. レズッカ・グールド・ギブソンによると、一六六七年から一七五〇年までに出版された三三冊の女性の詩集のうち半分がそのような弁解の言葉を掲載していた(Gibson 80)。
 9. *The Female Wis, or, The Trimmerate of Poets at Rehearsal* の劇は一七〇四年に匿名出版されている。
 10. バラードはノリッジのジュリアナの項で、彼女の『神の愛の十六の啓示』(*Sixteen Revelations of Divine Love, shoud to a Demout Servant of our Lord, called Mother Juliana an Anchorite of Norwich; Who Lived in the Days of King Edward the Third*)が一六七〇年に出版されていることに触れている(Ballard 2)。
 11. ダンカムの『女性讃歌』は初版(*The Feminiad*)と第二版(*The Feminead*)で書名の綴りなどが異なる。本書における『女性讃歌』からの引用は初版による。
 12. 第二版では、初版の第二六七行目のあとに十行と注が追加されて、Brookeを賞賛している。別の文献では、Brookes, Brooksとも綴られる。本書一四九、一五〇頁の原文を参照。本書では常に「ブルック」と表記する。
 13. サザンナ・ハイモアは同名の女性詩人と肖像画家のジョゼフ・ハイモアの間の一人娘で、彼女自身絵を描き、詩を書いた。
 14. たとえば、ジェーン・スペンサーは、女性の小説の勃興と伝統を論じ、マローン・B・ロスはいかに女性詩人たちが男性優位の文化の中で女性の声を見出し、伝統を作ったかについて考察した。また、アン・K・メラーは「男性的な」ロマン主義と「女性的な」ロマン主義を明確に区別し、ジェンダーによる詩のジャンルの違い(男性詩人が叙事詩、悲劇、挽歌、諷刺詩、預言詩を書くに對し、女性詩人は短いオード、ロマンス、バラッド、短い物語詩、ソネットを書く)やテーマの差(男性が創造的な想像力や自己、政治的革新や宗教的救世主としての役割に関心があるに對し、女性は「日常事」や「社会的な交際」に関心がある)を強調した(Spencer, Ross chs. 6-8; Mellor, *Romanticism* 2-11)。のちにメラーは上記の考えを修正し、女性的な詩を書

- く「The Poetess」と男性的な詩を書く「The Female Poet」の二つの女性詩人の伝統を提示した (Mellor, "Female Poet")。
15. *The Lives of the Poets of Great Britain and Ireland* 第一巻の扉頁には編纂者として「Mr. Cibber」の名前が挙げられているが、実際は、ほとんどがスコットランド詩人のロバート・シールズ (一七〇〇前頃—一五三) によって編纂された。第二巻以降の扉頁には「By Mr. Cibber, and other hands」とある。Eighteenth Century Collections Online の出典では編纂者名はシールズになっている。本書では便宜上編纂者をセオフィラス・シバーとして記す。彼は、イングランドの座元兼俳優・劇作家・詩人のコリー・シバーの息子で、本人も俳優・劇作家だった。
16. マアリー・マスターズは *Poems on Several Occasions* (London: printed by T. Browne for the Author, 1733) を出版したことが知られている。
17. アンナ・レティシア・エイキンは一七七四年に結婚してバーボウルトの姓になった。彼女はエイキンよりもバーボウルトとしてよく知られているので、本書では後者の姓を常に使用する。
18. "Verses on Mrs Rowe" からの引用は、Anna Laetitia Aikin, *Poems*, 3rd ed. (London: printed for Joseph Johnson, 1773) 101-03 による。
19. ロンドンのナショナル・ポर्टレイト・ギャラリー所蔵のリチャード・サミュエル (一七八七没) の油絵「アポロ神殿の女神たちに扮した肖像画」(「グレイトブリテンの現代の九女神」(一七七八) (図版13) は、一七九九年のローヤル・アカデミー展で展示された。サミュエルの九女神は、エリザベス・モンタギュー、エリザベス・グリフィス、エリザベス・カーター、シャーロット・レノックス、エリザベス・リンレイ・シェリダン、画家のアンジェリカ・カウフマン (一七四一—一八〇七)、キャサリン・マコーリー、アンナ・レティシア・エイキン、バーボウルト、ハンナ・モアである。この油絵に先立って一七七七年に出たページ彫版によるサミュエルの絵(図版14)は、「グレイトブリテンの現代の九女神」のタイトルをもち、人物配置が油絵のものとは左右逆になっている。また、油絵のアポロ像の部分がグレイトブリテンを象徴するブリタニア像になっている。サミュエルの「九女神」の絵をめぐる当時の文化的状況については、Eger, "Representing Culture" を参照。
20. "The Female Right to Literature, in a Letter to a young Lady, from Florence" は一七四八年出版の選詩集に匿名で発表された (*A Collection of Poems, by Several Hands*, 2: 295-302)。トマス・シーワードは詩人アンナ・シーワードの父親である。
21. アン・K・メラーは『国家の母たち』(二〇〇〇) において、ロマン主義時代に、女性は男性と同じ公共圏に参加し、フランス革命、奴隷制反対運動、家庭や国家の経済など幅広いトピックに対して自由な意見を新聞雑誌や書籍などの印刷物を通じてのみならず、討論クラブや劇場のような公の場においても発したことを論じている。特に奴隷制や奴隷貿易廃止問題は、一七八七年の奴隷貿易廃止委員会結成から一八〇七年の奴隷貿易廃止法案の議会通過まで、議会の内外で最も重要な政治的課題であり、男性だけでなく女性によっても公の場で繰り返し書かれたものである。これについては、たとえば Deirdre Coleman, *Colley 278; Davies; Ferguson, Subject; Midgley; Richardson* なを参照。拙稿「ロマン主義時代の女性詩人と反奴隷制運動」は、

- 主としてメアリ・ロビンソンの反奴隷制の詩を扱っている。
22. Moody, "Sappho Burns her Books and Cultivates the Culinary Arts." からの引用は Lonsdale, ed. *Eighteenth Century Women Poets* にある。

第七章 アンナ・シーワードとサッポールの伝統

1. 西洋においてサッポールと呼ばれた女性詩人たちに関して、本書第六章と第九章の他に Lipking 97-98; Prins 197, 208; Reynolds, *Sappho Companion* 8; David Robinson 170-71, and *passim* を参照。
2. メアリ・ロビンソンに関しては、本書第九章参照。
3. ホノーラの死後、リチャード・ラヴェル・エッジワースはその妹のエリザベスと結婚し、さらにその三番目の妻の死後、一七九八年に四回目の結婚をする。子どもは全部で二人いた。小説家のマライア・エッジワースは一番目の妻の長女。リチャード・ラヴェル・エッジワースの子どもたちに関しては、以下を参照。Butler, "Appendix A: The Children of Richard Lovell Edgeworth (1744-1817)," *Maria Edgeworth* 499.
4. スランゴスレンの貴婦人たちを称えるシーワードの詩に関しては、本書第五章九六—一〇一頁参照。
5. Coote 177-81; Faderman, *Chloe* 37-43; Donoghue, *Poems* 26-27; Castle, *Literature* 339-41. その他、シーワードを同性愛者として扱っているものとしては、Summers 607-08 を参照。
6. たとえば、次を参照。Kelly, introduction, *Anna Seward* xi-xiv; Franklin, introduction, *Louisa* vii-ix.
7. 以下のマンロジャーを参照。Armstrong, Bristow and Sharrock 28-29; Ashfield 1-9; Breen 36-38; Feldman 647-61; Wu 1-7.
8. Feldman, headnote to "Anna Seward," 648-50. フェルドマンのマンロジャーに所収のシーワードの十一編のうち、四編がホノーラについての詩である。
9. カトゥーラのラテン語の「51番」とその英訳については、次を参照。Reynolds, *Sappho Companion* 75-76. ジョゼフ・アデイソンは『スペクテーター』誌第二二九号（一七二一年十一月二二日）で、カトゥーラスの「51番」のラテン語版を掲載したが、最後の四行を省略した (Joseph Addison 2: 390-91)。サッポールの「断篇31」とカトゥーラスの「51番」を比較した論文としては、O'Higgins を参照。
10. "Time Past, Written Jan. 1773" のタイトルと日付は一八一〇年出版のスコット編版による。一七九六年の『スランゴスレン溪谷およびその他の詩』に収められて出版されたときのタイトルは、"To Time Past, Written Dec. 1772" だった。
11. William Hayley, "To Miss Seward. Impromptu" は、Seward, *Poetical Works* 2: 66-67 に所収されている。

12. 金銭ずくの結婚に対するシーワードの批判に関しては、Kelly, introduction, *Anna Seward* xiii-xvi を参照。

第八章 二人の女性と一人の男性の楽園——アンナ・シーワードの『ルイーザ』

1. 本書における『ルイーザ』からの引用は、スコット編の *Poetical Works* の巻数と頁数を示す。
2. サヴィルについては、シーワード自身の死の直前に書かれた彼女の最後の詩「思い出に寄せて」(“To Remembrance”) で、彼の死に言及しただけである。
3. フランスの哲学者・神学者のピエール・アベラルル(一〇七九—一一四二)とその教え子のエロイーズ(一一六四没)の悲恋は、ポープの一七二七年の詩「アベラルドに宛てたエロイーズの手紙」に取り上げられ、ルソーの小説 *Julie ou la nouvelle Heloise: Lettres de deux amants, habitans d'une petite ville au pied des Alpes* (1761) にも影響を与えた。ちなみに、ルソーの小説の原題はヒロインの名前「ジュリ」が最初にきているが、最初の英訳版(一七六一)では、翻訳者のウイリアム・ケンウィックによって、ヒロインの名前が「エロイーズ」に変えられ、タイトルも *Eloisa: or, A Series of Original Letters* に変更された。「ジュリ」の名前が回復したのは一七七三年の英訳版 *Julia: or, The New Eloisa, A Series of Original Letters* である。しかし、フィリップ・スチュワートによれば、ケンウィック訳の『エロイーズ』版は一七六一年から一八一〇年まで十五回ほど再発行された。Stewart, introduction, *Julie* xiii-xiv と同書 Appendix VI 中の英訳版のリスト(650)を参照。イギリス・ロマン主義時代の小説に与えたルソーの『新エロイーズ』の影響に関しては、鈴木を参照。
4. たとえば、「ホノーラ・スニード嬢への書簡、一七七二年五月」という詩の中で、シーワードはホノーラに「私の魂の妹」として呼びかけている (“Epistle to Miss Honora Sneyd, May 1772,” line 35)
5. ジェニファー・ケリーは、「エミリアに宛てたエヴァンダーの手紙」が当時の多くの若者の状況を反映していたことに注目する (Kelly, introduction, *Anna Seward* xv)。ロイ・ポーターによれば、十八世紀の結婚は「厳密には愛と至福についてはなかった。むしろもっと広い問題である一族の方針、名譽と血統と財産の確保と関わりがあった」(Porter 26)。
6. 本書第五章九八—九九頁参照。
7. ジュリとクレアのロマンティックな友愛関係について、詳しくは Faderman, *Surpassing* 78-79 を参照。
8. ギリシヤ神話で、カリュプソスはオデュッセウスがオーギュギア島に漂着したとき七年間引き留めたニンフ。プロテテウスは変幻自在な姿と予言力を有した海神。
9. シーワードはポープの次の箇所を引用している。Pope, “Epistle II: To a Lady: Of the Characters of Women,” lines 215-26.

第九章 魅つた女性詩人——メアリ・ロビンソンの『サッポーとパオン』

1. 記事中のホラティウスからの引用は、『歌章』第三卷三〇の一行目からで、自分の詩の価値と不滅性を主張した箇所 (Horace, *The Odes* III, Ode XXX, lines 1-2)。
2. サッポーの“fall”の二重の意味に関しては、Lipking 61-68を参照。
3. “The new Vis-a-vis, or Florizel driving Perdita”の諷刺画の背景に関しては、Pascoe, *Romantic Theatricality* 149-50を参照。
4. 一七八〇年代初期の間、ロビンソンとその恋人たちの話は、『モーニング・ポスト』、『モーニング・クロニクル』、『モーニング・ヘラルド』などの日刊紙で逐一報じられた。詳しくは、Bass, chs. 18-19を参照。
5. James Gillray, *The Thunder* (1798)の戯画に関しては、Fergus and Thaddeus 194; Pascoe, *Romantic Theatricality* 140を参照。
6. ロビンソンの自伝は彼女の死によって未完に終わったが、あとを託された一人娘で作家のメアリ・エリザベス・ロビンソンによって完成され、一八〇一年に全四巻の『故ロビンソン夫人の回顧録および遺稿集』として出版された。
7. のちにメアリ・ヘイズも『女性評伝集』(一八〇三)の「サッポー」の項で詩人サッポーを再評価し、「サッポーに帰されてきた淫らかなことは誹謗であるといつてむしろかえらない」(Hays, *Female Biography* 6: 381)と断定した。
8. 『サッポーとパオン』におけるこれらのソネットのタイトルは、“The Subject of Each Sonnet”と題した目次だけに記されているが、本書ではそれぞれのソネット番号のあとにも記す。
9. 詩中の「エトナ山」はシチリア島にある活火山。「イダリウム」はアフロディテが祀られているキプロス近くの古代都市。相似した表現は、ウイリアム・メイソンの劇詩『サッポー』(二七九七)の終幕場面にも見られるが、ロビンソンのソネットと違って地上におけるサッポーの蘇生のヴィジジョンはない。メイソンのサッポーは死を決意したあと、追いつがるパオンを決然とはねのけ、レスボスから一緒に来たお供の女性たちに向かって「不実な男性を憎むことがないとしても、そんな男性を信用しないことを学びなさい」(Mason, *Sappho* 3: 7)という遺言を残す。こうして男性への愛を断ち切ったサッポーは、投身自殺すると、「白鳥」(すなわち、偉大な詩人)として天に舞い上がり、地上には「不朽の名声」(Mason, *Sappho* 3: 7)だけが残る。メイソンのサッポー像に関して、詳しくは拙稿「男装のサッポーとセクシュアリティ」を参照。
11. サッポーの死の年や場所に関するさまざまな推測に関しては、Roche 36-38を参照。
12. *A Letter to the Women of England, on the Injustice of Mental Subordination*の第二版は著者名を記し、タイトルを *Thoughts on the Condition of Women, and on the Injustice of Mental Subordination* に変えて、同年に出版された。本書における引用は初版による。
13. スチュアート・カランは、『モーニング・ポスト』紙でロビンソンが用いたペンネームは詩と散文含め約十 (Sappho, Laura, Laura Maria, Lesbia, M. R., Oberon, the Sylphid, T. B., Tabitha Bramble, Titania) であったと指摘する (Curran 34n15)。

14. ロビンソンが『モーニング・ポスト』紙にどの詩をどのペンネームで発表したかは、パスコー編集『メアリ・ロビンソン詩選集』(二〇〇〇)中の“Appendix D: Publication histories of Robinson's poems”のリストを参照。
15. ちなみに『David Rivers,] *Literary Memoirs of Living Authors of Great Britain* にはサウジーの項はあるが、コウルリッジとワーズワスの項はない。
16. 『リリカル・テールズ』の大部分は、『モーニング・ポスト』紙への寄稿詩からなる。ロングマン社はこの詩集をワーズワスとコウルリッジの『リリカル・バラッズ』第二版を出す一ヶ月前に、そしてロビンソンの死の八日前に、同じ印刷業者ビックス・アンド・コットルから一二五〇部出版し、六三ポンド支払った。スチュアート・カランによれば、一ヶ月以内にこれほど似ているタイトルの載せ、印刷部数もそれに対する支払い金もかなり高額であるのは、市場に敏感なロングマン社がワーズワスとコウルリッジよりもはるかに名が売れていたロビンソンの能力と人気が大に大きな期待を寄せており、両者の詩が同じ特徴を持つと解釈されるのは有益であると計算していたことを示す (Curran 17-19)。
17. 次の論文は、ロビンソンの出版が金銭的理由であったことについて、詳しい証拠を挙げている。Fergus and Thaddeus 191-97, 200-01。
18. ロビンソンは『回顧録』においても、「これらの頁は真実の頁で、架空の物語に飾られていないし、優雅な言葉遣いで潤色させてもいならず」(*Memiors of the Late Mrs. Robinson* 1: 122)と主張しているけれども、実際は過去の汚名を晴らすために、プリンス・オヴ・ウエールズ以外の他の男性たちとの関係などを巧妙に隠しつつ、作家としての天賦の才能に恵まれた内省的な女性としての自己像を提供した。ロビンソンの『回顧録』やその他の著作品における戦略的な自己表現に関して、詳しくは拙稿『私を売る女』Peterson, “Becoming” 36-44; Ty を参照。

第十章 ウルストンクラフトとサッポーと女性のセクシュアリティ

1. 本書におけるウルストンクラフトの作品からの引用は、次の版により、巻数と頁数を示す。 *The Works of Mary Wollstonecraft, ed. Janet Todd and Marilyn Butler*, 7 vols. (London: Pickering, 1989).
2. テオンに関して、詳しくは次を参照。Friedli 244-46; Kates, “D’Eon”; Kates, *Monsieur d’Eon*; Peakman 211-17. テオンに対する当時のマスコミの反応については、本書第十一章二五八-六〇頁も参照。なお、心理学者ハズロック・エリスはテオンの名から、主に男性の「服装倒錯」を意味する「エオニズム」の語を作った (Ellis, *Eonsism and Other Supplementary Studies*)。しかし、ゲリー・ケイツによれば、デオンは男性の服や男性的活動に強い不快を示さなかったようだ (Kates, “D’Eon” 185)。
3. 本書第一章参照。

4. 本書第九章参照。
5. フリップスの訳によるサッポアの「断篇31」は Joseph Addison 2: 392² 「断篇1」は Joseph Addison 2: 367-69 に掲載されている。
6. 本書第一章二三―二五頁、旅行書におけるトルコ風呂の描写を参照。
7. 本書第三章六八―六九頁参照。十八世紀イギリスにおける男性同性愛者のサブカルチャーについて詳しくは、Trumbach, "Sex" 92-94 参照。
8. 十八世紀末期の「情欲のない女性」像や「母性的な女性」像に関して、詳しくは、本書五章一〇頁におけるトマス・ラカーヤルス・ペリーの論議を参照。その他、ナンシー・F・コットは、ヴィクトリア朝の女性の「情欲のなきのイデオロギー」の発生を一七九〇年代から一八三〇年代の福音主義信仰の台頭と関連していると指摘する (Cott 221)。
9. メアリの「男らしさ」と同性愛的傾向についてはすでに指摘されている。たとえば Claudia Johnson 48-58; Tauchert を参照。
10. 「マタイによる福音書」二三・三〇参照。
11. ウルストンクラフト自身の当時の手紙からもファニーに対する熱愛が伺える。たとえば、友人のジェーン・アーデン (一七五八―一八四〇)宛ての一七七九年五・六月頃の手紙では、ファニーのことを「世界中の誰よりも私が愛する人」、「感謝と好きな気持ちのあらゆる絆で私が結ばれている友人」と呼び、「この友人と一緒に住むことは私の大望の極致なのです」(Collected Letters 67)と述べている。
12. ゴドウィンによるウルストンクラフトの二度の自殺未遂の描写は、Godwin 123-34 を参照。
13. 詳しくは、本書第二章五三―五四頁参照。
14. ただし、ウルストンクラフトが『女性の虐待』で目指したのは、ただ単に女性の虐待の例を列挙することではない。彼女は母親著者のスタンスから、娘に読者に対し、さまざまな女性の虐待物語を警告として提示することによって、社会の中で「あるがままの自分」でいることの重要性を論ずる。「あるがままの自分」とは、『女性の権利の擁護』が提示したような男性的な理性を持つ自己ではなく、ましてや男性優位の社会に順応するような偽りの感受性に囚われた自己でもなく、女性の中で自発的に生じる「真の感受性」に忠実な自己を指す。しかし、ウルストンクラフトの考える「真の感受性」の概念自体、女性の自己と社会との関係において矛盾をはらみ、袋小路に突き当たっている。『女性の虐待』におけるジレンマやウルストンクラフトの感受性観について、詳しくは拙稿『Self and Society』“感受性のジレンマ”を参照。
15. その他、次の雑誌などがウルストンクラフトや『女性の虐待』の不道徳性を非難する書評を載せた。The Critical Review 22 (1798): 414-19; The Monthly Mirror 5 (1798): 153-57; The Monthly Review 27 (1798): 321-27; The European Magazine 33 (1798): 246-51.
16. 『アンティ・ジャコバン・レビュー』の編者ウィリアム・ギフォード (一七五六一―一八二六)によって英訳されたユウェナリス

の『諷刺詩』は一八〇二年に出版された。ホルウエルは『女らしさを失った女たち』の脚注で、「私は、この諷刺詩の見事な翻訳の手書き原稿を見たことがある。彼のユウエナリス完全版によってわれわれの期待がまもなく満たされたものだ」(Polwhele 6n)と述べている。

17. ジョン・ドライデンによる一六九三年の英訳からウィリアム・ギフォードの一八〇二年の英訳までのユウエナリスの『諷刺詩』について、詳しくは Donoghue, *Passion* 212-13 参照。

18. 十九世紀はじめには、リスターも一八二三年六月二十六日と同年八月五日の日記の中で記している (Lister, *I Know* 268, 273)。

第十一章 舞台の上の異性装とジェンダー——マライア・エッジワースの『ベリンダ』

1. 一八一〇年の改訂の詳細に関しては、Kirkpatrick, “Gentlemen”; Kirkpatrick, note on the text, *Belinda* を参照。
2. 本書における『ベリンダ』からの引用は、初版に基づく *Belinda*, ed. Eilean Ni Chuilleanáin (London: Everyman, 1993) の版による。
3. 十八世紀の女性兵士に関しては、本書第三章参照。
4. この読みは Kirkpatrick, introduction, *Belinda* xx の指摘による。
5. その他、男性的なビックフォード嬢についての言及は、Lister, *I Know* 256, 270 を参照。
6. デオンの生涯に関する文献は、本書第十章注2参照。
7. ドロシー・ジョーダンのズボン役に対する当時の反応に関して、詳しくは Marsden を参照。
8. 本書第一章二六―二八頁参照。

◆◆◆あどがき◆◆◆

リラを手にした白い彫像に、誰がいつ何のために色ペンキで落書きしたのだろうか。ミソロンギで開催された第三回バイロン国際学会に参加したあと、念願のレスボス島に渡った私は、アメリカ人芸術家ヘンリエッタ・フォーシュによって造られたサッポアの無残な姿を目にして言葉を失った。汚されていないサッポアはもはや観光ガイドブックの中にしか存在していなかった。

二年前の九月に見たサッポアの彫像は、まさしく西洋の長い歴史を通して誹謗中傷を受けてきたレスボスのサッポアである。今ではミティリネ市によってペンキが落とされていることを願ってやまないが、十八世紀末期のイギリスで、古代詩人の名誉を回復しようとしたのが「イングランドのサッポア」と呼ばれたメアリ・ロビンソンだった。イギリス・ロマン主義時代の女性作家たちを研究対象としていた私は、ロビンソンの『サッポアとパオーン』を読んだ、サッポアとはじめて出会った。そして、科学研究費による大規模な共同研究「古典学の再構築」中の「伝承と受容（世界）」班の末席を汚したことを契機に、すっかりサッポアにのめり込んでしまった。サッポアの伝承と受容を辿るためには、私がそれまでとつてきたフェミニズムやジェンダーの視点だけでは不十分であり、セクシュアリティや歴史の視点が必要不可欠だった。それらの批評道具を携えて、古代のサッポアやイギリスのサッポアたちを追いかけてから、十年経つ。今では私の興味は男性のロマン派詩人が描いたサッポア像へと移っているが、詳細な分析を要するイギリスのサッポアたちのテクストもまだ多く残っており、畢生の仕事になると予想する。それ故、サッポア研究十周年記念の年に、一応の区切りとして、本書を刊行する機会が与えられたことは最大の喜びである。

この十年の間に研究環境は激変した。最初の頃は、サッポア受容関連の文献を求めて、大英図書館やケンブリッジ大学図書館の稀覯書室に足を運び、高いハードコピー代を払うか、自分で筆写したりした。しかし、オンライン版フ

ルテキスト・データベースの Eighteenth Century Collections Online や Early English Books Online の登場により、一次資料を簡単に読むことができるようになっただけでなく、テキスト検索も可能になった。本書で使用している十七世紀や十八世紀の一次資料の多くはデータベースから手に入れたものである。ただし、日本国内で ECCO や EEBDO を導入している恵まれた大学はまだ数えるくらいしかない上、他大学者にはアクセス権もないので、閲覧許可書保持者全員に開放している海外の上記図書館などを利用した。なお、貴重な資料収集を思う存分にできたのは、平成十三—十四年度科学研究費補助金(特定領域研究(A)118)(13018235)、平成十五—十七年度科学研究費補助金(基盤研究(C)) (15510224)、平成十九—二十一年度科学研究費補助金(基盤研究(C)) (19510282)と(基盤研究(B)) (19320047)の助成のおかげである。ここに付記して感謝の意を表したい。

本書が刊行されるまでには、国内外の多くの方々からさまざまなお教示とご支援を賜った。この場をお借りして深甚の謝意を表したい。社会人を経て大学院に入った未熟な私を根気よく指導してくださった三浦修先生、川崎寿彦先生、そして神尾美津雄先生の学恩には、感佩している。川崎先生は鬼籍に入られてから二〇余年経ち、三浦先生も病床につかれてから久しい。お二人に本書を批評していただけなのはまことに残念である。大学院修了後も何かとお世話になり、本の出版を勧めてくださった神尾先生には、重ねて厚くお礼を申し上げたい。また、名古屋大学文学研究科大学院の岩田扶美氏には、校正や索引作成のために多大なるご助力をいただき、深く感謝する。

最後になったが、科研費助成申請時から出版にいたるまであらゆる段階でご尽力くださった音羽書房鶴見書店の山口隆史氏に、心から感謝申し上げます。

本書は、独立行政法人日本学術振興会平成二—三年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)学術図書(235064)の助成を受けたものである。

二〇二二年一月

川津雅江

初出一覧

(本書に収めるにあたり、大幅に加筆修正を施した。)

- 第一章 「レズビアン誕生秘話」平成十―十四年度文部科学省研究費特定領域研究(A) 118 「古典学の再構築」研究成果報告集第六巻、B 01班「伝承と受容(世界)」(二〇〇三) 一四一―五四。
- 第二章 「18世紀のサッポータち」平成十―十四年度文部科学省研究費特定領域研究(A) 118 「古典学の再構築」ニューズレター『古典学の再構築』第十二号(二〇〇二) 二二―三〇。
- 第三章 「18世紀の女性兵士――異性装とジェンダーとセクシュアリティ」、『人文科学論集』(名古屋経済大学人文科学研究会) 第七八号(二〇〇六) 二五―三八。
- 第四章 『『女性の夫』のジェンダー偽装とセクシュアリティ』、『人文科学論集』(名古屋経済大学人文科学研究会) 第八二号(二〇〇八) 二九―三八。
- 第五章 「ロマン主義時代のセクシュアリティとジェンダー――ランゴレンの貴婦人たち(1)」、『人文科学論集』(名古屋経済大学人文科学研究会) 第七五号(二〇〇五) 二五―三八。
- 「ロマン主義時代のセクシュアリティとジェンダー――ランゴレンの貴婦人たち(2)」、『人文科学論集』(名古屋経済大学人文科学研究会) 第七六号(二〇〇五) 一三一―二八。
- 第六章 「18世紀の女性と文芸的公共圏――(1)「公」の恐れ――」、『人文科学論集』(名古屋経済大学人文科学研究会) 第八六号(二〇一〇) 五三―六七。
- 「18世紀の女性と文芸的公共圏――(2)ペンと縫い針」、『人文科学論集』(名古屋経済大学人文科学研究会) 第八七号(二〇一一) 六一―八二。

- 第七章 “Anna Seward and the Sapphic Tradition,” *Voyages of Conception: Essays in English Romanticism*, ed. Japan Association of English Romanticism (Tokyo: JAER/Kirihara Shoten, 2005) 28–42.
- 第八章 “Romantic Friendship in Anna Seward’s *Louisa*,” *Studies in English Literature* (The English Literary Society of Japan), English Number 47 (2006): 45–63.
- 第九章 “‘Sappho’ and Mary Robinson” 『イギリス・ロマン派学会』第二十六号（二〇〇二）一
九—三〇。
- 第十章 「ウルストンクラフトとサッポーと女性のセクシュアリティ」、『ジェイン・オースティン研究』（日本オースティン協会）第二号（二〇〇八）二三—四四。
- 第十一章 「男装の喜劇役者——マライア・エッジワース『ベリンダ』（一八〇一）」、『長い十八世紀の女性作家たち——アフラ・ベインからマライア・エッジワースまで』（十八世紀女性作家研究会編）（英宝社、二〇〇九）一八一—二〇六。
- “Cross-Dressing and Gender on the Stage: Maria Edgeworth’s *Belinda*,” *Ivy Never Sere: The Fiftieth Anniversary Publication of The Society of English Literature and Linguistics, Nagoya University*, ed. Mutsumu Takikwa, Masae Kawatsu, and Tomoyuki Tanaka (Tokyo: Otowa-Shobo Tsurumi-Shoten, 2009) 61–74.

- Pursuit of Life, Liberty and Happiness*. London: Pandora, 1989.
- Whitbread, Helena. Introduction. *I Know My Own Herart*. By Anne Lister. Ed. Whitbread. New York and London: New York UP, 1988. xxiii–xxix.
- Williamson, Margaret. *Sappho's Immortal Daughters*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1995.
- Williams, Raymond. *Keywords: A Vocabulary of Culture and Society*. Rev. ed. New York: Oxford UP, 1983.
- Wilson, Carol Shiner, and Joel Haefner, eds. *Re-Visioning Romanticism: British Women Writers, 1776–1837*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1994.
- Wollstonecraft, Mary. *Collected Letters of Mary Wollstonecraft*. Ed. Ralph M. Wardle. Ithaca and London: Cornell UP, 1979.
- . *The Works of Mary Wollstonecraft*. Ed. Janet Todd and Marilyn Butler. London: Pickering, 1989. 7 vols.
- W[oodfall, William]. Rev. of *Poems*, by Miss Aikin. *The Monthly Review, or Literary Journal* 48 (Jan.-Feb. 1773): 54–59, 133–37.
- Woolf, Virginia. *Orlando*. Ed. Rachel Bowlby. Oxford: Oxford UP, 1992. ヴァージニア・ウルフ『オーランドー』杉山洋子訳. 筑摩書房, 1998.
- Wordsworth, William. *The Poetical Works of William Wordsworth*. Ed. Edward Dowden. 7 vols. London: George Bell & Sons, 1892.
- Wu, Duncan, ed. *Romantic Women Poets: An Anthology*. London: Blackwell, 1997.
- Wycherley, William. “To the *Sappho* of the Age, suppos’d to Ly-In of a *Love-Distemper*, or a *Play*.” *Miscellany Poems: As Satyrs, Epistles, Love-Verses, Songs, Sonnets, etc.* By Wycherley. Vol. 1. London: printed for C. Brome, J. Taylor, and B. Tooke, 1704. 191–92.

- アイリアノス. 『ギリシャ奇談集』. 松平千秋・中務哲郎訳. 岩波文庫, 1989.
- ウルストンクラフト, メアリ. 『女性の権利の擁護』. 白井堯子訳. 未来社, 1980.
- ウルストンクラフト, メアリ. 『女性の虐待あるいはマライア』. 川津雅江訳. あぼろん社, 1997.
- 川津雅江. 「アン・リスターのレスビアン日記」. 『日本ジョンソン協会年報』第32号(2008年5月): 10–14.
- . 「男装のサッポーとセクシュアリティ」. 『十八世紀イギリス文学研究——第四号交渉する文化と言語』. 日本ジョンソン協会編. 開拓社, 2010. 294–314.
- . 「ロマン主義時代の女性詩人と反奴隷制運動」. 『人文科学論集』(名古屋経済大学人文科学研究会)第72号(2003年7月): 1–18.
- . 「『私』を売る女——パーディタとメアリ・ロビンソン」. 『マージナリア——隠れた文学/隠された文学』. 村田薫・森田典正編. 音羽書房鶴見書店, 1999. 263–88.
- 鈴木美津子. 『ルソーを読む英国作家たち——『新エロイズ』をめぐる思想の戦い』. 国書刊行会, 2002.
- 蛭川久康. 『スランゴスレン村の貴婦人——隠棲する女同士の風景』. 国書刊行会, 2002.
- フパーツ, チャールズ. 「ギリシャとローマにおける同性愛」. 『同性愛の歴史』. ロバート・オールドリッチ編. 田中英史・田口孝夫訳. 東洋書林, 2009. 29–55.
- ホラティウス. 『ホラティウス全集』. 鈴木一郎訳. 玉川大学出版部, 2001.

- Tauchert, Ashley. "Escaping Discussion: Liminality and the Female-Embodied Couple in Mary Wollstonecraft's *Mary, A Fiction*." *Romanticism On the Net* 18 (May 2000). Web. 20 Nov. 2007. <<http://users.ox.ac.uk/~scat0385/18tauchert.html>>.
- Tissot, S. A. D. *Onanism: or, A Treatise upon the Disorders Produced by Masturbation: or, the Dangerous Effects of Secret and Excessive Venery*. Trans. A. Hume. London: printed for the translator, 1766.
- Titian. *Address to the Greeks*. Trans. J. E. Ryland. Web. 2 April 2010. <<http://www.earlychristianwritings.com/text/tatian-address.html>>.
- Todd, Janet. *Mary Wollstonecraft: A Revolutionary Life*. New York: Columbia UP, 2000.
- . *The Secret Life of Aphra Behn*. London: Pandora, 2000.
- . *Women's Friendship in Literature*. New York: Columbia UP, 1980.
- Tomory, Peter. "The Fortunes of Sappho: 1770–1850." Clarke 121–35.
- [Towers, Joseph.] *Dialogues Concerning the Ladies. To which is added, An Essay on the Ancient Amazons*. London: printed for T. Cadell, 1785.
- Trumbach, Randolph. "London's Sapphists: From Three Sexes to Four Genders in the Making of Modern Culture." Epstein and Straub 112–41.
- . "Sex, Gender, and Sexual Identity in Modern Culture: Male Sodomy and Female Prostitution in Enlightenment London." Fout 89–106.
- Tuite, Clara. "Sapphism." McCalman 688–89.
- Ty, Eleanor. "Engendering a Female Subject: Mary Robinson's (Re)Presentations of the Self." *English Studies in Canada* 21(1995): 407–31.
- Vanita, Ruth. *Sappho and the Virgin Mary: Same-Sex Love and the English Literary Imagination*. New York: Columbia UP, 1996.
- Venette, Nicolas. *The Mysteries of Conjugal Love Reveald*. Done into English by a Gentleman. 2nd ed. Corrected. London: [s. n.], 1707.
- Verri, Alessandro. *Le Avventure di Saffo, Poetessa di Mitilene/ The Adventures of Sappho, Poetess of Mitylene. Translation from the Greek original, newly discovered*. 2 vols. London: printed for T. Cadell, 1789.
- Walsh, William. *A Dialogue Concerning Women, Being a Defence of the Sex. Written to Eugenia*. London: printed for R. Bentley and J. Tonson, 1691.
- [Ward, Edward.] *The History of the London Clubs, or, the Citizens' Pastime*. Part I. By the Author of the *London Spy*. London: printed for J. Bagnall, 1709.
- . *The Second Part, of the London Clubs*. By the Author of the *London Spy*. London: printed by J. Dutton, [1709?].
- Watson, J. R. "Wordsworth, North Wales and the Celtic Landscape." *English Romanticism and the Celtic World*. Ed. Gerald Carruthers and Alan Rawes. Cambridge: Cambridge UP, 2003. 85–102.
- Weeks, Jeffrey. *Coming Out: Homosexual Politics in Britain from the Nineteenth Century to the Present*. 1977. Rev. ed. London and New York: Quartet Books, 1990.
- Wharton, Henry Thornton. *Sappho: Memoir, Text, Selected Renderings and a Literal Translation*. 1885. 2nd ed. London: David Stott, 1887. Web. 20 March 2009. <<http://www.archive.org/details/sapphomoirtext00sappiala>>.
- Wheelwright, Julie. *Amazons and Military Maids: Women Who Dressed as Men in the*

- Skrine, Henry. *Two Successive Tours Throughout the Whole of Wales, with Several of the Adjacent English Counties*. London: printed for Elmsley and Bremner, 1798.
- Smith-Rosenberg, Carroll. "The Female World of Love and Ritual: Relations between Women in Nineteenth-Century America." *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 1.1 (1975): 1–29.
- Smith, Sidonie. *A Poetics of Women's Autobiography: Marginality and the Fictions of Self-Representation*. Bloomington and Indianapolis: Indiana UP, 1987.
- Snyder, Jane McIntosh. *Lives of Notable Gay Men and Lesbians: Sappho*. Gen. ed. Martin B. Duberman. New York: Chelsea House, 1995.
- "Some Account of *Hannah Snell, the Female Soldier*." *The Gentleman's Magazine, and Historical Chronicle* 20 (July 1750): 291–93.
- Spencer, Jane. *The Rise of the Woman Novelist from Aphra Behn to Jane Austen*. Oxford: Basil Blackwell, 1986.
- Steen, Marguerite. *The Lost One: A Biography of Mary (Perdita) Robinson*. London: Methuen, 1937.
- Stanley, Liz. "Epistemological Issues in Researching Lesbian History: The Case of Romantic Friendship." *Working Out: New Directions for Women's Studies*. Ed. Hilary Hinds, Ann Phoenix and Jackie Stacey. London: Falmer Press, 1992. 161–72.
- Stanton, Judith Phillips. "Statistical Profile of Women Writing in English from 1660–1800." Keener and Lorsch 247–54.
- Stein, Judith Ellen. *The Iconography of Sappho, 1775–1875*. Diss. U of Pennsylvania, 1981. Ann Arbor: UMI, 1981. 8117858.
- Stephens, Matthew. *Hannah Snell: The Secret Life of a Female Marine, 1723–1792*. London: Ship Street P, 1997.
- Sterling, James. "To Mrs. Eliza Haywood, on Her Writings." *Secret Histories, Novels and Poems*. By Eliza Haywood. 2nd ed., 4 vols. London: Dan Browne and S. Chapman, 1725. 1: sig. a-a3.
- Straub, Kristina. "The Guilty Pleasures of Female Theatrical Cross-Dressing and the Autobiography of Charlotte Charke." Epstein and Straub 142–66.
- . *Sexual Suspects: Eighteenth-Century Players and Sexual Ideology*. Princeton: Princeton UP, 1992.
- Stewart, Philip. Introduction, *Julie, or the New Heloise: Letters of Two Lovers Who Live in a Small Town at the Foot of the Alps*. By Jean-Jacques Rousseau. *The Collected Writing of Rousseau*. Vol. 6. Trans. and annot. Stewart and Jean Vaché. Hanover and London: UP of New England, 1997. ix–xxi.
- Summers, Claude J., ed. *The Gay and Lesbian Literary Heritage: A Reader's Companion to the Writers and Their Works, from Antiquity to the Present*. Rev. ed. New York and London: Routledge, 2002.
- A Supplement to the Onania, Or the Heinous Sin of Self-Pollution*. London: printed for T. Crouch, [1725?].
- The Surprising Life and Adventures of Maria Knowles*. Newcastle: M. Angus, [ca. 1798].
- Tavernier, Jean-Baptiste. *Collections of Travels Through Turkey into Persia, and the East-Indies*. Trans. John Phillips. 2 vols. London: printed for Moses Pitt, 1684.

- Ross, Marlon. B. *The Contours of Masculine Desire: Romanticism and the Rise of Women's Poetry*. Oxford and New York: Oxford UP, 1989.
- Rousseau, G. S., and Roy Porter, eds. *Sexual Underworlds of the Enlightenment*. Manchester: Manchester UP, 1987.
- Rousseau, Jean-Jacques. *Julie ou la nouvelle Héloïse: Lettres de deux amants, habitants d'une petite ville au pied des Alpes*, 6 vols. Amsterdam [i.e. London]: Marc Michel Rey, 1761.
- . *Eloisa: or, a Series of Original Letters Collected and Published by J. J. Rousseau*. [Trans. William Kenrick.] 4 vols. London: printed for R. Griffiths, T. Becket, P. A. De Hondt, 1761.
- . *Julia: or, The New Eloisa. A Series of Original Letters, Collected and Published by J. J. Rousseau*. 3 vols. Edinburgh: printed for Alex. Donaldson, 1773.
- . *Julie, or the New Heloise: Letters of Two Lovers Who Live in a Small Town at the Foot of the Alps. The Collected Writing of Rousseau*. Vol. 6. Trans. and annot. Philip Stewart and Jean Vaché. Hanover and London: UP of New England, 1997. ルソー『新エロイーズ』全四冊. 安士正夫訳. 岩波文庫, 1960.
- A Sapphick Epistle, from Jack Cavendish to the Honourable and Most Beautiful Mrs. D*****. M. Smith, [1778?]. *Eighteenth-Century British Erotica II*. Vol. 5. Ed. Rictor Norton. London: Pickering, 2004. 357–79.
- Sappho. *Greek Lyric I: Sappho and Alcaeus*. Trans. David A. Campbell. Loeb Classical Library 142. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1982.
- Satan's Harvest Home (1749) and Hell upon Earth: or the Town in an Uproar (1729). New York and London: Garland, 1985.
- Scott, Mary. *The Female Advocate; a Poem. Occasioned by reading Mr. Duncombe's Feminead*. London: printed for Joseph Johnson, 1774.
- Scott, Sarah. *A Descriptive of Millenium Hall*. Ed. Gary Kelly. Ontario: Broadview, 1995.
- Scott, Walter. Biographical Preface. *The Poetical Works of Anna Seward*. Ed. Scott. 1810. 3 vols. New York: AMS Press, 1974. iii–xxxix.
- Seward, Anna. *Elegy on Captain Cook. To which is added, an Ode to the Sun*. London: printed for J. Dodsley, 1780.
- . *Llangollen Vale, with Other Poems*. London: printed for G. Sael, 1796.
- . *Louisa, A Poetical Novel, in Four Epistles*. Lichfield: J. Jackson, 1784.
- . *Monody on Major André. To Which are Added Letters Addressed to Her by Major André in the Year 1769*. Lichfield: J. Jackson, 1781.
- . *Original Sonnets on Various Subjects; and Odes Paraphrased from Horace*. London: printed for G. Sael, 1799.
- . *The Poetical Works of Anna Seward*. Ed. Walter Scott. 1810. 3 vols. New York: AMS Press, 1974. 3vols.
- [Seward, Thomas.] "The Female Right to Literature, in a Letter to a young Lady, from Florence." *A Collection of Poems, by Several Hands*. 3 vols. London: printed by J. Hughs, for R. Dodsley, 1748. 2: 296–302.
- Sharp, Jane. *The Midwives Book, or, The Whole Art of Midwifry Discovered*. London: printed for Simon Miller, 1671.

- Pretty Doings in a Protestant Nation*. London: J. Robert, 1734. Barchas 349–410.
- Prins, Yopie. *Victorian Sappho*. Princeton: Princeton UP, 1999.
- Prior, Matthew. “Henry and Emma, a Poem, Upon the Model of The Nut-brown Maid.” *The Literary Works of Matthew Prior*. Ed. H. Bunker Wright and Monroe K. Spears. Vol. 1. 2nd ed. Oxford: Clarendon P, 1971. 278–300.
- Radcliffe, Alexander. “Sappho to Phaon.” *Ovid Travestie, a Burlesque upon Ovid’s Epistles*. 4th ed. London: printed for J. T., 1705. 1–7.
- Reeve, Clara. *Original Poems on Several Occasions*. London: printed by T. and J. W. Pasham, for W. Harris, 1769.
- Reynolds, Margaret. “‘I lived for art, I lived for love’: The Woman Poet Sings Sappho’s Last Song.” 1996. Leighton, *Critical Reader* 277–306.
- , ed. *The Sappho Companion*. New York: Palgrave, 2001.
- . *The Sappho History*. New York: Palgrave Macmillan, 2003.
- Rich, Adrienne. “Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence.” *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 5(1980): 631–60.
- Richardson, Alan. “Darkness Visible: Race and Representation in Bristol Abolitionist Poetry, 1770–1810.” *Wordsworth Circle* 27 (1996): 67–72.
- Rivers, David. *Literary Memoirs of Living Authors of Great Britain, Arranged According to an Alphabetical Catalogue of Their Names; and Including a List of Their Works, with Occasional Opinions upon Their Literary Character*. 2 vols. London: printed for R. Faulder, sold also by T. Egerton and W. Richardson, 1798.
- Robinson, David M. *Sappho and Her Influence*. Longon: George G. Harrap & Co., [1924].
- Robinson, Mary. *A Letter to the Women of England, on the Injustice of Mental Subordination*. By Anne Frances Randall. London: printed for T. N. Longman, 1799. Poole: Woodstock Books, 1998.
- . *Mary Robinson: Selected Poems*. Ed. Judith Pascoe. Ontario: Broadview, 2000.
- . *Memoirs of the Late Mrs. Robinson, Written by Herself, with Some Posthumous Pieces*. [Ed. Mary Elizabeth Robinson.] 4 vols. London: printed for R. Phillips, 1801.
- . *Memoirs of Mary Robinson. With Portraits*. Ed. Joseph Fitzgerald Molloy. Philadelphia: J. B. Lippincott Co., 1895. *A Celebration of Woman Writers*. Ed. Mary Mark Ockerbloom. Web. 1 May 2011.
- . *Poems*. London: J. Bell, 1791. Oxford and New York: Woodstock Books, 1994.
- . *The Poetical Works*. 3 vols. Ed. Caroline Franklin. London: Routledge, 1996. Rep. of *The Poetical Works of the Late Mrs. Mary Robinson*. 3 vols. London: printed for Richard Phillips, 1806.
- . *Sappho and Phaon, In a Series of Legitimate Sonnets*. 1796. Delmar, New York: Scholars’ Facsimiles & Reprints, 1995.
- . *Thoughts on the Condition of Women, and on the Injustice of Mental Subordination*. 2nd. ed. London: printed for T. N. Longman, 1799.
- Roche, Paul, “Portrait of Sappho.” *The Love Songs of Sappho*. Trans. Roche. New York: Prometheus Books, 1998. 25–39.
- [Roscoe, William.] *The Life, Death, and Wonderful Achievements of Edmund Burke. A New Ballad*. By the Author of the *Wrongs of Africa*. [Edinburgh?]: n. p., 1792.

- Pettit, Alexander, and Patrick Spedding, gen. eds. *Eighteenth-Century British Erotica II*. 5 vols. London: Pickering, 2004.
- Perry, Ruth. "Colonizing the Breast: Sexuality and Maternity in Eighteenth-Century England." Fout 107–37.
- . *The Celebrated Mary Astell: An Early English Feminist*. Chicago: U of Chicago U, 1986.
- Philips, A[mbrose]. "The Life of Sappho." *The Works of Anacreon, and Sappho. Done from the Greek, by Several Hands*. London: printed for E. Curl; and A. Bettesworth, 1713. 63–70.
- , trans. "The Odes of Sappho." *The Works of Anacreon, and Sappho. Done from the Greek, by Several Hands*. London: printed for E. Curl; and A. Bettesworth, 1713. 71–75.
- Philips, Katherine. *Poems, by the Incomparable Mrs. K. P.* London: J. G. for Rich, 1664.
- . *Poems by the Most Deservedly Admired Mrs. Katherine Philips The Matchless Orinda; to which is added Monsieur Corneille's Pompey & Horace, Tragedies; with Several Other Translations out of French*. London: printed by J. M. for H. Herringman, 1667.
- . *Printed Poems, 1667. The Early Modern Englishwoman: a Facsimile Library of Essential Works. Series II, Printed Writings, 1641–1700, Part 3; Vol. 2*. Ed. Paula Loscocco. Aldershot: Ashgate, 2007.
- Piozzi, Hester Lynch Thrale. *Thraliana: The Diary of Mrs. Hester Lynch Thrale (Later Mrs. Piozzi) 1776–1809*. Ed. Katharine C. Balderston. 2 vols. Oxford: Clarendon P, 1942.
- Piozzi, Hester Lynch Thrale, and Penelope Pennington. *The Intimate Letters of Hester Piozzi and Penelope Pennington 1788–1821*. Ed. Oswald G. Knapp. London: John Lane, 1914.
- Plato. *The Banquet: A Dialogue of Plato Concerning Love*. 1st part. Trans. Floyer Sydenham. London: H. Woodfall, 1761.
- Rev. of *Poems, by Mary Robinson. The Gentleman's Magazine: and Historical Chronicle* 61 (1791): 560–61.
- Rev. of *Poems, by Mary Robinson. The Monthly Review; or, Literary Journal* 6 (1791): 448–50.
- Rev. of *Poems on Various Subjects and Occasions, by Mrs Savage. The Critical Review; or, Annals of Literature* 44 (August 1777): 151–52.
- Polwhele, Richard. *The Unsex'd Females: A Poem, Addressed to the Author of The Pursuits of Literature*. 1798. London: Garland, 1974.
- Poovey, Mary. *The Proper Lady and the Woman Writer: Ideology as Style in the Works of Mary Wollstonecraft, Mary Shelley, and Jane Austen*. Chicago and London: U of Chicago P, 1984.
- Pope, Alexander. *Minor Poems*. Ed. Norman Ault: Completed by John Butt. London: Methuen, 1954.
- . *Pope: Poetical Works*. Ed. Herbert Davis. Oxford: Oxford UP, 1966.
- Porter, Roy. *English Society in the Eighteenth Century*. 1982. Rev. ed. London: Penguin, 1991.
- Rev. of *Posthumous Works of the Author of A Vindication of the Rights of Woman. The British Critic, A New Review* 12 (1798): 234–35.

- Norton, Rictor, ed. *Eighteenth-Century British Erotica*. Vol.5. London: Pickering, 2002.
- , ed. *Eighteenth-Century British Erotica II*. Vol. 5. London: Pickering, 2004.
- . Headnote. *A Sapphick Epistle, from Jack Cavendish to the Honourable and Most Beautiful Mrs. D**** (1778?). *Eighteenth-Century British Erotica II*. vol. 5. 355–56.
- . Introduction. *Eighteenth-Century British Erotica*. Vol. 5. Ed. Norton. vii–xix.
- . *Mother Clap's Molly House: The Gay Subculture in England, 1700–1830*. 1992. Rev. ed. Stroud: Chalford Press, 2006.
- Nicolay, Niclolas de. *Nauigations into Turkie*. 1585. Trans. T. Washington the younger. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum; New York: Da Capo Press, 1968.
- O'Higgins, Dolores. "Sappho's Splintered Tongue: Silence in Sappho 31 and Catullus 51." Greene, *Re-Reading* 68–78.
- Onania: or, the Heinous Sin of Self-Pollution*. 19th ed. London: printed for C. Corbett, 1759.
- Oram, Alison, and Annmarie Turnbull, eds. *The Lesbian History Sourcebook: Love and Sex between Women in Britain from 1780 to 1970*. London and New York: Routledge, 2001.
- The Oxford English Dictionary*. 2nd. ed. V. 4.0. Oxford: Oxford UP, 2009. CD-ROM.
- Ovid. "The Fable of Iphis and Ianthe." Trans. Mr. Dryden. *Ovid's Metamorphoses in fifteen books*. Translated by the Most Eminent Hands. London: printed for Jacob Tonson, 1717. 323–30. オウイデイウス『変身物語』(上・下)中村善也訳. 岩波文庫, 1984.
- . Epistle XV. "Sappho Paoni" ("Sappho to Phaon"). *Heroides and Amores*. Trans. Grant Showerman. Loeb Classical Library 41. 2nd ed. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1977. 180–97.
- Pascoe, Judith. "Appendix D: Publication histories of Robinson's poems." *Mary Robinson: Selected Poems*. Ed. Pascoe. Ontario: Broadview, 2000. 392–429.
- . "Mary Robinson and the Literary Marketplace." Feldman and Kelley 252–68.
- . *Romantic Theatricality: Gender, Poetry, and Spectatorship*. New York: Cornell UP, 1997.
- Park, Katharine. "The Rediscovery of the Clitoris: French Medicine and the Tribade, 1570–1620." *The Body in Parts: Fantasies of Corporeality in Early Modern Europe*. Ed. Carla Mazzio and David Hillman. New York: Routledge, 1997. 171–93.
- Parker, Holt. "Sappho Schoolmistress." Greene, *Re-Reading* 146–83.
- Parsons, James. *A Mechanical and Critical Enquiry into the Nature of Hermaphrodites*. London: printed for J. Walthoe, 1741.
- Patrick, Mary Mills. *Sappho and the Island of Lesbos*. London: Methuen, 1912.
- Peakman, Julie. *Lascivious Bodies. A Sexual History of the Eighteenth Century*. London: Atlantic, 2004.
- Pearson, Hesketh, ed. *The Swan of Lichfield*. London: Mamish Hamilton, 1936.
- Pennant, Thomas. *A Tour in Wales*. 1784. 2 vols. London: printed for Wilkie and Robinson, 1810.
- Peterson, Linda H. "Becoming an Author: Mary Robinson's *Memoirs* and the Origins of the Woman Artist's Autobiography." Wilson and Haefner 36–50.
- . "Sappho and the Making of Tennysonian Lyric." *English Literary History* 61 (1994): 121–37.

- The London Magazine, or, Gentleman's Monthly Intelligencer* 46 (September 1777): 443–45.
- Rev. of *Memoirs of the Author of the Vindication of the Rights of Woman*, by William Godwin. *The Anti-Jacobin Review and Magazine* 1 (1798): 94–102.
- Rev. of *Memoirs of the Author of the Vindication of the Rights of Woman*, by William Godwin. *The British Critic, A New Review* 12(1798): 228–33.
- Rev. of *Memoirs of the Author of the Vindication of the Rights of Woman*, by William Godwin. *The European Magazine, and London Review* 33 (1798): 246–51.
- Rev. of *Memoirs of the Author of the Vindication of the Rights of Woman*, by William Godwin. *The Monthly Review; or, Literary Journal* 27 (1798): 321–27
- Rev. of *Memoirs of the Author of the Vindication of the Rights of Woman*, by William Godwin, and *Posthumous Works of the Author of a Vindication of the Rights of Woman*. *The Critical Review; or Annuals of Literature* 22 (1798): 414–19.
- Rev. of *Memoirs of the Author of the Vindication of the Rights of Woman*, by William Godwin, and *Posthumous Works of the Author of a Vindication of the Rights of Woman*. *The Monthly Mirror: Reflecting Men and Manners* 5 (1798): 153–57.
- Rev. of *Memoirs of the late Mrs. Robinson*, by Mary Robinson. *The Critical Review; or, Annals of Literature* 33 (1801): 295–301.
- “Memoirs of the (soy disant) Chevalier D'Eon, alas Mademoiselle Beaumont.” *The Town and Country Magazine* 9 (July 1777): 339–40.
- Midgley, Clare. *Women Against Slavery: The British Campaigns, 1780–1870*. London and New York: Routledge, 1992.
- Montagu, Mary Wortley. *Letters of the Right Honourable Lady M—y W—y M—e: Written, during her Travels in Europe, Asia and Africa, to Persons of Distinction, Men of Letters, &c. in Different Parts of Europe*. 3 vols. London: printed for T. Becket and P. A. De Hondt, 1763.
- Mounsey, Chris, and Rictor Norton, gen. eds. *Eighteenth-Century British Erotica*. 5 vols. London: Pickering, 2002.
- Moody, Elizabeth. “Sappho Burns her Books and Cultivates the Culinary Arts.” *Lonsdale* 406–07.
- Moore, Lisa L. *Dangerous Intimacies: Toward a Sapphic History of the British Novel*. Durham and London: Duke UP, 1997.
- . “‘Something More Tender Still than Friendship’: Romantic Friendship in Early-Nineteenth-Century England.” *Feminist Studies* 18. 3(1992): 499–520.
- More, Hannah. *The Search after Happiness: A Pastoral Drama*. 3rd ed. Bristol: S. Farley, 1774.
- . *Essays on Various Subjects, Principally Designed for Young Ladies*. London: printed for J. Wilkie, 1777.
- Most, Glenn W. “Reflecting Sappho.” Greene, *Re-Reading* 11–35.
- Myers, Sylvia Harcstark. *The Bluestocking Circle: Women, Friendship, and the Life of the Mind in Eighteenth-Century England*. Oxford: Clarendon, 1990.
- “Necrology (of Mary Wollstonecraft).” *The Anti-Jacobin Review and Magazine* 5 (1800): 93–94.

- ルキアノス「遊女の対話」高津春繁訳。『本当の話——ルキアノス短編集』呉茂一他訳。ちくま文庫, 1989.
- Lyly, John. *Sappho and Phao*. Ed. David Bevington. Manchester and New York: Manchester UP, 1991.
- Lyttleton, Lord. "On Reading Mrs. —'s Poems in Manuscript." *Poems on Several Occasions*. By Elizabeth Carter. London: printed for John Rivington, 1762. v–vi.
- Rev. of *Maria, or the Wrongs of Woman*, by Mary Wollstonecraft. *The Anti-Jacobin Review and Magazine* 1 (1798): 91–93.
- Mason, William. *Sappho: A Monodrama. Poems by William Mason, M. A.* Vol. 3. York: W. Blanchard, 1797. 143–89.
- Marsden, Jean I. "Modesty Unshackled: Dorothy Jordan and the Dangers of Cross-Dressing." *Studies in Eighteenth-Century Culture* 22 (1992): 21–35.
- Rev. of *Maria, or the Wrongs of Woman*, by Mary Wollstonecraft[*sic.*] Godwin. *The Anti-Jacobin Review and Magazine; or, Monthly Political and Literary Censor* 1 (1798): 91–93.
- Masters, Mary. *Poems on Several Occasions*. London: printed by T. Browne for the Author, 1733.
- Mathias, Thomas James. *The Pursuits of Literature: a Satirical Poem in Dialogue*. Part the fourth and last. London: printed for T. Becket, 1797.
- Mavor, Elizabeth. *The Ladies of Llangollen*. 1971. London: Penguin, 2001.
- , ed. *A Year with the Ladies of Llangollen*. 1984. Harmondsworth: Penguin, 1986.
- McCalman, Iain, gen. ed. *An Oxford Companion to the Romantic Age: British Culture 1776–1832*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- McGann, Jerome. *The Poetics of Sensibility: A Revolution in Literary Style*. Oxford: Clarendon, 1996.
- . "Mary Robinson and the Myth of Sappho." *Modern Language Quarterly* 56 (1995): 55–76.
- McGovern, Barbara. *Anne Finch and Her Poetry: A Critical Biography*. Athens: U of Georgia P, 1992.
- , and Charles H. Hinnant. Editors' note. *The Anne Finch Wellesley Manuscript Poems: A Critical Edition*. Ed. McGovern and Hinnant. Athens and London: U of Georgia P, 1998. xliii–l.
- Meilan, Mark Anthony. *Sermons for Children; Being a Course of Fifty-Two, on Subjects Suited to Their Tender Age, and in a Style Adapted to the Understanding of the Rising Generation*. 3 vols. London: printed for T. Hookham, and T. Longman, 1789.
- Mellor, Anne K. *Romanticism & Gender*. New York and London: Routledge, 1993.
- . "The Female Poet and the Poetess: Two Traditions of British Women's Poetry, 1780–1830." *Women's Poetry in the Enlightenment: The Making of a Canon, 1730–1820*. Ed. Isobel Armstrong and Virginia Blain. New York: Palgrave Macmillan, 1999. 81–98.
- . *Mothers of the Nation: Women's Political Writing in England, 1780–1830*. Bloomington and Indianapolis: Indiana UP, 2000.
- "Memoirs of *Mademoiselle D' Eon de Beaumont*; commonly called the *Chevalier D' Eon*."

- Oxford: Oxford UP, 1994. 485–500.
- Kowaleski-Wallace, Beth. “Home Economics: Domestic Ideology in Maria Edgeworth’s *Belinda*.” *Eighteenth Century* 29 (1988): 242–62.
- Laqueur, Thomas. *Body and Gender from the Greeks to Freud*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1990. トマス・ラカー『セックスの発明——性差の観念史と解剖学のアポリア』高井宏子・細谷等訳. 工作舎, 1998.
- Landry, Donna. *The Muses of Resistance: Laboring-Class Women’s Poetry in Britain, 1739–1796*. Cambridge: Cambridge UP, 1990.
- Lardinois, André. “Lesbian Sappho and Sappho of Lesbos.” *From Sappho to De Sade: Moments in the History of Sexuality*. Ed. Jan Bremmer. London and New York: Routledge, 1989. 15–35.
- Lighton, Angela, ed. *Victorian Women Poets: A Critical Reader*. Oxford: Blackwell, 1996.
- . *Victorian Women Poets: Writing Against the Heart*. Charlottesville and London: UP of Virginia, 1992.
- Lesbia, A Tale: in Two Cantos*. London: printed R. Withy and J. Ryal, 1756.
- The Life and Adventures of Maria Knowles*. [Manchester]: printed by W. Shelmerdine & Co., [1800?].
- The Life and Adventures of Mrs. Christian Davies*. London: R. Montagu, 1740.
- The Life and Surprising Adventures of Blue-eyed Patty, the Valiant Female Soldier*. Wolverhampton: J. Hatley, [ca. 1800].
- Lightfoot, Marjorie. “‘Morals for Those That Like Them’: The Satire of Edgeworth’s *Belinda*, 1801.” *Éire-Ireland* 29. 4 (1994): 117–31.
- Lipking, Lawrence. *Abandoned Women and Poetic Tradition*. Chicago and London: U of Chicago P, 1988.
- Lister, Anne. *I Know My Own Heart: The Diaries of Anne Lister 1791–1840*. Ed. Helena Whitbread. New York and London: New York UP, 1988.
- . *No Priest But Love: Excerpts from the Diaries of Anne Lister, 1824–1826*. Ed. Helena Whitbread. New York: New York UP, 1992.
- Rev. of *Llangollen Vale, with other Poems*, by Anna Seward. *The British Critic, a New Review* 7 (April 1796): 404–07.
- Lockhart, J. G. *Memoirs of Sir Walter Scott*. 5 vols. London: Macmillan, 1900.
- Longinus. *Peri hypsous, or Dionysius Longinus of the Height of Eloquence*. Trans. J. Hall. London: printed by Roger Daniel for Francis Eaglesfield, 1652.
- Lonsdale, Roger, ed. *Eighteenth-Century Women Poets*. Oxford and New York: Oxford UP, 1989.
- . Introduction. *Eighteenth-Century Women Poets*. Ed. Lonsdale. Oxford and New York: Oxford UP, 1989. xxi–xlvii.
- Losocco, Paula. Introductory note. *Printed Poems, 1667*. By Katherine Philips. *The Early Modern Englishwoman: a Facsimile Library of Essential Works, Series II, Printed Writings, 1641–1700, Part 3; Vol. 2*. Ed. Losocco. Aldershot: Ashgate, 2007. ix–xv.
- Lucian. “Leaena and Clonarium.” *Lucian, VII: Dialogues of the Dead. Dialogues of the Sea-Gods. Dialogues of the Gods. Dialogues of the Courtesans*. Trans. M. D. MacLeod. Loeb Classical Library 431. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1961. 378–85.

- Jay and Caroline Lewis. London: Anvil Press Poetry, 1996. 11–27.
- Johnson, Claudia L. *Equivocal Beings: Politics, Gender, and Sentimentality in the 1790s: Wollstonecraft, Radcliffe, Burney, Austen*. Chicago and London: U of Chicago P, 1995.
- Johnson, Samuel. *Samuel Johnson's Dictionary of the English Language*. Ed. Alexander Chalmers. 1843. London: Studio Editions, 1994.
- Johnson, W. R. Foreword. *Sappho's Lyre: Archaic Lyric and Women Poets of Ancient Greece*. Trans. Diane J. Rayor. Berkeley: U of California P, 1991. ix–xix.
- “The Jury Adjourned from the 3d to the 22d, M. D'E—n not being present.” *The Town and Country Magazine* 3 (June 1771): 305–06.
- Juvenal. *Satires with the Satires of Persius*. Trans. William Gifford. 1954. London: Everyman's Library, 1992.
- Kaplan, Cora. *Sea Changes—Essays on Culture and Feminism*. London and New York: Verso, 1986.
- Kahn, Madeleine. *Narrative Transvestism: Rhetoric and Gender in the Eighteenth-Century English Novel*. New York: Cornell UP, 1991.
- Kates, Gary. “D'Eon Returns to France: Gender and Power in 1777.” Epstein and Straub 167–94.
- . *Monsieur d'Eon Is a Woman: a Tale of Political Intrigue and Sexual Masquerade*. New York: Basic Books, 1995.
- Kauffman, Linda S. *Discourses of Desire: Gender, Genre, and Epistolary Fictions*. Ithaca: Cornell UP, 1986.
- Kavanagh, Julia. *English Women of Letters: Biographical Sketches*. 2 vols. London: Hurst, 1863[1862].
- Kawatsu, Masae. “Self and Society: Wollstonecraft's Dilemma in *The Wrongs of Woman*.” *Centre and Circumference: Essays in English Romanticism*. Ed. Association of English Romanticism in Japan. Tokyo: Kirihara Shoten, 1995. 638–53.
- Kelly, Jennifer, ed. *Anna Seward*. London: Pickering, 1999. Vol. 4 of *Bluestocking Feminism: Writings of The Bluestocking Circle, 1738–1785*. Gen. ed. Gary Kelly. 6 vols. ———. Introduction. *Anna Seward*. Ed. Kelly. ix–xxi.
- Keener, Frederick M., and Susan E. Lorsch, eds. *Eighteenth-Century Women and the Arts*. New York: Greenwood Press, 1988.
- [King, William.] *The Toast: An Epic Poem, in Four Books, Written in Latin by Frederick Scheffer, Done into English by Peregrine O Donald, Esq.* Vol. I. Dublin, 1732.
- . *The Toast: An Heroick Poem in Four Books, Written originally in Latin, by Frederick Scheffer: now Done into English, and Illustrated with Notes and Observations, by Peregrine Odonald Esq.* Dublin; rpt. London, 1736.
- [Kirby, R. S.] *Kirby's Wonderful and Eccentric Museum; or, Magazine of Remarkable Characters*. 6 vols. London: R. S. Kirby, 1820.
- Kirkpatrick, Kathryn J. “‘Gentlemen Have Horrors upon This Subject’: West Indian Suitors in Maria Edgeworth's *Belinda*.” *Eighteenth-Century Fiction* 5.4 (1993): 331–48.
- . Note on the text. *Belinda*. By Maria Edgeworth. 2nd ed. 1802. Ed. Kirkpatrick. Oxford: Oxford UP, 1994. xxvi–xxxii.
- . Explanatory notes. *Belinda*. By Maria Edgeworth. 2nd ed. 1802. Ed. Kirkpatrick.

- Harris, Jocelyn. Introduction. *The Femiinad: A Poem*. By John Duncombe. 1754. Los Angeles: U of California P, 1981. iii–xii.
- Harvey, Elizabeth D. “Ventriloquizing Sappho, or the Lesbian Muse.” Greene, *Re-Reading* 79–104.
- Hays, Mary. *Memoirs of Emma Courtney*. 1796. Ed. Eleanor Ty. Oxford and New York: Oxford UP, 1996.
- , ed. *Female Biography: or, Memoirs of Illustrious and Celebrated Women, of All Ages and Countries*. 1803. 6 vols. Osaka: Eureka Press, 2004.
- Herbert, Mr., trans. “SAPPHO, To the Goddess of Love. From the Greek.” *The Works of Petronius Arbitr . . . And Translations from the Greek of Pindar, Anacreon, Sappho*. London: printed for E. Curl; and A. Bettesworth, 1713. 325–26.
- Hill, Bridget. *The First English Feminist: “Reflections Upon Marriage” and Other Writings by Mary Astell*. Aldershot: Gower Publishing, 1986.
- Hinnant, Charles H. *The Poetry of Anne Finch: An Essay in Interpretation*. London and Toronto: Associated UPs, 1994.
- “Historical Chronicle.” [Report of Ann Marrow.] 5 July. *The Gentleman’s Magazine* 47 (July 1777) 348.
- . [Report of Mary East.] 10 July. *The Gentleman’s Magazine* 36 (July 1776): 339.
- . [Report of Mary East.] 21 October. *The Gentleman’s Magazine* 36 (October 1766): 492–93.
- . [Report of a young female husband.] 18 June. *The Gentleman’s Magazine* 43 (June 1773): 298.
- Hitchcock, Tim. *English Sexualities, 1700–1800*. New York: St. Martin’s Press, 1997.
- Horace. *The Odes and Epodes*. Trans. C. E. Bennett. Loeb Classical Library 33. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1927, 1988.
- Hunt, Leigh. “Mrs. Jordan.” *Critical Essays on the Performers of the London Theatres: Including General Observations on the Practise and Genius of the Stage*. London: John Hunt, 1807. 161–69.
- Hunt, Lynn. “The Many Bodies of Marie Antoinette: Political Pornography and the Problem of the Feminine in the French Revolution.” *Eroticism and Body Politic*. Ed. Hunt. Baltimore and London: Johns Hopkins UP, 1991. 108–30.
- Rev. of *The Inflexible Captive; a Tragedy*, by Hannah More. *The Monthly Review: or, Literary Journal* 50 (April 1774): 243–51.
- The Intrepid Female: Or, Surprising Life and Adventures of Mary-Anne Talbot, otherwise John Taylor. Kirby’s Wonderful and Eccentric Museum*. 6 vols. London: R. S. Kirby, 1820. 2: 160–225.
- Jackson, James Robert de J. *Annals of English Verse, 1770–1835: A Preliminary Survey of the Volumes Published*. New York: Garland, 1985.
- . *Romantic Poetry by Women: A Bibliography, 1770–1835*. Oxford: Oxford UP, 1993.
- [Jacob, Giles.] *A Treatise of Hermaphrodites. A Treatise of the Use of Flogging in Venereal Affairs . . . To which is added, A Treatise of Hermaphrodites*. By John Henry Meibomius. London: printed for E. Curl, [1718].
- Jay, Peter, and Caroline Lewis. Introduction. *Sappho through English Poetry*. Ed. Peter

- Foucault, Michel. *The History of Sexuality: Volume 1: An Introduction*. Trans. Robert Hurley. New York: Vintage, 1990. ミシェル・フーコー『性の歴史Ⅰ——知への意志』渡辺守章訳. 新潮社, 1986.
- Fout, John C., ed. *Forbidden History: The State, Society, and the Regulation of Sexuality in Modern Europe*. Chicago and London: U of Chicago P, 1992.
- Gibson, Rebecca Gould. “My Want of Skill”: Apologias of British Women Poets, 1660–1800.” Keener and Lorsch 79–86.
- Godwin, William. *Memoirs of the Author of A Vindication of the Rights of Woman*. 1798. Oxford: Woodstock, 1990. ウィリアム・ゴドウィン『メアリー・ウルストンクラフトの思い出——女性解放思想の先駆者』. 白井厚・堯子訳. 未来社, 1970.
- Gordon, Mary Louisa. *Chase of the Wild Goose: The Story of Lady Eleanor Butler and Miss Sarah Ponsonby, Known as the Ladies of Llangollen*. 1936. New York: Arno Press, 1975. メアリー・ゴードン『夢を追って——ランゴレーンの貴婦人たち』古木宜志子訳. 彩流社, 2003.
- Gould, Robert. “The Play-House. A Satyr.” *Poems Chiefly Consisting of Satyrs and Satyrical Epistles*. By Gould. London: printed and sold by most Booksellers in London and Westminster, 1689. 161–85.
- . *A Satyrical Epistle to the Female Author of a Poem, Call'd Silvia's Revenge, &c.* London: printed for R. Bentley, 1691.
- [Greene, Edward Burnaby.] “Observations on the Life, and Writings of Sappho.” *The Works of Anacreon and Sappho*. [Ed. and Trans. Greene.] London: printed for J. Ridley, 1768. 129–38.
- . trans. “The Odes of Sappho.” *The Works of Anacreon and Sappho*. [Ed. Greene.] London: printed for J. Ridley, 1768. 139–46.
- Greene, Ellen, ed. *Re-Reading Sappho: Reception and Transmission*. Berkeley: U of California P, 1996.
- Greenfield, Susan C. “‘Abroad and at Home’: Sexual Ambiguity, Miscegenation, and Colonial Boundaries in Edgeworth’s *Belinda*.” *PMLA* 112 (1997): 214–28.
- Greer, Germaine. *Slip-Shod Sibyls: Recognition, Rejection and the Woman Poet*. London: Viking, 1995.
- [Griffiths, Ralph.] Rev. of *Poetic Trifles*, by Elizabeth Moody. *The Monthly Review; or Literary Journal, Enlarged* 27(December 1798): 442–47.
- Grundy, Isobel. *Lady Mary Wortley Montagu: Comet of the Enlightenment*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Gubar, Susan. “Feminist Misogyny: Mary Wollstonecraft and the Paradox of ‘It Takes One to Know One.’” *Feminism Beside Itself*. Ed. Diane Elam and Robyn Wiegman. New York and London: Routledge, 1995. 133–54.
- Habermas, Jürgen. *The Structural Transformation of the Public Sphere: An Inquiry into a Category of Bourgeois Society*. Trans. Thomas Burger. Cambridge, Massachusetts: MIT Press, 1991. ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換——市民社会の категорияについての探究』細谷貞雄・山田正行訳. 第二版. 未来社, 1994.
- Halperin, David M. *One Hundred Years of Homosexuality: and Other essays on Greek Love*. New York and London: Routledge, 1990.

- Angeles: U of California, 1989. The Augustan Reprint Society. Publication Number 257.
- The Female Wits, or, The Triumvirate of Poets at Rehearsal: A Comedy. As it was Acted Several Days Successively with Great Applause at the Theater-Royal in Drury-Lane . . .* Written by Mr. W. M. London: printed for William Turner, [1704].
- Fergus, Jan, and Janice Farrar Thaddeus. "Women, Publishers, and Money, 1790–1820." *Studies in Eighteenth-Century Culture* 17(1987): 191–207.
- Ferguson, Moira, ed. *First Feminists: British Women Writers, 1578–1799*. Bloomington: Indiana UP, 1985.
- . "Women in Literature." *The Blackwell Companion to the Enlightenment*. Ed. John W. Yolton, Roy Porter, Pat Rogers, and Barbara Maria Stafford. Oxford: Blackwell, 1991. 294–300.
- . *Subject to Others: British Women Writers and Colonial Slavery, 1670–1834*. New York and London: Routledge, 1992.
- [Fielding, Henry.] *The Female Husband: or, The Surprising History of Mrs. Mary, Alias Mr. George Hamilton*. London: printed for M. Cooper, 1746.
- . *The Female Husband: or, The Surprising History of Mrs. Mary, Alias Mr. George Hamilton* (1746). *Eighteenth-Century British Erotica*. Vol. 5. Ed. Rictor Norton. London: Pickering, 2002. 393–417.
- . *The Surprising Adventures of a Female Husband!* London: J. Bailey, 1813.
- Finch, Anne, Countess of Winchilsea. *Miscellany Poems, on Several Occasions*. Written by a Lady. London: printed for John Barber, 1713.
- . *Miscellany Poems, on Several Occasions. Written by the Right Honble Ann, Countess of Winchilsea*. London: printed for J.B., 1713.
- . *Poems by Anne, Countess of Winchilsea*. Ed. John. Middleton Murry. London: Jonathan Cape, 1928.
- . *The Anne Finch Wellesley Manuscript Poems: A Critical Edition*. Ed. Barbara McGovern and Charles H. Hinnant. Athens and London: U of Georgia P, 1998.
- Folkenflik, Robert. "Gender, Genre, and the Theatricality in the Autobiography of Charlotte Charke." Coleman, Lewis, and Kowalik 97–116.
- Fone, Byrne R. S. "This Other Eden: Arcadia and the Homosexual Imagination." *Essays on Gay Literature*. Ed. Stuart Kellogg. New York: Harrington Park, 1985. 13–34.
- Foster, John. *Essays in a Series of Letters, On the Following Subjects: On a Man's Writing Memoirs of Himself; On Decision of Characer; On the Application of the Epithet Romantic; On Some of the Causes by Which Evangelical Religion Has Been Rendered Less Acceptable to Persons of Cultivated Taste*. 5th ed. London: printed for Gale, Curtis, and Fenner, 1813.
- Franklin, Caroline. Introduction. *Louisa, A Poetical Novel, in Four Epistles*. By Anna Seward. 1784. *The Lay of An Irish Harp; or Metrical Fragments*. By Sydney Owenson. 1809. London: Routledge, 1996. v–xiii. *The Romantic Women Poets 1770–1830*. 12 vols.
- Friedli, Lynne. "Passing Women: a Study of Gender Boundaries in the Eighteenth Century." Rousseau and Porter 234–60.

- Eger, Elizabeth. "Representing Culture: 'The Nine Living Muses of Great Britain' (1779)." Eger, Grant, Gallchoir, and Warburton 104–32.
- Eger, Elizabeth, Charlotte Grant, Cliona Ó Gallchoir, and Penny Warburton, eds. *Women, Writing and the Public Sphere, 1700–1830*. Cambridge: Cambridge UP, 2001.
- Eger, Elizabeth, and Lucy Peltz. *Brilliant Women: 18th-Century Bluestockings*. London: National Portrait Gallery, 2008.
- Edgeworth, Maria. *Letters for Literary Ladies, To which is added, An Essay on the Noble Science of Self-Justification*. 1795. Ed. Claire Connolly. London: Everyman, 1993.
- . *Belinda*. 1st ed. 1801. Ed. Eiléan Ni Chuilleanáin. London: Everyman, 1993.
- [Egerton, Sarah Fyge.] *Poems on Several Occasions, together with a Pastral*. By Mrs. S. F. London: J. Nutt, [1703].
- Ellis, Havelock. *Studies in the Psychology of Sex: Eonism and Other Supplementary Studies*. F. A. Davis Co., 1928.
- . *Studies in the Psychology of Sex: Sexual Inversion*. 1897. Honolulu: UP of the Pacific, 2001.
- Epstein, Julia, and Kristina Straub, eds. *Body Guards: The Cultural Politics of Gender Ambiguity*. New York and London: Routledge, 1991.
- "The Examination of a Jury of Matrons upon the Body of the Chevalier D'E—n, at Medmenham-Abbey, on the 24th Day of May, 1771." *The Town and Country Magazine* 3 (May 1771): 249–50.
- "Extraordinary Female Affection." *The Town and Country Magazine* 22(August 1790): 363.
- Ezell, Margaret K. M. *Writing Women's Literary History*. Baltimore and London: Johns Hopkins UP, 1993.
- Faderman, Lillian. *Surpassing the Love of Men: Romantic Friendship and Love Between Women from the Renaissance to the Present*. 1981. 1998. New York: Perennial, 2001.
- , ed. *Chloe Plus Olivia: An Anthology of Lesbian Literature from the Seventeenth Century to the Present*. New York: Penguin, 1994.
- Fay, Elizabeth. "Anna Seward, the Swan of Lichfield: Reading *Louisa*." Behrendt and Linkin 129–34.
- [Fawkes, Francis, trans.] *The Works of Anacreon, Sappho, Bion, Moschus and Musæus. Translated into English. By a Gentleman of Cambridge*. London: printed for J. Newbery; and L. Davis and C. Reymers, 1760.
- Feather, John. *A History Of British Publishing*. 1988. 2nd ed. London and New York: Routledge; 2005. ジョン・フェザー『イギリス出版史』箕輪成男訳. 玉川大学出版部, 1991.
- Feldman, Paula R., ed. *British Women Poets of the Romantic Era: An Anthology*. Baltimore and London: Johns Hopkins UP, 1997.
- Feldman, Paula R., and Theresa M. Kelley, eds. *Romantic Women Writers: Voices and Countervoices*. Hanover and London: UP of New England, 1995.
- The Female Soldier; Or, The Surprising Life and Adventures of Hannah Snell*. London: R. Walker, 1750.
- The Female Soldier; Or, The Surprising Life and Adventures of Hannah Snell*. 1750. Los

- Colley, Linda. *Britons: Forging the Nation 1707–1837*. New Haven and London: Yale UP, 1992.
- [Colman, George, and Bonnell Thornton, eds.] *Poems by Eminent Ladies*. 2 vols. London: printed for R. Baldwin, 1755.
- . and ———. Preface. *Poems*. Ed. Colman and Thornton. Vol. 1. iii–iv.
- Coote, Stephen, ed. *The Penguin Book of Homosexual Verse*. Harmondsworth: Penguin, 1983.
- Constable, A., ed. *Letters of Anna Seward: Written Between the Years 1784 and 1807*. 6 vols. Edinburgh: printed by George Ramsay, for Archibald Constable, 1811.
- Cott, Nancy F. “Passionlessness: An Interpretation of Victorian Sexual Ideology, 1790–1850.” *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 4.2 (1978): 219–36.
- Cox, Edwin Marion. *The Poems of Sappho with Historical & Critical Notes, Translations, and a Bibliography*. London: Williams and Norgate, 1924.
- Crawford, Patricia. “Women’s Published Writings 1600–1700.” *Women in English Society 1500–1800*. Ed. Mary Prior. Methuen, 1985. London and New York: Routledge, 1985. 211–82.
- Curran, Stuart. “Mary Robinson’s *Lyrical Tales* in Context.” Wilson and Haefner 17–35.
- Davies, Kate. “A Moral Purchase: Femininity, Commerce and Abolition, 1788–1792.” Eger, Grant, Gallchoir, and Warburton 133–59.
- DeJean, Joan. *Fictions of Sappho, 1546–1937*. Chicago and London: U of Chicago P, 1989.
- Dekker, Rudolf M., and Lotte C. van de Pol. *The Tradition of Female Transvestism in Early Modern Europe*. London: Macmillan, 1989. ルドルフ・M・デッカー, ロッテ・C・ファン・ドゥ・ポル『兵士になった女性たち——近世ヨーロッパにおける異性装の伝統』大木昌訳. 法政大学出版社, 2007.
- Donald, Diana. *The Age of Caricature: Satirical Prints in the Reign of George III*. New Haven and London: Yale UP, 1996.
- Donne, John. *Poetical Works*. Ed. Herbert J. C. Grierson. Oxford: Oxford UP, 1971.
- Donoghue, Emma. *Passions Between Women: British Lesbian Culture 1668–1801*. London: Scarlet Press, 1993.
- , ed. *Poems Between Women: Four Centuries of Love, Romantic Friendship, and Desire*. New York: Columbia UP, 1997.
- Dover, K. J. *Greek Homosexuality*. 1978. Updated and with a New Postscript. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1989. ケネス・ドローヴァー『古代ギリシャの同性愛』. 中務哲郎・下田立行訳. リプロポート, 1984.
- DuBois, Page. *Sappho is Burning*. Chicago and London: U of Chicago P, 1995.
- Dugaw, Dianne. Introduction. *The Female Soldier; Or, The Surprising Life and Adventures of Hannah Snell*. 1750. Los Angeles: U of California, 1989. v–xiii.
- . *Warrior Women and Popular Balladry, 1650–1850*. 1989. Chicago and London: U of Chicago P, 1996.
- Duncombe, John. *The Femeinead; or, Female Genius, A Poem*. 2nd ed. London: printed for R. and J. Dodsley, 1757.
- . *The Femiinad, A Poem*. London: printed for M. Cooper, [1754].

- Busbecq, Ogier Ghislain de. *The Four Epistles of A.G. Busbequius Concerning his Embassy into Turkey*. Done into English. London: printed for J. Taylor and J. Wyat, 1694.
- Butler, Marilyn. *Maria Edgeworth: A Literary Biography*. Oxford: Clarendon, 1972.
- Burney, Frances. *Camilla: or, A Picture of Youth*. 1796. Ed. Edward A. Bloom and Lillian D. Bloom. New York: Oxford World's Classics, 1999.
- . *Evelina*. 1778. Ed. Stewart J. Cooke. New York and London: Norton, 1998.
- Campbell, David A. Introduction. *Greek Lyric I: Sappho and Alcaeus*. Trans. Campbell. Loeb Classical Library 142. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1982.
- Cavendish, Margaret, Duchess of Newcastle. *The Convent of Pleasure*. Plays, Never Before Printed. London: A. Maxwell, 1668.
- Castle, Terry. "Matters Not Fit to Be Mentioned: Fielding's *The Female Husband*." *English Literary History* 49 (1982): 602–22.
- . *Masquerade and Civilization: The Carnavalesque in Eighteenth-Century English Culture and Fiction*. Stanford: Stanford UP, 1986.
- . "The Culture of Travesty: Sexuality and Masquerade in Eighteenth-Century England." *Rousseau and Porter* 156–80.
- . *The Apparitional Lesbian: Female Homosexuality and Modern Culture*. New York: Columbia UP, 1993.
- . ed. *The Literature of Lesbianism: A Historical Anthology from Ariosto to Stonewall*. New York: Columbia UP, 2003.
- Charke, Charlotte. *A Narrative of the Life of Mrs. Charlotte Charke*. 1755. Ed. Robert Rehder. London: Pickering, 1999.
- "Chronicle." [Report of Ann Marrow.] 3 July. *The Annual Register, or A View of the History, Politics, and Literature* (1777): 191–92.
- . [Report of a young female husband.] 19 June. *Annual Register* (1773): 111.
- Chudleigh, Mary. *Poems on Several Occasions; Together with The Song of the Three Children, Paraphras'd*. London: printed for Bernard Lintott, 1703.
- . *Essays upon Several Subjects in Prose and Verse*. London: R. Bonwick, 1710.
- Chuilleanáin, Eiléan Ni. "Maria Edgeworth and Her Critics." *Belinda*. By Maria Edgeworth. 1st ed. 1801. Ed. Chuilleanáin. London: Everyman, 1993. 457–67.
- Cibber, [Theophilus, and others,] comp. *The Lives of the Poets of Great Britain and Ireland, to the Time of Dean Swift*. 5 vols. London: printed for R. Griffiths, 1753.
- "A Circumstantial Account of an Extraordinary Affair which Lately Happened at Poplar." *The Gentleman's Magazine, and Historical Chronicle* 36 (August 1766): 359–60.
- Clarke, G. W., ed. *Rediscovering Hellenism: The Hellenic Inheritance and the English Imagination*. Cambridge: Cambridge UP, 1989.
- Coleman, Deirdre. "Conspicuous Consumption: White Abolitionism and English Women's Protest Writing in the 1790s." *ELH* 61 (1994): 341–62.
- Coleman, Patrick, Jayne Lewis, and Jill Kowalik, eds. *Representations of the Self from the Renaissance to Romanticism*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- A Collection of Tours in Wales; or, a Display of the Beauties of Wales: Selected principally from Celebrated Histories and Popular Tours, with Occasional Remarks*. London: printed for C. W. Leadbeater, 1799.

- Barnstone, Willis. "Sappho: Her Life and Poems." *Sappho and the Greek Lyric Poets*. Trans. Barnstone. New York: Schocken, 1988. 268–82.
- Barthélemy, J.-J. (Jean-Jacques). *Travels of Anacharsis the Younger in Greece, During the Middle of the Fourth Century Before the Christian Æra*. [Trans. William Beaumont.] 2nd ed. 7 vols. London: printed for G. G. and J. Robinson, 1793–94.
- Bass, Robert D. *The Green Dragoon: The Lives of Banastre Tarleton and Mary Robinson*. London: Alvin Redman, 1958.
- Bayle, Pierre. *An Historical and Critical Dictionary*. 4 vols. London: C. Harper, etc., 1710.
- . *An Historical and Critical Dictionary, Selected and Abridged from the Great Work of Peter Bayle. With A Life of Bayle*. 4 vols. London: printed for Hunt and Clarke, 1826.
- [Beckford, W.] *Dreams, Waking Thoughts, and Incidents; in a Series of Letters, from Various Parts of Europe*. London: printed for J. Johnson, 1783.
- Behn, Aphra, trans. *Cowley's Of Plants*. Book VI. "Of trees." *The Second and Third Parts of the Works of Mr Abraham Cowley . . . The Third containing his Six Books of Plants . . . now made English by several hands (J. O., C. Cleve, N. Tate, Mrs. A. Behn), etc.* 6th ed. London: Charles Harper, 1689. 131–66.
- . *The Works of Aphra Behn*. Volume 1. Poetry . Ed. Janet Todd. Columbus: Ohio State UP, 1992.
- Behrendt, Stephen C., and Harriet Kramer Linkin, eds. *Approaches to Teaching British Women Poets of the Romantic Period*. New York: Modern Language Association of America, 1997.
- Bell, G. H., ed. *The Hamwood Papers of the Ladies of Llangollen and Caroline Hamilton*. London: Macmillan, 1930.
- Bond, Donald F. Notes. *The Spectator*. By Joseph Addison. Ed. Bond. 5 vols. Oxford: Oxford UP, 1965.
- Boswell, John. *Same-Sex Unions in Premodern Europe*. 1994. New York: Vintage, 1995.
- Bosworth, William. "The Story of Phaon and Sappho." *The Chast and Lost Lovers, Lively Shadowed in the Persons of Arcadus and Sepha and illustrated with the severall stories of Haemon and Antigone, Eramio and Amissa, Phaon and Sappho, Delithason and Verista*. London: printed by F. L. for Laurence Blaiklock, 1651. 64–84.
- Breen, Jennifer, ed. *Women Romantic Poets 1785–1832: An Anthology*. London: Everyman, 1994.
- [Brereton, Jane.] *Merlin: A Poem . . . To which is added, The Royal Hermitage: a Poem, Both by a Lady*. London: printed by Edward Cave, 1735.
- . *Poems on Several Occasions . . . With Letters to Her Friends, and an Account of Her Life*. London: Edw. Cave, 1744.
- Brown, Judith C. *Immodest Acts: The Life of a Lesbian Nun in Renaissance Italy*. New York: Oxford UP, 1986.
- Burke, Edmund. *Reflections on the Revolution in France, and on the Proceedings in Certain Societies in London Relative to that Event*. 1790. Ed. Conor Cruise O'Brien. Harmondsworth: Penguin, 1968. エドモンド・バーク『フランス革命の省察』半澤孝磨訳。みすず書房, 1978.

参考文献

- “An Account of the Chevalier d'Eon.” *Annual Register, or A View of the History, Politics, and Literature* 24 (1781). 3rd ed. London: printed for J. Dodsley, 1800. 28–29.
- Addison[, John], trans. “The Life of Sappho.” *The Works of Anacreon . . . To Which are Added the Odes, Fragments, and Epigrams of Sappho*. London: printed for John Watts, 1735. 249–55.
- . “The Odes of Sappho of Lesbos.” *The Works of Anacreon . . . To Which are Added the Odes, Fragments, and Epigrams of Sappho*. London: printed for John Watts, 1735. 256–65.
- Addison, Joseph. *The Spectator*. Ed. Donald F. Bond. 5 vols. Oxford: Oxford UP, 1965.
- . *The Spectator*. 8 vols. Newcastle: M. Brown, 1799.
- Anacreon. *Anakreonos Teiou Mele*. Londini : Apud Gualt. Kittilby . . . , 1695.
- Andreadis, Harriette. *Sappho in Early Modern England: Female Same-Sex Literary Erotics 1550–1714*. Chicago and London: U of Chicago P, 2001.
- . “Sappho in Early Modern England: A Study in Sexual Reputation.” Greene, *Re-Reading* 105–21.
- Armstrong, Isobel, Joseph Bristow and Cath Sharrock, eds. *Nineteenth-Century Women Poets: An Oxford Anthology*. Oxford Clarendon P, 1996.
- Arnaud, George. *A Dissertation on Hermaphrodites*. London: printed for A. Millar, 1750.
- Ashfield, Andrew, ed. *Romantic Women Poets 1770–1838*. Vol. 1. Rev. ed. Manchester and New York: Manchester UP, 1997.
- Ashmun, Margaret. *The Singing Swan: An Account of Anna Seward and Her Acquaintance with Dr. Johnson, Boswell, & Others of Their Time*. 1931. New York: Greenwood Press, 1968.
- Ashton, John. *Eighteenth Century Waifs*. London: Hurst and Blackett, 1887.
- [Astell, Mary.] *A Serious Proposal to the Ladies, for the Advancement of Their True and Greatest Interest*. By a Lover of Her Sex. London: printed for R. Wilkin, 1694.
- Athenaeus. *The Deipnosophists*. Trans. Charles Burton Gulick. 7 vols. Loeb Classical Library 327. London and New York: W. Heinemann, 1927–41. アテナイオス『食卓の賢人たち』柳沼重剛訳. 京都大学学術出版社, 1997.
- Atkinson, Colin B., and Jo Atkinson. “Maria Edgeworth, *Belinda*, and Women’s Rights.” *Éire-Ireland* 19 (1984): 94–118.
- Baker, Sheridan. “Henry Fielding’s *The Female Husband*, Fact and Fiction.” *PMLA* 74 (June 1959): 213–24.
- Ballard, George. *Memoirs of Several Ladies of Great Britain, Who Have Been Celebrated for their Writings or Skill in the Learned Languages Arts and Sciences*. Oxford: printed by W. Jackson, for the author, 1752.
- [Barbauld,] Anna Laetitia Aikin. *Poems*. 3rd. ed. London: printed for Joseph Johnson, 1773.
- Barber, Mary. *Poems on Several Occasions*. London: C. Rivington, 1734.
- Barchas, Janie, ed. *Eighteenth-Century British Erotica* II. Vol. 1. London: Pickering, 2004.

- 「ソネット 33. シチリアに到着する」“Sonnet XXXIII. Reaches Sicily” 212, 218–20
 「ソネット 34. サッポールのヴィーナスへの祈り」“Sonnet XXXIV. Sappho’s Prayer to Venus” 220–21
 「ソネット 35. パオーンを非難する」“Sappho XXXV. Reproaches Phaon” 221
 「ソネット 41. レフカスから飛び降りる決心をする」“Sonnet XLI. Resolves to take the Leap of Leucata” 218, 222
 「ソネット 42. パオーンへの彼女の最期の訴え」“Sonnet XLII. Her last Appel to Phaon” 222–23
 「ソネット 43. 非業の死を遂げる前、レフカスの岩上における彼女の黙想」“Sonnet XLIII. Her Reflections on the Leucadian Rock before she perishes” 212, 224
 「レスビアと彼女の恋人」“Lesbia and Her Lover” 166
 『リリカル・テールズ』 *Lyrical Tales* 228, 280
 ロビンソン, メアリ・エリザベス Mary Elizabeth Robinson (ca. 1775–1818) 279
 ロンギノス Longinus (1st c.) 21, 34, 41, 52
 『崇高論』 *On the Sublime* 21, 41
 『ロンドン・クロニクル』 *The London Chronicle* 77–78, 273, 282
 『ロンドン・タイムズ』 *The London Times* 254–55
 『ロンドン・マガジン』 *The London Magazine* 259

ワ行

- ワーズワス, ウィリアム William Wordsworth (1770–1850) 95, 112, 227, 274, 280
 『リリカル・バラッズ』 *Lyrical Ballads* 280
 「レディ・エレナー・バトラーとボンソンビィ嬢に寄せて」“To Lady Eleanor Butler and the Honble Miss Ponsonby” 112, 114, 274

- ルソー, ジャン=ジャック Jean-Jacques Rousseau (1712-78) 179-80, 189, 278
 『新エロイズ』 *Julie ou la nouvelle Héloïse* 180, 189, 278
- レイン, リチャード・ジェイムズ Richard James Lane (1800-72) 112-13
 「レスビア」“Lesbia” 166 ⇒サッポー
 「レスビア」“Lesbia” 166-67 ⇒スニード, ホノーラ
 「レスビア」“Lesbia” 226 ⇒ロビンソン, メアリ
 『レスビア——一つの物語』 *Lesbia, A Tale* 166
 レノックス, シャーロット Charlotte Lennox (1730-1804) 150, 153, 276
 レノルズ, ジョシュア Joshua Reynolds (1723-92) 199-200
- ロウ, エリザベス・シンガー Elizabeth Singer Rowe (1674-1737) 135, 140, 144, 146-47, 154
 ロスコウ, ウィリアム William Roscoe (1753-1831) 241-42
 『エドマンド・バークの人生、死、そして素晴らしき業績』 *The Life, Death, and Wonderful Achievements of Edmund Burke* 241-42
 ロスコモン 4th Earl of Roscommon (ca. 1630-85) 144
 ロセッティ, クリスティーナ Christina Rossetti (1830-94) 200
 ロックハート, ジョン J. G. Lockhart (1794-1854) 112
 ロビンソン, メアリ Robinson, Mary (1757-1800) 6, 58, 156, 161, 166, 199-234, 271, 277, 279-80
 『イングランドの女性たちへの手紙』 *A Letter to the Women of England* 225-26, 228, 231-33, 279
 『偽りの友人』 *The False Friend* 228
 『故ロビンソン夫人の回顧録および遺稿集』 *Memoirs of the Late Mrs. Robinson, Written by Herself, with Some Posthumous Pieces* 161, 207, 228, 279-80
 『サッポーとパオーン』 *Sappho and Phaon* 6, 58, 166, 199, 201-03, 208-24, 229, 232-33, 271, 279
 『詩集』(1791) *Poems* 199-200, 207
 『庶出の娘』 *The Natural Daughter* 228
 訳ジョゼフ・ヘイガー 『パレルモの絵』 trans. Joseph Hager, *Picture of Palermo* 228
 「ソネット 4. サッポーが自分の情欲を発見する」“Sonnet IV. Sappho discovers her Passion” 211-15
 「ソネット 5. その力を軽蔑する」“Sonnet V. Contemn its Power” 218
 「ソネット 6. 愛の特徴を述べる」“Sonnet VI. Describes the characteristics of Love” 218
 「ソネット 7. 理性に嘆願する」“Sonnet VII. Invokes Reason” 218
 「ソネット 11. 理性の影響を拒む」“Sonnet XI. Rejects the Influence of Reason” 218
 「ソネット 13. 彼女は彼をとりこにしようとする」“Sonnet XIII. She endeavours to facinate him” 211
 「ソネット 19. 彼の不変の愛を疑る」“Sonnet XIX. Suspects his constancy” 215-16
 「ソネット 22. パオーンは彼女を棄てる」“Sonnet XXII. Phaon forsakes her” 211
 「ソネット 23. サッポーの憶測」“Sonnet XXIII. Sappho's Conjectures” 216-18
 「ソネット 25. パオーンへ」“Sonnet XXV. To Phaon” 218
 「ソネット 29. パオーンについていくことを決心する」“Sonnet XXIX. Determines to follow Phaon” 212

ヤ行

- ユウエナリス Juvenal (ca. 60–ca. 128) 20, 38–39, 246, 270, 281–82
 『諷刺詩』 *The Satires* 246, 282
 『勇敢な美しい娘メアリ・アンブリがゴートで闘った勇猛な行為』 *The Valarous Acts Performed at Gaunt, by the Brave Bonny Lass Mary Ambree* 67
 「ユージーニア」“Eugenia” 140 ⇒ハイモア, スザンナ
 『有名な女性鼓手』 *The Famous Woman Drummer* 68
 『ユニヴァーサル・スペクテーター』 *The Universal Spectator* 69
 『ヨーロッパ・マガジン』 *The European Magazine* 281

ラ行

- ライト, メヘタベル・ウェズリー Mehetabel Wesley Wrights (1697–1750) 140
 ラドクリフ, アレグザンダー Alexander Radcliffe (fl. 1669–96) 29
 『オウィディウスもどきの詩』 *Ovid Travestie* 29–30
 ラドクリフ, アン Ann Radcliffe (1764–1823) 157
 ラファエロ Raphael (1483–1520) 21
 『パルナッソス』“The Parnassus” 21
 ラム, キャロライン Caroline Lamb (1785–1828) 95
 ランドン, レティシア・エリザベス Letitia Elizabeth Landon (1802–38) 200
 『ランブラーズ・マガジン』 *The Rambler's Magazine* 205–06
 リーヴ, クララ Clara Reeve (1729–1807) 135–36
 『独創的な詩集』 *Original Poems* 135–36
 リーパー, メアリ Mary Leaper (1722–46) 140, 144, 274
 リヴァース, デイビッド David Rivers (fl. 1798) 227–28, 280
 『グレートブリテン現代作家文学的回顧録』 *Literary Memoirs of Living Authors of Great Britain* 227–28, 280
 リウイウス Livy (59 B.C.–A.D. 17) 150
 リスター, アン Anne Lister (1791–1840) 107–11, 165, 257, 274, 282
 『愛以外の司祭はいない』 *No Priest But Love* 107, 257
 『私は私自身の心がわかっている』 *I Know My Own Heart* 107–09, 257
 リチャードソン, サミュエル Samuel Richardson (1689–1761) 67, 74
 『パメラ』 *Pamela* 67
 『リッチフィールドの白鳥』“The Swan of Lichfield” 96, 160–61 ⇒シーワード, アンナ
 リットルトン卿 Lord Lyttleton (1709–73) 145–46, 157
 『——夫人の手稿詩を読んで』“On Reading Mrs. —'s Poems in Manuscript” 145–46
 リリー, ジョン John Lyly (ca. 1554–1606) 21
 『サッポーとパオ』 *Sappho and Phao* 21
 リンチ, ジェイムス・ヘンリ James Henry Lynch (d. 1868) 112–13
 ルイ十五世 Louis XV (1710–74) 231, 258
 ルキアノス Lucian (2nd c.) 17, 25, 30–31, 35
 『遊女の対話』 *Dialogues of the Courtesans* 17–18, 31
 『レアイナとクローナリオン』“Leaena and Clonarium” 17–18

- マサイアス, トマス・ジェイムズ Thomas James Mathias (ca. 1754–1835) 245
 『文学の営み』 *The Pursuits of Literature* 245
- マシューズ, チャールズ Charles Mathews (1776–1835) 112
- マスターズ, メアリ Mary Masters (dates unknown) 144, 276
- マダン, ジュディース・クーパー Judith Cowper Madan (1702–81) 140, 144
- マッカーシー, シャーロット Charlotte MacCarthy (mid 18th c.) 99
 「満足、友へ」 “Contentment, to a friend” 99
- マルティアリス Martial (40–ca. 103) 20, 22
- 『マンズリー・ミラー』 *The Monthly Mirror* 281
- 『マンズリー・レビュー』 *The Monthly Review* 150, 154, 157, 199, 207, 248, 282
- マンリー, メアリ・ドラリヴィエール Mary Delarivier Manley (1663–1724) 134–35, 137, 140–41, 143
 『ニュー・アタランティス』 *New Atalantis* 135
- ミルトン, ジョン John Milton (1608–74) 97, 154, 166, 210
- ムーディ, エリザベス Elizabeth Moody (d. 1814) 157–59, 277
 「サッポーは彼女の本を焼き、料理法を磨く」 “Sappho Burns her Books and Cultivates the Culinary Arts” 158–59, 277
 『詩的な些細なこと』 *Poetic Trifles* 157–58
- ムーディ, クリストファー・レイク Christopher Lake Moody (1753–1815) 157
- メイソン, ウィリアム William Mason (1724–97) 279
 『サッポー』 *Sappho: A Monodrama* 279
- メイラン, マーク・アンソニー Mark Anthony Meilan (ca. 1743–1813) 233
 『子どもたちのための説教』 *Sermons for Children* 233
- メーデシア Medea 21
- メナンドロス Menander (ca. 342–ca. 293 B.C.) 14
 『レフカスの女』 *The Leucadian* 14
- モア, ハンナ Hannah More (1745–1833) 148–50, 153, 155–56, 195, 276
 『頑固な捕虜』 *The Inflexible Captive* 150
 『幸福を探して』 *The Search after Happiness* 148–50, 153
 『さまざまな主題に関する随筆』 *Essays on Various Subjects* 155
- モア, トマス Thomas More (1478–1535) 21
 『モーニング・クロニクル』 *The Morning Chronicle* 279
 『モーニング・ヘラルド』 *The Morning Herald* 279
 『モーニング・ポスト』 *The Morning Post* 199, 206, 226–28, 279–80
- モールデン卿 Lord Malden (1757–1839) 206
- モンク, メアリ Mary Monk (ca. 1678–1715) 136, 144
- モンタギュー, エリザベス Elizabeth Montagu (1718–1800) 36–37, 92–93, 145–46, 150, 153, 156, 276
- モンタギュー, メアリ・ウオートリ Mary Wortley Montagu (1689–1762) 33, 35, 91, 129–30, 144

- ペナント, トマス Thomas Pennant (1726–98) 95
 『ウェールズ旅行記』 *A Tour in Wales* 95
- ペニングトン, E. E. Pennington (1734–59) 140
- ペニングトン, セアラ Sarah Pennington (1740–83) 153
- ベリー, メアリ Mary Berry (1763–1852) 36
- ヘルマプロディートス Hermaphroditus 18
- ヘルメシアナクス Hermesiannax (3rd c. B.C.) 13
- ホイートリー, フィリス Phillis Wheatley (ca. 1753–84) 153
- ホエートリー, メアリ Mary Whately (1738–1825) 150
- ポープ, アレクザンダー Alexander Pope (1688–1744) 6, 23, 33, 35, 37, 58, 120, 128–31, 144, 161, 166–67, 179–80, 191, 202, 210–15, 223–24, 231–32, 234, 236, 270, 275, 278
 「アベラードに宛てたエロイーザの手紙」 “Eloisa to Abelard” 179–80, 231, 278
 「あるレディへの書簡」 “To a Lady, Of the Characters of Women” 120, 234, 278
 『髪のも盗み』 *The Rape of the Lock* 128
 「パオーンに宛てた sappho の手紙」 “Sappho to Phaon” 23, 33, 35, 37, 58, 128, 161, 166–67, 202, 211, 213–14, 223, 231–32
 「ハーヴェー卿とレディ・メアリ・ウォートリへ」 “To Ld. Hervey & Lady Mary Wortley” 130–31, 275
 「ホラティウスの模倣第二編第一の諷刺詩」 “The First Satire of the Second Book of Horace Imitated” 130
 「レディ・ウィンチェルシーへの即興詩」 “Impromptu To Lady Winchelsea” 128–29
- ボーモン, エオン・ド Éon de Beaumont 231, 258–59 ⇒ デオン, シュヴァリエ
- ホール, ジョン John Hall (1627–56) 22
 訳ロンギノス『崇高論』 trans. *Dionysius Longinus of the Height of Eloquence* 22
- ボズワース, ウィリアム William Bosworth (1607–ca. 50) 28–29
 『貞淑な恋人たちと墮落した恋人たち』 *The Chast and Lost Lovers* 28–29
- ホメロス Homer (ca. 10 c. B.C.) 21, 203, 216
 『オデュッセイア』 *Odyssey* 21, 216
- ホラティウス Horace (65–8 B.C.) 12–13, 16, 20, 31, 54, 56, 130, 200, 279
 『歌章』 *The Odes* 279
- 「ポリアーカス」 “Poliarchus” 125 ⇒ コットレル, チャールズ
- ポルウェル, リチャード Richard Polwhele (1760–1838) 156–57, 195–96, 203, 225, 228, 245–46, 256, 272, 282
 『女らしさを失った女たち』 *The Unsex'd Females* 156–57, 195–96, 203, 245–46, 263, 282
- ポルピュリオン Porphyrio (early 3rd c.) 16, 20, 54, 56
- ボワロ, ニコラス Nicolas Boileau (1636–1711) 22, 50
 訳ロンギノス『崇高論』 trans. Longin, *Traité du sublime* 22
- ボンソンビィ, セアラ Sarah Ponsonby (1755–1831) 88–91, 96–98, 101–05, 111–12, 163, 274 ⇒ スランゴスレンの貴婦人たち

マ行

- マコーリー, キャサリン Catharine Macaulay (1731–91) 150, 153, 231, 276
 『教育に関する書簡』 *Letters on Education* 231

- フォークス, フランシス Francis Fawkes (1721–77) 48–49
 訳『アナクレオン, サッポー……著作集』trans. *The Works of Anacreon, Sappho . . .*
 48
 訳「第一のオード——ヴィーナスへの讃歌」trans. “Ode I: An Hymn to Venus” 48–
 49
- フォスター, ジョン John Foster (1770–1843) 91
- フォックス, チャールズ・ジェイムズ Charles James Fox (1749–1806) 206
- ブスベクィウス, アウグエリウス・ギスレニウス Ogier Ghislain de Busbecq (1522–92)
 25
 『トルコ使節に関する A・G・ブスベクィウスの四通の書簡』*The Four Epistles of A.
 G. Busbequius Concerning his Embassy into Turkey* 25
- フューズリ, ヘンリー Henry Fuseli (1741–1825) 243
- プライアー, マシュー Matthew Prior (1664–1721) 180
 「ヘンリーとエマ」“Henry and Emma” 180
- ブラッド, ファニー Fanny Blood (1757–85) 93, 242–43, 281
- プラトン Plato (ca. 427–348 B.C.) 4, 12, 21, 37, 98, 202
 『饗宴』*The Banquet* 37, 98
- 「フラビア」“Flavia” 140 ⇒フェラー, マーサ
- ブリアトン, ジェーン Jane Brereton (1685–1740) 132–37
 「アン・グリフィス夫人への手紙」“Epistle to Mrs Anne Griffiths” 133–35
- 『フリーシンカー』*The Freethinker* 69
- 『ブリティッシュ・クリティック』*The British Critic* 195, 244–45
- プリンス・オヴ・ウエルズ (ジョージ四世) Prince of Wales (George IV) (1762–1830)
 204–06, 280
- プルタルコス Plutarch (ca. 46–ca. 120) 52, 271
- ブルック, フランシス・ムーア Frances Moore Brooke (1724–89) 140, 150, 275
- フロイト, ジークムント Sigmund Freud (1856–1939) 164
- 「フローリゼル」“Florizel” 204–06, 227 ⇒プリンス・オヴ・ウエルズ
- 「フローリゼルとパーディタ」“Florizel and Perdita” 204–05
- 「フロリメル」“Florimel” 140 ⇒ペニングトン, E
- ヘイウッド, エリザ Eliza Haywood (1693–1756) 134–35
- ヘイズ, メアリ Mary Hays (1759–1843) 91, 156, 256, 279
 『エマ・コートニーの回顧録』*Memoirs of Emma Courtney* 91, 256
 『女性評伝集』*Female Biography* 279
- ヘイリー, ウィリアム William Hayley (1745–1820) 173, 277
 「シーワード嬢に寄せて」“To Miss Seward” 173, 277
- ベイン, アフラ Aphra Behn (1640–89) 32, 124–25, 127–28, 134–36, 140–41, 143–44, 275
 「美しきクラリンダへ」“To the Fair Clarinda” 32, 124
 訳カウリー 『植物について』trans. Cowley, *Of Plants* 127
 『都会の女相続人』*The City Heiress* 127
- ページ, フランシス Francis Page (1661–1741) 130, 275
- バール, ピエール Pierre Bayle (1647–1706) 43–45, 271
 『歴史批評事典』*An Historical and Critical Dictionary* 43–45, 271
- ペトラルカ Petrarch (1304–74) 158, 169, 210
- ペトロニウス Petronius (d. A.D. 66) 38, 270

- ハミルトン, メアリ Mary Hamilton (1739–1816) 225
 ハミルトン, メアリ, (チャールズ・ハミルトン) Mary Hamilton (Charles Hamilton) 5, 75, 77–87, 272–73
 バラード, ジョージ George Ballard (1706–55) 136–37, 144, 152–53, 275
 『グレイトブリテン女性回顧録』 *Memoirs of Several Ladies of Great Britain* 136–37, 152–53, 275
 ハリカルナッソスのディオニュシオス Dionysius of Halicarnassus (1st c. B.C.) 21, 41
 『文章構成法』 *On Literary Composition* 21, 41
 バルテルミ, ジャン=ジャック Jean-Jacques Barthélemy (1716–95) 57–58, 208–09, 224, 271
 『小アナカルシスのギリシャ旅行記』 *Travels of Anacharsis the Younger in Greece* 57–58, 208
 ハワード, アン, アーウィン子爵夫人 Anne Howard, Viscountess Irwin (ca. 1696–1764) 140
 ハント, リー Leigh Hunt (1784–1859) 261

 ピオッツィ, ガブリエル・マリオ Gabriel Mario Piossi (1740–1809) 270
 ピオッツィ, ヘスター・リンチ・スレール Hester Lynch Thrale Piozzi (1741–1821) 37–39, 95, 105–07, 110, 157, 197, 246, 257, 270, 274
 『スレーリアナ』 *Thraliana* 38–39, 106, 197, 246, 257
 ピザン, クリスティース・ド Christine de Pisan (ca. 1363–1431) 21
 ピックス, メアリ Mary Pix (1666–1709) 135–37
 ヒッポナクス Hipponax (fl. 540/36 B.C.) 13
 ピョートル大帝 Peter III (1728–62) 231
 ビルキングトン, レティシア Laetitia Pilkington (ca. 1708–50) 140–41, 144, 152

 ファリングトン, ジョゼフ Joseph Farrington (1747–1821) 111
 ファレン, エリザベス Elizabeth Farren (ca. 1759–1829) 36, 38–39
 フィールドィング, セアラ Sarah Fielding (1710–68) 153
 フィールドィング, ヘンリー Henry Fielding (1707–54) 5, 77, 79–87, 273
 『女性の夫』 *The Female Husband* 5, 77, 79–87, 273
 フィリップス, アンブローズ Ambrose Philips (1674–1749) 45–46, 50–51, 53, 57, 233, 281
 『サッポアの伝記』 “The Life of Sappho” 53
 訳「第二のオード」 trans. “Ode II” 50–51, 53, 233
 訳「ヴィーナスへの讃歌」 trans. “An Hymn to Venus” 45–46, 233
 フィリップス, キャサリン Katherine Philips (1631–64) 5, 33, 99, 124–26, 131, 135–36, 139, 143–44, 200, 274
 『比類なき K・P 夫人の詩集』 *Poems, by the Incomparable Mrs. K. P.* 125
 『最も高い賞賛を受けるに値するキャサリン・フィリップス夫人の詩集』 *Poems by the Most Deservedly Admired Mrs. Katherine Philips* 125
 フィリップス, テレシア・コンスタンシャ Teresia Constantia Phillips (1709–65) 140–41
 『フィロメラ』 “Philomela” 135 ⇒ロウ, エリザベス・シンガー
 フィンチ, アン, ウィンチルシー伯爵夫人 Anne Finch, Countess of Winchelsea (1661–1720) 31–32, 121–24, 128–29, 135–36, 139, 143–44, 270, 274–75
 『序』 “The Introduction” 31–32, 121–24, 127, 270, 274–75
 『諸々の詩』 *Miscellany Poems* 124, 274
 フェラー, マーサ Martha Ferrar (1729–1805) 140

ニコレイ, ニコラス・ド Nicolas de Nicolay (1517–83) 23
 『トルコ航海記』 *Navigation into Turkie* 23–24
 ニュンボドロス Nymphodorus (3rd c. B.C.) 19

ノートン, フランシス Frances Norton (1644–1731) 136
 ノールズ, マライア Maria Knowles (dates unknown) 64
 ノリッジのジュリアナ Juliana of Norwich (ca. 1342–ca. 1413) 136, 275

八行

パー, キャサリン Catherine Parr (1512–48) 152
 ハーヴィー, ジョン John Hervey (1696–1743) 130
 パーカー, メアリ, レディ・レイトン Mary Parker, Lady Leighton (1799–1864) 111, 113
 バーク, エドマンド Edmund Burke (1729–97) 95, 104, 241, 256–57, 259
 『フランス革命の省察』 *Reflections on the Revolution in France* 241, 256
 パーシー, トマス, ドロモアの主教 Thomas Percy, Bishop of Dromore (1729–1811) 160, 162
 編『古英詩拾遺』 ed. *Reliques of Ancient English Poetry* 160
 『バース・ジャーナル』 *The Bath Journal* 79
 パーソンス, ジェームズ James Parsons (1705–70) 27
 『両性具有者の性質に関する機械論的批評的研究』 *A Mechanical and Critical Enquiry into the Nature of Hermaphrodites* 27
 『パーディタ』 “Pardita” 204–07 ⇒ロビンソン, メアリ
 ハーディング, ジョージ George Hardinge (1743–1816) 177
 バーニー, フランシス Frances Burney (1752–1840) 156–57, 247
 『エヴェリーナ』 *Evelina* 247
 『カミラ』 *Camilla* 247
 バーバー, メアリ Mary Barber (ca. 1690–1757) 132, 144
 『折々の詩集』 *Poems on Several Occasions* 132
 ハーバート氏 Mr. Herbert (dates unknown) 47
 訳「サッポー、愛の女神に寄せて」 trans. “Sappho, To the Goddess of Love” 47
 訳『ペトロニウス著作集』 trans. *The Works of Petronius Arbiter* 47
 バーボウルド, アンナ・レティシア・エイキン Anna Laetitia Aikin Barbauld (1743–1825)
 36–37, 146–50, 152–56, 248–49, 276
 『詩集』 *Poems* 146, 154
 「ロウ夫人への詩歌」 “Verses on Mrs Rowe” 146–48
 ハイモア, スザンナ Susanna Highmore (1725–1812) 140, 142, 275
 ハウズ, フランセス・アン, ヴェイン子爵夫人 Frances Anne Hawes, Viscountess Vane (ca. 1715–88) 140
 パオン Phaon 1, 6, 13–15, 19, 24, 28–29, 36, 43–49, 53, 56–57, 161, 201–03, 208, 210–24, 232–33, 243, 279
 「パオン」 “Phaon” 160, 162 ⇒サヴィル, ジョン
 バトラー, エレナー Eleanor Butler (1739–1829) 88, 91, 94, 96, 98, 102–05, 111–12, 163
 ⇒スランゴスレンの貴婦人たち
 ハミルトン, ジョージ George Hamilton 79 ⇒ハミルトン, メアリ, (チャールズ・ハミルトン)

- 『女性たちについての対話』 *Dialogues Concerning the Ladies* 156
 ダン, ジョン John Donne (1572-1631) 22
 『ピラエニスに宛てたサッポーの手紙』 “Sappho to Philaenis” 22
 ダンカム, ジョン John Duncombe (1729-86) 137-45, 152, 275
 『女性讃歌』 *The Femiinad, The Femeinead* 137-44, 152, 275
 ダンテ Dante (1265-1321) 158
- チャーク, シャーロット Charlotte Charke (1713-60) 63, 76, 79, 271-72
 『シャーロット・チャーク夫人の生涯の物語』 *A Narrative of the Life of Mrs. Charlotte Charke* 76
- チャールズ二世 Charles II (1630-85) 117, 139
 チャドリィ, メアリ Mary Chudleigh (1656-1710) 131-32, 136, 143-44
 『折々の詩集』 *Poems on Several Occasions* 132
 『散文と詩のさまざまなテーマに関する評論』 *Essays upon Several Subjects in Prose and Verse* 132
 『女性の擁護』 *The Ladies' Defence* 131-32
- チャンドラー, メアリ Mary Chandler (1687-1745) 144
 チョーサー, ジェフリー Geoffrey Chaucer (ca. 1342-1400) 143
- デイヴィス, クリスチャン Christian Davies (1667-1739) 64, 272
 デイクンズ, チャールズ Charles Dickens (1812-70) 77
 ティソ, サミュエル Samuel Auguste Tissot (1728-97) 27-28
 『自慰』 *Onanism* 27-28
- ティトノス Tithonus 14
 『デイリー・アドヴァタイザー』 *The Daily Advertiser* 79-80
- テイレスィアース Teiresias 18
- デオン, シュヴァリエ Chevalier d'Eon (1728-1810) 7, 231-32, 258-60, 280, 282
 デニソン, アルフレッド Alfred Tennyson (1809-92) 3
 テミスティオス Themistius (ca. 317-ca. 385) 16
 テュロスのマクシモス Maximus of Tyre (2nd c.) 16
 「デリア」 “Delia” 140 ⇒ シャポーン, ヘスター・マルソ
- トーマス, エリザベス Elizabeth Thomas (1675-1731) 143-44
 トールボット, キャサリン Catherine Talbot (1721-70) 92, 153
 トールボット, メアリ・アン Mary-Anne Talbot (1778-1808) 64, 272
 『都市と田園』 *The Town and Country Magazine* 105, 110, 258-59
 ドライデン, ジョン John Dryden (1631-1700) 144, 246, 262, 282
 訳オウィディウス 「イピスとイアンテの話」 trans. Ovid, “The Fable of Iphis and Ianthe” 262
 訳ユウェナリス 『諷刺詩』 trans. Juvenal, *The Satires* 246, 282
 トレシャム, ヘンリー Henry Tresham (ca. 1751-1814) 271

ナ行

- ナジアンゾスのグレゴリオス Gregory of Nazianzus (ca. 330-ca. 389) 20

- 『女性のタトラー』 *The Female Tatler* 135
 『女性兵士』 *The Female Soldier* 64–75, 272
 ジョンソン, サミュエル Samuel Johnson (1709–84) 91
- スウィフト, ジョナサン Jonathan Swift (1667–1745) 143–44
 『スーダ』 *Suda* 1, 19
 スカリゲル, ヨセフ Joseph Scaliger (1540–1609) 20
 スキュデリー, マドレイス・ド Madeleine de Scudéry (1607–1701) 200
 『スコッツ・マガジン』 *The Scots Magazine* 66
 スコット, ウォルター Walter Scott (1771–1832) 95, 112, 181, 195, 274, 277–78
 編 『アンナ・シーワード詩集』 ed. *The Poetical Works of Anna Seward* 181, 274, 278
 スコット, セアラ Sarah Scott (1720–95) 92, 197–98
 『ミレニアム・ホール』 *Millenium Hall* 92, 197–98
 スコット, メアリ Mary Scott (ca. 1752–93) 152–54
 『女性の擁護者』 *The Female Advocate* 152–53
 スコット, メアリ, デロレイン伯爵夫人 Mary Scott, Countess of Deloraine (1703–44) 275
 スチュアート, ダニエル Daniel Stuart (1766–1846) 226
 スティール, アン Anne Steel (1717–78) 153
 スニード, ホノーラ Honora Sneyd (d. 1780) 6, 93, 96, 101, 163–79, 185, 277–78
 スネル, ハンナ Hannah Snell (1723–92) 4–5, 64–75, 254, 272
 『スペクテーター』 *The Spectator* 15, 44–46, 50–52, 54, 120–21, 167, 208, 232–33, 244, 277, 281
 スペンサー, ジョージアナ, デヴォンシア公爵夫人 Georgiana Spencer, Duchess of Devonshire (1757–1806) 99
 『レディ・エリザベス・フォスターへ』 “To Lady Elizabeth Foster” 99
 スミス, シャーロット Charlotte Smith (1749–1806) 156
 スランゴスレンの貴婦人たち Ladies of Llangollen 5, 88–114, 163–65, 196, 273, 277
- セントリーヴァー, スザンナ Susanna Centlivre (ca. 1667–1723) 140–41, 143

夕行

- ダーウィン, エラズマス Erasmus Darwin (1731–1802) 160, 171
 ターバヴィル, ジョージ George Turberville (ca. 1540–ca. 97) 22, 270
 タールトン, バナスター Banastre Tarleton (1754–1833) 206
 タヴァニエ, J・B Jean-Basptiste Tavernier (1605–89) 24
 『トルコ・ペルシャ・東インド諸国旅行記』 *Travels Through Turkey into Persia, and the East-Indies* 24
 ダシエ, アンヌ・ルフューヴル Anne Le Févre Dacier (1654–1720) 22, 43–45, 56, 208, 271
 訳 『アナクレオンとサッポールの詩集』 trans. *Les Poésies d'Anacréon et de Sapho* 22
 タスカー, ウィリアム William Tasker (1740–1800) 229–30
 『ロビンソン夫人に寄せて』 “To Mrs. Robinson” 229–30
 タッソ Tasso (1544–95) 158
 タティアノス Tatianos (2nd c.) 16
 ダマー, アン・コンウェイ Anne Conway Damer (1748–1828) 36–39, 111, 114, 197, 257
 タワーズ, ジョセフ Joseph Towers (1737–99) 156

- 「ソネット 19. 一へ寄せて」“Sonnet XIX, To —” 170
 「ソネット 31. 疎遠になった友のあの世へ旅立ちつつある魂に寄せて」“Sonnet XXXI. To the Departing Spirit of an Alienated Friend” 171
 「ソネット 32. 前のソネットの主題の続き」“Sonnet XXXII. Subject of the Preceding Sonnet Continued” 171–72
 「ソネット 33. 一七八〇年六月」“Sonnet XXXIII. June 1780” 172
 「ソネット 44」“Sonnet XLIV” 172
 「眠りの守り神への祈り, 一七八七年十月」“Invocation to the Genius of Slumber, Written, Oct. 1787” 172, 176
 「ホノーラ, 哀歌」“Honora, An Elegy” 167
 「ホノーラ・スニード嬢への書簡, 一七七二年五月」“Epistle to Miss Honora Sneyd, May 1772” 168, 278
 「ボンソンビィ嬢へ」“To Miss Ponsonby” 97–98
 『ルイーザ』*Louisa* 6, 164, 177–98, 278
 シーワード, トマス Thomas Seward (1708–90) 152, 160, 276
 「女性の学問の権利」“The Female Right to Literature” 152, 276
 シェイクスピア, ウィリアム William Shakespeare (1564–1616) 96, 98, 150, 154, 161, 166, 210, 253
 『お気に召すまま』*As You Like It* 98
 『ジェネラル・イヴニング・ポスト』*General Evening Post* 102–05, 110–11
 シェリダ, エリザベス・リンレイ Elizabeth Linley Sheridan (1754–92) 254, 276
 シェリダ, リチャード・プリズリー Richard Brinsley Sheridan (1751–1816) 254, 267
 『ジェントルマンズ・マガジン』*The Gentleman's Magazine* 66, 78, 207–08, 273
 シドナム, フロイア Floyer Sydenham (1710–87) 37
 シドズ, サリー Sally Siddons (1775–1803) 39
 シドズ, セアラ Sarah Siddons (1755–1831) 38–39, 271
 シバー, コリー Colley Cibber (1671–1757) 76, 276
 シバー, セオフィラス Theophilus Cibber (1703–58) 143, 153, 276
 編『グレートブリテンおよびアイルランド詩人伝』ed. *The Lives of the Poets of Great Britain and Ireland* 143
 シモンズ, ジョン・アディントン John Addington Symonds (1840–93) 46
 シャバーン, ジョン John Sherburne (fl. mid 17th c.) 23, 270
 シャープ, ジェーン Jane Sharp (fl. mid 17c.) 26
 『産婆術書』*The Midwives Book* 26
 ジャイル, ジェイコブ Giles Jacob (1686–1744) 27
 『両性具有者論』*A Treatise of Hermaphrodites* 27
 『ジャック・キャヴェンディッシュから尊敬すべき、とても美しいダ***夫人に宛てたサッポー風の書簡』*A Sapphick Epistle, from Jack Cavendish to the Honourable and Most Beautiful Mrs. D***** 36–37, 196–97, 257
 シャポーン, ヘスター・マルソ Hester Mulso Chapone (1727–1801) 140, 153, 156–57
 『精神の向上についての書簡』*Letters on the Improvement of the Mind* 153
 ジョージ三世 George III (1738–1820) 206
 ジョージ二世 George II (1683–1760) 275
 ジョーダン, ドロシー Dorothy Jordan (1761–1816) 261, 282
 ジョーンズ, メアリ Mary Jones (d. 1778) 144
 『女性のスペクテーター』*The Female Spectator* 135

- サウジー, ロバート Robert Southey (1774-1843) 95, 226-27, 280
 『サタンの収穫祭』 *Satan's Harvest Home* 34-36
 サッカレー, ウィリアム William Thackeray (1811-63) 77
 サッポー Sappho (7th c. B.C.) 1-6, 11-58, 117, 119, 121, 124, 126-27, 129-30, 138-39, 145-46, 149, 154, 159, 161, 166-67, 178, 197, 199-203, 208-24, 230-34, 236, 239, 241, 243-44, 246, 257, 269-71, 277, 279, 281
 「断篇 1」 fr.1 11, 21, 41-50, 233, 281
 「断篇 31」 fr. 31 11, 21-22, 41-44, 50-57, 166-67, 233, 277, 281
 「サッポー」 “Sappho” 124, 127 ⇒ベイン, アフラ
 「サッポー」 “Sappho” 159 ⇒ムーディ, エリザベス
 「サッポー」 “Sappho” 33, 35, 129-31 ⇒モンタギュー, メアリ・ウォートリ
 「サッポー」 “Sappho” 200 ⇒ランドン, レティシア・エリザベス
 「サッポー」 “Sappho” 146-47 ⇒ロウ, エリザベス・シンガー
 「サッポー」 “Sappho” 200 ⇒ロセッティ, クリスティーナ
 「サッポー, イングランドの」 “English Sappho” 33, 124-26, 139, 200 ⇒フィリップス, キャサリン
 「サッポー, イングランドの」 “English Sappho” 6, 58, 161, 199-200, 203, 207, 226-29
 ⇒ロビンソン, メアリ
 「サッポー, フランスの」 “French Sappho” 200 ⇒スキュデリー, マドレイス・ド
 「サッポー, ブリテンの」 “Britain Sappho” 5, 160-61, 166 ⇒シーワード, アンナ
 サミュエル, リチャード Richard Samuel (d. 1787) 151, 276
 「アポロ神殿の女神たちに扮した肖像画」 “Portraits in the Characters of the Muses in the Temple of Apollo” 151, 276
 「グレートブリテンの現代の九女神」 “The Nine Living Muses of Great Britain” 151, 276
- シーモア, フランセス, ハートフォード伯爵夫人 (のちサマセット公爵夫人) Frances Seymour, Countess of Hertford (later Duchess of Somerset) (1699-1754) 140
 シールズ, ロバート Robert Shiells (ca. 1700-53) 276
 シーワード, アンナ Anna Seward (1742-1809) 5-6, 39, 93, 95-101, 156-57, 160-98, 273-74, 276-79
 『アンドレ少佐の死を悼む哀悼詩』 *Monody on Major André* 173-77, 185, 196
 『エミリアに宛てたエヴァンダーの手紙』 “Evander to Emilia” 185, 278
 『思い出に寄せて』 “To Remembrance” 278
 『クック船長の死を悼む哀歌』 *Elegy on Captain Cook* 173, 176-77, 196
 『さまざまな主題の独創的なソネット集』 *Original Sonnets on Various Subjects* 169
 「シーワード嬢の文学的書簡からの抜粋」 “Extracts from Miss Seward's Literary Correspondence” 181, 185, 189
 「過ぎ去った時間、一七七三年一月作」 “Time Past. Written Jan. 1773” 168-69, 277
 「スランゴスレン溪谷」 “Llangollen Vale” 96-100, 163, 273
 『スランゴスレン溪谷およびその他の詩』 *Llangollen Vale, with Other Poems* 168, 277
 「ソネット 9」 “Sonnet IX” 166-67
 「ソネット 10. ホノーラ・スニーードに寄せて。一七七三年四月」 “Sonnet X. To Honora Sneyd. April 1773” 169-70
 「ソネット 12. 一七七三年七月」 “Sonnet XII. July 1773” 170
 「ソネット 14. 一七七三年七月」 “Sonnet XIV. July 1773” 170

- ギルレイ, ジェイムズ James Gillray (1757–1815) 206–07, 279
 「雷神」“The Thunderer” 206–07, 279
- キング, ウィリアム William King (1685–1763) 33–34
 『祝杯』 *The Toast* 33–34
- デアリーニ Guarini (1538–1612) 158
- グールド, ロバート Robert Gould (ca. 1660–1708/09) 127
 「劇場」“The Play-House” 127
 『女性作家への諷刺的書簡』 *A Satyrical Epistle to the Female Author* 127
- グリアソン, コンスタンシア Constantia Grierson (ca. 1705–32) 136, 144
- クリーチ, トマス Thomas Creech (1656–1700) 144
- グリーン, E・B Edward Burnaby Greene (ca. 1740–88) 54–56
 「サッポアの伝記と著作に関する所見」“Observations on the Life, and Writings of Sappho” 56
 訳「第二のオード」trans. “Ode II” 54–56
- 『クリティカル・レビュー』 *The Critical Review* 119, 154, 207, 281
- グリフィス, エリザベス Elizabeth Griffith (ca. 1727–93) 150, 153, 276
- グリフィス, ラルフ Ralph Griffiths (ca. 1720–1803) 157–58
- クルークシャンク, ジョージ George Cruikshank (1792–1878) 77
- グレイ, ジェイムズ James Gray 65, 66, 71, 74 ⇒ スネル, ハンナ
- グレイヴ, フランシス Frances Greville (1724–89) 36–37, 150, 153
- クレオパトラ Cleopatra (ca. 69–30 B.C.) 70
- グレゴリウス七世 Gregory VII (ca. 1020–85) 20
- 『コヴェントガーデン・マガジン』 *Covent-Garden Magazine* 37
- コウルリッジ, S・T Samuel Taylor Coleridge (1772–1834) 226, 280
- 「コーネリア」“Cornelia” 140 ⇒ マダン, ジュディス・クーパー
- コルマン, ジョージ, と ボンネル・ソートン Colman, George, and Bonnell Thornton
 144–45, 153
 『著名女性詩集』 *Poems by Eminent Ladies* 144–45
- コックバーン, キャサリン・トロッター Catharine Trotter Cockburn (1679–1749) 135,
 139–40, 144
- コットレル, チャールズ Charles Cotterell (1615–1701) 125
- ゴドウィン, ウィリアム William Godwin (1756–1836) 202, 242–46, 281
 『女性の権利の擁護の著者の思い出』 *Memoirs of the Author of A Vindication of the Rights of Woman* 242–46
- コリンナ Corinna (6th c. B.C.) 149
- 『コンスタンスとアンソニー』 *Constance and Anthony* 68

ザ行

- 『才女——もしくは下稽古中の詩人三人組』 *The Female Wits, or, The Triumvirate of Poets at Rehearsal* 135, 275
- サヴィル, ジョン John Saville (dates unknown) 162, 177–78, 278
- サヴェッジ, メアリ Mary Savage (fl. 1763–77) 119, 154
 『種々の主題の折々の詩集』 *Poems on Various Subjects and Occasions* 119

- 『マライア・エッジワースの思い出』 *A Memoir of Maria Edgeworth* 249
 エッジワース, マライア Maria Edgeworth (1767–1849) 6, 156, 162, 247–67, 277
 『家庭外と家庭内』 “Abroad and at Home” 249
 『文筆をたしなむ女性たちへの手紙』 *Letters for Literary Ladies* 156, 264
 『ベリンダ』 *Belinda* 6–7, 247–67, 282
 エッジワース, リチャード・ラヴェル Richard Lovell Edgeworth (1744–1817) 162, 171–73, 178, 185, 277
 エリザベス一世 Elizabeth I (1533–1603) 21
 エリス, ハヴロック Havelock Ellis (1859–1939) 76, 280
 エロイーズ Héloïse (d. 1164) 180, 189, 193, 231, 278
 エンデュミオン Endymion 14
- オウィディウス Ovid (43 B.C.–A.D. 17) 4, 6, 14–17, 19–24, 28–37, 43, 45, 48, 51, 53, 58, 128, 161, 167, 180, 201–03, 210–16, 223–24, 232, 241, 261–62, 269
 『イピスとイアンテの話』 “The Fable of Iphis and Iante” 17, 262
 『女主人公たち』 *Heroides* 14, 19, 22, 161, 180
 『パオーンに宛てたサッポーの手紙』 “Sappho Phaoni” 4, 14–16, 19, 22, 33–37, 58, 128, 161, 166, 202, 210–11, 223, 231–32, 269
 『変身物語』 *Metamorphoses* 17, 262
 『雄々しい女兵士』 *The Gallant She-Souldier* 68
 『オナニア』 *Onania* 26, 236
 『オナニア補遺』 *A Supplement to the Onania* 26–27, 236
 『オリンダ』 “Olinda” 124–27, 134, 139 ⇒フィリップス, キャサリン

カ行

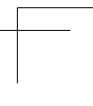
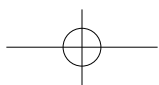
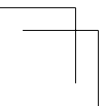
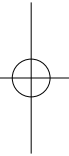
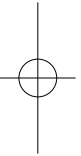
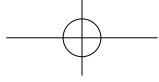
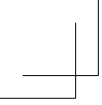
- カーター, エリザベス Elizabeth Carter (1717–1806) 36–37, 92, 140, 142, 144–45, 149–50, 156, 276
 『折々の詩集』 *Poems on Several Occasions* 145
 『カービの不思議で奇妙な美術館』 *Kirby's Wonderful and Eccentric Museum* 272–73
 カウフマン, アンジェリカ Angelica Kauffman (1741–1807) 276
 カウリー, エイブラハム Abraham Cowley (1618–67) 126–27, 144
 『植物について』 *De Plantarum* 127
 カウリー, ハンナ Hannah Cowley (1743–1809) 156
 カトウルス Catullus (ca. 84–54 B.C.) 50, 166, 277
 『51番』 “Ille mi par esse deo videtur” 166, 277
 カルデリヌス, ドミティウス Domitius Calderinus (1447–78) 20
 ガレノス Galen (129–99) 25, 110
- ギフォード, ウィリアム William Gifford (1756–1826) 281–82
 訳ユウェナリス『諷刺詩』 trans. Juvenal, *The Satires* 281–82
 キャヴェンディッシュ, マーガレット, ニューカースル侯爵夫人 Margaret Cavendish, Duchess of Newcastle (ca. 1624–74) 32–33, 136, 143–44
 『快樂の修道院』 *The Convent of Pleasure* 32
 『キャヴェンディッシュ, ジャック』 “Jack Cavendish” 36, 37
 キリグリュウ, アン Anne Killigrew (1660–85) 136, 143–44

- イヤーズリー, アン Ann Yearsley (1752–1806) 156
 インチボールド, エリザベス Elizabeth Inchbald (1753–1821) 255
- ヴィーナス Venus 41, 45, 47–49, 220–21, 223, 225, 230, 233 ⇒アフロディテ
 ウィチャリー, ウィリアム William Wycherley (ca. 1640–1715) 127–28
 『当代のサッポーに寄せて』 “To the Sappho of the Age” 127–28
 ウィリアムズ, ヘレン・マライア Helen Maria Williams (ca. 1761–1827) 156, 225
 ウエスト, ジェーン Jane West (1758–1852) 160–62
 『ウエストミンスター・ガゼット』 *The Westminster Gazette* 259
 ウェストン, ペネロッペ Penelope Weston (dates unknown) 39, 96, 197
 ウェッジウッド, ジョサイア Josiah Wedgwood (1730–95) 95
 ヴェネット, ニコラス Nicolas Venette (1633–98) 26–27
 『夫婦間の営みの奥義の開示』 *The Mysteries of Conjugal Love Reveal'd* 26
 ヴェリ, アレッサンドロ Alessandro Verri (1741–1816) 56–57, 271
 『サッポーの冒険』 *The Adventures of Sappho* 56–57
 ウェリントン公爵 Duke of Wellington (1769–1852) 95
 ウェルギリウス Vergil (70–19 B.C.) 98
 ウォーカー, ロバート Robert Walker (dates unknown) 64, 67
 ウォード, エドワード Edward Ward (1667–1731) 68, 237
 『第二部ロンドン・クラブ』 *The Second Part, of the London Clubs* 68–69, 237
 『ロンドン・クラブ史』 *The History of the London Clubs* 68
 ウォートン, ヘンリー・ソーントン Henry Thornton Wharton (1846–95) 46
 『サッポー——伝記、テキスト、精選訳と逐語訳』 *Sappho: Memoir, Text, Selected Renderings and a Literal Translation* 46
- ウォルシュ, ウィリアム William Walsh (1663–1708) 30, 35, 117
 『女性たちに関する対話』 *A Dialogue Concerning Women* 30, 35, 117
 ウォルポール, ホーラス Horace Walpole (1717–97) 36, 271–72
 ウォレス, エグランタイン Eglantine Wallace (d. 1803) 255
 ウッドフォール, ウィリアム William Woodfall (1746–1803) 154–55
 ウルストンクラフト, メアリ Mary Wollstonecraft (1759–97) 6, 93, 156, 196, 202–03, 225, 231–46, 255–56, 263, 271–72, 280–82
 『女性の虐待』 *The Wrongs of Woman* 244–45, 281
 『女性の権利の擁護』 *A Vindication of the Rights of Woman* 6, 231–41, 243, 245, 255–56, 281
 『女性の権利の擁護の著者の遺稿集』 *Posthumous Works of the Author of A Vindication of the Rights of Woman* 244
 『人間の権利の擁護』 *A Vindication of the Rights of Men* 241
 『メアリ』 *Mary* 239–43
- ウルフ, ヴァージニア Virginia Woolf (1882–1941) 61–62
 『オーランドー』 *Orlando* 61–62
- エカチェリーナ二世 Catherine II (1729–96) 231
 『エグザミナー』 *The Examiner* 135
 エジャトン, セアラ・ファイジ Sarah Fyge Egerton (1670–1723) 132
 『折々の詩集』 *Poems on Several Occasions* 132
 エッジワース, フランシス Frances Edgeworth (1769–1865) 249

索引

ア行

- 「アーデリア」“Ardelia” 129 ⇒フィンチ、アン
アーデン, ジェーン Jane Arden (1758–1840) 281
アイリアノス Aelian (3rd c.) 18
『ギリシャ奇談集』 *Historical Miscellanies* 18–19
アウグストゥス帝 Augustus (63 BC.–A.D. 14) 37
アキレウス Achilles 18
アシュトン, ジョン John Ashton (1834–1911) 64
『十八世紀の放浪者たち』 *Eighteenth Century Waifs* 64
アステル, メアリ Mary Astell (1666–1731) 32–33, 35, 63–64, 74, 121, 136
『女性たちへの大事な提言』 *A Serious Proposal to the Ladies* 32–33, 35
アディソン, ジョゼフ Joseph Addison (1672–1719) 44–45, 50, 52–54, 120, 167, 208, 232–33, 244, 277, 281
アディソン, ジョン John Addison (fl.1735) 53–54, 244
訳『アナクレオンとサッポー著作集』 trans. *The Works of Anacreon ... To which are added ... Sappho* 53
訳「オードー彼女が愛した若い娘に」 trans. “An Ode. On a Young Maid whom she lov'd” 53
「サッポーの伝記」 “The Life of Sappho” 53–54, 244
アテナイオス Athenaeus (ca.170.–ca.230) 13, 269
『食卓の賢人たち』 *The Deipnosophists* 269
アドニス Adonis 14
「アドニス」 “Adonis” 130–31 ⇒ハーヴェー, ジョン
アナクレオン Anacreon (ca. 582–ca. 485 B.C.) 13, 16, 21, 269
『アナクレオンとサッポー著作集』 (1713) *The Works of Anacreon, and Sappho* 53
『アナクレオンのオード』 (羅訳) *Anakreontos Teiou Mele* 22
『アニュアル・レジスター』 *The Annual Register* 78, 259–60, 273
アフロディテ Aphrodite 14, 41–42, 45, 47, 279
アベラルー, ピエール Pierre Abélard (1079–1142) 231, 278
アランソン公爵 Francis, Duke d'Alençon (1555–84) 21
アリオスト Ariosto (1474–1533) 158
アルカイオス Alcaeus (ca. 620–ca. 580 B.C.) 13
アルキロコス Alchilochus (ca. 680–ca. 640 B.C.) 13
アルノー, ジョージ George Arnaud (1698–1774) 27
『両性具有者論』 *A Dissertation on Hermaphrodites* 27
アレクサンドロス大王 Alexander the Great (356–323 B.C.) 12
アン・フランシス・ランデル Anne Frances Randall 224–25 ⇒ロビンソン, メアリ
『アンティ・ジャコバン・レヴュー』 *The Anti-Jacobin Review* 228, 245, 281
アンドレ, ジョン John André (1750–80) 173–75, 185
アントワネット, マリー Marie Antoinette (1755–93) 38, 270
イムレイ, ギルバート Gilbert Imlay (1754–1828) 243–44



著者紹介

川津 雅江 (かわつ まさえ)

名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。名古屋経済大学法学部教授。文学修士。専攻、イギリス近代文学・フェミニズム思想。

著書：*Centre and Circumference: Essays in English Romanticism* (共著、Kirihara Shoten); 『マージナリア——隠れた文学／隠された文学』(共著、音羽書房鶴見書店); 『恋愛・結婚・友情——アフラ・ベーンからハリエット・マーティノーまで (1684–1839)』(共著、英宝社); *Voyages of Conception: Essays in English Romanticism* (共著、Japan Association of English Romanticism/Kirihara Shoten); 『長い十八世紀の女性作家たち——アフラ・ベーンからマライア・エッジワースまで』(共著、英宝社); *Ivy Never Sere: The Fiftieth Anniversary Publication of The Society of English Literature and Linguistics, Nagoya University* (共編著、Otowa-Shobo Tsurumi-Shoten); 『十八世紀イギリス文学研究第4号——交渉する文化と言語』(共著、開拓社)

訳書：メアリ・ウルストンクラフト『女性の虐待あるいはマライア』(あぼろん社); ジェイムズ・C・マキューシク『グリーンライティング——ロマン主義とエコロジー』(共訳、音羽書房鶴見書店)

KAWATSU, Masae

Sapphos of the Eighteenth Century
Women, Gender and Sexuality in Modern Britain

サッポーターたちの十八世紀

近代イギリスにおける女性・ジェンダー・セクシュアリティ

2012年2月28日 初版発行

著者 川津雅江
発行者 山口隆史
印刷 シナノ印刷株式会社

発行所 株式会社 音羽書房鶴見書店
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-14
TEL 03-3814-0491
FAX 03-3814-9250
URL: <http://www.otowatsurumi.com>

© 2012 川津雅江
Printed in Japan
ISBN978-4-7553-0263-3 C3098
組版 ほんのしろ
装幀 相田陽子(オセロ)
製本 シナノ印刷株式会社